

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第433集

こ まつ いち

小松 I 遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地工区クロスロード整備事業

岩手県大船渡地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

こ まつ いち
小松 I 遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地工区クロスロード整備事業

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,700ヶ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとまなう社会資本の充実はまた重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県大船渡地方振興局土木部が整備を進めている県道釜石住田線改良工事に関連して、平成12年度から3年間実施した小松T遺跡の調査結果をまとめたものであります。本調査により、縄文時代早期中葉～前期初頭の住居跡・竪穴状遺構・土坑・焼土などの遺構のほか、主に縄文時代早期中葉から弥生時代初めの遺物が確認され、貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県大船渡地方振興局土木部・住田町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成15年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例 言

1. 本報告書は、岩手県住田町上住小松28-1他に所在する、小松I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般県道釜石住田線改良に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と岩手県大船渡地方振興局土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 本遺跡の成果は、平成12・13・14年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査第370集・397集・418集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は、以下の通りである。

遺跡番号	NF07-0030
遺跡略号	KMI-00、KMI-01、KMI-02
5. 調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

調査期間	平成12年6月19日～12月4日
	平成13年5月22日～11月30日
	平成14年4月10日～9月30日
調査面積	5,825㎡
調査担当者	平成12年度 吉田 充 ・ 鳥居達人
	平成13年度 吉田 充 ・ 西澤正晴 ・ 佐藤あき子
	平成14年度 吉田 充 ・ 阿部孝明
6. 室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。

室内整理期間	平成12年11月1日～平成13年3月31日
	平成13年11月1日～平成14年3月31日
	平成14年11月1日～平成15年3月31日
整理担当者	吉田 充
7. 本報告書の執筆は「IV検出遺構と遺物」の遺構については吉田 充・鳥居達人・西澤正晴が、それ以外と編集は吉田 充が担当した。
8. 分析鑑定及び委託業務は次の方々へ依頼した(敬称略)。

石質鑑定	花崗岩研究会
炭化材鑑定	木炭協会 早坂次郎
自然科学分析(テフラ同定 放射性炭素年代 花粉 植物珪酸体 微細遺物 焼土 動物遺体)	パリオサーヴェイ株式会社
9. 国土地理院発行の地図を複製したものは図中に図幅名と縮尺を記した。
10. 遺構の理土観察には、小山・竹原編「新版標準土色帖」を参考にした。
11. 本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導とご教示をいただいた(敬称略)。
相原淳一(宮城県教育庁) 谷藤保則 他(群馬県立埋蔵文化財センター) 熊谷 賢(陸前高田市立博物館)
12. 野外調査にあたっては、住田町の方々にご協力をいただいた。
13. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

[本文目次]

序
 例言
 目次

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 地形	3
3. 地質	3
4. 各調査区上層	5
5. 基本土層	7
6. 周辺の遺跡	14
III. 調査方法と室内整理	19
1. 野外調査	19
2. 室内整理	20
IV. 検出された遺構と遺物	23
1. 住居跡	23
2. 竪穴状遺構	118
3. 焼土遺構	138
4. 炭化物集積遺構	163
5. 土坑	169
V. 遺構外出土遺物	183
1. 土器	183
2. 石器	211
VI. まとめ	224
付編 小松 I 遺跡の自然科学的分析	232

[表目次]

第1表 土層注記一覧表	13
第2表 周辺の遺跡一覧表	16

[図版目次]

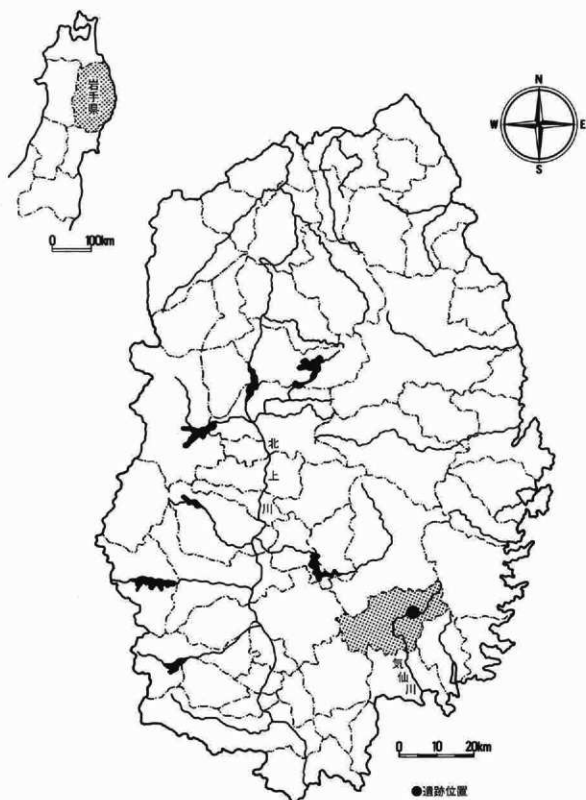
第1図	遺跡位置図	1	第45図	48号住居跡・出土遺物(1)	63
第2図	地形・地質図	4	第46図	48号住居跡出土遺物(2)	64
第3図	土層断面図(1) 0区	8	第47図	49号住居跡・出土遺物	65
第4図	土層断面図(2) 1・3区	9	第48図	51号住居跡・出土遺物	67
第5図	土層断面図(3) 2区	10	第49図	200号住居跡・出土遺物	68
第6図	土層断面図(4) 4区	11	第50図	202号住居跡	69
第7図	土層断面図(5) 7区	12	第51図	202号住居跡出土遺物(1)	70
第8図	基本土層	14	第52図	202号住居跡出土遺物(2)	71
第9図	周辺の遺跡図	17・18	第53図	206号住居跡・出土遺物	73
第10図	遺構配置図	21・22	第54図	207号住居跡・出土遺物	74
第11図	20号住居跡(1)	24	第55図	303号住居跡・出土遺物(1)	76
第12図	20号住居跡(2)	25	第56図	303号住居跡出土遺物(2)	77
第13図	20号住居跡出土遺物(1)	26	第57図	317号住居跡	78
第14図	20号住居跡出土遺物(2)	27	第58図	317号住居跡出土遺物	79
第15図	20号住居跡出土遺物(3)	28	第59図	318号住居跡・出土遺物(1)	80
第16図	21号住居跡	29・30	第60図	318号住居跡出土遺物(2)	81
第17図	21号住居跡出土遺物(1)	31	第61図	319号住居跡・出土遺物(1)	82
第18図	21号住居跡出土遺物(2)	32	第62図	319号住居跡出土遺物(2)	83
第19図	24号住居跡	33	第63図	320号住居跡・出土遺物	84
第20図	24号住居跡出土遺物(1)	34	第64図	321号住居跡・出土遺物	85
第21図	24号住居跡出土遺物(2)	35	第65図	323号住居跡・出土遺物	87
第22図	25号住居跡	37	第66図	324号住居跡・出土遺物	88
第23図	25号住居跡出土遺物	38	第67図	400号住居跡	90
第24図	26・52号住居跡	39	第68図	400号住居跡出土遺物	91
第25図	26・52号住居跡出土遺物(1)	40	第69図	404号住居跡・出土遺物	92
第26図	26・52号住居跡出土遺物(2)	41	第70図	405号住居跡・出土遺物	94
第27図	27号住居跡	43	第71図	407号住居跡・出土遺物	95
第28図	27号住居跡出土遺物	44	第72図	408号住居跡	96
第29図	30号住居跡・ 29号竪穴状遺構(1)	45	第73図	408号住居跡出土遺物	97
第30図	30号住居跡・ 29号竪穴状遺構(2)	46	第74図	409号住居跡	98
第31図	30号住居跡出土遺物	47	第75図	409号住居跡出土遺物(1)	99
第32図	31号住居跡	48	第76図	409号住居跡出土遺物(2)	100
第33図	31号住居跡出土遺物	49	第77図	410号住居跡・出土遺物	101
第34図	38号住居跡	50	第78図	412号住居跡	102
第35図	38号住居跡出土遺物	51	第79図	412号住居跡出土遺物	103
第36図	39号住居跡・出土遺物	52	第80図	413号住居跡・出土遺物	105
第37図	40号住居跡	54	第81図	414号住居跡・出土遺物	106
第38図	40号住居跡出土遺物	55	第82図	415号住居跡	107
第39図	41・46号住居跡	56	第83図	415号住居跡出土遺物	108
第40図	41号住居跡出土遺物	57	第84図	417号住居跡・出土遺物(1)	110
第41図	46号住居跡出土遺物	58	第85図	417号住居跡出土遺物(2)	111
第42図	42号住居跡・出土遺物	59	第86図	418号住居跡・出土遺物	112
第43図	44号住居跡・出土遺物	60	第87図	420号住居跡・出土遺物	113
第44図	45号住居跡・出土遺物	62	第88図	422号住居跡・出土遺物	114
			第89図	423号住居跡・出土遺物	115
			第90図	425号住居跡・出土遺物	117

第91图	28号竖穴状遺構	118	第135图	遺構外出土土器(7) 1区IVa3層	2	193
第92图	29号竖穴状遺構出土遺物	119	第136图	遺構外出土土器(8)		
第93图	32・33・35号竖穴状遺構	120		1区IIb層-1、I、II層		194
第94图	36・37号竖穴状遺構	122	第137图	遺構外出土土器(9) 1区IIb層-2		195
第95图	36・37号竖穴状遺構出土遺物	123	第138图	遺構外出土土器(10) 1区IIb層-3		196
第96图	301号竖穴状遺構・出土遺物	124	第139图	遺構外出土土器(11)		
第97图	304号竖穴状遺構・出土遺物	125		2区Vla3、Vla2層-1		197
第98图	306・307号竖穴状遺構・出土遺物	127	第140图	遺構外出土土器(12)		
第99图	309・311号竖穴状遺構	129		2区Vla2層-2		198
第100图	309・311号竖穴状遺構出土遺物	130	第141图	遺構外出土土器(13)		
第101图	312号竖穴状遺構・出土遺物	131		2区Vla2層-3、IVa3層-1		199
第102图	314・315号竖穴状遺構・出土遺物	132	第142图	遺構外出土土器(14)		
第103图	316号竖穴状遺構・出土遺物	133		2区IVa3層-2、IVa2層		200
第104图	322号竖穴状遺構・出土遺物(1)	135	第143图	遺構外出土土器(15)		
第105图	322号竖穴状遺構出土遺物(2)	136		3区(山体側)Vla2層-1		201
第106图	325号竖穴状遺構	137	第144图	遺構外出土土器(16)		
第107图	325号竖穴状遺構出土遺物	138		3区(山体側)Vla2層-2、V層-1		202
第108图	焼土遺構(1)	140	第145图	遺構外出土土器(17)		
第109图	焼土遺構(2)	143		3区(山体側)V層-2、IVa4層		203
第110图	焼土遺構(3)	144	第146图	遺構外出土土器(18)		
第111图	焼土遺構(4)	147		3区(畑側)V層-1		204
第112图	焼土遺構(5)	149	第147图	遺構外出土土器(19)		
第113图	焼土遺構(6)	153		3区(畑側)V層-2		205
第114图	焼土遺構(7)	156	第148图	遺構外出土土器(20)		
第115图	焼土遺構(8)	158		3区(畑側)IVb層-1		206
第116图	焼土遺構(9)	162	第149图	遺構外出土土器(21)		
第117图	焼土遺構(10)・炭化物集積遺構(1)	165		3区(畑側)IVb層-2		207
第118图	炭化物集積遺構(2)	166	第150图	遺構外出土土器(22)		
第119图	焼土遺構出土遺物(1)	167		3区(山体側)IVa4、(畑側)IIb層		208
第120图	焼土遺構出土遺物(2)	168	第151图	遺構外出土土器(23)		
第121图	土坑(1)	170		5~7区Vb2、V層-1		209
第122图	土坑(2)	172	第152图	遺構外出土土器(24)		
第123图	土坑(3)	174		5~7区V層-2		210
第124图	土坑(4)	176	第153图	遺構外出土土器(1)		213
第125图	土坑(5)	178	第154图	遺構外出土土器(2)		214
第126图	土坑(6)	180	第155图	遺構外出土土器(3)		215
第127图	土坑出土遺物(1)	181	第156图	遺構外出土土器(4)		216
第128图	土坑出土遺物(2)	182	第157图	遺構外出土土器(5)		217
第129图	遺構外出土土器(1) 0区IX層	187	第158图	遺構外出土土器(6)		218
第130图	遺構外出土土器(2)		第159图	遺構外出土土器(7)		219
	0区Vla、Vlb層-1	188	第160图	遺構外出土土器(8)		220
第131图	遺構外出土土器(3) 0区Vlb層-2	189	第161图	遺構外出土土器(9)		221
第132图	遺構外出土土器(4)		第162图	遺構外出土土器(10)		222
	0区Vla、Vlb層-3、IIb層-1	190	第163图	遺構外出土土器(11)		223
第133图	遺構外出土土器(5) 0区IIb層-2	191	第164图	作屑跡形態(縄文早期末~前期前葉頃)		226
第134图	遺構外出土土器(6)		第165图	上川各式土器を中心にした 出土層位別土器		229
	1区V、IVa3層-1	192				

[写真図版目次]

写真図版1	遮跡遠景・近景	253	写真図版45	404号住居跡	297
写真図版2	0~3区調査開始前・作業風景・完備	254	写真図版46	405号住居跡	298
写真図版3	2区検出状況	255	写真図版47	407号住居跡	299
写真図版4	2~3区調査前		写真図版48	408号住居跡(1)	300
	3区V層(煙囪)検出住居跡群	256	写真図版49	408号住居跡(2)	301
写真図版5	4~8区調査前	257	写真図版50	409号住居跡	302
写真図版6	9~10区調査前		写真図版51	410号住居跡	303
	1、7、9区作業風景・検出状況	258	写真図版52	412号住居跡	304
写真図版7	土層断面1	259	写真図版53	413号住居跡	305
写真図版8	土層断面2	260	写真図版54	414号住居跡	306
写真図版9	土層断面3	261	写真図版55	415号住居跡	307
写真図版10	土層断面4	262	写真図版56	417号住居跡	308
写真図版11	土層断面5	263	写真図版57	418号住居跡	309
写真図版12	土層断面6	264	写真図版58	420号住居跡	310
写真図版13	20号住居跡	265	写真図版59	422号住居跡	311
写真図版14	21号住居跡	266	写真図版60	423号住居跡	312
写真図版15	24号住居跡	267	写真図版61	425号住居跡	313
写真図版16	25号住居跡	268	写真図版62	28号竪穴状遺構	314
写真図版17	26・52号住居跡	269	写真図版63	29号竪穴状遺構	315
写真図版18	27号住居跡	270	写真図版64	32・33号竪穴状遺構	316
写真図版19	30号住居跡	271	写真図版65	35号竪穴状遺構	317
写真図版20	31号住居跡	272	写真図版66	36号竪穴状遺構	318
写真図版21	38号住居跡	273	写真図版67	37号竪穴状遺構	319
写真図版22	39号住居跡	274	写真図版68	301号竪穴状遺構	320
写真図版23	40号住居跡	275	写真図版69	304号竪穴状遺構	321
写真図版24	41号住居跡	276	写真図版70	306号竪穴状遺構	322
写真図版25	46号住居跡	277	写真図版71	307号竪穴状遺構	323
写真図版26	42号住居跡	278	写真図版72	309号竪穴状遺構	324
写真図版27	44号住居跡	279	写真図版73	311号竪穴状遺構	325
写真図版28	45号住居跡	280	写真図版74	312号竪穴状遺構	326
写真図版29	48号住居跡	281	写真図版75	314号竪穴状遺構	327
写真図版30	49号住居跡	282	写真図版76	315号竪穴状遺構	328
写真図版31	51号住居跡	283	写真図版77	316号竪穴状遺構	329
写真図版32	200号住居跡	284	写真図版78	322号竪穴状遺構	330
写真図版33	202号住居跡	285	写真図版79	325号竪穴状遺構	331
写真図版34	206号住居跡	286	写真図版80	焼土遺構(1)	332
写真図版35	207号住居跡	287	写真図版81	焼土遺構(2)	333
写真図版36	303号住居跡	288	写真図版82	焼土遺構(3)	334
写真図版37	317号住居跡	289	写真図版83	焼土遺構(4)	335
写真図版38	318号住居跡	290	写真図版84	焼土遺構(5)	336
写真図版39	319号住居跡	291	写真図版85	焼土遺構(6)	337
写真図版40	320号住居跡	292	写真図版86	焼土遺構(7)	338
写真図版41	321号住居跡	293	写真図版87	焼土遺構(8)	339
写真図版42	323号住居跡	294	写真図版88	焼土遺構(9)	340
写真図版43	324号住居跡	295	写真図版89	焼土遺構(10)	341
写真図版44	400号住居跡	296	写真図版90	焼土遺構(11)	342

写真图版91	烧土遗構(12)	343	写真图版128	409号住居跡出土遺物	380
写真图版92	烧土遺構(13)	344	写真图版129	410号·412号住居跡出土遺物	381
写真图版93	烧土遺構(14)	345	写真图版130	413号·414号·415号·417号(1) 住居跡出土遺物	382
写真图版94	烧土遺構(15)	346	写真图版131	417号(2)·418号·420号 住居跡出土遺物	383
写真图版95	烧土遺構(16)	347	写真图版132	422号·423号·425号住居跡· 29号·36号·37号·301号·304号· 306号·307号彫穴状遺構出土遺物	384
写真图版96	烧土遺構(17)	348	写真图版133	309号·311号·312号·314号 315号·316号·322号(1) 彫穴状遺構出土遺物	385
写真图版97	烧土遺構(18)	349	写真图版134	322号(2)·325号彫穴状遺構· 烧土遺構(1)出土遺物	386
写真图版98	烧土遺構(19)	350	写真图版135	烧土遺構出土遺物(2)	387
写真图版99	烧土遺構(20)	351	写真图版136	烧土遺構(3)·上坑(1)出土遺物	388
写真图版100	烧土遺構(21)	352	写真图版137	土坑出土遺物(2)	389
写真图版101	烧土遺構(22)·炭化物朱灰遺構(1)	353	写真图版138	遺構外出土土器(1) 0区	390
写真图版102	炭化物集積遺構(2)	354	写真图版139	遺構外出土土器(2) 0区	391
写真图版103	土坑(1)	355	写真图版140	遺構外出土土器(3) 0区	392
写真图版104	土坑(2)	356	写真图版141	遺構外出土土器(4) 0区·1区	393
写真图版105	土坑(3)	357	写真图版142	遺構外出土土器(5) 1区	394
写真图版106	土坑(4)	358	写真图版143	遺構外出土土器(6) 1区	395
写真图版107	土坑(5)	359	写真图版144	遺構外出土土器(7) 1区	396
写真图版108	土坑(6)	360	写真图版145	遺構外出土土器(8) 1区	397
写真图版109	20号住居跡出土遺物(1)	361	写真图版146	遺構外出土土器(9) 1区	398
写真图版110	20号住居跡出土遺物(2)	362	写真图版147	遺構外出土土器(10) 2区	399
写真图版111	20号(3)·21号住居跡出土遺物	363	写真图版148	遺構外出土土器(11) 2区	400
写真图版112	24号住居跡出土遺物(1)	364	写真图版149	遺構外出土土器(12) 2区	401
写真图版113	24号(2)·25号·26·52号(1) 住居跡出土遺物	365	写真图版150	遺構外出土土器(13) 2区·3区	402
写真图版114	26·52号(2)·27号(1) 住居跡出土遺物	366	写真图版151	遺構外出土土器(14) 3区	403
写真图版115	27号(2)·30号·31号(1) 住居跡出土遺物	367	写真图版152	遺構外出土土器(15) 3区	404
写真图版116	31号(2)·38号住居跡出土遺物	368	写真图版153	遺構外出土土器(16) 3区	405
写真图版117	39号·40号·41号(1) 住居跡出土遺物	369	写真图版154	遺構外出土土器(17) 3区	406
写真图版118	41号(2)·46号住居跡出土遺物	370	写真图版155	遺構外出土土器(18) 3区	407
写真图版119	42号·44号·45号·48号(1) 住居跡出土遺物	371	写真图版156	遺構外出土土器(19) 3区	408
写真图版120	48号(2)·49号·51号·200号 住居跡出土遺物	372	写真图版157	遺構外出土土器(20) 3区、 5~7区	409
写真图版121	202号住居跡出土遺物(1)	373	写真图版158	遺構外出土土器(21) 5~7区	410
写真图版122	202号(2)·206号·207号(1) 住居跡出土遺物	374	写真图版159	遺構外出土土器(1)	411
写真图版123	207号(2)·303号·317号(1) 住居跡出土遺物	375	写真图版160	遺構外出土土器(2)	412
写真图版124	317号(2)·318号·319号 住居跡出土遺物	376	写真图版161	遺構外出土土器(3)	413
写真图版125	320号·321号·323号·324号 住居跡出土遺物	377	写真图版162	遺構外出土土器(4)	414
写真图版126	400号·404号·405号 住居跡出土遺物	378	写真图版163	遺構外出土土器(5)	415
写真图版127	407号·408号住居跡出土遺物	379	写真图版164	遺構外出土土器(6)	416
			写真图版165	遺構外出土土器(7)	417
			写真图版166	遺構外出土土器(8)	418



第1図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

小松1遺跡は、一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地区区クロスロード整備事業（新交流ネットワーク道路整備事業）施工に伴い、遺跡が事業区内に位置することから発掘調査をすすめることになったものである。

一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地区区は沿線に小学校等の公共機関及び店舗、住宅が連なる住田町上右住の中心街を通り国道340号への連絡する生活道路、滝瀬洞への観光道路となっているが、幅員が5.5mと狭小で小半径のカーブが連続し、交通の隘路区間となっていることから、歩行者の安全な通行と円滑な自動車交通の確保が阻害されており幹線道路としての機能が低下している。これらの問題を解決すべく平成3年に新規採択された改良工事区間で、平成4年に降格的な工事を行っている。

当事業の施工にかかわる埋蔵文化財の扱いについては、岩手県大船渡地方振興局土木部へ平成10年9月21日付け教文第672号「一般県道釜石住田線道路改良における埋蔵文化財の分布調査について（回答）」に於いて回答し、その際今後の進め方は文化課と協議していくという調査結果が付記された。

回答を受けた岩手県大船渡地方振興局土木部では、本遺跡を含む工事を平成12年10月より工事着手を予定し、平成11年11月8日付け地土第385号「新交流ネットワーク道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により岩手県教育委員会に対して試掘を依頼し、依頼を受けた岩手県教育委員会では平成11年11月15日及び12月9日に試掘調査を実施したが、その結果を平成11年12月21日付け教文第950号「新交流ネットワーク道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」に於いて、岩手県大船渡地方振興局土木部に回答し、その際本遺跡の発掘調査を必要とすることが付記されたものである。

発掘調査は平成12年6月19日から2ヶ月予定で行われた。調査の結果、試掘調査では確認できなかった文化面が複数枚あり、また遺跡を埋めている土も厚く最大数mあることが判明した。しかも、県内で発掘例の少ない縄文時代早期中葉から前期前下にかけての集落跡であることが確認された。この調査状況を受け、同年9月25日文化課・岩手県大船渡地方振興局土木部・文化振興事業団埋蔵文化財センターの3者は現地協議を行い13年度も発掘調査を実施することを確認した。文化課は10月30～31日にかけて再度試掘調査を行い、遺跡がさらに富麗にのびることを確認した。その結果、平成13年度も4,345㎡の調査が必要とされた。平成12年度分の調査は12月2日まで実施され、当初調査面積1,700㎡に対して変更面積2,000㎡、実施調査面積は1,305㎡となった。

平成13年度調査は平成13年5月22日から実施された。当初4月から調査を予定していたが、イヌワシの生息に関する環境調査で1.5ヶ月遅れの調査となった。12年度同様に遺跡を埋めている土は最大数mで、主に縄文時代早期末から前期初期にかけての集落跡を確認した。同年は台風の当たり年で8月と9月に浸水・崩落の災害にあった。調査は11月30日まで実施され、実施調査面積2,395㎡となった。

平成14年度調査は平成14年4月10日から実施された。調査面積は昨年度未了部分に遺跡東側の水路付け弁え部分が追加され2,200㎡となった。地山までの最大深度は最大約6mとなり、昨年度同様8月に台風が通過し、安全対策をしていたにもかかわらず、予想を上回る大雨で大量の地下水が湧き出し崩落・冠水した。このため危険箇所の調査を中止し、埋め戻した（第10図網かけ部分）。その後は順調にすすみ、9月26日に3年間に及んだ調査が終了した。3年間の調査面積は約5,800㎡となった。

（岩手県大船渡地方振興局土木部）

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置 (第1図)

気仙郡住田町は県南東部に位置し、北は遠野市、西は江刺市、南西は大東町、南は陸前高田市、東は大船渡市、北西は釜石市の5市1町に接している。住田町は昭和30年に世田米町、上右住村、下右住村が合併してできた町である。藩政時代には小松峠を越えて遠野と盛を結ぶ遠野街道、日詰駅と高田駅とを結ぶ高田遠野街道、水沢と海岸地方を結ぶ盛街道などの道路があり、宿場、駅場、馬宿、市場として世田米や八日町が栄えた。現在は国道340号線(八戸市-陸前高田市)、国道107号(横手市-大船渡市)、国道397号(東成瀬村-住田町)として利用されている。高清水山に源流を持つ気仙川は途中でいくつかの支流と合流しながら上右住-下右住-世田米とC字状に流れ下り、陸前高田市に向けて南流する。面積334.83km²、その90%が山林原野でしめられる。人口は7,199人(平成15年6月末)である。

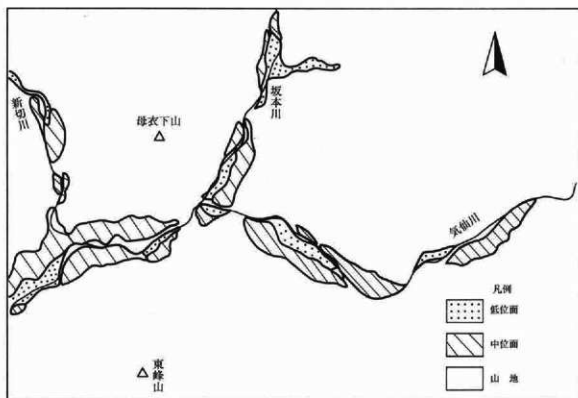
小松1遺跡は、JR釜石線上右住駅の南西約8.5kmに位置する。気仙川右岸の山裾にあり、標高は200.900~202.600mである。現況は畑および水田である。

2. 地形 (第2図)

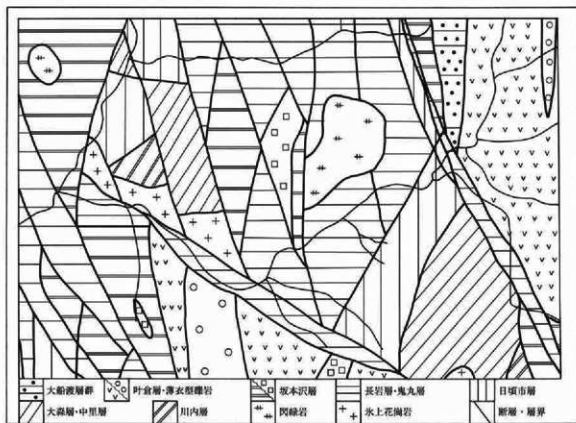
住田町は北上高地内にある。気仙川とその支流沿いには谷低平野が広がり、中位面と低位面(沖積面)が分布する。本遺跡がのる中位面は上流側の鏡岩と下流側八日町入り口付近で隔離された面で、気仙川に分断されながら細長く分布する。両岸は非対称的で、右岸(北側)は北西-南東方向の断層の影響のためか山地が平野に接するのに対し、左岸(南側)は平野と山地の間に丘陵上のなだらかな地形が続く。平野部は、小松-深渡地区を除き南から北に向けて緩く傾斜している。本遺跡の地山は主に礫層で、4~9区にかけては旧気仙川の自然堤防と河床が確認され、北西方向に下っている。また、小規模な谷地形の先端部分では土石流による段丘状地形が認められ、調査区内では最大数mの厚さで堆積している。

3. 地質 (第2図)

気仙地域は南部北上山地に位置する。遺跡周辺は日詰-気仙断層の東側に位置し、それに派生するとみられるWNW-SES方向の断層に挟まれながら、主に石炭系-二畳系の地層が分布している。気仙地区は古生代の地層の模式地と言われるほど古生代各時代の堆積物が良くそろって保存されている地域である。古期花崗岩(水上花崗岩)を基盤として、古生代シルル紀・アボン紀(川内層・大野層・中里層・大森層)、石炭紀(日頃市層・鬼丸層・長岩層)、二畳紀(坂本沢層・町倉層・登米層)の堆積物が分布している。川内層は石灰岩よりなり、床板サンゴや四放サンゴの外、層孔虫・腕足類・三葉虫など多くの化石が含まれる。大野層は主に凝灰岩よりなり、花崗岩片を含む。この層からは床板サンゴや苔虫・海百合などの化石が産出する。中里層下部は角礫凝灰岩、中部は黑色粘板岩・粗粒凝灰岩、上部は凝灰岩・砂岩・黑色粘板岩からなる。上部層からはわずかに三葉虫と腕足類などの化石を産出する。大森層下部は礫泥じり砂岩、上部は砂岩からなる。日頃市層は主に細粒凝灰岩や凝灰質粘板岩よりなり、後者には魚卵状石灰岩薄層が挟在する。腕足類・三葉虫・二枚貝・巻貝・苔虫・海百合などの化石を産出する。鬼丸層は主に黑色泥質石灰岩からなり、四放サンゴ類のほか紡錘虫の原始的グループを産出する。長岩層は灰白色石灰岩とそれに介在する凝灰岩薄層からなる。四放サンゴの大形群体系や床板サンゴの群体系などの化石が含まれる。坂本沢層の基底には厚く礫岩・砂岩を堆積させ、陸上から流された植物の化石のほか、海の生物化石も多く産出する。中でも紡錘虫は種類が多い。町倉層下部は礫岩・砂岩層をレンズ状に挟む砂質粘板岩からなる。上部では石灰岩のレンズ状



地形図



地質図

第2図 地形・地質図

岩体が発達し、さらに「薄衣礫岩」と呼ばれる花崗岩の巨礫を含む礫岩が発達する。本層の砂岩相では腕足類・二枚貝・巻貝・苔虫類・紡錘虫類を、石灰岩相ではサンゴ類・石灰藻・紡錘虫類を産出する。登米層は黒色粘板岩が卓越する層で、気仙地区では浸食されてほとんど残っていない。これら古生代の地層は山体や段丘崖では観察されるが、平野部では気仙川の堆積物に覆われ見ることができない。山麓では十和田一中礫火山灰や崖錐性堆積物に覆われ、緩斜面を呈する部分がある。

小松洞穴やその向かいにある鏡岩では黒色の泥質石灰岩が観察され、本遺跡0～1区までの北側山地に分布している。2区付近から八日町にかけての後背山地には、泥質石灰岩と断層で接した水ト花崗岩が広がる。非常に脆くなっており、遺跡の埋土には大小の岩石が塊状に含まれる。

4. 各調査区土層（第3～8図）

本調査区は北西南東方向に約300mと長く、遺跡を埋めている堆積物は一様でないために調査区（0、1、2、3、4、5～7、8、9、10区）ごとに土層を説明する。

(1) 0区（第3図）

最東端にある調査区で、地山の標高は約202.500mである。古生界二疊系の石灰岩上に気仙川の堆積物をのせ、これを地山としている。本調査区の東側2/3は後背の山地が迫る部分で、山地の裾付近には地山上に崖錐性堆積物が堆積している。調査区内で一帯高いところに位置し、遺跡内では古くから生活場所として利用されていた。土層は10層に区分される。下位から砂礫層・崖錐性礫混粘土層（地山）、黒褐色土、崖錐性礫混粘土、黒色土、黒褐色土、十和田一中礫火山灰（以下To-Cu）、黒色土層の順に堆積している。遺構はX層（地山）、Ⅱb-5層（基本土層-調査区土層、以下同じ）（黒褐色土）、Ⅱb-2層（黒褐色土）で検出された。遺物から読み取れる時期は、それぞれ縄文時代早期後葉、縄文時代早期末葉～前期前葉、縄文時代晩期末～弥生時代初期、江戸時代末葉～明治時代初期（器炭）に属する。この中で5層黒褐色土には獣骨や炭化物片が土器や石器とともに含まれ、本層の分布範囲は捨て場であったと考えられる。

(2) 1区（第4図）

戦後耕作地として改良される前は山体から平野部にかけて緩斜面が続いていたところである。調査前は山体側で最大数m削平された状態で確認された。調査区外の山体側約10m奥まで緩斜面がまだ残っており、調査結果から考えるとこの部分にさらに遺構が広がる可能性は大きい。本区は全調査区の中で埋土は比較的薄い。山体側は崖錐性堆積物がのるため埋土はやや厚いが、平野部側は礫層を直接黒色土が覆うだけで、埋土厚は約50cmである。調査区東側から西側に緩く傾斜し、西寄り中央部が窪み、その両側は自然堤防状の高まりを呈する。土層は下位から砂礫層（地山）、褐色粘土層、暗褐色砂礫質粘土層、褐色粘土～オリーブ褐色砂礫互層、暗褐色砂礫質粘土層、褐色粘土層、To-Cu層、崖錐性堆積物、黒色土層、攪乱層・耕作土である。遺構はX（地山、粘土）、Ⅱa1-11層（褐色土）、Ⅴ-10層（暗褐色土）、Ⅳa3-7層（暗褐色土）、Ⅱb-5層（黒色土）で検出された。遺物から読みとれる時期は、縄文時代早期中葉、末葉～前期前葉、後期、晩期末～弥生時代初期、後葉、奈良時代である。

(3) 2区（第5図）

後背山地から沢が流れ、東西方向に走る農業用水路に注ぐ。以前は平野部に向かってまっすぐ流れ、生活用水として利用され、現在でも飲み水として利用されている。本区周辺の山体側堆積物は沢から供給されたと考えられる細礫～細礫質粘土で構成されるものが多い。山体側に厚く堆積し、平野部（民家側）に向かって層厚を減ずる。地山は気仙川旧河道沿いに堆積した砂礫で、場所により巨礫を伴う。平野部側は自然堤防の高まりを呈し、山体側は旧河床で低くなっている。土層は下位から砂礫層（地山）、褐色砂礫質粘土、暗

褐色砂礫質粘土、褐色砂礫質粘土、暗褐色砂礫質粘土、褐色砂礫質粘土、暗褐色砂礫質粘土、褐色砂礫質粘土、暗褐色砂礫質粘土、褐色砂礫質粘土、褐色粘土、To-Cu、黒色土、褐色砂礫質粘土、黒色土である。遺構はⅤa2-24層（暗褐色砂礫質粘土）、Ⅴ-17層（暗褐色砂礫質粘土）、Ⅴa3-9層（暗褐色砂礫質粘土）、Ⅴa2-7層（褐色砂礫質粘土）で検出された。遺物から読みとれる時期は、それぞれ縄文時代早期末～前期前葉である。

(4) 3区（第4図）

山体側と平野部、気仙川上流側と下流側（北西）とでは堆積環境が少しづつ異なる。2区寄りの山体側は2区同様に複数の包含層が分布する。平野側は耕作土下の黒色土内に気仙川洪水時の堆積物を厚く混入させ、山体側包含層を含む層に対応する部分には砂礫質土と粘土が互層しながら堆積し、頻繁に気仙川やその支流の影響を受ける環境にあったと推定される。後者の環境が3区の約2/3をしめる。また、西側は小谷から発生したと見られる土り流堆積物が挟まれ、4区に厚く延びている。土層は下位から砂礫層（地山）、暗褐色砂質粘土、褐色砂礫質粘土とオリープ褐色砂礫互層、黒色土、洪水堆積物、黒色土、洪水堆積物、黒色土、耕作土・盛土である。遺構はⅤ-32層（暗褐色砂礫質粘土）とⅤb層-15～31層（褐色砂礫質粘土とオリープ褐色砂礫互層内粘土層）で検出された。遺物から読みとれる時期は、縄文時代早期末～前期前葉頃である。

(5) 4区（第6図）

後背山体に小谷地形があり、普段は枯れ沢であるが、雨量が多いときにはわかに水が流れ出す。本区は山体側から舌状に段丘状地形を呈している部分で、豪雨期に土砂流が押し寄せたためにできた地形と推測される。埋土には数cmの堆積物が確認されている。調査区北側は地山（砂礫）が山体側に向かって窪み、反対側（水田側）は逆に高くなることから他の区と同様に気仙川旧河道跡とみられる。土層は下位から砂礫層（地山）、オリープ褐色砂質粘土層、黒褐色砂礫質粘土層、褐色粘土とオリープ褐色砂礫互層、To-Cu、土砂流堆積物、黒色土と土砂流堆積物互層である。遺構はⅤ-16層（黒褐色砂礫質粘土）、Ⅴb-11層（褐色粘土とオリープ褐色砂礫互層最上位粘土）で検出された。遺物および層序から読みとれる時期は、縄文時代早期末～前期前葉頃である。なお、本区北側で行った試掘では、11層上で小規模な炭化物集積を確認していたが、調査面積と調査深度との関係で調査できなかった。

(6) 5～7区（第7図）

気仙川の旧河道跡が約70mにわたって確認される。およそ調査区の半分山体側が旧河床跡で、水田側が旧自然堤防跡で高くなっている。他の区と同様に平野部に向かって埋土厚を減じ、黒色土が直接地山（砂礫）を覆っている。土層は砂礫層（地山）、オリープ褐色砂質粘土層、暗褐色砂質粘土層、褐色砂礫層、暗褐色砂礫質粘土層、褐色粘土とオリープ褐色砂礫互層、To-Cu、土砂流堆積物、黒色土層、耕作土・盛土で、調査区西端は崖堆積物本体部分にあたるためか、Ⅴc-10層とⅤb-12層に崖堆積物が厚く溜まっている。遺構はⅤ-11層（暗褐色砂礫質粘土）と、Ⅴb-8層（褐色粘土）で検出された。Ⅴ層は包含層であり、その下面で遺構が検出されている。遺物および層序から読みとれる時期は、縄文時代早期末～前期前葉頃である。これらの区の後背山地との間には緩い緩斜面が最大15m広がっていること、Ⅴ層がこの緩斜面から調査区旧河床跡に広がっていることを考え合わせると、この部分で遺構を検出できる可能性は大きい。

(7) 8区

旧気仙川河道は、上流で流路が切替わった後も沢水が流れていたが、Ⅴ層堆積後に7区西端付近で崖堆積物（Ⅴc層）が溜まったために流路をふさがれ、5～7区の旧河床部分は池状になりⅤb層が堆積した。したがって、その西側に位置する8区には基本的にはⅤb層は堆積していない。土層は砂礫層（地山）、オリープ褐色砂質粘土層、暗褐色砂礫質粘土層、土砂流堆積物、To-Cu、黒色土層、崖堆積物混黒色土層、耕作

土・盛土である。遺構はV層（暗褐色砂礫質粘土、7回11層相当）で検出され、遺物および層序から読みとれる時期は縄文時代早期末葉～前期初葉である。

(8) 9区

4～7区同様に旧河床地形を呈していたと推測される。褐色粘土（優勢）とオリープ褐色砂礫互層がやや厚めに堆積している。常時湧き水があり、大雨が降るたびに約1m深さで水がよく溜まったことから、埋没小谷様な水の通り道があると考えられる。上層は砂礫層（地山）、褐色粘土（優勢）とオリープ褐色砂礫互層、To-Cu、暗褐色粘土層、黒色土層、炭錐性堆積物、黒色土層、炭錐性堆積物、耕作土である。遺構は、IVb層（褐色粘土（優勢）とオリープ褐色砂礫互層、7回8層相当）で検出され、遺物および層序から読みとれる時期は縄文時代前期前葉である。

(9) 10区

丘状地の高まりを呈する場所である。試掘結果からは角礫と黒色土が交互に複数枚厚く堆積していることより、後背山地からの頻繁な崩落により形成された地形と考えられた。土層は下位から炭錐性堆積物、To-Cu（塊状）、炭錐性堆積物、黒色土層、炭錐性堆積物、黒色土層、炭錐性堆積物、黒色土層、炭錐性堆積物層、表土である。遺構・遺物ともに検出されていない。

5. 基本土層

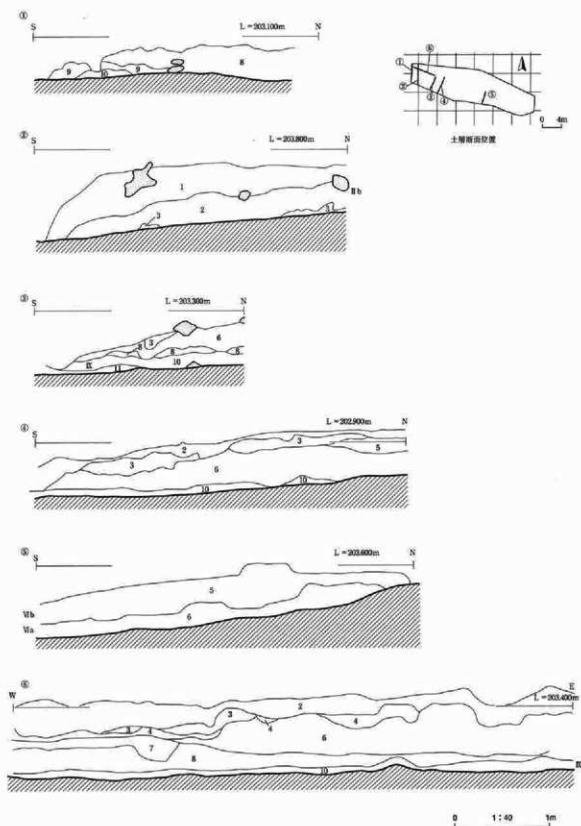
調査区全体は一見一つの段丘面のように見えるものの、埋土の様子から5つの単独環境があることが判明した。0区と1区の一部は少なくとも縄文早期後葉から微高地であった場所、1区西側から2区と3区の一部にかけては後背の気仙川支流堆積物などを堆積させる凹地、3区～8区水田圃は旧自然堤防で主に旧気仙川堆積物を堆積させる場所、4～8区山体側および9区は旧気仙川河床面の凹地、10区は後背の旧気仙川支流堆積物などを堆積させる凹地である。これらの場所に堆積した土層を対比し、次のように基本土層を考えた。

なおローマ数字の区分は黒色土、火山灰層、広範囲に延びる包含層、旧気仙川堆積物の分布などから推測される堆積環境を考慮して設定し、その中で細分できる場合はローマ字（小文字）でしめた。

I層：現代の耕作土や盛土によってできた土層。黒褐色系土色（7.5YR3/1など第1表参照、以下同じ）を呈する。最大層厚は約120cmである。後背山地起源の炭錐礫を混入させることが多い。

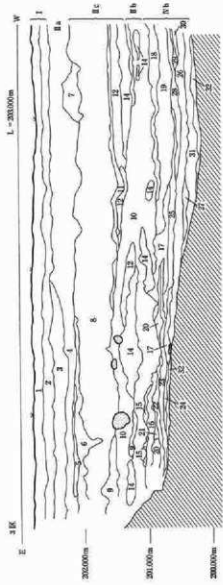
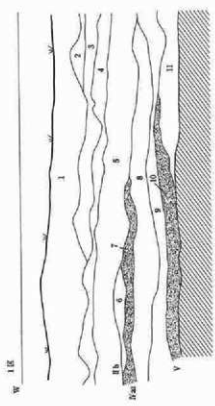
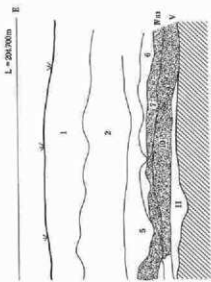
II層：旧表土。後背山地起源の炭錐礫を混入させ、大局的に見て黒色土が生成される時期に斜面移動を起こすような気候変動などがあったと推測される。最大層厚は約470cm。黒色～黒褐色系土色（5YR2/1、7.5YR2/2など）を呈する。10区で顕著で炭錐性堆積物が4枚確認された。このため、表土生成が3回にわたって分断されている。また、3区では黒色土内で洪水性堆積物が最大層厚1mで堆積している。炭錐性堆積物と洪水性堆積物の堆積時期は関連性があると考えられる。II層は黒色土と炭錐性堆積物などを交互に堆積させ、a～fに細分している。IIb層は主に縄文時代晩期末～弥生時代初葉頃の遺物包含層である。

III層：十和田～中樺火山灰（To-Cu）。秋田・青森両県に跨る十和田火山から噴出した火山砕屑物である。噴出時期は約5,500年前とされている。本火山灰層は模式地付近で3層に区分される。下部層は黄褐色～黄褐色軽石、中部層は暗灰色～黄褐色火山灰と軽石の互層、上部は暗灰色～黄褐色粘土質火山灰である。本遺跡では斜面堆積と水中堆積の2タイプで堆積しているが、ほぼ調査区全域で観察される。両タイプともに上部層境は不明瞭で、下部軽石層のみ明瞭に識別できる。厚さは前者（斜面堆積）が最大約10cm、後者が約50cmで、下部層は両タイプともに1cm前後である。10YR6/4いぶい黄褐色～10YR7/6明黄褐色を呈する。粘土化がすすみ粒径は不明である。



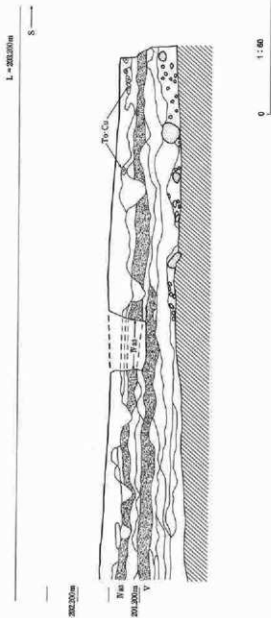
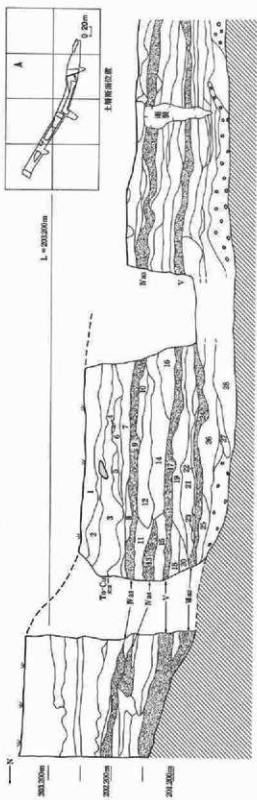
※注記は第1表掲載

第3図 土層断面図(1)0区



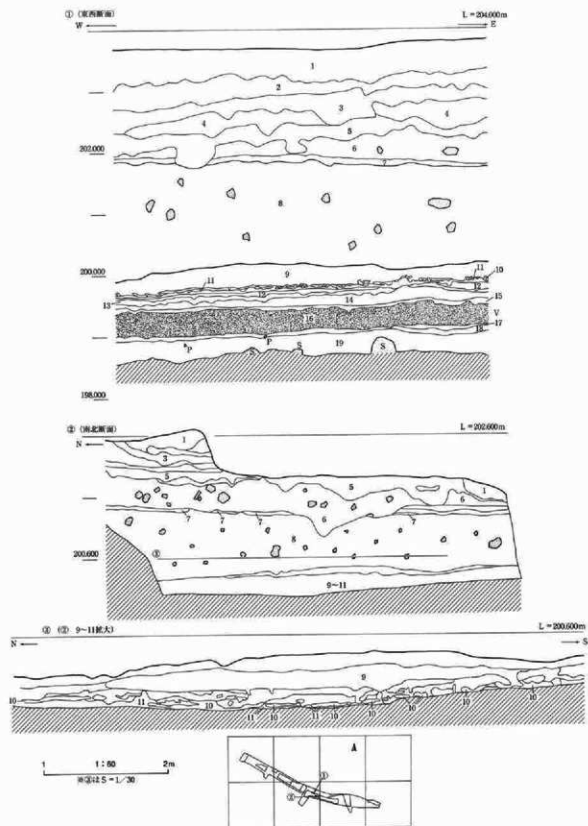
※注記は第1表掲載

第4図 土層断面図(2) 1・3区



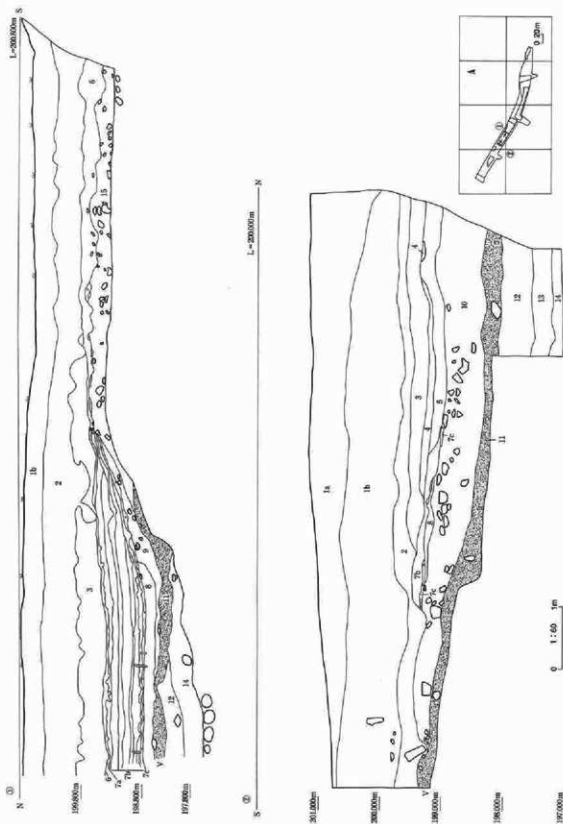
※注記は第1表掲載

第5図 土層断面図 (3) 2区



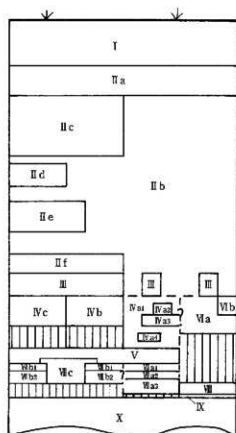
※注記は第1表掲載

第6図 土層断面図(4) 4区



※注記は第1表掲載

第7図 土層断面図(5) 7区



第8図 基本土層

IV層：河遺跡など地山に明瞭な地形の凹凸を示す時期の堆積物で、土砂流堆積物(IVc、7区西)・河川性堆積物(IVa：2区、IVb：3～7区)など同時期に性格の異なる堆積物が堆積している。層厚は2区周辺の包含層分布範囲で約140cm、3～7区の河川性堆積物分布範囲で約74cm、7区西の1:砂流堆積物分布範囲で約76cmである。土色は2区で褐色系(10YR4/4など)3～7区で10YR4/4褐色(粘土)と2.5Y4/3オリブ褐色(砂礫)を呈する。堆積環境ごとにa～cに細分し、さらに2区では包含層を区別するために1～4に細分している。放射性年代はIVa4層で $5,540 \pm 100$ BP(β線)で、縄文時代前期前葉頃の遺物包含層である。

V層：To-Cu層～地山間で明瞭に識別できる単一の包含層。土色は7.5YR3/3暗褐色を呈する。層厚は約40cm。風化花崗岩礫を含む。3区(畑側)から8区(田河床)にかけて広く分布する。とくに4～8区は考古学的単一時期堆積物と考えられる。放射性年代は $6,560 \pm 170$ BP(β線)で、縄文時代早期末葉(最終木)の遺物包含層である。

VI層：微高地に堆積した黒色土。IV～V層相当堆積物。調査区で唯一河川性堆積物が分布しない範囲で、このため連続して黒色土が堆積した場所である。山体が迫出部分では黒色土上に少量の土器片・石器を含む多量の獣骨、炭化物片が出土し、捨て場のような場所である。a、b層に細分し、捨て場層をVIb層とした。土色はa層が10YR2/1黒色、b層が10YR2/2黒褐色で、層厚は約50cmと約47cmである。

VII層：旧気仙川堆積物で、3～7区は本流から支流に切り変わった様に細粒堆積物(砂質粘土など)が堆積する。主に2.5Y4/3オリブ褐色を呈し、中部で2.5Y3/3暗オリブ褐色を呈する薄層を挟む。この薄層は約10cmで、遺物が少量出土する。VII層全体では約86cmである。2区周辺では後背の沢から粗粒堆積物(砂礫)が堆積し、中部に暗褐色(7.5YR3/3)の包含層(約23cm)を介在させる。7区西側では崖堆積物(7.5YR5/6明褐色、約53cm)が分布する。したがって、2区をa1、a2、a3に、3～7区をb1、b2層に、7区西側をc層に細分する。放射性年代はa2層で $6,460 \pm 170$ BP(β線)で、縄文時代早期末葉の遺物包含層である。

VIII層：IX層直上にある崖堆積性堆積物。10YR5/4にぶい黄褐色を呈する。層厚約30cm。淘汰不良で最大数十cmの角礫を含む粘土層である。

IX層：本遺跡では0区にのみ分布する黒褐色土層(10YR2/2)である。厚さは約10cmである。石灰岩の崖堆積物を少量包含する。縄文時代早期後葉頃の遺物包含層である。

X層：旧気仙川堆積物で、谷底を埋めるような1mを超える巨礫で構成される場所もある。

6. 周辺の遺跡

気仙地方(大船渡市・陸前高田市・住田町)は縄文時代の遺跡が多く、貝塚の分布では東京湾周辺、仙台湾周辺とともに密集地域の一つである。その代表的なものとして、大洞貝塚が上げられる。縄文時代晩期の土器標式「大洞式」土器は著名であり、多くの報告書で紹介されている。住田町内には約120ヶ所の遺跡

があり、多くは気仙川とその支流の平野部に集中する。旧石器時代の遺跡は確認されていない。また、住田町は石灰岩割窟を利用した洞穴遺跡が多いことで知られ、縄文時代早期の洞穴遺跡（関谷洞穴・蛇王洞洞穴・湧清水洞穴・小松洞穴）が確認されている。特に昭和4年に調査が始まった関谷割窟は古くから知られている。中期の集落跡は無く、後期・晩期になると遺跡数が増加する。住田町上郷生遺跡は後期～晩期、大船渡市上甲子遺跡からは後期～弥生時代前期の集落跡が発掘されている。古墳時代に属する遺跡は確認されていない。中世では城跡が知られており、上右住城跡、樋の口城跡、世田米城跡などがある。

近年、県道住田～釜石線の道路改良工事などの原因で発掘調査が行われ、遺跡の分布調査が明らかになってきた。中和田遺跡は平成11年度に岩手県文化振興事業団が発掘調査し、前期初頭の住居跡を検出している。土器は早期から後期、弥生前半が出土している。近接する小松Ⅱ遺跡の発掘調査は、同事業団により平成12年4月～6月まで行われ、縄文時代晩期から弥生時代初頭を中心とした集落跡を確認している。土器は縄文時代早期中葉から弥生時代後期が出土した。本遺跡（小松Ⅱ遺跡）出土遺物との係わりから、以下住田町周辺の洞穴遺跡について評述することとする。

大船渡市関谷割窟の最下層は、早期中葉の貝殻文尖底土器である。Ⅷ層は、早期の口縁部に文様帯のない縄文縄文土器（表裏とも縄文の土器）である。Ⅶ層は、縄文縄文土器・縄文条痕文土器である。縄文条痕文土器は、縦縞を含むものと含まないものがある。Ⅵ層は早期末から前期初頭の移行期であり、船入島下層式土器（内面に帯状縄文、羽状縄文）である。Ⅳ～Ⅴ層は、前期から中期にあたり、大木の1から8aまでの土器が出土している。最上層は、弥生時代と奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土している。（大船渡市史第1巻地質・考古学編昭和53年）

蛇王洞洞穴の遺物は第Ⅰ層～第Ⅶ層から出土している。このうち第Ⅵ層の2個体が復元されている。蛇王洞Ⅱ式と設定されているもので、一例は口縁外角に縦位の刻目、その下に平行沈線を格状につけ、文様の下縁に2列の爪型文がめぐらされている。地紋は横走する摺糸文である。二例は、口縁外角に縦位の刻目、口縁部文様帯は半截竹管による沈線を縦・斜めに組み合わせ、その区画内に沈線・爪型文でうめている。文様帯の上下は2～3条の沈線で区切られ、その下に3列の地紋は摺糸文が施されている。いずれも尖底である。第Ⅲ～第Ⅴ層からは、沈線と貝殻縞文を組み合わせた土器が出土している。最上層からは、縦縞を微量に含んだ表裏縄文が出土し、最下層からは県内で最も古い埴輪文土器が出土している。（住田町史第1巻自然・考古編1997年、芹沢長介・林謙著「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代7号）

湧清水洞穴は、人骨が多い割には土器の出土量が少ない。第Ⅷ層からは蛇王洞Ⅱ式と思われる口縁部の小破片が出土している。他には、表裏縄文土器が出土している。これは関谷第Ⅷ層に比定するものである。第Ⅷ層出土土器の本文様は、口縁部に縄文押捺が施されており、これらは関谷第Ⅷ層出土土器や早稲田第5類に類似するものである。第Ⅶ層出土土器は縦縞を多量に含み、第Ⅳ層との関連から早期末頃～前期初頭の時期に位置すると考えられる。第Ⅳ層は大木2式であり縦縞が多く前期初頭に相当する。（住田町史第1巻自然・考古編平成9年）

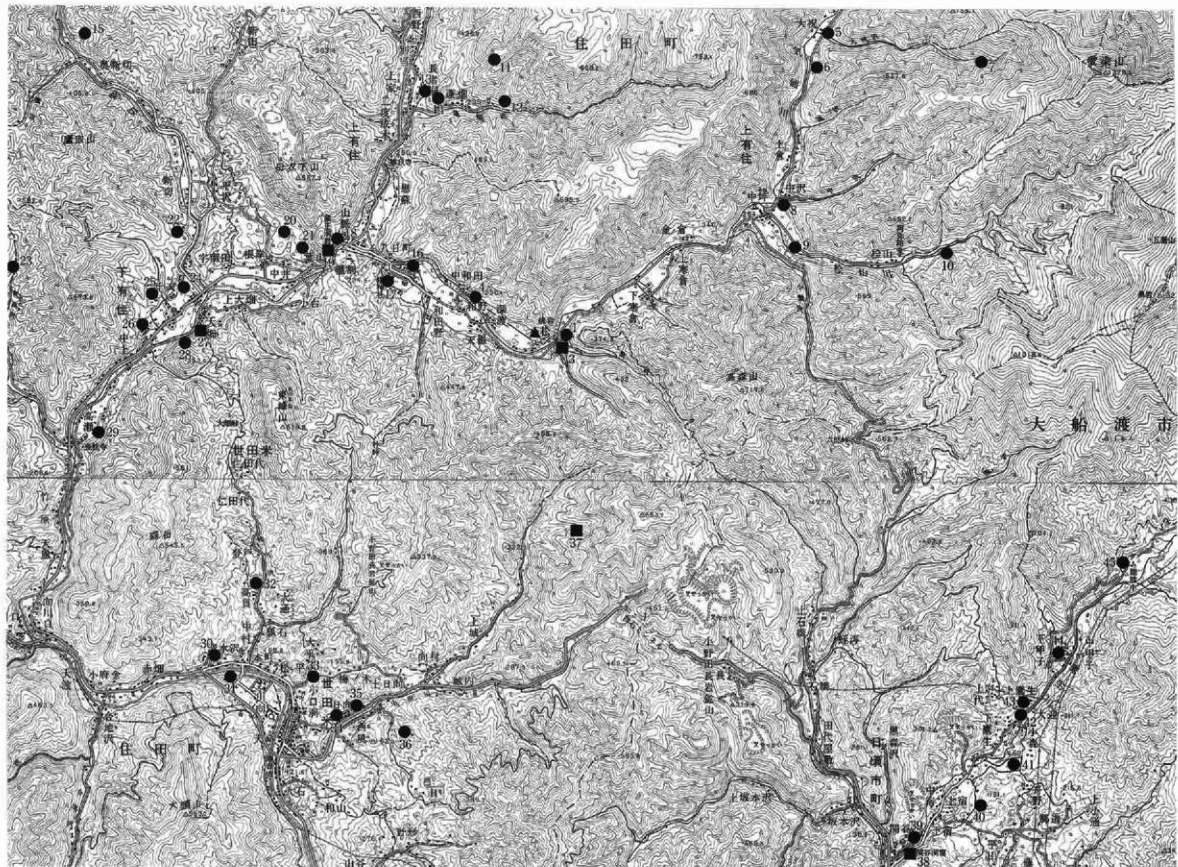
小松洞穴の発掘調査は平成7年～11年まで5年間に亘り行われた。土器は層位的な出土状況から1群、2群、3群に分けられる。小松1群と関谷第Ⅷ層・湧清水、小松2群と関谷第Ⅷ層・湧清水第Ⅷ層、小松3群と蛇王洞穴第Ⅰ層が対応する。1群では口唇部に平縁、縄文施文がなく、原体、指先押圧が多い。内外面にはRL、LR施文が多い。2群は1群に比べて平縁が増え、内外面はRLが主体である。3群は平縁、縄文施文が多く、原体押圧は少なくなる。指先押圧はなくなる。外面はRLがもっとも多いが、摺糸文、0段の縄文が一定割合存在する。縄文早期の赤御堂式・早稲田5類、前期初頭の木6式～10式が出土している。後期～弥生土器・土師器、現代の陶磁器も出土している。さらに、早期の生活跡である焼土遺構が検出されてい

る。その出土土器は、小松Ⅰ・Ⅱ遺跡出土土器と時代が重なり注目値する。

蛇下洞Ⅱ式土器などを含む本遺跡が異なった特色を持つこれらの洞窟や近隣の遺跡とどう関わってくるかが注目されることである。(岩手県立博物館調査研究報告書第16冊「気仙郡住田町小松洞穴発掘調査報告書」2000年)

No.	遺跡名	種別	時代等	備考
1	小松Ⅰ	集落跡	縄文 / 住居跡 竈上遺構 炭化弥生稲 土坑 土器 (早期中葉~弥生時代)	報告遺跡
2	小松Ⅱ	集落跡	縄文 / 住居跡 竈上遺構 土坑 柱穴 土器 (早期~弥生時代初)	
3	小松洞穴	洞穴	縄文 / 竈上遺構 土器 (早期~弥生時代)	早期寺倉釜
4	中和田	集落跡	縄文 / 住居跡 土器 (早・前・後・晩期)	弥生土器
5	大祝	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
6	大坂平	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
7	長畑	散布地	縄文 / 土器 (後期)	洞穴の存在
8	中塚Ⅰ	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	大洞C1式
9	中塚Ⅱ	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
10	柳山	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
11	奥上倉	散布地	縄文 / 土器 (後期)	消滅
12	蓬瀬	散布地	縄文 / 土器 (後期)	消滅
13	長倉	洞穴	縄文 / 土器 (後・晩期)	大洞C2式 弥生土器 土器
14	上家	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
15	柴ノ木洞	散布地	縄文 / 土器 (前期)	尖頭器 石鏡
16	八日町	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
17	八日町	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
18	御殿平	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	環状石斧 龍王洞穴上段の遺跡
19	藏土洞穴	洞穴	縄文 / 土器 (早期)	蛇下洞Ⅱ式 骨角器 磁器
20	中井	散布地	縄文 / 土器 (中・後期)	
21	沢田	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
22	羽穴	散布地	縄文 / 土器 (後期?)	
23	尻高	散布地	縄文 古代 / 土器 (後・晩期)	土器
24	十文字	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
25	苗代	散布地	縄文 / 土器 (中期)	
26	中上	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	石鏡 磨製石斧
27	菅ノ下	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
28	菅岩洞穴	洞穴	縄文 / 土器 (後・晩期)	奥に向かい下る
29	下沼水	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
30	赤畑	散布地	縄文 / 土器 (前?・中・後期)	
31	川向	散布地	縄文 / 土器 (晩期)	
32	淨庵寺	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
33	小口新	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
34	下日向	散布地	縄文 / 土器 (後期)	
35	上日向	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
36	杉山	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
37	湧清水洞穴	洞穴	縄文 弥生 中世 / 縄文土器 (早・前・後期)	埋葬人骨 (縄文後期、27体)
38	栗谷洞穴	洞穴	縄文 弥生 古代 / 土器 須臾器	県指定史跡
39	関谷	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
40	上相	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
41	大野林Ⅰ	散布地	縄文 / 土器 (後・晩期)	
42	上野生	集落跡	縄文 弥生 / 住居跡 竈上 土器 (縄文前~晩期)	
43	藤生	集落跡	縄文 古代 / 縄文土器 土器	
44	下甲子Ⅲ	散布地	縄文 / 土器	
45	上甲子	集落跡	縄文 / 住居跡 土器	

第2表 周辺の遺跡一覧表



第9図 周辺の遺跡図

※■は洞穴遺跡、▲は小穴I遺跡

Ⅲ. 調査方法と室内整理

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査区の区画設定は任意の基準点1・2を設置し、2点間を見通す直線と基準点に直交する直線を座標の基軸線とした。調査は3年計画ではなく、遺跡の状況から随時調査延長を行ったため、3年分の基準点の配置には規則性がない。各基準点の平面直角座標第Ⅹ系（日本測地系）による成果は次の通りである。

<平成12年度>

基準点1	X = -90,290,000、	Y = -67,961,000、	II=202.648m
基準点2	X = -90,300,000、	Y = +68,060,000、	H=202.582m
補点1	X = -90,300,000、	Y = +67,998,000、	H=202.700m
補点2	X = -90,290,000、	Y = +68,038,000、	H=202.531m

<平成13年度>

基準点1	X = -90,196,000、	Y = +67,818,000、	II=203.856m
基準点2	X = -90,248,000、	Y = +67,910,000、	H=201.255m
補点1	X = -90,248,000、	Y = +67,870,000、	H=200.873m
補点2	X = -90,288,000、	Y = +67,990,000、	H=200.967m

<平成14年度>

基準点1	X = -90,272,000、	Y = +67,970,000、	H=205.438m
基準点2	X = -90,297,000、	Y = +68,058,000、	II=202.494m
補点1	X = -90,297,000、	Y = +67,914,000、	H=201.521m
補点2	X = -90,288,000、	Y = +67,990,000、	H=200.650m

これらの座標値をもとに遺跡全体を100×100mの大区画を設定し、さらに4×4mの小区画に細分し、東西に数字の1～25を、南北にアルファベットを付した。調査区の名称はアルファベット・数字の組み合わせでB1a1、-A1b1というように呼称した。さらに、2年目からは想定していなかった西側の調査も実施されることになり、混乱を避けるため初年度調査区の西側は負のグリッドを設定した。このグリッドによる調査区名のはかに、遺物採り上げ時に必要に応じて2×2mの最小グリッドに細分し、コの字形に1～4まで区分し、B1a1-1のように設定した。なお、区画設定は小松Ⅱ遺跡と整合性がある。

(2) 掘掘り・遺構検出

雑物の除去と刈り払い作業から開始し、調査区内を網羅するように一辺が4m四方の正方形や幅2mで調査区を横断するよう長方形を設定して試掘を行い、上層の状況と遺物の出土状況の把握につとめた。その結果、当初予想した地山深度50cmをはるかに超える300cmで地山に到達する調査区もあった。しかも、検出面は最低でも4面あり、その都度掘掘り・検出・精査を繰り返した。しかしながら、年度ごとに調査区が増えたため、調査区全面にわたって同一検出面ごとの調査はできなかった。

(3) 遺構の命名

調査は3年間行われたため、年度ごとの遺構を区別できるように、次のように遺構の命名を行った。遺構種類の記号の後に、初年度は20～100番台、2年度目は200～300番台、3年度目は400番台の数字を使った。なお、精査の進行に伴い遺構の性格が変わったなどのために欠番が生じている。

竅穴住居跡・竅穴状遺構：SI20～SI51（欠番：22 23 34 43 47 50） SI200～SI207（欠番：201 203 204

205) SI300～SI325 (欠番:300 302 305 308 310 313) SI400～SI425 (欠番:401 402 403 406 411 416 419 421 424) 焼上遺構:SR2～SR29 (欠番:5) SR200～SR209 SR300～SR306 (欠番:303) SR400～SR462 (欠番:411 413 421 428 429 430 431 438 439 440 449 450 451 454) 炭化物集積:SC300、SC400～SC401 土坑:SK50～SK57 (欠番:52 54) SK100～SK120 (欠番101～112、114～119) SK200～SK204 SK300～321 (欠番:301～306 309 311 315 316 320) SK403～406 (欠番:404)

(4) 遺構精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、住居跡・堅穴状遺構は4分割法、土坑類は2分割法を原則として精査を行った。遺構の記録は主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものはフィールドノートに記録した。作図は座標系にあわせた1mメッシュを基本とする簡易遺方測量で行った。

(5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)と35mm判カメラ(モノクロとカラーリバーサル)を使用し、この他にデジタルカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した「撮影カード」を事前に写し、整理がしやすいようにした。また、調査終了同様にセスキ機による空中写真の撮影を実施した(平成13年度のみ実施)。

2. 室内整理

図面の点検・遺物の洗浄・写真の整理は原則的に現場で野外調査と平行して行うこととしたが、後半は毎日の調査整理を重点的に行ったため、一部は野外調査終了後に行った。

(1) 遺構

実測してきた図面の座標、セクションポイントの位置、基準高などを点検しながら必要に応じて第2原図を作成し、トレースを行った。図版の縮尺は、住居跡・堅穴状遺構が1/40～1/80、土坑類・焼上遺構などが1/40を原則とした。なお、個々の図版にはスケールを付してある。

(2) 遺物・遺物

洗浄後、採取月日順に整理し、実測や拓本の必要なものを選択した後遺構内外に分け登録し、注記・接合・復元を行った。報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、土器は接合・復元できたものの大部分、破片は器形や文様モチーフの明瞭なものを優先した。同一遺構の破片資料は床面出土のものではできるだけ使用し、同じ文様の破片は重複記載のないようできるだけ避けている。遺構外遺物は各調査区の出土層位ごとに口縁部片や底部片を中心に特徴的なものを掲載している。石器は約1,100点出土したが、整理時間の都合上器種を代表する特徴的なものを掲載して実測点数を絞ら込んだ。挿入中の縮尺は、土器が1/3、剥片石器が1/2、礫石器が1/3を原則としている。

(3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルム規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理して台帳に記載した。デジタルカメラのデータはCD-Rに調査日ごとにJPEGファイルで記録している。遺物は登録したものを、石器は遺構内外の順に、土器は復元できたものから破片の順に遺構内外の別なく35フィルムで撮影し整理した。

なお、遺物の撮影は当センターの写真技師が行った。

IV. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、3ヶ年の調査で縄文時代の住居跡49棟、堅穴状遺構19棟、焼土遺構91基、炭化物集積遺構3基、土坑24基である。遺物は、縄文時代の土器45箱（41×31×19cm）、石器6箱が出土した。

遺構名の命名方法はⅢ章で述べており、初年度調査から命名した順に掲載している。遺物の説明は概要に留め、詳細については出土遺物の章で述べることにする。

1. 住居跡

20号住居跡（第11～15号、写真図版13・109～111）

<位置> B I k・118～20区に跨いで位置する。

<検出状況> 重機による表土剥ぎの後に黒色土の広がりを検出した。大きくベルトを残して精査したが、出土遺物はなく遺構も確認できなかった。さらに掘り下げ、黄褐色粘土の低位層で遺物が出土し、住居跡を想定し精査した。遺物の出土量、堅くしまった床面、焼土の検出などから住居跡と認定した。

<重複関係> 遺構の南西隅を現代の遺構によって破壊されている。本遺構の北側で37号堅穴状遺構を切り、本住居跡床面を下げると、30号・38号・49号住居跡、29号堅穴状遺構が確認される。また、遺構の西側では同時期と思われる土器片が多く出土させることから遺構が西側に延びるかまたは住居状遺構が重複していることも考えられたが、初年度調査では確認できなかった。3年目の調査で、2区内に隣接する400号住居跡を検出した。

<形態・規模> 長軸約8m、短軸約4.2mの楕円形状を呈する。東西方向に主軸を持つ。

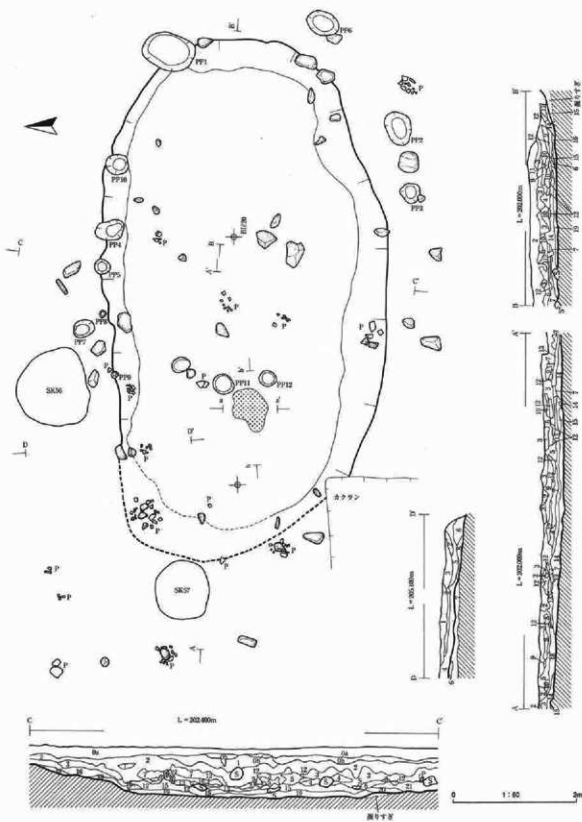
<壁土> 概ね黒色土・火山灰質粘土・暗褐色粘土の3層に大別できる。火山灰質粘土は上部が褐色火山灰質粘土、下部が黄褐色軽石質粘土（最大厚5cm）で構成され、十和田・中標火火山灰（以下To-Cu）であることが分析の結果判明した。最下部の暗褐色粘土は遺構の中心部に厚く堆積し、遺物が出土する。本層は南北に層相を変化させ、北側では砂礫の割合が多くなり、南側では径30cmの並円礫が混入し、土器がこの礫に押し潰されたように出土することがある。この層相の変化がプランの検出を困難にさせた。また、南側から出土した礫の配置には規則性はみられない。住居跡築造方法のひとつなのかもしれない。

<床・壁> 非常に堅くしまり、所々に炭化物の細粒の広がりが確認できる。壁の立ち上がりは北側で確認され、全体的に緩やかに立ち上がる。部分的に最大15cmの高さでやや垂直に立ち上がる所がある。南側は壁といえるほどの立ち上がりは確認できず、自然の起伏を利用しているようにみえる。

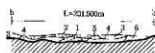
<柱穴> 12基検出された。北側から右回りに径30～40cmの柱穴状土坑が8基検出された。北東隅に位置するpp01は低位に位置する住居跡の埋土も含めて掘った可能性があり、規模が大きくなってしまった。本来は他の7基と同規模であると考えている。また、北側に径10cm足らずの小規模のものを2基検出した。これらは補助的な役割を果たした柱穴の可能性もある。地床炉の周囲で検出された2基は非常に浅く他の10基とは埋土も異なりTo-Cuに覆われる。柱穴は壁柱穴で構成されるのではないかと推定される。

<炉・焼土> 地床炉と思われる焼土遺構は床面の西側に寄って検出された。規模は70×60cm、厚さは最大で10cmである。非常に堅くしまる。

<その他> 西側に2基の土坑が隣接する。北側壁から50cmほど離れて位置する第56号土坑の埋土は砂礫が主体で、中央部上位層はTo-Cuである。西側推定壁から50cm離れて位置する第57号土坑の埋土は、本住居跡埋土最下層の暗褐色粘土の単層である。台形状断面形で底面に柱痕跡状のものを残す。これらの土坑は埋土や出土遺物からも本遺構と同時期であると判断される。



第11図 20号住居跡 (1)



- 1 5YR4/8 赤褐色 しまる
 2 5YR4/4 濃い赤褐色 しまる
 3 10YR2/4 暗褐色赤褐色質土 (硬20%)
 4 10YR5/3 黄褐色質粘土 かつくしまる
 5 10YR5/3 黄褐色粘土 しまる
 6 10YR5/3 黄褐色粘土 しまる

5A' 5B' 5C' 5D'

- 0a 灰土
 0b 10Y2/2 褐色砂土 薄層硬質 (平均 μ (cm 30%) しまりあり
 1 10Y2/2 褐色砂土 薄層硬質 (平均 μ (cm 40%) しまりあり
 2 10Y2/2 褐色砂土 しまりあり
 3 10YR5/3 黄褐色火山灰質粘土と10YR2/2 暗褐色赤褐色土との混合土 しまりあり
 4 10YR4/4 暗褐色火山灰質粘土と10YR2/2 暗褐色赤褐色土 (5%)との混合土 しまりあり
 5 10YR6/6 黄褐色火山灰質粘土 しまりあり
 6 10YR5/6 黄褐色火山灰質粘土 しまりあり
 7 10Y2/2 褐色砂土 しまりあり
 8 10YR4/4 暗褐色砂土 しまりあり
 9 10YR5/4 黄褐色火山灰質粘土 しまりあり
 10 10YR5/5 黄褐色火山灰質粘土 しまりあり
 11 10YR5/6 黄褐色火山灰質粘土と10YR4/4 暗褐色赤褐色土との混合土
 12 10YR5/4 暗褐色火山灰質粘土 しまりあり
 13 10YR5/4 暗褐色砂土 (砂20%) しまりあり
 14 10YR2/4 暗褐色砂土 (砂30%) しまりあり
 15 10YR2/3 暗褐色砂土 (砂40%) (焼けた土層より) しまりあり
 17 10YR5/4 黄褐色砂土 (焼けた土層より) しまりあり
 18 7.5YR5/8 暗褐色砂土 (砂70%) しまりあり
 19 10YR5/3 黄褐色砂土 (砂70%) しまりあり
 20 10YR5/3 黄褐色砂土 (砂70%) しまりあり
 21 2.5YR5/3 黄褐色砂土 (砂70%) しまりあり

No	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12
μ (cm)	46×67	26×30	34×33	50×30	30×25	54×30	35×28	10×15	19×16	37×33	34×35	28×26
長さ (cm)	30	7	14	12	9	10	12	6	5	11	6	5

第12図 20号住居跡 (2)

遺物 第13図の上器片はすべて植物繊維を含み、厚さは10mm前後である。1～9は口縁部の裝飾文様が横位・斜位・渦巻状の直面汗痕と縦位・斜位の短沈線の組み合わせで施文されるものである。1は反外しながら先端付近で強く内湾する。先端部分の文様帯と面する部分に横位降帯が貼られ、先端部は綾杉状沈線文帯で縦位降帯と短沈線を充填した蛇状降帯が貼られている。4、5、7、11は胴部から反外し、先端で内湾する。胴部は滑帯非結束羽状縄文 (0多) で施文される。5は1同様に先端で強く内湾する。9はボタン状の突起をもつ。10・11は横位の側面正横文が施文される。12、13は外側が「へ」字状に先細り、縦の刻みがある。10は口唇部に刻みが、14は原体末端正横文が施される。18は底部に直面汗痕を持つ。19は横帯非結束羽状縄文でやや内湾しながら立ち上がる。石鏝は石鏝56点、石匙27点、石鏝1点、不定形22点、擦石2点、打製石斧1点、合計109点出土した。石鏝は平基が多く、やや狭きみのものがある (30)。石匙は45を除いて縦長のものである。

34は裏面アスファルトが付着している。打製石斧49は両面に調整を加えている。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期初頭頃と考えられる。

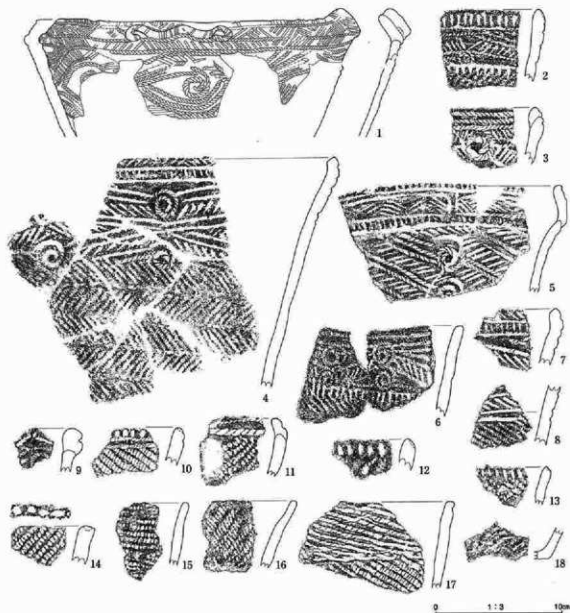
21号住居跡 (第16～18図、写真図版14・111)

<検出状況> II b層下位に灰白火山灰状の広がりを検出した。新しい時期の遺物の可能性を視野に入れ精査を進めた結果、予想した時期の遺物は一切出土せず、灰白火山灰質土下に黄褐色軽石質粘土を検出した。20号住居跡の埋土状況からTo-Cuと容易に判別でき、また本火山灰層下から土器片が出た。その後焼土遺構 (地床炉) を検出し、土層断面が北と東側で緩く立上ることから住居跡と認定した。

<重複関係> 西側は現代の陶器や炭化物片などの混じったゴミ穴状の撹乱層によって切られ、南東側は28号竪穴状遺構を切っている。

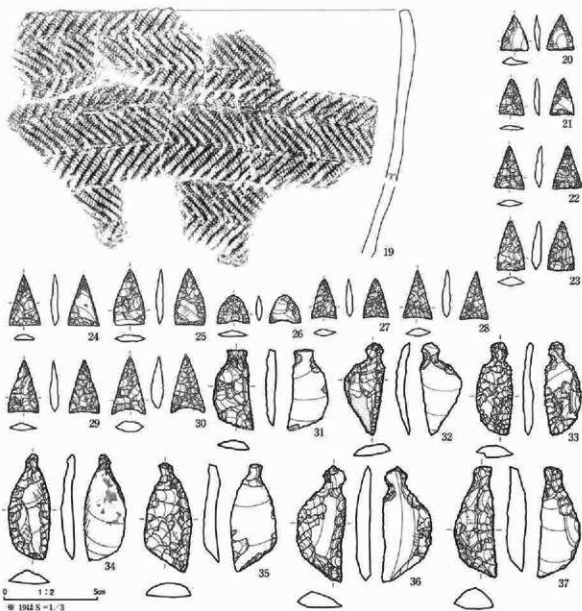
<形態・規模> 西側を現代の遺構によって切られるために全貌は不明であるが、残存長軸は9m、短軸は6.5mで北西-南東方向に主軸をもつ。平面形は隅丸長方形形状を呈する。

<埋土> To-Cuは不連続に塊状に堆積している。水はけのよい場所らしくやや乾燥気味で全体的に固くしまっている。第20号住居跡同様に概ね黒色土・褐色～黄褐色火山灰質土・暗褐色土の3層に大別できるが、やや礫の混入率が高い。



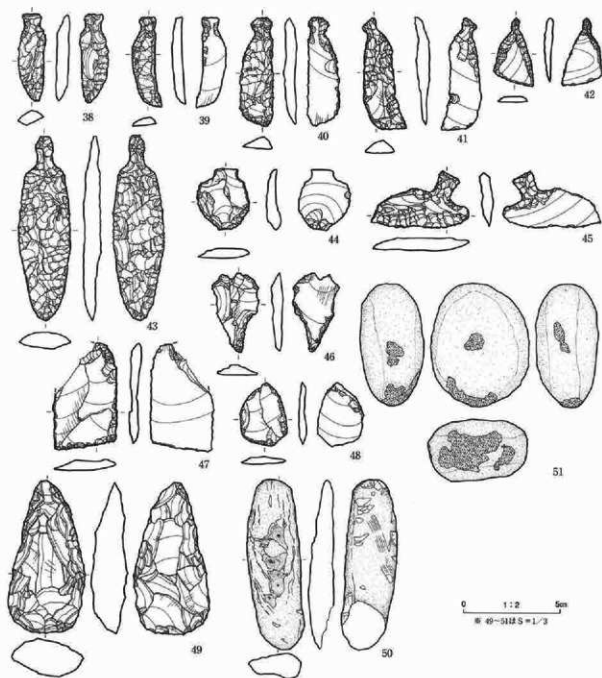
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	器状	外面文様	内面調整	分厚	器厚	備考
1	05-306	20号住居跡	瓦上下部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文 横紋線文	ナデ	雫	6mm	漆物繊維混入
2	05-389	20号住居跡	瓦上下部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文	ナデ	雫	10	漆物繊維混入
3	05-604	20号住居跡	瓦土中～上部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文	ナデ	雫	12	漆物繊維混入
4	05-833	20号住居跡	瓦土中～上部	漆鉢	口～胴	横筋圧文文 短沈線文 胴：赤結東前縄文 (60多)	ナデ	雫	8	漆物繊維混入
5	05-822	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文 横紋線文	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
6	05-603	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
7	05-338	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文	ナデ	雫	10	漆物繊維混入
8	05-125	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口～胴	横筋圧文文 短沈線文	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
9	05-607	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	口	ボタン状突起 横筋圧文 横紋	ナデ	雫	10	漆物繊維混入
10	05-602	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	横筋圧文文 短沈線文 口唇：刺目	ナデ	雫	11	漆物繊維混入
11	05-603	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	口	横筋圧文文 L.R (9多)	ナデ	雫	11	漆物繊維混入
12	05-625	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	L.R (9多) 口唇：短唇	ナデ	雫	11	漆物繊維混入
13	05-620	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	赤結東前縄文 口唇：短唇	ナデ	雫	7	漆物繊維混入
14	05-618	20号住居跡	床面	漆鉢	口	L.R (9多) 口唇：厚縁木地圧文	ナデ	雫	13	漆物繊維混入
15	05-622	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	横筋圧文(L.R)	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
16	05-627	20号住居跡	瓦土中部	漆鉢	口	L.R (9多)	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
17	05-395	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	口	横筋圧文 L.R (9多)	ナデ	雫	9	漆物繊維混入
18	05-614	20号住居跡	瓦土下部	漆鉢	底	平底 横筋圧文文	ナデ	雫	7	漆物繊維混入

第13図 20号住居跡出土遺物 (1)



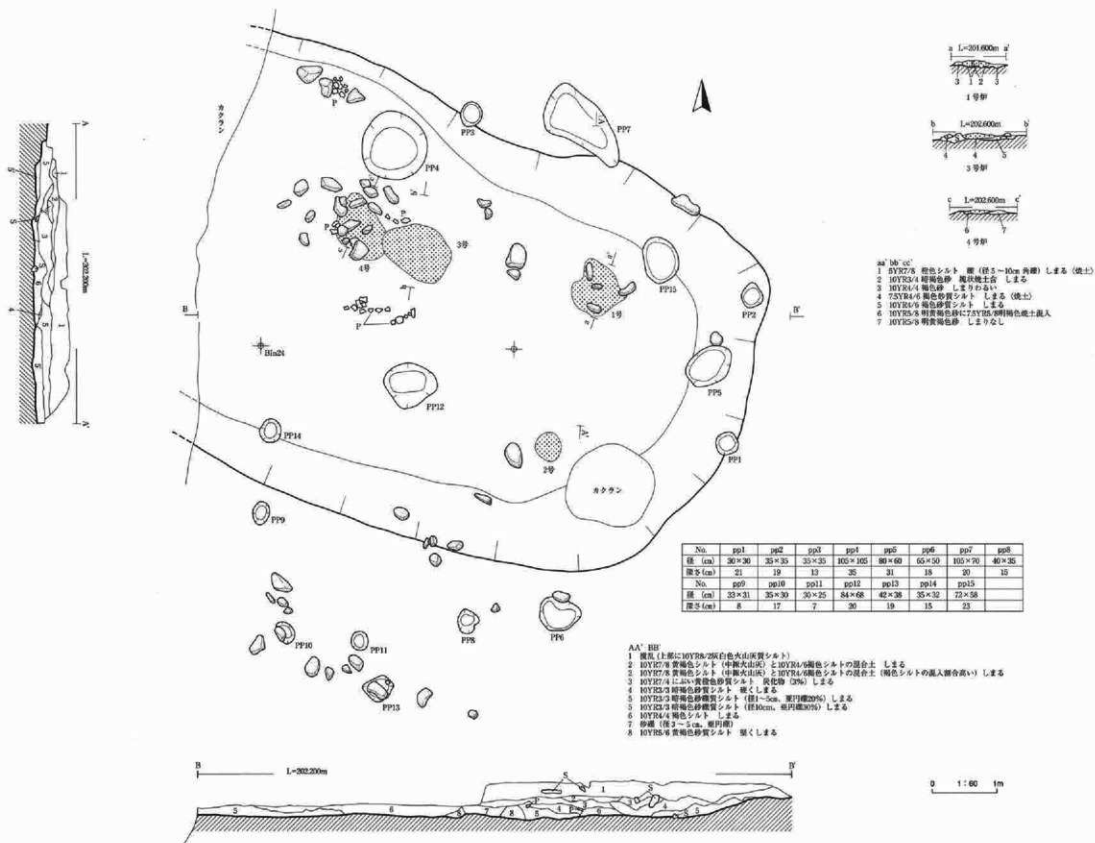
国庫番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	器名						備考		
						形状	口径	津結定33式縄文 (0.9)					内面調整	分割
						長さ	幅	厚さ	重量	材質	ナデ	径	9cm	検出経緯記入
20	183	石磯	I A1	20号住居跡	規土中層	18.8	14.8	4.0	0.59	頁岩				
21	30	石磯	I A1	20号住居跡	規土下層	19.5	13.0	3.0	0.48	硬質頁岩				先層部欠損
22	184	石磯	I B1	20号住居跡	規土中層	23.3	18.5	3.5	0.78	頁岩				
23	77	石磯	I A1	20号住居跡	規土下層	26.5	14.5	4.5	1.30	頁岩				
24	251	石磯	I B1	20号住居跡	規土下層	27.0	16.5	3.5	1.06	頁岩				
25	112	石磯	I A2	20号住居跡	規土中下層	30.0	16.0	3.5	1.44	頁岩				
26	163	石磯	II A1	20号住居跡	規土下層	15.0	17.5	3.0	0.65	頁岩				
27	88	石磯	II A1	20号住居跡	規土下層	21.0	13.5	3.5	0.72	頁岩				先層部欠損
28	186	石磯	II B1	20号住居跡	規土中層	26.0	15.0	4.0	0.87	頁岩				
29	110	石磯	II B1	20号住居跡	規土中下層	28.0	11.0	4.0	1.37	頁岩				
30	247	石磯	II B1	20号住居跡	規土下層	27.5	18.0	4.0	2.16	頁岩				先層部欠損
31	269	石磯	I B	20号住居跡	規土中層	44.0	22.0	5.2	5.15	頁岩				
32	268	石磯	I A	20号住居跡	規土中層	30.0	21.5	5.0	5.22	頁岩				
33	32	石磯	I A	20号住居跡	規土中層	48.7	18.5	4.0	5.26	頁岩				
34	260	石磯	I B	20号住居跡	規土中下層	56.1	21.3	7.0	6.81	頁岩				裏面にアスファルト付着
35	171	石磯	I B	20号住居跡	規土下層	58.0	25.0	7.5	8.98	頁岩				
36	22	石磯	I A	20号住居跡	規土下層	62.5	26.0	10.0	13.49	頁岩				
37	206	石磯	I A	20号住居跡	規土下層	56.6	22.0	10.2	12.40	頁岩				

第14図 20号住居跡出土遺物 (2)

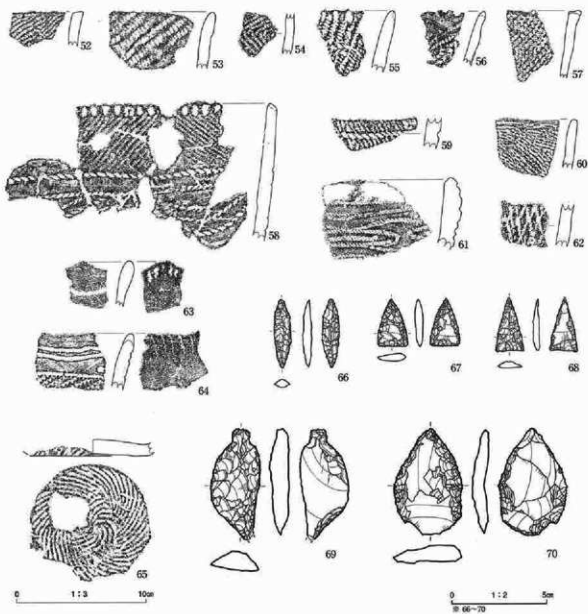


図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
38	303	石銃	I A	20号住居跡	埋土下部	46.9	13.1	6.7	5.44	頁岩	
39	307	石銃	I B	20号住居跡	埋土下部	48.0	16.0	5.0	3.71	頁岩	
40	308	石銃	I B	20号住居跡	埋土下部	36.0	19.0	6.0	6.44	頁岩	
41	272	石銃	I B	20号住居跡	埋土中下部	58.7	20.0	6.3	6.8	頁岩	
42	273	石銃	I B	20号住居跡	埋土中下部	35.3	21.2	3.3	2.00	頁岩	
43	305	石銃	I A	20号住居跡	埋土中下部	97.7	36.7	9.2	22.8	頁岩	
44	164	石銃	I A	20号住居跡	埋土下部	32.2	36.5	6.0	5.78	頁岩	
45	307	石銃	B	20号住居跡	埋土中部	31.4	52.0	6.7	7.92	頁岩	
46	309	石銃	I	20号住居跡	埋土中下部	41.5	24.0	5.0	4.65	頁岩	
47	115	不定形	B	20号住居跡	埋土下部	34.0	32.5	8.5	13.06	頁岩	
48	242	不定形	B	20号住居跡	埋土中部	33.3	24.0	3.5	4.03	頁岩	
49	246	打製石斧	Ic	20号住居跡	埋土下部	118.0	58.0	28.0	192.3	カレンフェルス	左先端欠損
50	130	磨石	-	20号住居跡	埋土中下部	132.0	40.0	30.2	118.4	頁岩	右先端欠損
51	328	磨石	-	20号住居跡	床面	96.0	49.5	48.0	489.8	石英燧山岩	先端に磨打痕

第15図 20号住居跡出土遺跡(3)



第16図 21号住居跡



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面図物	分限	数量	備考	
22	00-039	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	L.R (彩色)	ナゲ		7mm	植物繊維混入	
23	00-039	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	L.R (彩色)	ナゲ		8	植物繊維混入	
24	00-42	21号住居跡	瓶土下部	漆器	胴	結末部縦文 (彩色)	ナゲ	Ⅱ	6	植物繊維混入	
25	00-307	21号住居跡	瓶土中部	漆器	口	R.L (彩色) 口唇に縦線混み	ナゲ	V	10	植物繊維混入	
26	00-087	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	R.L 口唇小波状	ナゲ		6	植物繊維混入	
27	00-083	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	ピッチリ縦文	ナゲ	Ⅱ	8	植物繊維混入	
28	00-041	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口-胴上	L.R (縦・横斜形) + 赤平・後状部周正横文 口唇に縦線混み	ナゲ		9	植物繊維混入	
29	00-08	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	R.L	ナゲ	V	11	植物繊維混入	
30	00-090	21号住居跡	瓶土中部	漆器	口	赤赤文 先端に顔面正横	ナゲ	V	8	植物繊維混入	
31	00-31	21号住居跡	瓶土中部	漆器	口	縦線正横文	ナゲ		13	植物繊維混入	
32	00-41	21号住居跡	瓶土下部	漆器	胴	縦目状赤赤文	ナゲ		9	植物繊維混入	
33	00-243	21号住居跡	瓶土中部	漆器	口	沈線・網文 内面先端に縦線混み正横文 口唇小波状	ナゲ		8		
34	00-082	21号住居跡	瓶土下部	漆器	口	具正横・沈線・斜赤文 内面先端に縦線混み正横文 口唇小波状	ナゲ		10		
35	00-666	21号住居跡	瓶土下部	漆器	底	渦巻状正横文	ナゲ	Ⅱ	9	植物繊維混入	
図録番号	登録番号	器種	分限	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量g	材質	備考
66	1	石鏃	ⅡA2	21号住居跡	埋土下部	26.0	8.3	4.5	2.00	頁岩	
67	130	石鏃	I A1	21号住居跡	埋土	24.8	15.0	4.5	1.36	頁岩	
68	128	石鏃	I A1	21号住居跡	埋土	28.0	15.0	3.8	1.08	頁岩	
69	2	石鏃	I B	21号住居跡	埋土下部	58.0	25.5	10.0	12.76	頁岩	先端欠損
70	3	不透明	2	21号住居跡	埋土下部	30.5	30.0	8.0	15.11	頁岩	先端下部欠損

第17図 21号住居跡出土遺物 (1)

◎ () 欠損状



図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	高さ	重量	材質	備考
71	4	不定形	Ⅱ	21号住跡	埋土下部	3.6	23.6	7.1	5.7	頁岩	
72	172	不定形	Ⅱ	21号住跡	埋土中部	34.1	35.4	13.2	21.96	頁岩	

第18図 21号住居跡出土遺物(2)

<床・壁> 壁は北側がやや傾り込んでいる様子がやや垂直気味に立ち上がる部分がある。東から南側にかけては大きく緩やかに立ち上がる。とくに南側は顕著で、20号住居跡に類似し自然の地形を利用しているようにみえる。床面からの比高は、北壁8.1～16.8cm、南壁25.2～27.2cm、東壁6.6～16.6cmで東側が低くなる。床面は遺構の西側と東側で異なり、西側はよくしまった砂質シルトであるのに対して、東側は砂礫(堆山)である。完形に近い土器は東側で多く出土する。

<柱穴> 柱穴状遺構は遺構周辺のものも含めて15基検出している。直径は30cm～1mと幅がある。一見自然の窪み状のものもあり、主柱穴も不明瞭である。この内pp1～3・6・8・9は直径や深さが一定で、壁柱穴を構成する可能性がある。緩やかに立ち上がる南側壁では径3～5cmの柱穴状の穴が多数検出された。付属施設や木根の可能性もあるが、判断できなかった。

<炉跡> 地床炉と考える焼土遺構が4基検出された。2号炉は非常に薄く断面観察できなかった。他の炉は固くしまり、礫に覆われてる。

<その他> 床面は東側が西側より高い。遺構重複の可能性も考えたが、遺物出土状況からは同一面と判断した。同様な検出状況は25号住居跡でも見られた。

遺物 ほとんどの土器片に植物繊維を混入させる。63・64には含まれない。厚さは10mm前後であるが、54・56は6mmと薄い。55は口唇から口縁先端にかけて棒状工具による太い(5mm幅)刻みが縦位にはいる。56は口唇に5mm幅の刻みが入れられ、小波状である。57は54同様の刻み下位に同一原体により回転向きを変えた「ハ」字状斜縄文、その下位に横位～波状の側面圧痕文を4条施している。59は斜縄文上に横位の側面圧痕文を、61は先端が破損しているが横位の曲線的側面圧痕文を施す。61は破損した中に1ヶ所刺突がみられる。53は表裏面に、61は破損面に明瞭な植物繊維が認められる。63・64は貝殻文・沈線文・刺突文による施文で、ともに内面先端に縦位貝殻文施される。65は底部片(径約10cm)で平底である。石器は石鏃13点、石匙3点、不定形4点出土している。石鏃はほとんどが平基である。68は基部両端が尖り、全体として浅く挟られているように見える。石匙はすべて縦型である。不定形石器は背面両側縁と左辺腹面に調整の加えているもの(70)、腹面両側に調整のあるもの(71・72)などがある。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

24号住居跡(第19～21図、写真図版15・112・113)

<位置> B II 12～14・m12～14・n14区に跨いで位置する。

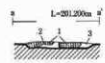
<検出状況> To-Cu直下の褐色砂礫質粘土層に覆われた若褐色砂質粘土層から比較的多量に土器片が出土した。壁と見られる掘り込みは東側の一部でだけ検出され、全体的には明瞭なプランを把握できず、遺物と



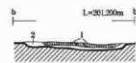
No.	径(m)	深(m)
pp1	50×40	9
pp2	45×30	7
pp3	35×25	5
pp4	23×17	-
pp5	18×17	6
pp6	16×16	5



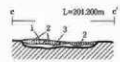
- AA' BB'
- 1 75YR4/3 褐色砂質粘土 (層厚15cm、角礫) しまる
 - 2 10YR5/2 黒赤褐色砂質粘土 土器片含 しまりゆかい
 - 3 10YR2/2 黒褐色シルト ややしまる
 - 4 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 土器・炭化物片含 しまる
 - 5 10YR4/4 褐色砂層 (層厚5-10cm、角一室角礫) 土器片・石器含 しまる
 - 6 10YR4/4 褐色砂質粘土 (層厚約1m) 炭化物片含 しまる
 - 7 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 土器・炭化物片含 しまる
 - 8 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (層厚5cm、垂直面2%) しまる
 - 9 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (層厚5cm、垂直一室角礫) しまる



- aa'
- 1 5YR2/3 暗赤褐色砂質粘土 炭化物片含 しまる
 - 2 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 炭化物片含 しまる
 - 3 75YR2/2 黒褐色砂質粘土 しまる



- bb'
- 1 5YR2/3 暗赤褐色砂質粘土 炭化物片・土器片含 しまる
 - 2 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 しまる



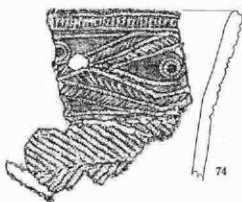
- cc'
- 1 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 しまる
 - 2 5YR2/3 暗赤褐色砂質粘土 炭化物片・土器片含 しまる
 - 3 10YR2/4 暗赤褐色粘土質砂層 しまる



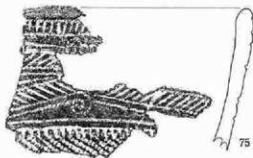
第19図 24号住居跡



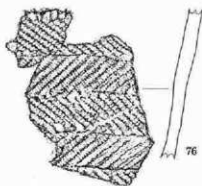
73



74



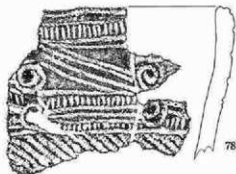
75



76



77



78

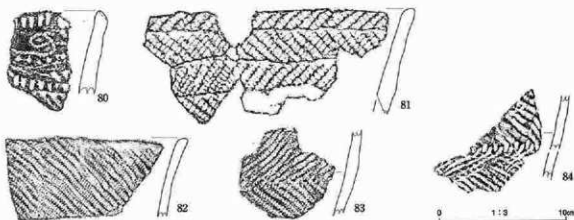


79

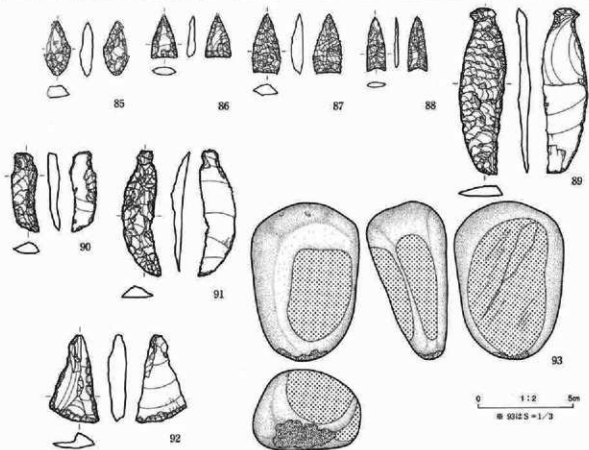
0 1:3 10cm

図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	片断文様	内面文様	分期	器厚	備考	
73	00-823	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	26mm	植物繊維混入
74	00-894	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	15	植物繊維混入
75	00-897	24号住居跡	埋土中層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	11	植物繊維混入
76	00-125	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	11	植物繊維混入
77	00-645	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	10	植物繊維混入
78	00-630	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	14	植物繊維混入
79	00-130	24号住居跡	埋土下層	漆器	口-胴上	文様帯：斜面圧痕文+斜虎線文	胴部：非斜巻羽織文	ナデ	埋	9	植物繊維混入

第20図 24号住居跡出土遺物(1)



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	表面文様	内面文様	片の長さ	分厚	器厚	備考
80	00-546	24号住居跡	2号炉	漆器	口縁	文様部：横線に交+斜交文	胴部：斜. (0多)	ナデ	厚	11mm	植物繊維混入
81	00-508	24号住居跡	2号炉	漆器	口縁	非粘着目縄文 (0多)		ナデ	厚	11	植物繊維混入
82	00-265	24号住居跡	堀土下層	漆器	口縁	斜. (0多)		ナデ	厚	6	植物繊維混入
83	00-137	24号住居跡	堀土下層	漆器	胴	非粘着目縄文 (0多)		ナデ	厚	9	植物繊維混入
84	00-134	24号住居跡	堀土下層	漆器	胴	粘着目縄文 (0多)		ナデ	厚	7	植物繊維混入



図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
85	38	石皿	ⅡA2	24号住居跡	堀土上層	260	134	4.7	2.12	頁岩	左辺上半部欠損
86	329	石皿	ⅡA1	24号住居跡	堀土下層	22.1	13.9	3.9	0.95	頁岩	先端欠損
87	181	石皿	ⅡA2	24号住居跡	堀土上層	30.7	14.1	6.2	2.16	頁岩	
88	321	石皿	ⅡA1	24号住居跡	堀土上層	26.6	10.0	2.0	0.58	頁岩	
89	328	石皿	I A	24号住居跡	堀土下層	87.2	24.1	3.8	11.36	頁岩	
90	289	石皿	I B	24号住居跡	堀土下層	39.2	18.6	3.8	3.47	頁岩	
91	300	石皿	I A	24号住居跡	堀土下層	63.2	24.2	6.6	6.26	頁岩	
92	39	不定形	Ⅲ	24号住居跡	堀土上層	45.4	27.0	9.3	6.53	頁岩	
93	323	磨石	—	24号住居跡	堀土下層	123.5	84.6	62.0	814.9	砂岩 (北上山産)	表面に風化による割れ目

第21図 24号住居跡出土遺物 (2)

礫、焼土、柱穴などで形状を推定した。長・短軸方向の規模はある程度推定できたが、方形か楕円形かの詳細については十分ではない。住居跡南側は調査区外に延びるため全体形は確認できなかった。褐色砂礫質粘土層は北側に位置する旧河道跡から広がるように住居跡の北側を被っており、その影響もあってか、北壁は非常に不明瞭である。本住居跡の西側床下で39号住居跡を検出している。

<形態・規模> 楕円形状を呈すると推測したが、前述のように北側ほど地山と埋土の識別がしにくく方形の可能性もある。規模は、長軸が約9.3m、短軸が5.3m以上ある。

<埋土> 2層に大別される。上部層は径約10mmの亜角礫を多く含む粘上層で北側から本住居跡をオーバーラップするように被っている。下部層は暗褐色砂質シルト層で、土器片・石器・炭化物片を含み数十cmの扁平な亜円礫も多く出土する。

<床・壁> 検出面から床面までの深さは15cmである。全体的に壁の立ち上がりは不明瞭であるが、東側で緩い壁の立ち上がりを確認した。

<柱穴> 柱穴状の小土坑が6基検出された。3基(p1-p3)は東側壁沿いに、残り3基(p4-p6)は中央寄りに設けられている。前者は35-50cm、後者は16-23cmで、深さは5-9cmと浅いが、本住居跡に属する可能性がある。

<炉跡> 竈形炉と考えられる焼土が4基検出された。北西寄りの3基は規模が85×65cm、105×65cm、75×40cmで、南東寄りのものは30×20cmと小規模である。いずれも床面が焼けているだけで、掘り込み等は確認できなかった。

遺物 土器片には植物繊維が混入する。口縁部に側面瓦文と短沈線文による横位・斜位・渦巻状の文様をもつもの、非結束羽状縄文のみで施文されるものが主に出土する。また、本住居跡以前に構築された遺構(39号住居跡など)に伴うとみられる惣糸文や表裏縄文の土器片が少量出土した。73-80は口縁部文様帯に側面瓦文とそれを充填するように短沈線文の土器片が少量出土した。73-80は口縁部文様帯に側面瓦文で区画する。80は文様帯幅が狭く、横位の側面瓦文間に短沈線の代わりに太い刺突を加えている。78はU字中央に1条の側面瓦文が施される。石器は石鏃14点、石匙4点、不定形7点、擦石1点が出土している。85は尖頭状、88は薄く、細長い。石匙は3点とも緩型である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期初頭頃と考えられる。

25号住居跡(第22・23図、写真図版16・113)

<位置> BⅠm・n25-BⅡm・n21に跨いで位置する。

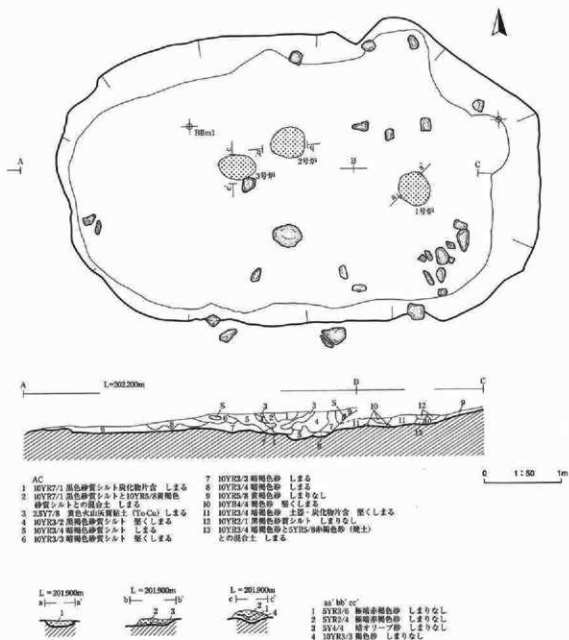
<検出状況> IIb層を剥いだ後に土坑状の黒褐色土のプランを検出した。土坑として精査したところ断面に焼土を検出したため、住居跡に認定し直し精査を続けた。遺構の東側に壁状の立ち上がりとなまった床面を確認し、一括で出土する土器などから竈穴住居跡とした。

<形態・規模> 長軸6.32m、短軸3.86mで、平面形は不整な楕円形を呈する。東西方向に主軸を持つ。

<埋土> 遺構の西側、中央、東側で異なる。西側は石器チップが多量出土する締まりのよい黄褐色砂が、中央は黄褐色の中級火山灰が特徴的に覆う。東側は締りのよい砂質シルト下位に土器を伴う暗褐色シルトが堆積する。

<壁> 明確に確認できるのは遺構の東側と北側の一部のみで他は壁らしき立ち上がりが見えない。特に南側では自然地形を利用しているようにみえる。東側は緩やかに立ち上がり、残存する壁高は19.5cm、北側はやや垂直気味に立ち上がる。壁高は23.8cmである。

<床面> 西側は埋層で石器剥片が多く出土するのに対して、東側は砂質シルトで覆われる。東西で床面の



第22図 25号住居跡

状況が異なるのは21号住居跡と同じである。中央部は窪みをもつ。

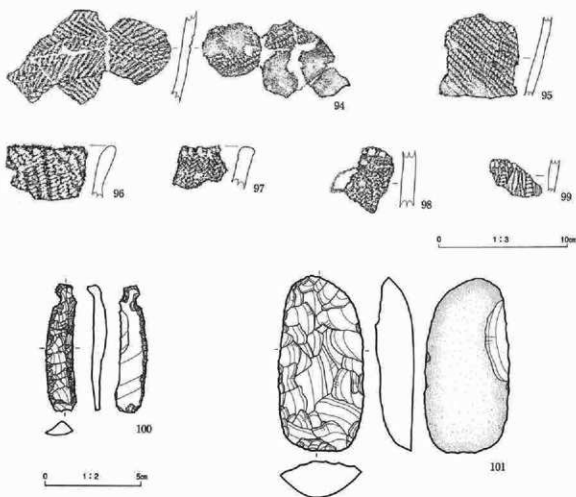
<柱穴> 柱穴としては確認していないが、床面北東隅に窪みがある。柱穴の可能性もある。

<炉跡> 3基検出している。3基とも約40×30cmで固く締まる。

<その他> 埋土の様子から複数期にわたる遺構利用の可能性はある。

遺物 ほとんどの土器片に植物繊維を含み、厚さは6～11mmである。94は非結束羽状縄文上に波状の側面圧痕文が、また内面にも縄文が施される。99は条痕地に縦横位側面圧痕文が、97・98は矢羽状の燃糸文が施される。石器は槩型の石匙と片面調整の打製石斧各1点が出土している。

時期 出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



図録番号	登録番号	出土地点	層位	形種	部位	外面文様	内面文様	台幅	器厚	備考	
94	00-43	25号住居跡	埋土下層	碎鉢	口一側	穿結糸羽織文上に雲面庄敷文		L.R	2	破物編織品入	
95	00-40	25号住居跡	埋土上層	碎鉢	胴	肌		ナデ	7		
96	00-305	25号住居跡	埋土下層	碎鉢	口	糸織上に雲面庄敷		ナデ	8	破物編織品入	
97	00-317	25号住居跡	埋土上層	碎鉢	口	先端縦位刺 熱赤文(矢羽織状)		ナデ	10		
98	00-47	25号住居跡	埋土上層	碎鉢	胴	先端縦位刺 熱赤文(矢羽織状)		ナデ	11		
99	00-34	25号住居跡	埋土上層	碎鉢	胴	熱赤文(矢羽織状)		赤灰	6		
図録番号	登録番号	器種	分層	出土地点	層位	長mm	幅mm	重量g	材質	備考	
100	314	石匙	I.B	25号住居跡	埋土上層	67	13.0	6.0	7.28	頁岩	先端部欠損
101	315	打製石斧	I.A	25号住居跡	埋土上層	93.0	44.5	20.0	92.17	ホルンフェルス	片断自然面

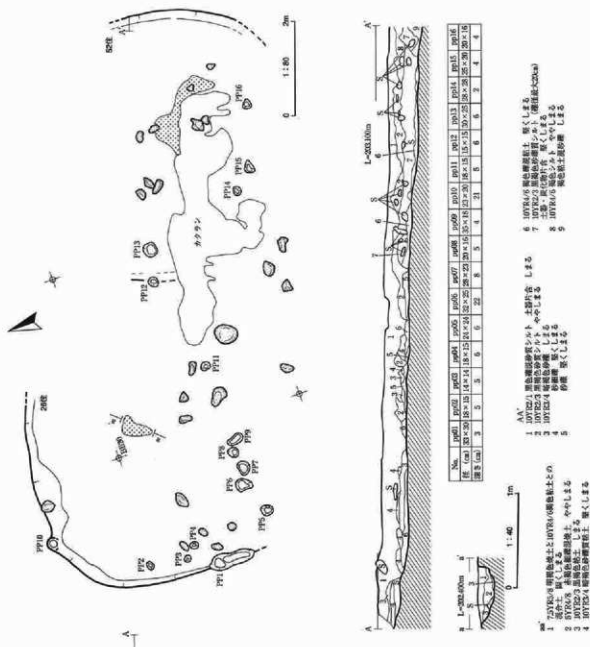
※()は欠損長

第23図 25号住居跡出土遺物

26号・62号住居跡 (第24～26図、写真図版17・113・114)

<位置> B I hi19～20・ij20～21に跨いで位置する。

<検出状況・重複関係> 20・21号住居跡の検出状況から山側(北側)にも遺構が広がる可能性が大きくなり、再度重機で表土を粗掘した後人力による検出を始めた。II b層黒褐色土下位の暗褐色土から20号住居跡で出土した土器と同様のものを確認し、住居跡を想定して精査をすすめた。山側に生じた東西の土層断面から長軸が約8mにおよぶ遺構と推定されたが、山側半分を調査するためにはさらに約2mの粗掘が必要であることが判明した。平面からはほとんど掘り込みは確認できず、東側で検出した炉跡と遺物の出土状況からプランを推定した。調査がすすむにつれて遺構の長軸方向に沿って旧水路跡が検出され、この水路構築時に

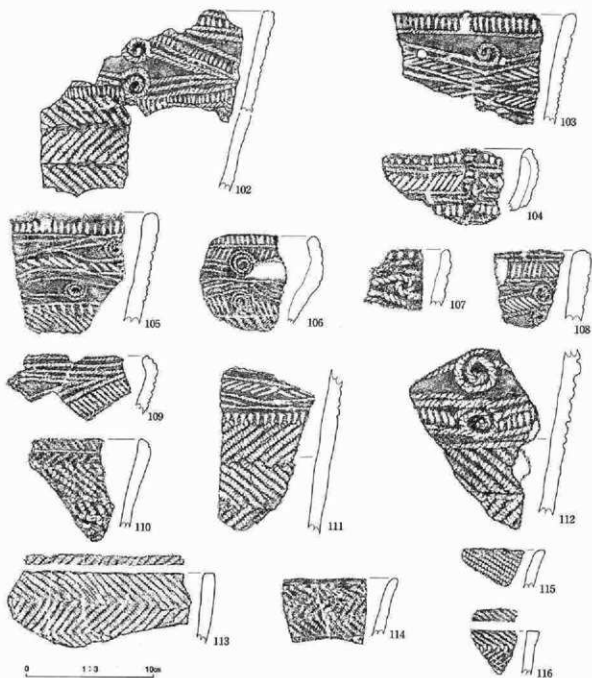


第24図 26・52号住居跡

地床炉が攪乱を受けいることが分かった。このため、本住居跡の全貌を調べるために現水路の安定を保てる限度（約1.5m幅）までさらに拡張し、調査を行った。その結果、もう一基の地床炉を西側に検出するとともに、東側地床炉を中心とするおよそ円形の住居跡（52号）が推定された。埋土状況と遺物から52号住居跡が古いと判断した。

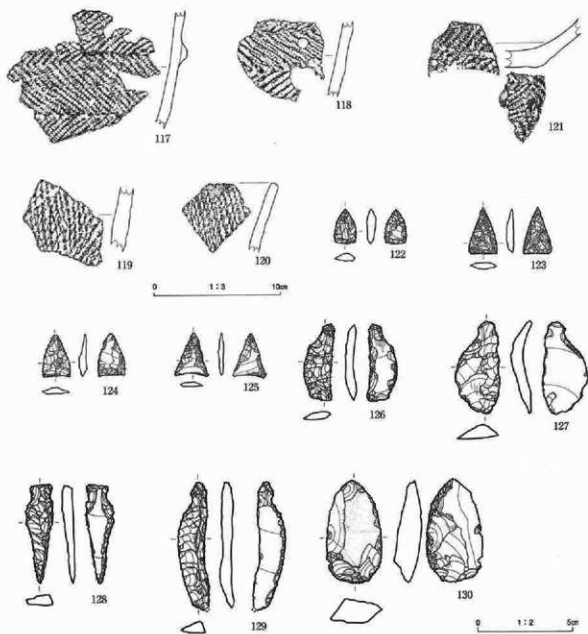
<形態・規模> プランは不明瞭であるが、26号住居跡は東西方向に長軸を持ち6m以上×6mで楕円形状を52号住居跡は約5.6mの円形状を呈すると推測される。

<埋土> 26号住居跡は上部層のⅢ層黒褐色土を除けば、褐色～暗褐色砂細礫質粘土が、52号住居跡は黒



国庫番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分層	図取	備考
102	00-848	26号住居跡	埋土下部	漆器	口一側	横面圧文・短比線文 赤結末羽織文 (少)	ナテ	Ⅷ	10cm	漆物繊維混入
103	00-272	26-52号住居跡	埋土中部	漆器	口	横面圧文・短比線文 漆粉孔	ナテ	Ⅷ	11	漆物繊維混入
104	00-554	52号住居跡	埋土下部	漆器	口	横面圧文・短比線文 縦線帯	ナテ	Ⅷ	9	漆物繊維混入
105	00-261	52号住居跡	埋土下部	漆器	口一側	横面圧文・短比線文	ナテ	Ⅷ	11	漆物繊維混入
106	00-260	26-52号住居跡	埋土上部	漆器	口	横面圧文・短比線文	ナテ	Ⅷ	12	漆物繊維混入
107	00-280	26号住居跡	埋土下部	漆器	口	横面圧文・短比線文	ナテ	Ⅷ	11	漆物繊維混入
108	00-289	26号住居跡	埋土上部	漆器	口	横面圧文・短比線文	ナテ	Ⅷ	15	漆物繊維混入
109	00-273	26号住居跡	埋土上部	漆器	口	横面圧文・短比線文	ナテ	Ⅷ	9	漆物繊維混入
110	00-485	26号住居跡	埋土下部	漆器	口一側	1.3 丸菊丸羽織文	ナテ	Ⅷ	9	漆物繊維混入
111	00-217	26-52号住居跡	埋土中部	漆器	口一側	横面圧文・短比線文 赤結末羽織文 (少)	ナテ	Ⅷ	12	漆物繊維混入
112	00-205	26-52号住居跡	埋土中部	漆器	口一側	横面圧文・短比線文 赤結末羽織文 (少)	ナテ	Ⅷ	7	漆物繊維混入
113	00-567	26号住居跡	埋土下部	漆器	口	赤結末羽織文 (少) 口唇：横面圧文	ナテ	Ⅷ	6	漆物繊維混入
114	00-591	26号住居跡	埋土上部	漆器	口	赤結末羽織文 (少)	ナテ	Ⅷ	6	漆物繊維混入
115	00-297	26号住居跡	埋土下部	漆器	口	肌。(少)	ナテ	Ⅷ	7	漆物繊維混入
116	00-508	52号住居跡	埋土上部	漆器	口	縦糸羽織文 (少) 口唇：横面圧文	ナテ	Ⅷ	8	漆物繊維混入

第25図 26・52号住居跡出土遺物 (1)



国庫番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面図柄	分組	器深	備考	
117	00-199	26号住居跡	層土下部	漆鉢	口~胴	赤粘重明織文 段帯貼付	ナゲ	Ⅱ	12mm	植物繊維混入	
118	00-227	52号住居跡	層土中部	漆鉢	胴	赤粘重明織文 補修孔	ナゲ	Ⅱ	9	植物繊維混入	
119	00-230	52号住居跡	層土下部	漆鉢	胴	赤粘文	ナゲ	Ⅱ	12	植物繊維混入	
120	00-279	52号住居跡	層土下部	漆鉢	口~胴	赤粘文	ナゲ	Ⅱ	7	植物繊維混入	
121	00-211	26号住居跡	層土下部	漆鉢	胴~底	L状 (90%) 表面側面凹状文	ナゲ	Ⅱ	12	植物繊維混入	
国庫番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
122	150	石鏃	IA1	52号住居跡	層土	18.5	11.0	4.5	0.95	頁岩	
123	152	石鏃	IB	52号住居跡	層土	22.0	13.5	3.5	1.1	頁岩	先端部欠損
124	305	石鏃	III B1	26号住居跡	層土	22.5	35.0	1.6	0.97	頁岩	
125	40	石鏃	III B1	26-52号住居跡	層土	23.0	17.4	2.5	0.81	頁岩	
126	88	石鏃	IB	26-52号住居跡	層土上部	40.5	15.5	5.0	2.96	頁岩	
127	215	石鏃	IA	26-52号住居跡	層土下部	47.9	25.0	6.5	6.24	頁岩	
128	154	石鏃	IA	52号住居跡	層土	50.7	14.3	5.5	3.68	頁岩	欠損したものを再調査?
129	109	石鏃	IB	52号住居跡	層土	67.37	17.0	6.0	6.24	頁岩	先端部欠損
130	227	不定形	I	26号住居跡	層土上部	54.0	28.5	11.0	18.08	頁岩	

※ ()は欠損長

第26図 26・52号住居跡出土遺物(2)

褐色砂礫質シルトが主体となる。両遺構の埋土の違いは時期差の他に、IIb層堆積以前の侵食の差による可能性もあるが、不明である。

<床・壁> 床面はともにしまりがよい。床面上では同時期の他の住居跡と同様に葦円籾（最大約40cm、平均20cm）が散在する。壁は西側から北側にかけて検出され、やや緩やかに立ち上がる。26号住居跡の壁高は西側で4cm、北側で23cmである。52号住居跡は西側で24cm、東側で26cmである。

<柱穴> 柱穴状の小土坑が26号住居跡で10基、52号住居跡で5基検出されたが、浅いものが多くはっきりとは断定できない。

遺物 すべての土器片に植物繊維を含む。側面圧痕文と短沈線文で文様帯を構成するもの、非結束羽状縄文、結束羽状縄文、撚糸文などで施文されたものが出土している。撚糸文の土器片は52号から多く出土した。104・106・109は「く」字状に内湾する。104は縦位の隆帯を、117は横位の隆帯を貼付している。121は底に渦巻状の圧痕が施されている。石器は石鏃25点、石匙5点、不定形13点出土している。石鏃は長さ20～25mmで、平基～浅く抉れたものが多い。石匙は籠型のみである。

時期 検出層位、出土遺物、遺構の形態から26・52号住居跡はそれぞれ縄文早期末、前期初頭頃と考えられる。

27号住居跡（第27・28図、写真図版18・114・115）

<位置> BII m 4・5区に跨って位置する。

<検出状況> 調査区東側の山体が迫出す場所で、重機による表土剥ぎが最小限度しかできず手作業による検出となった。攪乱を受ける黒色土下層から裸とともに土器片が多数出土し、焼土を伴う堅くしまった面を検出したことから住居跡と認定した。

<重複関係> 西側では江戸時代末～明治初期にかけての墓塚が多数検出され、南側は旧水路により攪乱を受けている。本遺構上は生活用道路が通っていたこともありかなり攪乱を受けていた。

<形態・規模> 検出状況が悪く全貌が把握できないが、長軸8m前後の楕円形状を呈すると推測される。

<埋土> 暗褐色砂質シルトを主体とする。後背山地起源の虚線礫（石灰岩、径数10cm）を多く含む。To-Cuは観察されなかった。

<壁> 南東側で壁状の高まりを確認した。高さは5cmである。

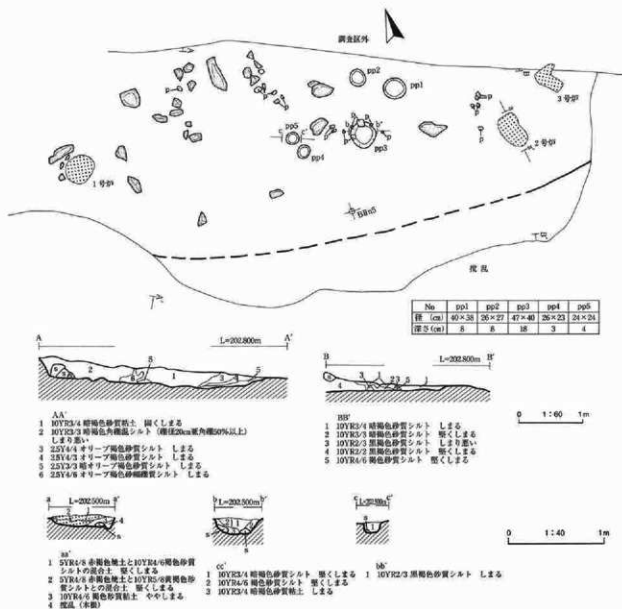
<床面> 非常に堅く締まる。このしまりが住居跡に伴うものか、旧道によるものかは判別できなかった。

<柱穴> 中央部に5基の柱穴状小土坑を検出した。pp3は直径が50cmと大潤で、主柱穴となりうる可能性を持つ。

<か跡> 住居跡に伴う地床炉を3基検出した。いずれも非常に堅く締まる。規模は1号炉が50×40cm、2号炉が56×32cmで楕円形状、3号炉が23×19cmで不整形を呈する。前者の厚さは10cmである。また、両炉跡の間でごく薄い焼土遺構を検出している。

遺物 すべての土器に植物繊維が混入する。側面圧痕文・短沈線文と非結束羽状縄文に属する土器片が多く出土する。131は先端で「く」字状に屈曲する。137は内面にへら状工具のナデ跡が残る。石器は石鏃6点、石匙1点が出土した。石鏃は1点だけ基部が大きく抉入するが、残りは平基である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期初頭頃と考えられる。



第27図 27号住居跡

30号住居跡 (第29・31図, 写真図版19・115)

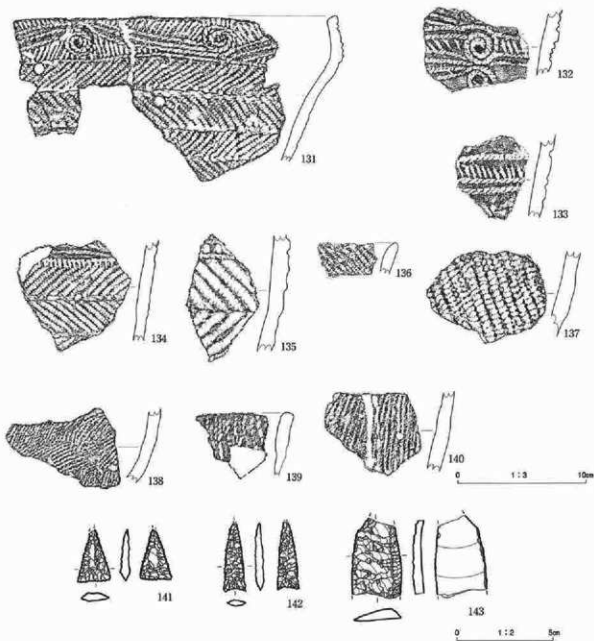
<位置> B I k-119区に跨って位置する。

<検出状況> 20号住居跡と同時期とみられる56号土坑を精査中に、地山を掘りぬいた黒褐色土から古い時代の土器片が出土した。遺構の可能性も視野に入れ20号住居跡の床下を精査したところ、粘土層下位から土器片とともに焼土遺構を検出した。このことから住居跡と認定した。

<重複関係> 東側では29号竪穴状遺構に切れ、西側では38号住居跡が本遺構床面下で検出された。

<形態・規模> 規模は7×5.3mでほぼ楕円形を呈する。およそ東西方向に主軸を持つ。

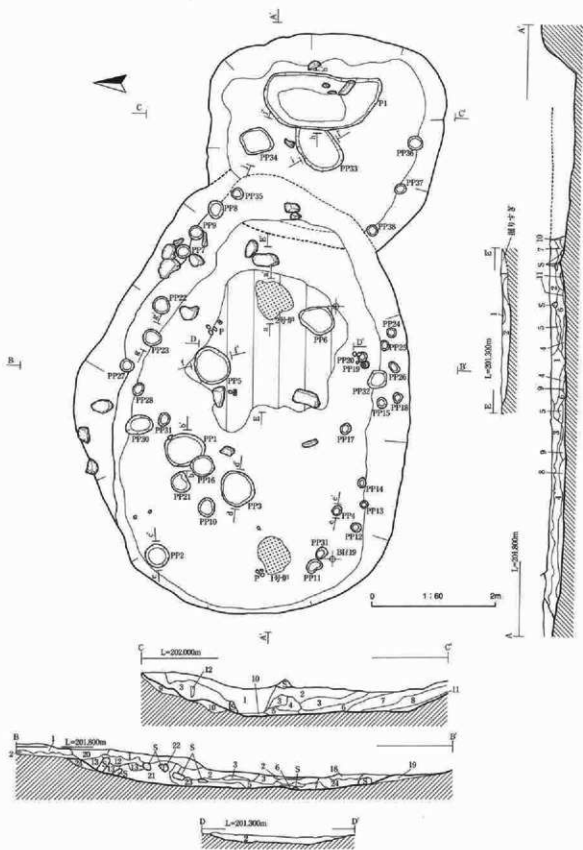
<埋土> 粗土主体部は土器片や炭化物片を包含する褐色~暗褐色粘土層で、遺構中央部では上位に20号住居跡床面の砂礫質粘土層、北から西側にかけては砂礫層に覆われる。遺構全体が均一に埋積されておらず、



図録番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	写真文様	内面調整	分類	器厚	備考	
131	00-829	27号住居跡	床面	漆鉢	口一側上	横面正交文・沈滞文 刷・垂結葉形陶文 (0多) 輪付乳	ナテ	Ⅷ	30mm	植物繊維混入	
132	00-869	27号住居跡	甕土下部	漆鉢	口	横面正交文・沈滞文	ナテ	Ⅷ	11	植物繊維混入	
133	00-92	27号住居跡	甕土上部	漆鉢	口一側上	横面正交文・沈滞文	ナテ	Ⅷ	11	植物繊維混入	
134	00-80	27号住居跡	甕土上部	漆鉢	口一側上	横面正交文・沈滞文 刷・垂結葉形陶文 (0多)	ナテ	Ⅷ	30	植物繊維混入	
135	00-84	27号住居跡	甕土上部	漆鉢	口一側上	横面正交文・沈滞文 刷・垂結葉形陶文 (0多)	ナテ	Ⅷ	12	植物繊維混入	
136	00-808	27号住居跡	甕土上部	漆鉢	口	SL	ナテ	Ⅶ	7	植物繊維混入	
137	00-75	27号住居跡	床面	漆鉢	胴部	SL	ヘラ底ノ具痕	Ⅷ	12	植物繊維混入	
138	00-71	27号住居跡	甕土上部	漆鉢	胴部	赤糸文	ナテ	Ⅹ	10	植物繊維混入	
139	00-504	27号住居跡	甕土下部	漆鉢	口	赤糸文	ナテ	Ⅹ	10	植物繊維混入	
140	00-94	27号住居跡	甕土下部	漆鉢	胴部	赤糸文	ナテ	Ⅹ	10	植物繊維混入	
図録番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
141	47	石鏃	I B1	27号住居跡	甕土上部	(97)	17.0	5.6	1.4	頁岩	先端部欠損
142	43	石鏃	EA1	27号住居跡	甕土上部	(95)	11.0	3.9	1.37	頁岩	先端部欠損
143	212	石鏃	-	27号住居跡	甕土下部	(43)	26.0	5.0	7.3	頁岩	先端・上半欠損

※ ()は欠損長

第28図 27号住居跡出土遺物



第29図 30号住居跡・29号竪穴状遺構 (1)

- AA' BB' CC'
- 1 25Y4/4 オリーブ褐色砂礫 堅くしめる
 - 2 25Y5/4 オリーブ褐色砂礫 堅くしめる
 - 3 10YR4/4 褐色砂礫質粘土 堅くしめる
 - 4 10YR5/8 黄褐色粘土 炭化物片含 (10%) 堅くしめる
 - 5 10YR4/4 褐色砂礫質粘土 炭化物片含 (少量) 堅くしめる
 - 6 10YR4/4 褐色粘土 炭化物片含 (10%) 堅くしめる
 - 7 10YR7/4 暗褐色粘土 堅くしめる
 - 8 10YR3/4 暗褐色粘土 炭化物片含 (2%) 焼土粒 (1%) ややしめる
 - 10 砂礫 (強磁石)
 - 11 25Y5/8 暗赤褐色粘土 しめる
 - 12 25YR3/4 オリーブ褐色砂礫 炭化物片含 (1%) 非常に堅くしめる

- 13 10YR3/4 暗褐色砂礫質粘土 炭化物片含 (2%) ややしめる
- 14 10YR2/2 暗褐色砂礫質粘土
- 15 10YR6/6 暗褐色砂礫質粘土
- 16 25Y5/4 オリーブ褐色砂礫質粘土 しめる
- 17 10YR4/6 褐色砂礫質粘土 炭化物片含 (少量) しめる
- 18 25YR3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト ややしめる
- 19 10YR4/4 オリーブ褐色砂質シルト ややしめる
- 20 25YR3/3 暗オリーブ褐色砂質シルトと5YR4/4に赤い赤褐色土との混合土 しめる
- 21 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 炭化物片含 (1%) しめる
- 22 25YR3/3 オリーブ褐色砂質シルトと5YR4/4に赤い赤褐色土との混合土
- 23 10YR6/3 におい黄褐色砂
- 24 25YR6/6 暗褐色砂質シルト しめる
- 25 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 堅くしめる



- aa' bb' cc'
- 1 10YR4/6 褐色粘土と5YR4/6赤褐色粘土との混合土 堅くしめる
 - 2 5YR4/6 赤褐色粘土 堅くしめる
 - 1 10YR3/4 暗褐色粘土 堅くしめる
 - 2 10YR2/2 暗褐色砂礫質粘土 炭化物片含 (1%) 堅くしめる
 - 3 10YR3/3 褐色粘土と5YR3/6暗赤褐色土との混合土 しまりなし
 - 4 10YR2/2 暗褐色砂質シルト 非常に堅くしめる
 - 5 10YR3/4 暗褐色粘土 (焼土粒5%) しめる



- bb' ff' ff'
- 1 10YR6/4 におい黄褐色砂礫 堅くしめる
 - 2 10YR5/4 黄褐色砂礫 堅くしめる
 - 3 10YR3/3 暗褐色粘土 土鏡片・磁石含 ややしめる
 - 4 10YR2/2 暗褐色砂礫質粘土 (強磁石) ややしめる
 - 4 10YR3/4 におい黄褐色粘土 炭化物片含 (1%) 堅くしめる
 - 5 10YR4/4 褐色砂礫 しめる
 - 7 25YR3/3 暗褐色砂質粘土 (10%) 炭化物片含 (1%) しめる
 - 8 10YR2/2 暗褐色砂礫質粘土 (5-10cm, 1%) 土鏡片・磁石含 ややしめる
 - 9 10YR2/4 暗褐色粘土 しめる
 - 10 5YR3/2 オリーブ褐色砂 上部に焼土粒 しまりなし
 - 11 25YR3/4 暗赤褐色土と10YR5/6黄褐色砂との混合土 しまりなし
 - 12 10YR5/8 黄褐色砂 しまりなし
 - 13 5YR3/3 オリーブ褐色砂礫

No.	F1	pp01	pp04	pp05	pp06	pp07	pp08
径 (cm)	182×85	178×27	42×40	18×18	24×21	19×15	15×13
厚さ (cm)	27	10	17	8	5	6	4

0 1:60 2m

No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16
径 (cm)	40×32	36×36	56×52	15×14	52×52	50×43	24×22	28×24	24×22	31×25	26×16	16×15	11×11	16×11	15×15	35×33
厚さ (cm)	10	6	5	20	—	6	9	21	10	4	7	9	6	8	9	7

No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32
径 (cm)	18×16	18×16	12×12	15×14	33×25	35×25	32×36	16×16	18×14	22×14	20×20	22×16	22×14	44×32	22×18	36×30
厚さ (cm)	5	3	5	2	4	10	11	7	7	6	6	5	4	—	5	9

第30図 30号住居跡・29号竪穴状遺構 (2)

しかも同様な土質のため壁と埋土の境を明確にすることは難しかった。

<壁> 20号住居跡と同様南壁はなだらかに上がり、残存する20号住居跡の南壁へと続く。西壁はほとんど残りが無く、壁高は平均2cmである。砂礫層の埋まる北壁は緩やかに立ち上がった後に、さらに10~25cm立ち上がる。

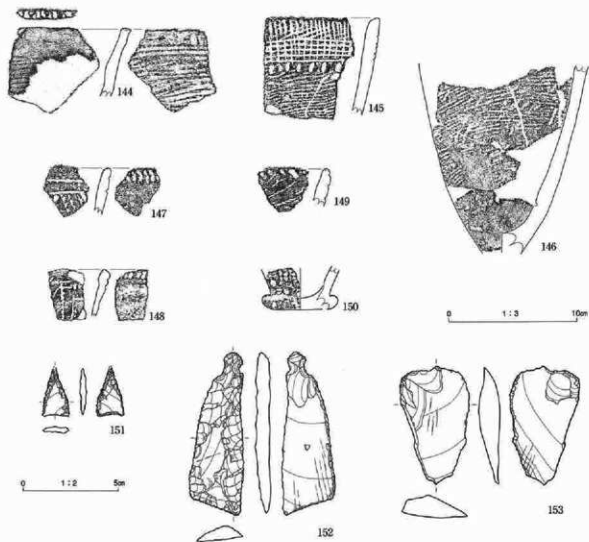
<柱穴> 柱穴状小土坑は32基検出している。直径約50cmの柱穴が4基あり、北壁から北西側床にかけて径20~30cmの小土坑が巡る。南壁では径10cmの柱穴が14基検出された。北壁の柱穴はその配列から壁柱穴の可能性がある。

<床面> 全般的によくしまっている。とくに東側の縦線の範囲は炭化物混じり粘土で堅くしまり、貼床とも考えられる。

<炉跡> 地床炉2基を検出している。1号炉は西壁から約90cm東寄りにあり、規模は60×40cm、やや不整な楕円形状で薄い。2号炉は炭化物混じり粘土床面の東側に位置する。規模は52×42cm、厚さ約8cmで不整な楕円形状を呈する。

遺物 貝殻文の土器片を除いて、植物繊維を混入する。145と146は同一個体の可能性が大きい。石器は石鎌3点、石匙2点、不定形1点が出土している。石鎌は挟りの深いものが1点、石匙はすべて縦型である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えられる。



図面番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考
144	00-541	30号住居跡	礎土上部	漆鉢	口	条状文 口唇底体本層圧痕文	条痕		9mm	漆物繊維混入
145	00-523	30号住居跡	床面	漆鉢	口	格子状沈線文 爪形状文 横縄文	ナデ		9	漆物繊維混入
146	00-817	30号住居跡	礎土下部	漆鉢	底	横縄文 尖底	ナデ		10	漆物繊維混入
147	00-549	30号住居跡	礎土上部	漆鉢	口	沈線文 刺突文 貝殻線彫り痕文	先端鋭位貝殻圧痕文 ナデ		8	
148	00-530	30号住居跡	礎土上部	漆鉢	口	貝殻線彫り痕文 沈線文 刺突文	先端鋭位貝殻圧痕文 ナデ		7	
149	00-542	30号住居跡	漆面	漆鉢	口	懸糸文 口唇隅の筋み	ナデ		10	漆物繊維混入
150	00-112	30号住居跡	漆面	漆鉢	底	縄文	板面		-	漆物繊維混入

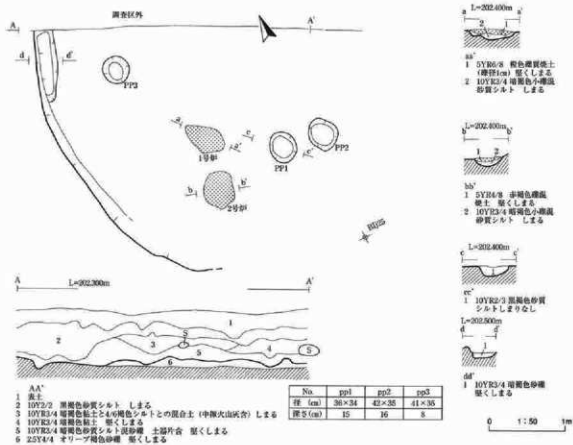
図面番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
151	395	石皿	ⅢA1	30号住居跡	上部	285	140	3.0	1.08	頁岩	先端欠損
152	396	石皿	I B	30号住居跡	下部	860	28.5	8.0	16.04	頁岩	
153	220	不定形	I	30号住居跡	上部	630	36.5	11.0	21.96	頁岩	

第31図 30号住居跡出土遺物

31号住居跡 (第32・33図、写真図版20・115・116)

<位置> BIj24~25区に跨って位置する。

<検出状況> IIa層黒褐色砂礫質粘土下位で検出した。重機で表土削除後人力検出を行った。遺物が多く出土し慎重に精査した結果、焼土遺構を検出した。西側でわずかに壁の立ち上がりを確認したことから住居跡と認定した。



第32図 31号住居跡

<形態・規模> 北側は調査区外に延び、南側は攪乱を受けている。西壁プランから推定する規模は5m前後と考えられる。

<埋土> 山体から緩やかに傾斜する裾野部分にあり、約1m北側には水路がある。表土部分は水路造成時の攪乱層で、その下位に旧表土黒褐色土が残る。西側の調査区より表土から検出面までは浅い。To-Cuは黒褐色土下部に塊状に混入し、その下位に暗褐色土が堆積している。本土層には遺物が包含されるが、地山までの厚さがない分遺物の時期幅が大きい。

<壁> 南向き断面とそれから延びる西壁のみの検出である。壁高は3～5cmで、形状は判別できない。

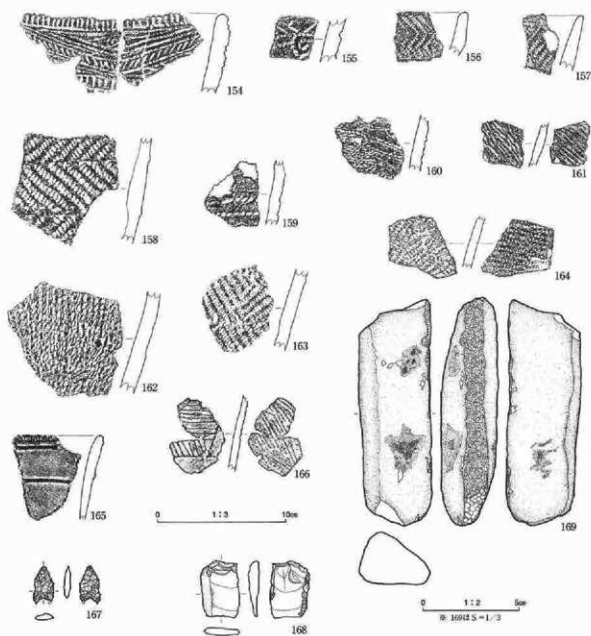
<床面> 礫を含む砂礫よりなり、堅くしまる。小さな凹凸が目立つ。

<柱穴> 床面で3基検出した。開口部径は30～40cm、深さは約10cmである。

<竈> 地床竈を2基検出した。規模は58×34cmと50×40cmで、不整な楕円形を呈する。厚さは最大12cmである。

<付属施設> 東西断面西側で溝状の断面を確認し精査をすすめたが、1mを検出した。住居外地山からは15cm、床面からは8cmの比高を持つ。

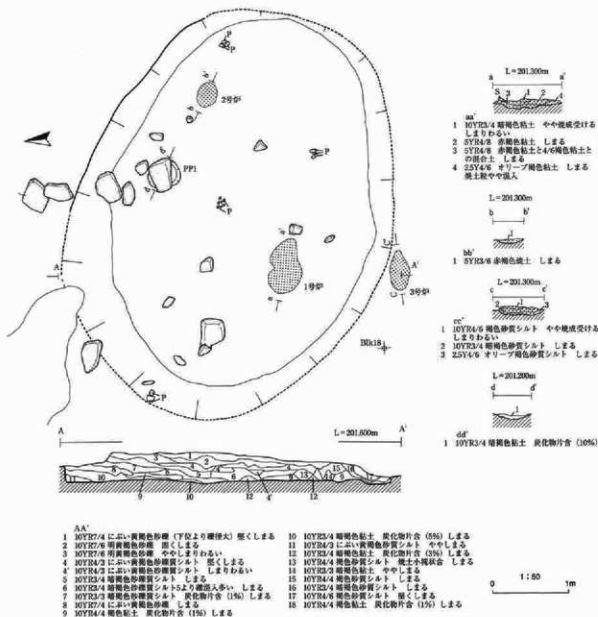
遺物 埋土で述べたが、周辺で検出された遺構時期幅からみると埋土が薄く、単一時期の土器の包含層ではなく、それぞれの時期ごとの攪乱や山体からの重力移動に伴う攪乱をうけているため、埋土から出土した土器には時期幅がある。植物繊維を混入する土器が多い。文様や胎工から154～158はⅧ群土器に、159～166はⅡ群土器に属すると考えられる。石器は石鏃2点、不定形2点、凹石1点などが出土している。石鏃は平



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外観文様	内面調査	分厚	器厚	備考
154	00-832	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	文様部:横細点底文・点線文	ナテ	■	13mm	横物織成混入
155	00-87	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	文様部:横細点底文・点線文	ナテ	■	11	横物織成混入
156	00-586	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	点結草母縄文	ナテ	■	10	横物織成混入
157	00-598	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	L.R	ナテ	■	10	横物織成混入
158	00-70	31号住居跡	床面	深鉢	胴	点結草母縄文	ナテ	■	10	横物織成混入
159	00-80	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	横細点底文	ナテ	■	8	横物織成混入
160	00-104	31号住居跡	床面	深鉢	胴	点線文(縦線)	ナテ	■	8	横物織成混入
161	00-109	31号住居跡	埋土下部	深鉢	胴	点線文	点線文	■	6	
162	00-76	31号住居跡	床面	深鉢	胴	点線文	ナテ	■	11	横物織成混入
163	00-83	31号住居跡	埋土下部	深鉢	胴	横物縄文	ナテ	■	10	横物織成混入
164	00-85	31号住居跡	埋土下部	深鉢	胴	L.R 点線文	L.R	■	7	横物織成混入
165	00-577	31号住居跡	埋土下部	深鉢	口	点結草母	ナテ	■	7	横物織成混入
166	00-588	31号住居跡	埋土上部	深鉢	胴	横物縄文	点線文	■	6	

図録番号	登録番号	器種	分厚	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
167	63	石鏃	8A1	31号住居	埋土	20.0	10.5	3.0	0.74	頁岩	先端欠損
168	67	不定形	I	31号住居	埋土	30.0	19.0	6.0	1.92	頁岩	先端欠損
169	325	凹石	-	31号住居	埋土	176.0	54.0	40.0	392.1	頁岩	断面に縦溝

第33図 31号住居跡出土遺物



第34図 38号住居跡

基と凹基である。

時期 不完全なプランと出土土器の時期から断定はできないが、縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

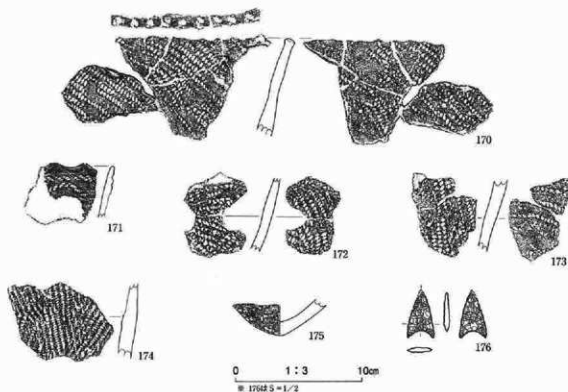
38号住居跡 (第34・35図、写真図版21・116)

<位置> B I k18区に位置する。

<検出状況> 30号住居跡床面下を補足調査中、西側床面下2層目の炭化物片混粘土層で比較的多くの土器片が出土し、焼土遺構を検出したため、本遺跡での住居跡検出状況から住居跡と認定した。

<形態・規模> 壁の立ち上がり不明瞭で、堅くしまる粘土層の範囲でプランを推定した。北西—南東方向に主軸を持つ楕円形状で、規模は5×4mである。

<埋土> 上位から砂細礫 (20号住居跡検出面)、暗褐色砂礫質粘土 (30号住居跡検出面) の順に堆積して



図録番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考	
170	00-485	38号住居跡	環土層下部	陶鉢	口	縄	口唇：冠体木曜花文	彫込	Ⅱ	9cm	植物繊維混入
171	00-542	38号住居跡	基壇	陶鉢	口	縄面圧痕文 (0少)		ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
172	00-556	38号住居跡	基壇	陶鉢	胴	縄		彫込	Ⅱ	9	植物繊維混入
173	00-303	38号住居跡	環土層下部	陶鉢	胴	縄		彫込	Ⅱ	10	植物繊維混入
174	00-528	38号住居跡	床面	陶鉢	胴	縄面縄文 (3L)		ナデ	Ⅱ	11	植物繊維混入
175	00-486	38号住居跡	基壇	陶鉢	底	無文		ナデ	Ⅱ	11	植物繊維混入

図録番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
176	313	石鏝	ⅡA1	38号住居跡	下部	241	149	25	0.64	頁岩	先端欠損

※ () は欠損

第35図 38号住居跡出土遺物

いる。

<壁> 北側断面に壁高10cmのなだらかな立ち上りを確認できるが、全体的には不明瞭である。

<床面> 固くしまる。

<柱穴> 巨礫下で柱穴状土坑1基を検出した。自然作用の可能性もある。

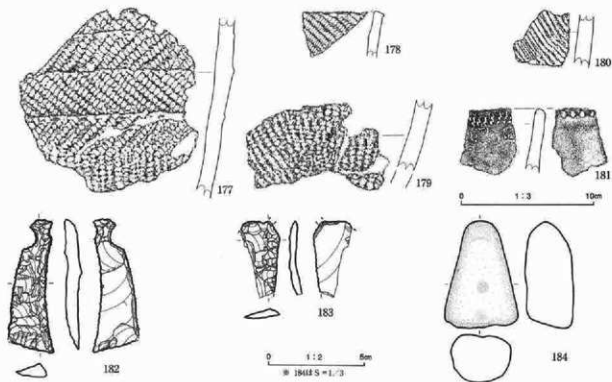
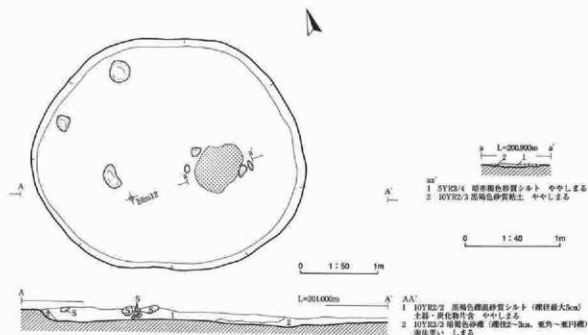
<炉跡> 地床炉を3基検出した。1号炉は西側にあり、不整な楕円形で規模は70×40cm、厚さは12cmである。3号炉は南壁外に位置し、屋外炉と考えられる。2・3号炉ともに弱焼成である。

遺物 すべての土器片に植物繊維を混入する。縄文を施文される土器片は厚く、10mm前後である。170は先端で軽く外反する。171は横位または曲線的な側面圧痕文の文様帯をもつ土器片とみられ、先端は小波状を呈する。これらの土器片は、他の遺構や包含層からの出土状況から見て共伴土器と考えられる。石器は石鏝が2点出土している。もう1点の基部は平基である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

39号住居跡 (第36図・写真版22・117)

<位置> B11-m11~12区に跨って位置する。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考
177	00126	39号住居跡	地上下部	磁器	胴	赤褐色直線文		ナテ	約 11mm	補助線線記入
178	00129	39号住居跡	地上部	磁器	口	紅、(砂中)		ナテ	約 7	補助線線記入
179	00127	39号住居跡	地上下部	磁器	胴下	紅、(腐植土)		ナテ	約 13	補助線線記入
180	00141	39号住居跡	地上上部	磁器	胴	赤赤文		ナテ	約 9	補助線線記入
181	00130	39号住居跡	地上上部	磁器	口	貝殻片直線文		ナテ	約 9	
182	40	石炭	1区	39号住居跡	瓦	71.0 31.0 4.0 10.64	瓦目			
183	50	不定形	約	39号住居跡	瓦土	(40.5) (20.0) 4.5 3.19	瓦目			先端・基部欠損
184	206	四石	-	39号住居跡	瓦土	84.0 37.0 37.0 200.4	砂岩			

※ () は欠損長

第36図 39号住居跡・出土遺物

＜検出状況＞ 第24号住居跡の補足調査で床面を掘り下げたところ、黒褐色土中から土器片を比較的多く出土した。西側土層断面で埋土の傾きを確認しながら精査をすすめ、暗褐色土床面で焼土遺構を検出したところで住居跡と認定した。

＜形態・規模＞ 埋土の広がりから円形状と推定された。規模は約4.3mである。

＜埋土＞ 2層に大別される。上位から黒褐色土・暗褐色土である。北側では堺および黒褐色土を侵食するように褐色砂礫層がオーバーラップする。黒褐色土はプランよりも小さく西側によって分布し、人頭大の亜円礫が多量に混入している。周囲の土層の様子から考えて、人為的な投げ込みの可能性もある。

＜床・壁＞ 検出面から床面までの深さは5～11cmである。全体的に壁の立ち上がりは不明瞭であるが、西側断面上でみるとやや急に立ち上がる。床面はしまりがよい。

＜柱穴＞ 検出されていない。

＜加跡＞ 地床かと考えられる焼土が中央付近で検出された。不整な楕円形状を呈し、規模は70×55cm、厚さは5cmである。

遺物 只数文土器片を除き、植物繊維を胎土に含む。177と179は厚く胎土と施文状況からみて同一個体で、179の傾きから丸底と考えられる。183は石匙の欠損出とも考えられる。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

40号住居跡（第37・38図、写真図版23・117）

＜位置＞ B1m-n14～16区に跨って位置する。

＜検出状況＞ 第24号住居跡東側の検出面を第39号住居跡検出面まで掘り下げ中に、遺物が多く出土する範囲を確認した。調査区外を画する土層断面を観察しながら精査をすすめ、南北方向に緩い堺の立ち上がりと西側に焼土遺構を検出したことから住居跡と認定した。検出プランからは南側調査区外と東側米年度調査区に延びることが分かった。米年度の遺構精査も考えたが、さらに下位に検出面が存在する可能性もあり、地山を確認することを優先して検出分の精査はその年度に終了した。次年度はプランが広がる範囲を推定して精査をすすめたが、砂礫層質粘土層に侵食されたかのように壁が不明瞭で検出できなかった。

＜形態・規模＞ 検出したプランから推定される形態は楕円形状と考えられる。規模は5～6mと推測される。

＜埋土＞ 堆積物が多い山体側から20m以上離れているため比較的埋土は薄い。埋土の主体は暗褐色土で、その上を褐灰色土、黄褐色土が覆う。To-Cuは黒褐色土下限に塊状に混入する。

＜床・壁＞ 床は固くしまる。壁はかろうじて南北断面で緩く立ち上がる北壁を確認した。

＜柱穴＞ 検出されていない。

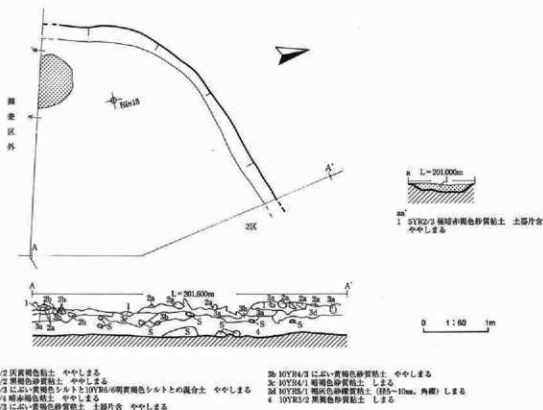
＜加跡＞ 西側壁寄りでも1基検出された。明瞭な焼成面に到達するまでの約10cm1位から、焼土が滲んだような前移層が検出された（焼土遺構にできない程の焼成状況）。南側1/3が調査区外に延びるため推定形態は円形状で、規模は約80cmである。厚さは6cmである。

遺物 すべての土器片の胎土に植物繊維を含む。斜縄文（表裏縄文舎）のほか非結束羽状縄文、結束羽状縄文、側面正痕文で施文された土器片が出土している。石器は石鏃3点、石匙1点、不定形石器1点、擦石1点が出土している。石鏃の基部はおおよそ平基である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

41号住居跡（第39・40図、写真図版24・117・118）

＜位置＞ B12区に位置する。



第37図 40号住居跡

＜検出状況＞ 第26号住居跡の北半分を精査するために拡張した調査区内で検出された。26号住居跡北半分の精査中に流れ込みと考えられるやや時期の古い土器片が出土していたが、26号住居跡の精査終了後の補足調査で床面下に多くの土器片を包含する褐色粘土層を検出し、壁の立ち上がりを確認したことから住居跡と認定した。

＜重複関係＞ 本遺構の上位層Ⅱbでは、縄文時代晩期末～弥生時代初の遺物とともに焼土遺構を検出した。確認できなかったが、住居跡が存在していた可能性がある。Ⅳa3層面では52号住居跡が検出され、南側が同遺構に切られている。本遺構と第46号住居跡は同一検出面で検出されており、本遺構の出土土器を包含する暗褐色粘土が46号住居跡の上位に確認されることから、本遺構が46号住居跡より新しいと考えられる。また、土器片からは大きな時間差はなく、2遺構で床面が上下する竪穴状遺構の可能性もある。

＜形態・規模＞ 重複および東側の擾乱のため形態・規模は判別しがたいが、長軸4～4.5mの楕円形状を呈すると推測される。

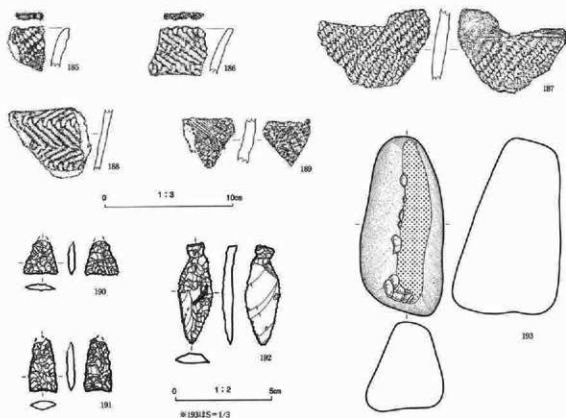
＜埋土＞ 砂礫質粘土を主体とし、下位に褐色粘土層が堆積する。この埋土状況は46号住居跡と異なっている。

＜壁＞ 北側断面に壁状の立ち上がりを確認できる。調査区外に広がるため全貌を把握できないが、上面で検出された住居跡よりやや垂直気味に立ち上がる。

＜床面＞ 堅くしまりやや凹凸がある。掘りすぎの可能性もあるが、貼床等の施設は確認できない。

＜柱穴＞ 検出できなかった。

＜灰跡＞ 検出できなかった。南側に隣接する第52号住居跡に伴う焼土遺構があるが、位置と検出高から本遺構に属する可能性もある。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考
185	00-453	40号住居跡	埋土上部	漆器	口	LR (少)	ナデ		7mm	埋物調査品入
186	00-407	40号住居跡	埋土上部	漆器	口	斜交斜縄文	ナデ			5
187	00-188	40号住居跡	埋土上部	漆器	胴	斜交斜縄文	LR	B	10	埋物調査品入
188	00-180	40号住居跡	埋土上部	漆器	胴	斜交斜縄文	ナデ		6	埋物調査品入
189	00-185	40号住居跡	埋土上部	漆器	口	LR	IRL		8	埋物調査品入

図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	材質	備考
190	00-363	石鏝	1B1	40号住居跡	埋土下部	(17.5)	17.5	3.5	0.0	頁岩	先鋒欠損
191	00-277	石鏝	1A1	40号住居跡	埋土上部	28.5	14.5	4.0	1.9	頁岩	先鋒欠損
192	00-278	石鏝	1A	40号住居跡	埋土上部	90.5	17.5	8.1	4.5	頁岩	アスファルト付着
193	00-327	礫石	-	40号住居跡	埋土	(130.5)	65.0	82.0	962.9	緑石	

* ()は欠損品

第38図 40号住居跡出土遺物

遺物 貝殻復縁庄痕文・沈線文・刺突文で幾何学的に施文される土器片が多く出土している。205と208は条痕・条痕文土器片で縦・斜位2方向に施文される。205は内面先端に横位の条痕が施されている。石器は出土していない。

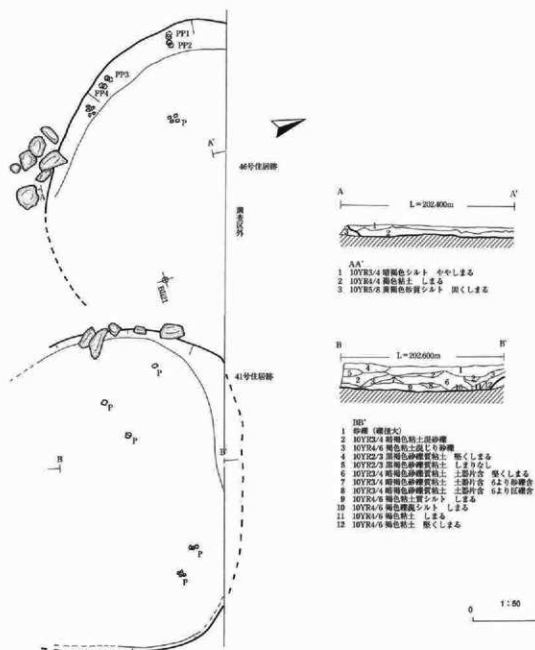
時期 検出層位と出土遺物より縄文時代早期中葉頃と考えられる。

46号住居跡 (第39・41図、写真図版25・118)

<位置> B I h・i20区に跨って位置する。

<検出状況> 41号住居跡と同様に検出中に貝殻文で施文された土器片が出土した。亜円礫の巨礫も散在するため平面での検出が難しくなり、土層観察用のベルトを設定して精査をすすめた結果、壁状の立ち上がりをもベルトで確認でき、住居跡に認定し精査をすすめた。

<重複関係> 上面で検出された遺構とは41号住居跡と同様な関係である。東側は41号住居跡に切られて



第39図 41・46号住居跡

いる。

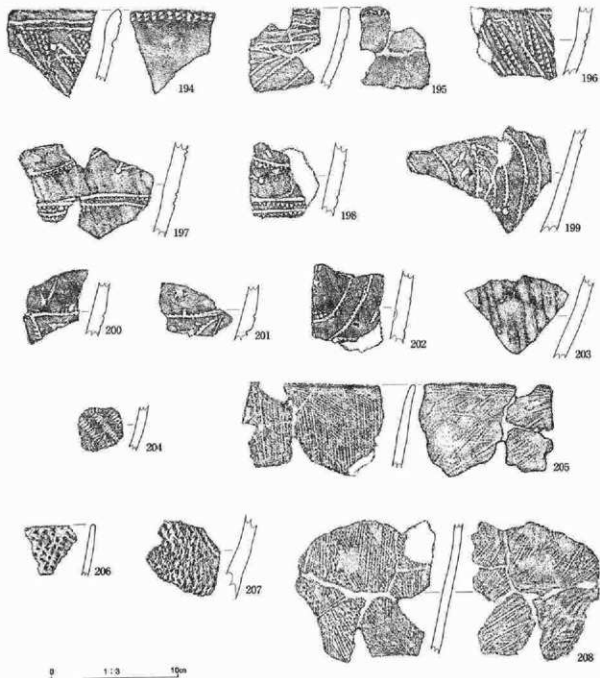
<形態・規模> 北側が調査区外に延び、東側を41号住居跡に切られるため全貌ははっきりしないが、長軸が4m前後の楕円形状を呈すると考えられる。

<埋土> 上位層に巨礫を伴う粘土層、中から下位層には褐色粘土が堆積する。

<壁> 西側壁のみが検出された。なだらかに立ち上がり、壁高は平均12cmである。

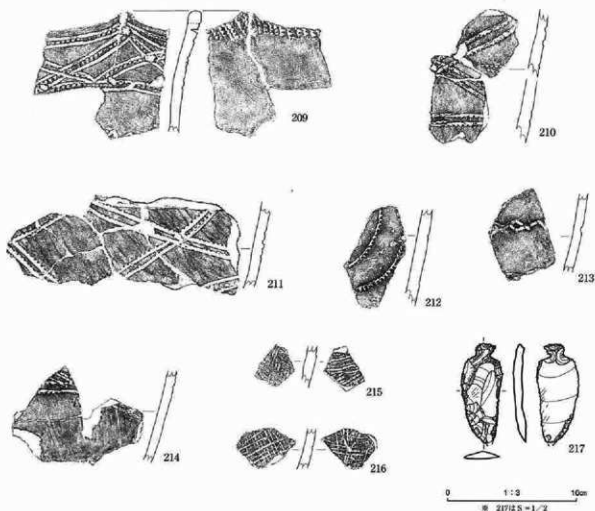
<床面> 堅くしまる。

<柱穴> 西側壁に2基一對の壁柱穴4基を検出した。地上部の柱が交差するように掘られており、直径が5～6cmで深さは約10cmである。



図面番号	登録番号	出土地点	層位	形種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
194	00-002	41号住居跡	下部	深鉢	口	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	先端縮位貝殻圧痕文 ナテ	5mm	
195	00-001	41号住居跡	最下部	深鉢	口	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	先端縮位貝殻圧痕文 ナテ	7	
196	00-245	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	9	
197	00-180	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	10	
198	00-191	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	11	
199	00-246	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	8	
200	00-122	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	10	
201	00-123	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	10	
202	00-73	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	10	
203	00-193	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	貝殻線押圧文 沈線文	刺突文	ナテ	9	
204	00-120	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	刺突文 (部位ナテ側)		ナテ	6	
205	00-020	41号住居跡	最下部	深鉢	口	刺突文		刺突文	7	
206	00-323	41号住居跡	最下部	深鉢	口	刺突文		刺突文	6	
207	00-325	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	刺突文		ナテ	12	器物編目記入
208	00-114	41号住居跡	最下部	深鉢	胴	刺突文		刺突文	8	

第40図 41号住居跡出土遺物



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分層	部厚	備考	
209	00-816	46号住居跡	表面	器縁	口	具段縹緑圧痕文 沈線文 刺突文	先施織紋具段文		7mm	先施山形溝状	
210	00-187	46号住居跡	表面	器縁	胴	具段縹緑圧痕文 沈線文	丁字凸ナデ	9		植物繊維混入?	
211	00-663	46号住居跡	表面	器縁	胴	具段縹緑圧痕文 沈線文 刺突文	丁字凸ナデ	8			
212	00-156	46号住居跡	表面	器縁	胴	具段縹緑圧痕文 沈線文 刺突文	丁字凸ナデ	10			
213	00-154	46号住居跡	表面	器縁	胴	沈線文	丁字凸ナデ	7		植物繊維混入?	
214	00-173	46号住居跡	表面	器縁	胴	具段縹緑圧痕文 沈線文	丁字凸ナデ	7		植物繊維混入	
215	00-322	46号住居跡	表面	器縁	胴	条痕文	条痕文	7			
216	00-321	46号住居跡	表面	器縁	胴	条痕文	条痕文	6			
図版番号	登録番号	器種	分層	出土地点	層位	径mm	高さmm	厚mm	重量g	材質	備考
217	203	石甕	1A	瀬戸住居跡	腰土	(52)	203	4.5	4.52	石質	先施部欠損

※ () は欠損長

第41図 46号住居跡出土遺物

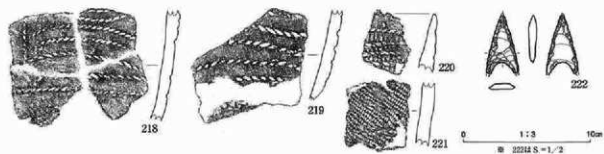
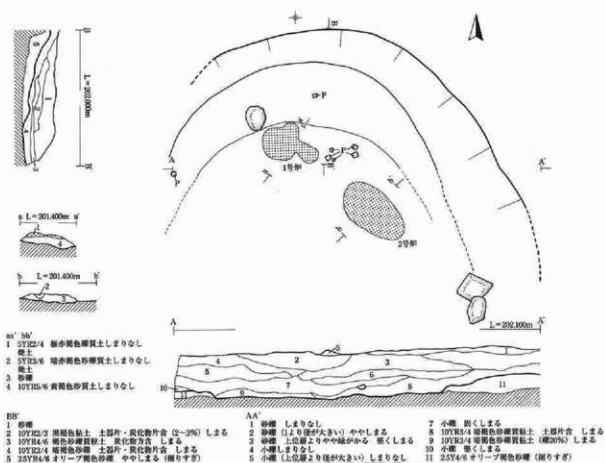
<炉跡> 検出できなかった。48号住居跡の2号焼土遺構が木遺構の屋外炉に相当する可能性がある。

遺物 41号住居跡と同様に具段縹緑圧痕文・沈線文・刺突文で幾何学的に施文される土器片が多く出土し、条痕-条痕文土器片が少量出土している。前者の土器片の無文部や内面は縦方向に丁寧になでた跡が明瞭に見られる。石器は石匙1点のみが出土している。

時期 第41号住居跡同様に検出層位と出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えられる。

42号住居跡 (第42図、写真図版26・119)

<位置> BIj17-18区に跨って位置する。



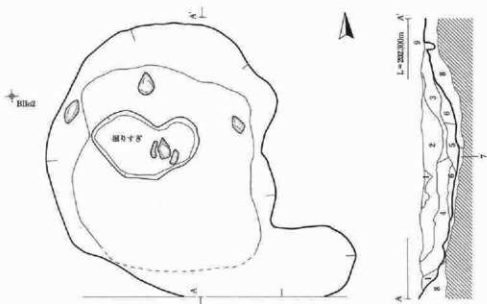
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考	
218	00147	42号住居跡	表面	埴鉢	口	横線瓦文	ナデ	9	9mm	埴物線彫り入	
219	00148	42号住居跡	埋土	埴鉢	口	横線瓦文	ナデ	9	9	埴物線彫り入	
220	00149	42号住居跡	表面	埴鉢	口	地文 (不明) 上に横線瓦文	ナデ	11	11	埴物線彫り入	
221	00152	42号住居跡	表面	埴鉢	蓋	瓦	ナデ	9	9	埴物線彫り入	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
222	69	石鏃	B A I	42号住居跡	埋土	31.0	16.5	4.0	1.4	頁岩	先端・基部欠損

第42図 42号住居跡・出土遺物

<検出状況> 当該区の検出は砂礫質土で非常に難航したため、土層観察用ベルトを残しながら行った。途中土器片を伴う焼土遺構(2~4号焼土)を検出し、遺物と土層対比から縄文前期初頭面と考えた。さらに検出をすめ暗褐色土層を確認し、遺物と焼土遺構を検出したことにより住居跡と認定した。

<重複関係> 南側を49・50号住居跡に切られている。

<形態・規模> 残存部が少なく不明なところが多いが、およそ北西-南東方向に長軸を持つ楕円形状を呈



- AA'
- 1 10YR2/3 黒色砂質シルト しまる
 - 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト しまる
 - 3 10YR2/4 暗褐色砂質シルト (小礫10%) しまる
 - 4 10YR2/3 暗褐色砂質シルト 土器片等 多くしまる
 - 5 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (礫粒5cm) しまりなし
 - 6 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 しまる
 - 7 2.5Y6/4 にぶい黄色砂 しまりなし
 - 8 黒 掘りすき
 - 9 10YR2/3 褐色シルト

0 1:50 1m



0 1:3 10cm

探検番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分厚	器厚	備考
223	00-505	44号住居跡	埋土中部	深鉢	口	焼赤文 斜線付灰文 口唇に斜線付灰	ナデ	5	7cm	植物繊維混入
224	00-227	44号住居跡	埋土中部	深鉢	胴	焼赤文 (R?) に斜線付灰文	ナデ	5	11	植物繊維混入
225	00-201	44号住居跡	埋土中部	深鉢	胴	R	ナデ	5	8	
226	00-226	44号住居跡	埋土中部	深鉢	胴	焼赤文 (LR)	ナデ	5	9	植物繊維混入

第43図 44号住居跡・出土遺物

し、規模は5m前後と考えられる。

<掘りすき> 2層に大別でき、上部は砂礫質土、下部は暗褐色粘土で埋められている。

<壁> 北、東壁ともに緩やかに立ち上がる。人為的ではなく自然の営力により形成されたようにみえる。

<床面> しまりのない礫層で構成される。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉跡> 2基の地床炉を検出した。1号炉は楕円形状を呈し、規模は約78×40cmである。精査中に削割されすぎて残存部が少なくなった。2号炉は長軸が60cmで歪な形を呈する。厚さは8cmと薄い。

<その他> 床面の礫層を掘り下げたところ、焼土や炭化物の混入する暗褐色粘土の広がりを検出した。同様の状況(住居跡下の地山礫層を埋める炭化物片や焼土混粘土)は他の調査区でも見られ、わずかな窪みを利用して屋外炉を作るような環境から住居跡を構築する場所に変化していったような可能性もある。

遺物 土器片に植物繊維を含むものが多い。218・219は口縁部文様帯と見られ、横位や曲線的な備面灰文で構成される。220は口縁部に先端が先細り、口唇部に刻みがある。不鮮明であるが、斜線文上に横位の

側面圧痕文が施される。石器は石鏃と不定形石器が各1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

44号住居跡（第43図、写真図版27・119）

<位置> BⅡo02区に位置する。

<検出状況> 1区の最終検出面であり、旧河遺跡に堆積した礫層上にあるオリブ褐色の砂質粘土面である。暗褐色粘土の広がりでもプランを推定した。

<形態・規模> 不整な楕円形状を呈し、規模は3.65×2.80mである。

<埋土> 上位は黒褐色土、中位は暗褐色砂質土で自然堆積状に埋められている。床面は検出時に掘りすぎている。

<壁> 全般的になだらかである。南壁はやや急な立ち上がりが見られ、壁高は約30cmである。特徴的なことは南東壁がスロープ状に窪むことである。同様の構造は第51号住居跡でも観察される。

<柱穴> 掘りすぎている部分もあるが、黒褐色砂礫質土で覆われている。

<柱穴> 検出できなかった。埋土断面北側に小型の壁柱穴らしき跡を観察できる。

<炉跡> 検出できなかった。

遺物 植物繊維を混入する土器片が多い。223は調き気味に外反する。横位の側面圧痕文が2段みられる。224は地文上に2段の側面圧痕文を施す。石器は出土していない。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

45号住居跡（第44図、写真図版28・119）

<位置> BⅠi19～20区に位置する。

<検出状況> 26号住居跡の精密後床面を掘り下げた。貝殻土器片が聖円礫の巨礫周辺から出土した。土層観察用のベルトを残し精査をすすめ、断面で壁を確認したため、住居跡と認定した。

<形態・規模> 残存する壁から推定すると、北西-南東方向に長軸をもつ楕円形状を呈し、規模は約4×3.4mである。

<埋土> 砂礫質土に覆われている。上部から中部にかけて巨礫が混入し、下部は暗褐色～黒褐色砂礫質土で埋められている。

<壁> 断面東側にほぼ垂直に立ち上がる壁を観察できる。壁高は20cmである。また、北東壁や北西壁上では埋土中位にある巨礫の一部が検出される。

<床面> 堅くしまるが凹凸がある。やや南傾斜する。

<柱穴> 壁に沿って柱穴状小坑が1基検出された。直径は10～20cmである。東側に傾くものが多く、垂直に立つもの(pp1・pp2・pp9～pp11)もある。南壁が失われているために全体像は把握できない。

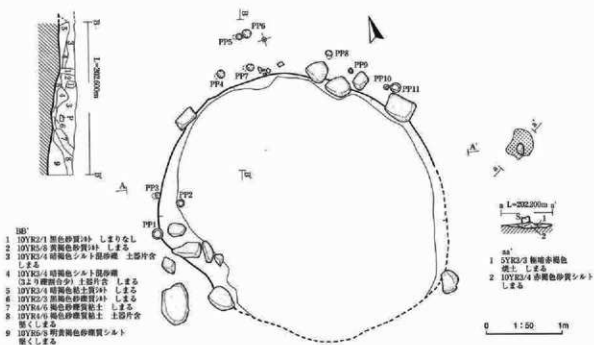
<炉跡> 東壁から80cmほど離れた位置から焼土遺構が検出された。屋外かと考えられる。

遺物 貝殻文の土器片が主に出土している。231は小型の深鉢で貝殻による条痕とみられる。石器は石鏃のほかに欠損した石匙が1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えられる。

48号住居跡（第45・46図、写真図版29・119・120）

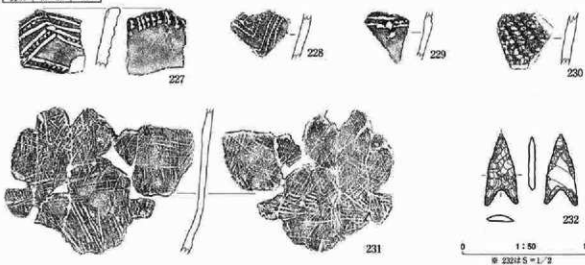
<位置> BⅠi・i19区に跨って位置する。



No	径 (cm)	深 (cm)
pp01	20 × 20	15
pp02	9 × 9	—
pp03	6 × 6	12
pp04	10 × 10	22
pp05	7 × 7	25
pp06	10 × 10	40
pp07	10 × 10	35
pp08	10 × 10	30
pp09	5 × 5	42
pp10	7 × 7	30
pp11	20 × 20	10



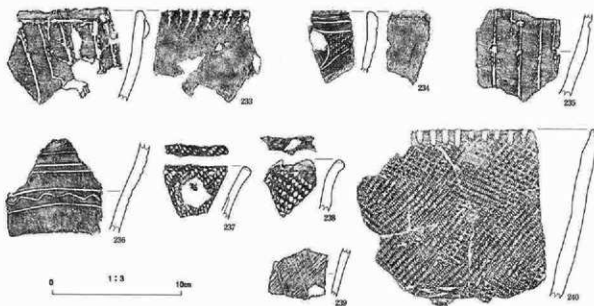
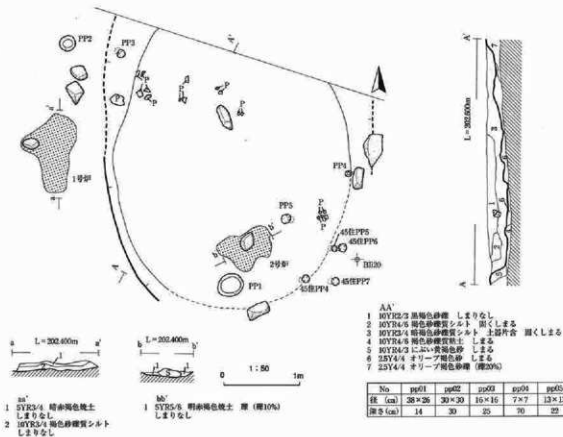
- AA'
- 10YR4/5 黄褐色砂礫質シルト 堅くしまる
 - 10YR4/5 黄褐色砂礫質シルト (1より砂礫少い) 堅くしまる
 - 10YR4/5 黄褐色砂礫 (大礫) 堅くしまる
 - 10YR2/3 黄褐色粘土質シルト 堅くしまる
 - 10YR4/4 褐色砂礫質粘土 (礫10%) 固くしまる
 - 10YR4/6 褐色砂礫質粘土 堅くしまる
 - 10YR7/4 暗褐色砂礫質粘土 固くしまる
 - 10YR2/3 黄褐色砂礫質粘土 堅くしまる
 - 10YR4/4 褐色砂礫シルト 中々しまる
 - 10YR2/2 黄褐色砂礫シルト 中々しまる
 - 10YR4/6 褐色粘土 固くしまる
 - 10YR5/8 黄褐色砂礫質シルト 堅くしまる



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	番号
227	00-503	45号住居跡	Ⅱ土下部	陶鉢	口縁	只縁散線紅系文 散線文 斜向文	先端部位只縁文		5mm	
228	00-241	45号住居跡	Ⅱ土下部	陶鉢	胴	只縁散線紅系文 散線文	ミギキ		8	
229	00-247	45号住居跡	Ⅱ土下部	陶鉢	胴	只縁散線紅系文 散線文 斜向文	ミギキ		7	
230	00-310	45号住居跡	Ⅱ土下部	陶鉢	胴	只	ナギ		7	
231	00-418	45号住居跡	Ⅱ土下部	陶鉢	胴	斜向文	赤系文		5	

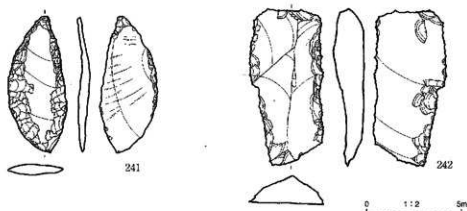
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	幅mm	重量g	材質	備考
232	280	石鏃		45号住居跡	下部	38	13.5	3	1.66	黄頁

第44図 45号住居跡・出土遺物



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外面文様	内面文様	分類	数量	備考
231	00-05	48号住居跡	縄土下部	深鉢	口	貝殻散粒状文 流線文 刺刺文 粘土肌層付	先施破位貝殻文		5	
234	00-177	48号住居跡	縄土下部	深鉢	口	貝殻散粒状文 流線文	先施破位貝殻文		8	
235	00-35	48号住居跡	縄土下部	深鉢	胴	貝殻散粒状文 流線文 刺刺文	ナテ		8	植物繊維混入
236	00-172	48号住居跡	縄土中部	深鉢	胴	流線文	ナテ		6	
237	00-369	48号住居跡	縄土下部	深鉢	口	LR 口唇: 刺刺状文	ナテ		6	
238	00-308	48号住居跡	縄土下部	深鉢	口	BE 口唇: 指痕状文	ナテ		7	
239	00-170	48号住居跡	縄土下部	深鉢	胴	刺刺文	刺刺文		5	
240	00-820	48号住居跡	縄土下部	深鉢	口	LR (G多) 先施樹太沈積+交差状刺刺文	ナテ		10	植物繊維混入

第45図 48号住居跡・出土遺物 (1)



図録番号	発掘番号	品名	分類	出土地点	層位	Flm	Flm	Flm	Flm	石目	備考
241	35	不定形	48号群陶片	壁土	72	20.8	6.2	11.73	14.6		
242	276	不定形	48号群陶片		83	38	16	50.33	14.6		

第46図 48号住居跡出土遺物 (2)

<検出状況・重複関係> 4棟の縄文早期中葉住居跡の中で最西端にあり、検出した標高も最も高い。遺物や炉跡の検出は早い段階にしていたが、当初46号住居跡と同一とみていたため登録が遅くなった。埋土状況などからより新しい遺構と考えられる。

<形態・規模> 西壁と東側床面の広がりでおよそのプランを推定している。東側に巨礫が分布し、礫の分布しない部分が束壁のようにみえる。規模は3m程度で、平面形は不整な円形～楕円形を呈すると推測される。

<埋土> 主に砂礫質土に覆われる。北側は壁錐堆積物に覆われ、近隣住居跡でも観察された褐色粘土が下位で少し認められた。

<壁> 南西壁のみ観察された。ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cmである。

<床面> ややしまる程度である。

<柱穴> 床面、西壁と西壁外で5基の柱穴を検出した。pp1とpp2がやや大きい。pp3とpp5は傾きが中央部を向いている。南東側第45号住居跡の柱穴は本遺構に所属する可能性もある。

<炉跡> 地床炉を2基検出している。2号炉は床面上にあり固くしまる。1号炉は西側推定壁からやや離れている。異地性の可能性もある。

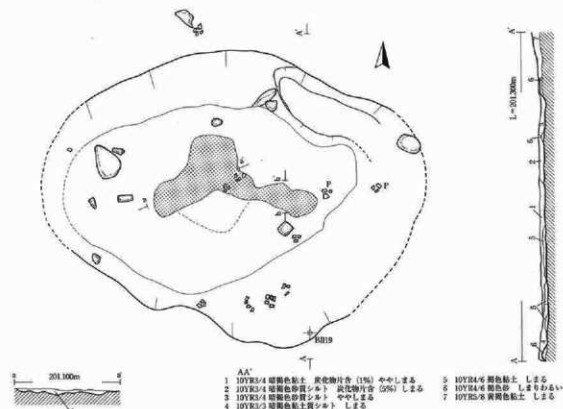
遺物 貝殻文土器片が出土。土器のおよそ半数をしめる。233～236は只殻文で施文される土器片で、233と235は焼成良好で、文様を鮮明に観察できる。234と236は表面が黒色で、234は内湾気味に立ち上がり、236は逆「く」の字形の急激な屈曲部を有する。238は口唇に指面状の圧痕文で施文され、先端がめくれるように外反する。240は先端に縦位の太い沈線が引かれ、その下位に回転方向を変えた施文がなされ交差してみえる。石器は石匙、不定形石器の各1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えられる。

49号住居跡 (第47図、写真図版30・120)

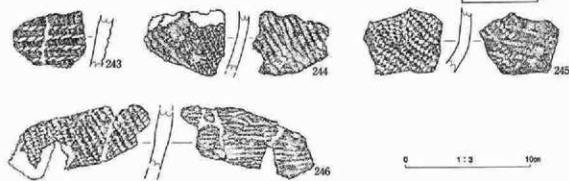
<位置> B I k18～19区に跨って位置する。

<検出状況> 38号住居跡調査終了後に地山検出作業中に焼土遺構を検出した。土層断面からは自然堆積土に覆われていることから38号住居跡床面下位に位置する遺構と判断した。本遺構は同位置で4回目の検出面にあたる (20号・30号・38号・49号の順)。



h. 20.100m h

1 30' 25YR4/6 赤褐色粘土と 25YR3/4 暗イリーブ褐色砂との混合土 しまりわるい



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分期	器厚	備考
243	00-318	49号住居跡	床面	深鉢	胴	縦縞瓦文	ナデ		10mm	植物繊維混入
244	00-311	49号住居跡	床面	深鉢	胴	RL	RL		7	植物繊維混入
245	00-298	49号住居跡	床面	深鉢	胴	RL	赤文		9	植物繊維混入
246	00-255	49号住居跡	床面	深鉢	胴	RL	赤文		9	植物繊維混入

第47図 49号住居跡・出土遺物

<形態・規模> 東西壁を確認できなかったため、南北壁と床面の広がりからおよそ5×4m規模の楕円形状を呈すると推測される。

<埋土> 主に暗褐色土に覆われている。

<壁> 上位面遺構の検出精査で北壁と南壁には地山が露出している。南壁は地山がなだらかに立ち上がる。自然の傾きであり、概ね本傾斜面を壁として利用していたと考えられる。

<床面> 地山面に近く粘土も薄いため上位面の遺構に比べてしまりはよくないが、炭化物片が混入し、しまる。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉跡> 大型で不整形で検出された。斜線の部分には炭化物片が多く混入する。およそ北西-南東方向に1.8mの長軸を持つ。焼成がよく堅くしまっている。

<その他> 東壁付近は上位検出遺構精査で掘りすぎて、平面形が多少変わる可能性がある。

遺物 土器片の粘土に植物繊維を混入させる。230・231は表裏縄文、232は内面に貝殻の条痕文で施文されている。石器は出土していない。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

第51号住居跡 (第48図、写真図版31・120)

<位置> B I o24～25区に跨って位置する。

<検出状況> 当区域の最終検出面である。第44号住居跡と同様に暗褐色土・プランを検出し精査を行った。規模が小さいが、形態や柱穴状土坑の検出などから小型住居跡として登録した。

<形態・規模> 楕円形を呈する。規模は2.75×2.30mである。

<埋上> 上部は黒褐色土・暗褐色土、下部は土器片が出土する砂礫土である。

<壁> 全般的になだらかであるが、南北壁にやや急な立ち上がりが見られる。北壁高は32cmである。東側は壁がスロープ状に窪む。第44号住居跡と類似する。

<床面> 砂礫が露出し、下部埋上の一部が床面であった可能性もある。3ヶ所で炭化物片の集中する場所が観察された。

<柱穴> 3基検出した。いずれもプラン外側で検出された。pp1・2の径は15～17cmで、深さは10cmと浅い。

<炉跡> 東壁から50cmほど離れた場所に焼成の悪い焼土遺構を検出した。屋外炉の可能性がある。

遺物 斜縄文のほかに非結東羽状縄文が出土している。石器は掲載した3点が出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

200号住居跡 (第49図、写真図版32・120)

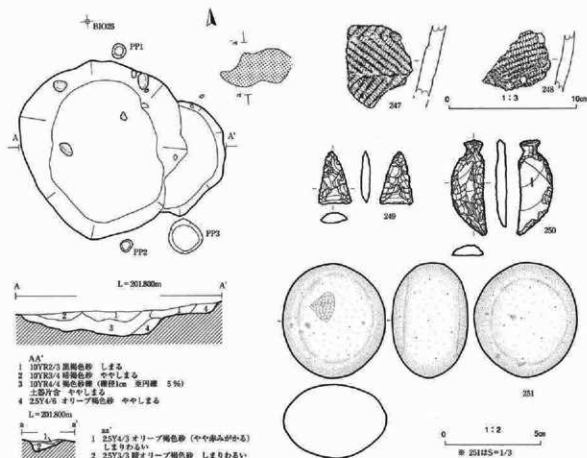
<位置> B I k・17～8区に跨いで位置する。

<検出状況> 周囲に比し土器が多く出土し、数10cmの礫が点在する範囲を検出した。昨年度の調査の経験から遺物が出土する範囲下位に遺構が存在することが多いため、遺物出土の範囲を控え土層観察用ベルトを設定し、精査をすることにした。南北方向ベルト北側で緩く傾斜する炭化物片混じりの暗褐色砂礫質粘土層を確認するが、東西方向では不明瞭であった。その後、南北方向ベルト下で地床炉とみられる焼土を2ヶ所で検出し、南側調査区境土層断面で東西方向に緩く傾斜する層を確認した。これらの状況から住居跡と認定した。この時点で住居跡は地表面から1m50cmほど下から検出されたことになる。

<形態・規模> 南側は調査区外に延び、北側では明瞭な掘り込みを確認できないため、長軸5m以上、短軸4.3mの楕円形状を呈すると推測される。

<埋土> 5層に細分された。上部の主体は褐色砂礫質粘土で遺物を含む。下部は黒褐色砂礫質粘土で下限に褐鉄鉱の集積層を介在させることがある。

<床・壁> 床は固くしまる。南壁で緩い壁の立ち上がりを明瞭に確認できるが、一部は調査区外に延びる。北側半分は不明瞭であり、壁は検出できなかった。



No	pp01	pp02	pp03
径 (cm)	17×17	15×15	85×43
深さ (cm)	10	10	8

図数番号	登録番号	出土地点	層位	図種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考	
247	00-403	51号住居跡	下部	捺鉢	胴	非結束羽状縄文 (0多) ナデ			11mm	博物館蔵品入	
248	00-436	51号住居跡	下部	捺鉢	胴	LR (0多) ナデ				博物館蔵品入	
図数番号	登録番号	図種	分類	出土地点	層位	長cm	幅cm	厚cm	重量g	材質	備考
249	190	石鏝		51号住居跡	埋土	28.3	14	5	214	頁岩	
250	196	石匙		51号住居跡	埋土	80.3	18.2	5.3	541	頁岩	
251	322	麻石		51号住居跡	埋土	890	800	570	504.9		

第48図 第51号住居跡・出土遺物

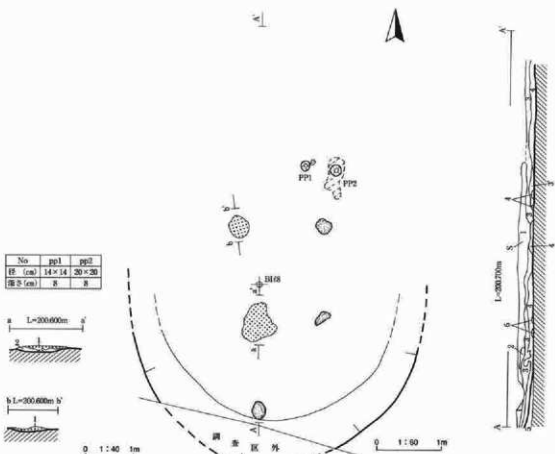
<柱穴> 2基検出された。5～数10cmの炭化材混粘土で埋まり、長軸が14～20cmで深さは8cmと浅い。

<炉跡> およそ住居跡の長軸上で2基検出された。長軸が55cmで不整形を呈するものと3.5cmの円形状を呈するものである。厚さは5cm前後である。

<その他> 床面で数10cmの垂円礫を数点と炭化材を検出している。

遺物 埋土上部の褐色粘土層と下部の黒褐色粘土層から遺物が出土している。下部で結束羽状縄文のやや大きめの土器片(252)が出土した。出土割合は斜縄文(羽状縄文の破片含)、非結束羽状縄文、結束羽状縄文の順に多い。254は前面匠痕文と短炷線文で構成される文様帯下部の土器片である。石器は掲載石器1点が出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

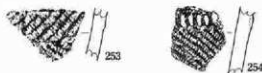
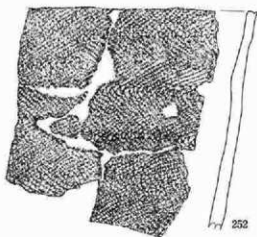


2a' 2b'

- 1 3YR3/4 暗赤褐色 砂礫質粘土 (層位3-5cm, 東西側)
炭化物片少量 中々しまる
- 2 7.5YR4/4 暗褐色砂礫質粘土 (層位3-5cm, 東西側)
しまる 地山
- 3 3YR4/4 1:2.5 赤褐色砂礫質粘土
炭化物片・炭塊少量含 しまる

AA'

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫質粘土 (層位1cm, 東西一帯内側) しまる
- 2 10YR3/3 暗褐色砂礫 (層位3-5cm, 内一帯内側) しまる
- 3 10YR4/4 暗褐色砂礫土 (5%) 土器片含 しまる
- 4 10YR3/2 暗褐色砂礫質粘土 (層位3-5cm, 内一帯内側, 20%)
下部に炭化物少量 しまる
- 5 10YR3/4 暗褐色砂礫質粘土 中々しまる
- 6 7.5YR3/4 暗褐色砂礫質粘土 中々しまる

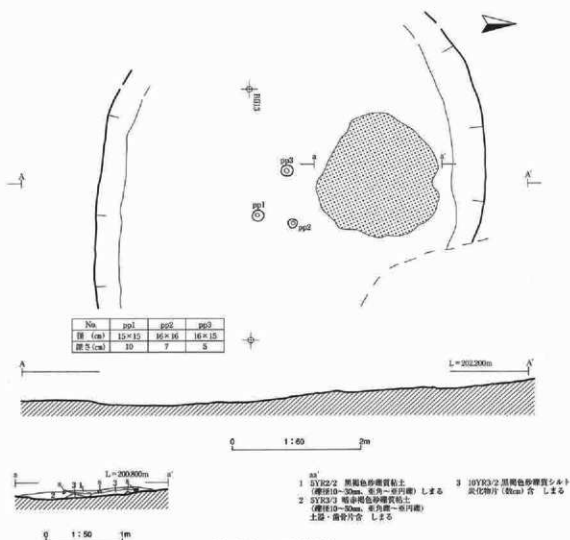


0 1:3 10m



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考	
252	01-3035	300号住居跡	瓦土上部	深鉢	胴	結東沼状縄文	ナゲ	9	2mm	植物繊維混入	
253	01-306	300号住居跡	瓦土上部	深鉢	胴	赤結東沼状縄文	下家ナゲ	9	0	植物繊維混入	
254	01-48	300号住居跡	瓦土上部	深鉢	胴上部	文様帯下結: 縦位短波縄 胴: 紅土赤結東沼状(縄文?)	ナゲ	9	0	植物繊維混入	
図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	材質	備考
255	3021	石環		300号住居跡	瓦土上部	36	14.5	3.5	1.1	頁岩	

第49図 200号住居跡・出土遺物



第50図 202号住居跡

202号住居跡 (第50~52図、写真図版33・121・122)

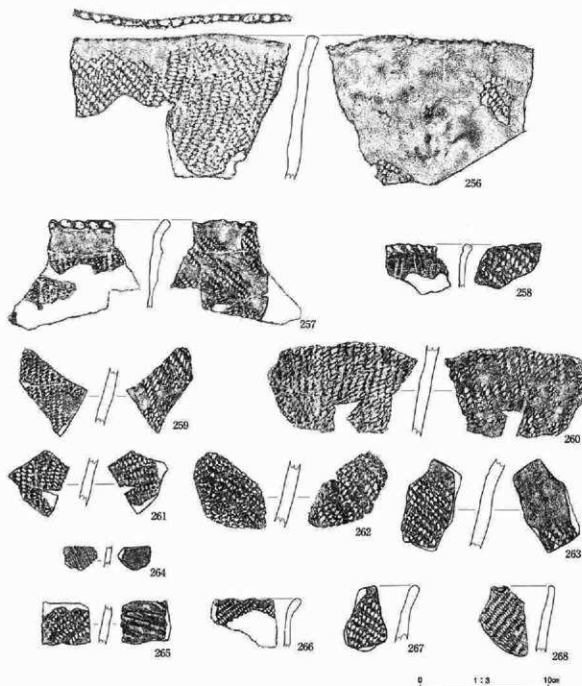
<位置> B I ij12~13区に跨いで位置する。

<検出状況> 同区2回目の検出後褐色粘土質砂礫層を掘り下げたところ、その下位に遺物を含む黒褐色砂礫質粘土層を検出した (基本土層 Wa層)。遺物を採取しながら掘り進むうちに山体側で径1mを越す焼土を、南側で緩く立ち上がる壁を確認し、住居跡と認定した。明瞭なプランではないが、遺物出土状況、焼土遺構の検出などから判断した。調査手順の不手際から土層観察用ベルトは設定していない。プラン中央付近に明瞭な柱穴状小土坑を検出した。埋土からは大小の重円礫が埋土の数%の割合で出土した。

<形態・規模> 規模は南北方向で約6mと推定される。前年度の調査で東側はプランを検出できず地山まで下げているため、また西側は明瞭な壁を検出できないために東西方向の規模は不明である。円形~楕円形状を呈するとみられる。

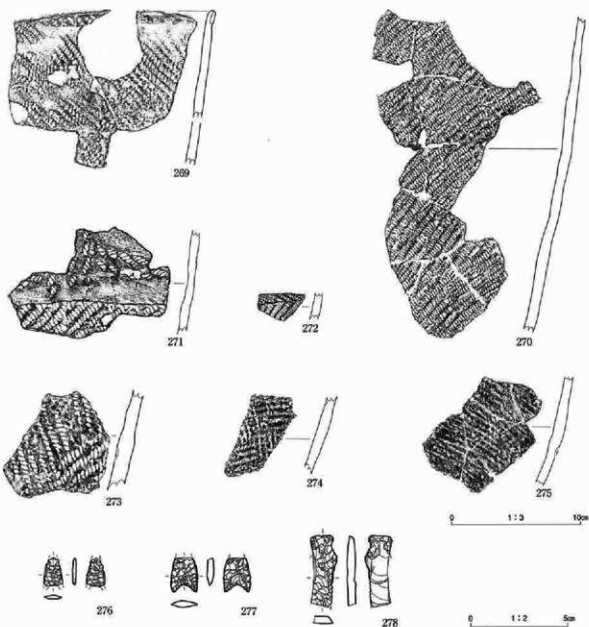
<埋土> 調査の不手際で土層断面をとっていない。埋土は1層である。暗褐色砂礫質粘土層で土器片・石器のほかには獣の骨・炭化物片が出土する。

<床・壁> 埋土の暗褐色砂礫質粘土を取り除くと、北側焼土周辺と南側では床面に5cm程の高低差が生じた。南側の砂質土部分に埋土と同様な粘土を貼っていた可能性もある。南壁は緩く立ち上がり、北側は自然



図版番号	登録番号	出土地点	層位	材料	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
256	01-2001	302号住居跡	粗土下部	苧麻	口縁	縦、口唇：原糸束筋1本直	縦、	Ⅱ	8mm	植物繊維混入
257	01-82	302号住居跡	粗土上部	苧麻	口縁	縦、口唇：縦糸	縦、	Ⅱ	7	植物繊維混入
258	01-80	302号住居跡	粗土上部	苧麻	口縁	条織文、口唇：縦糸1本直	縦、	Ⅱ	5	植物繊維混入
259	01-67	302号住居跡	粗土上部	苧麻	胴	縦	縦、	Ⅱ	8	植物繊維混入
260	01-190	302号住居跡	粗土下部	苧麻	胴下部	縦	縦、	Ⅱ	8	植物繊維混入
261	01-68	302号住居跡	粗土上部	苧麻	胴	縦	縦、	Ⅱ	8	植物繊維混入
262	01-61	302号住居跡	粗土上部	苧麻	胴	縦	縦、	Ⅱ	8	植物繊維混入
263	01-62	302号住居跡	粗土上部	苧麻	胴	縦	縦、	Ⅱ	9	植物繊維混入
264	01-43	302号住居跡	粗土上部	苧麻	胴	条織文	条織文	Ⅱ	4	
265	01-853	302号住居跡	粗土下部	苧麻	胴	縦	条織文	Ⅱ	7	植物繊維混入
266	01-76	302号住居跡	粗土上部	苧麻	口縁	縦、口唇：小袋状	十字	Ⅱ	5	植物繊維混入
267	01-41	302号住居跡	粗土下部	苧麻	口縁	縦、	縦、	Ⅱ	6	植物繊維混入
268	01-182	302号住居跡	粗土下部	苧麻	口縁	縦、口唇：小袋状	十字	Ⅱ	7	植物繊維混入

第51図 202号住居跡出土遺物(1)



図版番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外観文様	内面調査	分類	器厚	備考	
269	01-2002	202号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	なし。先端：斜り返し肥厚	ナゲ	Ⅱ	2mm	植物繊維混入	
270	01-2003	202号住居跡	埋土下部	深鉢	胴	LR (少)	ナゲ	Ⅱ	5	植物繊維混入	
271	01-84	202号住居跡	埋土上部	深鉢	口一側	波状線面任儀文。胴：LR (少)	ナゲ	Ⅱ	6	植物繊維混入	
272	01-60	202号住居跡	埋土下部	深鉢	胴	非粘栗羽文	ナゲ	Ⅱ	5	植物繊維混入	
273	01-62	202号住居跡	埋土上部	深鉢	胴下部	菱形幾文?	ナゲ	Ⅱ	11	植物繊維混入	
274	01-186	202号住居跡	埋土上部	深鉢	胴	LR	ナゲ	Ⅱ	7	植物繊維混入	
275	01-71	202号住居跡	埋土上部	深鉢	胴下部	LR	ナゲ	Ⅱ	6	植物繊維混入	
図版番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	高mm	厚mm	重量g	材質	備考
276	1072	石皿	ⅡB1	202号住居跡	埋土下部	(14)	(15)	2	0.34	頁岩	先端・基部欠損
277	1045	石皿	ⅡA1	202号住居跡	埋土下部	(10)	15	4	1.03	頁岩	先端欠損
278	1030	石皿	I	202号住居跡	埋土上部	(40)	(15)	5	3.24	頁岩	右縁線・先端欠損

第52図 202号住居跡出土遺物 (2)

※ ()は欠損長

の傾斜を利用してつくられていたようにみえる。

〈柱穴〉 3基検出された。3基ともに径15cmの円形で最大で10cmと浅い。暗褐色砂礫質粘土が埋まっていた。プランは明瞭に検出できた。

<炉跡> 地床炉を1基検出している。焼土自体は不整な楕円形状を呈するが、炭化物片が混った部分を含めると約2mの円形状となる。精査時点では厚さ約2cmである(台風災害の復旧で薄くなってしまった)。

遺物 ほとんどの土器片に植物繊維が含まれる。破片でみると薄手で表裏縄文土器片の出土量が約2割をしめる。他に非結束羽状縄文、側面直溝文の土器片や稀に厚手で赤褐色の斜縄文土器片が出土する。全体的に地床炉の南側(相対的に低い部分)から多く出土した。256・258・266・267は先端で軽外反する。257は口唇に竹管状工具で斜め刺突が加えられる。266・268は口唇に指頭直溝状凹みを有する。258は半截竹管状工具による条痕で施文されている。石器は石鏃3点、石匙1点が出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文早期末葉頃と考えられる。

206号住居跡(第53図、写真図版34・122)

<位置> 生活用道路下のB1n~p・16~17区に跨いで位置する。

<検出状況> 本住居跡周辺は自然堤防で高まり、黒色土層下から礫層までの層厚は薄く、数10cmで礫層に到達する。塊状に分布する中塚火山灰層下位の暗褐色粘土層からは遺物が出土し、とくに本住居跡検出区は周囲に比し遺物の出土量が多く、しかも西側に微傾斜しながら凹地形を呈する。遺物を取り上げ、さらに掘り下げたところ焼土を検出し、住居跡と認定した。基本十層X層を検出面とする。

<形態・規模> 本住居跡のほとんどの部分は西側の調査区外に延びるため、検出した部分から推測すると楕円形~隅丸方形を呈し、規模は検出最大長7mである。

<埋土> 5層に細分された。概ね上位から黒色土・褐色粘土・暗褐色砂礫質粘土である。褐色粘土層は黒色土との境界が近状となり漸移し、下部に中塚火山灰層を介在させる。暗褐色砂礫質粘土層には遺物が多く含まれる。

<床・壁> 地山は礫層で、直上の暗褐色砂礫質粘土層を床面としている。常時湿り気があり、ややしまる程度である。壁は約10度の傾斜で緩く立ち上がる。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 東壁寄りでは1基検出された。不整な楕円形を呈し、規模は110×70cmである。焼成は弱い。

<その他> 他の住居跡と同様に自然堤防上に構築されており、床を掘りぬくと礫層を検出できる。

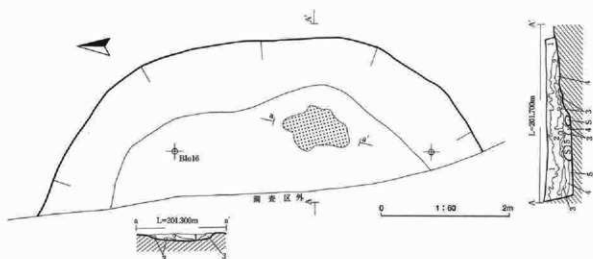
遺物 他の住居跡に比し、土器片の出土量は多くはない。非結束羽状縄文が多く、結節羽状縄文も出土している。反面石器の出土量が多く、石鏃8点、石匙4点が出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期初頭頃と考えられる。

207号住居跡(第54図、写真図版35・122・123)

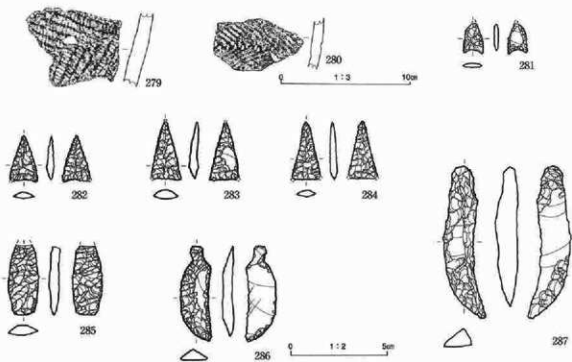
<位置> B1f9区に位置する。

<検出状況> 本住居跡の検出面は基本土層Ⅷb層である。本検出面は東側の110区から19区にかけて50cmの比高で傾斜し、窪んだところに本住居跡がある。暗褐色砂礫質粘土層が地山で、東側から斜面に沿って木層を検出中、半円形に残る褐色粘土層を検出した。偶然にも本遺構の中心付近に南北方向の土層ベルトを残しており、その西側も同様に掘り下げ東側に広がる半円形状の褐色粘土層を検出し、遺構の存在を確認した。この褐色粘土層を掘り下げ床面で2基の焼土遺構を検出し、住居跡と認定した。本住居跡の80cm上位の褐色砂礫質粘土層では200号住居跡を検出している。また、本遺構床面を掘り下げたところで408号住居跡を検出している。



- aa'
- 1 7SYR2/4 暗褐色砂質粘土 ややしまる
 - 2 10YR2/2 黒褐色砂礫質粘土 (礫径10~20mm, 葉片層, 1%) 土層・葉片層 ややしまる
 - 3 10YR2/3 暗褐色砂質粘土 ややしまる

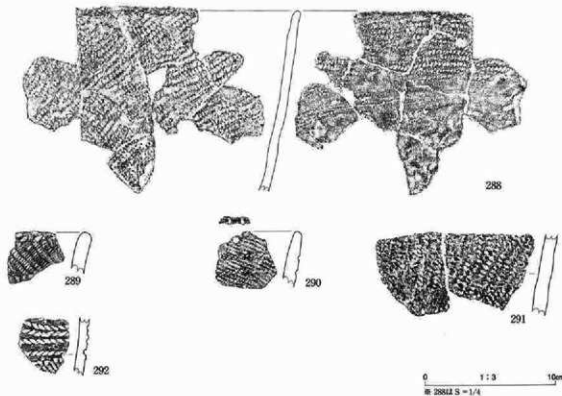
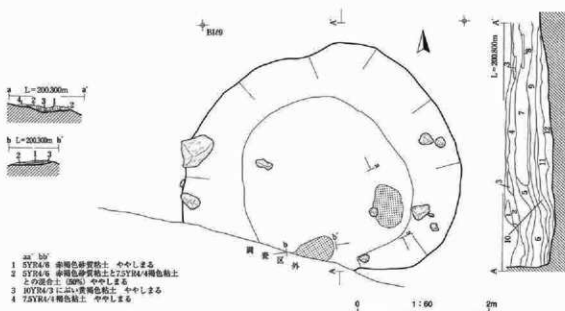
- AA'
- 1 7SYR2/1 黒色シルト ややしまる
 - 2 7SYR2/2 黒褐色シルトと4/2暗褐色土との混合土 ややしまる
 - 3 10YR6/6 明黄褐色火山灰質粘土 (Te-Cu) と6/4に多い黄褐色火山灰質粘土との混合土 ややしまる
 - 4 10YR4/2 に近い黄褐色砂礫質粘土 (礫径10mm, 葉片層, 1%) ややしまる
 - 5 10YR2/4 暗褐色砂礫質粘土 (礫径10mm, 葉片層, 1%) 土層片層 ややしまる



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外観文様	内面調査	分級	器号	備考	
279	00-374	206号住居跡	層土	燧石	製	森林帯形文	+	ナ	11mm	燧石燧石混入	
280	00-373	206号住居跡	層土	燧石	製	結実型文	+	ナ	7	燧石燧石混入	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	石質	備考
281	1114	石鏃	NA1	206号住居跡	層土	136	29	2	0.41	頁岩	先端欠損
282	1103	石鏃	NA1	206号住居跡	層土	25	110	4	1.03	燧石質岩	基部欠損
283	1104	石鏃	NA1	206号住居跡	層土	31	115.0	5	1.44	頁岩	先端・基部欠損
284	1107	石鏃	TC1	206号住居跡	層土	31	105	4	1.12	頁岩	基部欠損
285	1106	石鏃	TA2	206号住居跡	層土	107	16	0.5	3.27	頁岩	先端欠損
286	1116	石鏃	IA	206号住居跡	層土	01	16	0	4.44	頁岩	
287	1115	石鏃	IA	206号住居跡	層土	21	22	11	15.16	頁岩	未製品?

第53図 206号住居跡・出土遺物

※ (114次補正



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考
288	01-2655	207号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	LR	LR	V	6cm	器物線図記入
289	01-33	207号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	RL		V	8	器物線図記入
290	01-35	207号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	RL上に横線圧痕文		V	8	器物線図記入
291	01-37	207号住居跡	埋土下部	深鉢	胴下部	LR		V	10	器物線図記入
292	01-32	207号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	斜線圧痕文(矢羽状)、磨:RL		V	6	器物線図記入

第54図 207号住居跡・出土遺物

<形態・規模> 概ね円形状を呈する。南側の一部が調査区外に延びるため全貌は不明であるが、規模は4.3m×3.5mと推測される。

<埋土> 明確に遺構と判断できた検出面高からは5層に区分される。土層断面6層と9層が地山に広がる褐色粘土層にあたる。住居跡中央付近は土層断面全層が下に湾曲していることがわかる。遺物は床面付近のにおい黄褐色粘土質砂礫層から出土する。

<床・壁> 前述したように地山は暗褐色砂質粘土層で、地床炉はその上位の褐色粘土層上につくられている。このことより貼床がなされていると考えられる。貼床には炭化物片が混入する。壁は南側を除いて三方とも緩く立ち上がる。南側の一部は調査区外に延びているが、検出できた部分は垂直に切り立っている。ちょうどホタテ貝の腹縁の緩い傾きと葺頂付近の膨らみの関係に似ている。壁が切り立つ部分には地床炉が位置するので、これに関係するのかもしれない。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 地床炉とみられる焼土を2基検出している。1基は調査区外に延びるため全体形は不明であるが、2基ともに楕円形状を呈すると推測される。全体形がわかる1基の規模は70×50cmである。2基の長軸方向はおおよそ東西と南北方向で、直交する。

遺物 ほとんどの土器片の胎土に植物繊維を混入する。斜縄文土器片が多く出土する。0段多条のものが比較的多い。文様帯に側面疋痕文を持つものが少量出土している。石器は出土していない。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

303号住居跡 (第55・56図・写真図版36・123)

<位置> 旧河道自然堤防上の-BIb-c14~15区に位置する。

<検出状況> To-Cu下位のオリブ褐色シルト層(基本土層Ⅷb層)上位面で、暗オリブ褐色土の広がり認められた。

<形態・規模> 平面形は不整な円形を呈している。規模は東西3.1m、南北3.0mの規模であり、確認からの深さは最深部で18cmである。

<埋土> 概ね単層であり、暗オリブ褐色シルトで覆われている。この下層には黒褐色粘質土が約10cmの厚さで堆積しているが、貼り床的な性格の土層であると考えられる。したがって、掘方床面までの深さは30cmとなる。また単層であることや周囲の環境を考慮すると洪水などによる自然堆積の可能性が高い。

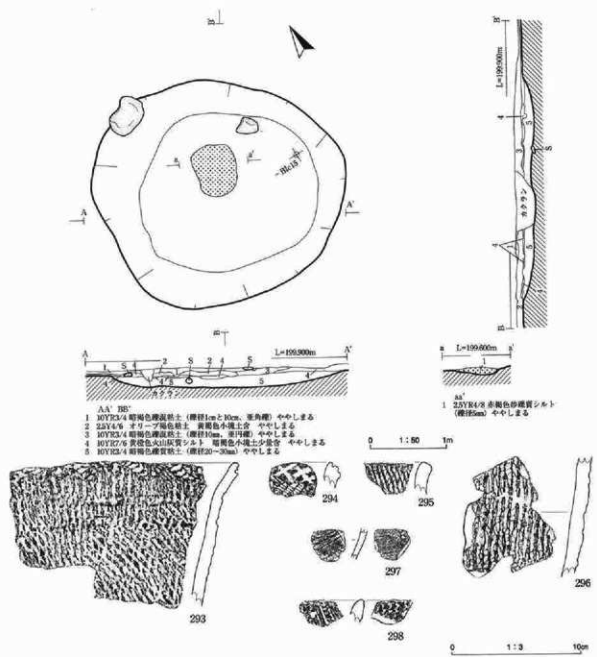
<床・壁> 床面は黒褐色の粘質土であるが、現状では硬化していないがほぼ平坦になっている。壁は住居中心を最深部とし、そこから緩やかに立ち上がっている。壁の明瞭な段差は認められない。なお、貼り床を剥がすと、礫層が露出し、凹凸が激しくなる。

<柱穴> 明確な柱穴は認められない。

<炉・焼土> 床面中央やや北寄りの場所、黒褐色土層の上位に焼土が広がる。規模は70×55cmで、不整な楕円形を呈する。焼土の厚さは10cmほどであり、よく赤化した赤褐色の色調を呈して折り、地床炉と考えられる。

遺物 土器片の胎土に植物繊維を混入させるものが多い。燃糸文の土器片が多く出土している。これに貝殻文や斜縄文の土器片が少量出土する。293は燃糸文上に2本の横位側面疋痕文と先端に半円形状の連続疋痕文が、297は3条の横位側隆起線文が施される。石器は石匙が2点、石笥が1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



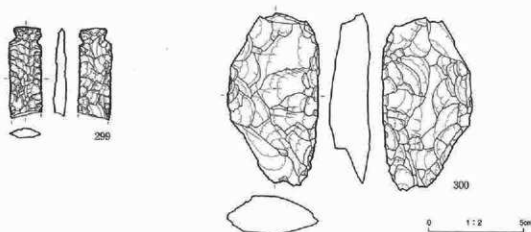
採取番号	記録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
293	61-130	303号住居跡	表面	漆器	口縁	雲文、黄褐色点文	ナデ	V	9mm	漆物断面記入
294	61-132	303号住居跡	粘土下部	漆器	口縁	1尺、口唇: X字状筋本	ナデ	V	8	漆物断面記入
295	61-151	303号住居跡	表面	漆器	口縁	雲文	ナデ	V	8	漆物断面記入
296	61-149	303号住居跡	表面	漆器	胴	雲文	ナデ	V	8	漆物断面記入
297	61-150	303号住居跡	粘土上部	漆器	胴	雲文	赤点文	V	6	
298	61-132	303号住居跡	粘土上部	漆器	口縁	貝殻模刻文、刺突、波筋	先施模刻貝紋	V	7	

第55図 303号住居跡・出土遺物 (1)

317号住居跡 (第57・58図、写真図版37・123・124)

<位置> - A I v22~23区に跨いで位置する。

<検出状況> 316号堅穴状遺構を精査後北側調査区縁で人力により地山確認中、To-Cu下約1mで黒褐色



国史番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
299	1009	石鏃		303号住居跡	床面	169.4	31.6	5.9	5.36	頁岩	先端部欠損
300	1025	石鏃		300号住居跡	床面	192.7	47.2	5.9	95.82	頁岩	先端・基部欠損

第56図 303号住居跡出土遺物(2)

※()は欠損具

砂礫質粘土層を検出した。本粘土層からは石器とともに剥片が多く出土し、掘り進むにつれてしまりの良い床面と焼土2基、西側で立ち上がる壁を検出したため、住居跡と認定した。本粘土層は上下位を崖線性堆積物に覆われている。基本土層Ⅶc層を検出面とする。

<形態・規模> 概ね円形状を呈する。北東-南西方向に長軸を持ち、規模は約4.3×4.0mである。

<埋土> 10cm前後の崖線礫を含む黒褐色砂礫質粘土で埋められている。本粘土には遺物の他に炭化物片が多く混入する。本粘土層直上には厚さ約1mの崖線堆積物とその上位にTo-Cu薄層がレンズ状に堆積する。

<床・壁> 崖線堆積物を地山とし、床面はかたくしまる。壁は自然堤防側の掘り込みが大きい。河床側(北側)は検出できなかった。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 地床炉とみられる焼土を2基検出している。長軸はおよそ北西側を向いており、規模は80×50cm、60×50cmである。

遺物 少量の土器片と15点の石器・多量の剥片が出土した。土器片は小片で、斜縄文で施文される。植物繊維が胎土に含まれる。石器は石鏃9点、石匙2点、打製石斧2点、不定形石器2点である。

時期 検出面および出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

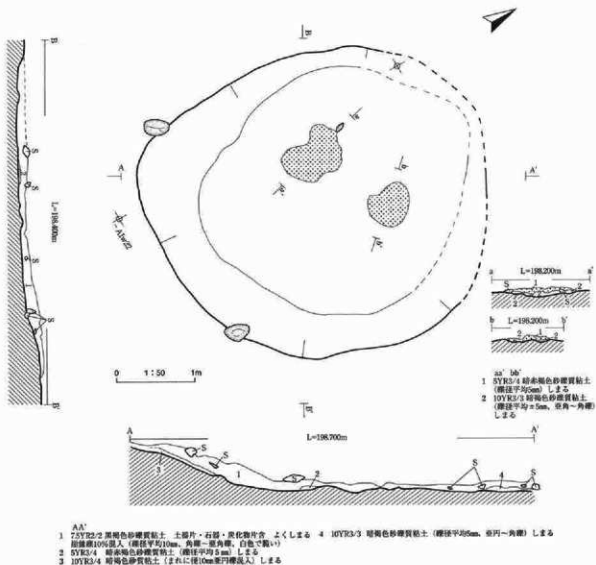
318号住居跡(第59・60図、写真図版38・124)

<位置> -A I v-w21~22区に跨いで位置する。

<検出状況> 西側に隣接する317号住居跡の東壁の立ち上がりを確認するために設定していた東西土層ベルトの東延長部分で、やや緩やかに東側に傾斜する地山を検出した。埋土から亜円礫の巨礫とともに土器片が出土するためさらに南北方向に土層ベルトを設定して精査をすすめた。締りのよい炭化物片混じりの暗褐色粘土の床面と小規模な地床炉を検出したため住居跡と認定した。基本土層Ⅶb₁層を検出面とする。

<形態・規模> 規模が約3.8mの不整な円形を呈する。中央付近が浅く窪む。

<埋土> 概ね2層に区分される。壁から床中央に向かって流れ込むように暗褐色細礫混粘土が堆め、中央



第57図 317号住居跡

部分の寝みを埋めるように褐色粘土が堆積している。廃棄後に水没し、粘土に埋められたようにみえる。

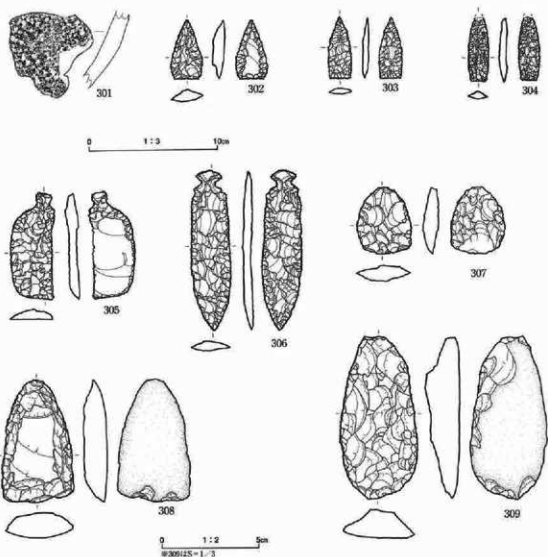
＜床・壁＞ 床はほぼ平坦で、地床がの北西側がとくに良く締まっている。南壁は自然堤防の斜面を利用し、北側は座敷堆積物細粒部を浅く掘り込んでつくり上げている。壁高は西側が最大で15cm、平均約10cmである。壁から床にかけて明瞭な境界はなく、浅い凹状を呈する。検出面から床面までの最大深さは22cmである。

＜柱穴＞ 検出されていない。

＜炉跡＞ 床面中央に1基検出されている。規模は40×35cmの略方形を呈する。

遺物 埋土中には重円礫の巨礫が遺物とともに出土した。遺物は埋土中では北西側に、床面では南東側に集中する傾向がある。すべての土器片に植物繊維が混入する。磨耗して不明なものもあるが、出土量は撚糸文・斜縄文（羽状縄文破片含）が多い。311~313・315は先端で軽く外反する。313と315は先細る。石器は石鎌2点、石匙2点、石筥1点、打製石斧2点・敲石1点が出土している。打製石斧は片面に自然面を残すものである。322は自然礫に調整を加えず、とくに右側縁に敲打痕が多く観察される。

時期 検出層位と出土遺物より縄文時代早期末葉頃と考えられる。



図版番号	登録番号	出土地式	層位	出土層		出土層	断面寸法				分類	器呼	備考	
				上部	下部		全長	幅	厚さ	底径				石質
301	06-100	317号住居跡	家屋			新機文 (R.L.?)								
302	1123	石匙	1A2	317号住居跡	埋土下部	26.0	14.0	3.5	1.58		頁岩			
303	1111	石匙	1A2	317号住居跡	埋土下部	32.5	19.2	2.5	1.35		頁岩			
304	1112	石匙	1A2	317号住居跡	埋土下部	24.0	11.0	5.0	1.81		頁岩			先端欠損
305	1122	石匙	1B	317号住居跡	埋土下部	57.0	24.0	7.0	4.7		雄黄灰岩			
306	1203	石匙	1A	317号住居跡	埋土下部	64.0	21.0	5.5	11.23		頁岩			
307	1136	不安形	B	317号住居跡	埋土下部	26.0	20.0	8.0	7.61		頁岩			
308	1135	打製石斧	I	317号住居跡	埋土下部	66.0	30.0	13.0	30.34		燧灰岩			
309	1134	打製石斧	I	317号住居跡	埋土下部	128.0	60.0	27.0	220.72		頁岩			

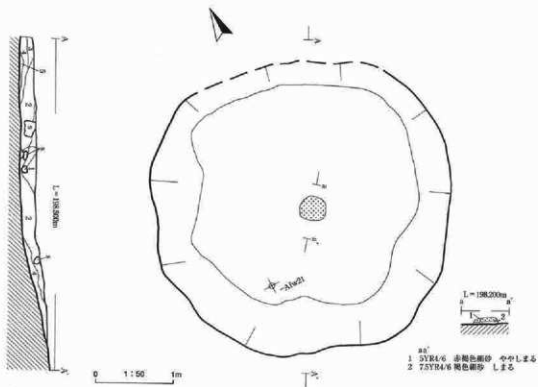
第58図 317号住居跡出土遺物

※ ()は欠損長

319号住居跡 (第61・62図、写真図版39・124)

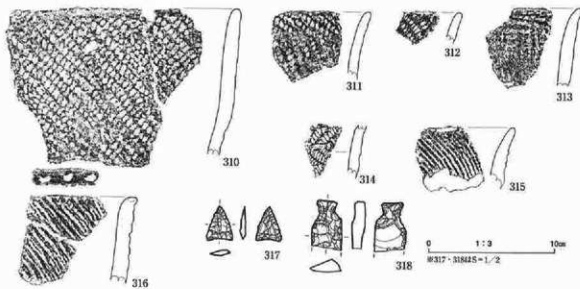
<位置> 7区-A I x17~18区に跨いで位置する。

<検出状況> 7区旧河床に広がるIVb層褐色粘土層を除去中、本遺構範囲のみ粘土層が厚く堆積していたため遺構プランに沿ってほぼ円形に窪んでしまった。住居跡の可能性も考えながら土層観察用ベルトを設定し精査をすすめた結果、中央付近に焼土遺構を検出し住居跡と認定した。検出層位はV層中位である。なお本住居跡は地床坪の広がりから2時期に亘っての利用(新段階と旧段階)が認められた。新段階(実線)は



317
1 5YR4/6 赤褐色細砂 ややLまる
2 7.5YR4/6 褐色細砂 Lまる

- AA'
1 7.5YR4/3 褐色砂礫質粘土 (腐泥) ~30cm, 内縁~室内縁, 風化花崗岩, 10%
2 7.5YR2/3 暗褐色砂礫質粘土(腐泥) 5~30cm, 風化花崗岩, 3% Lまる
3 7.5YR4/3 褐色砂礫質粘土 (腐泥) Lまる
4 10YR4/4 褐色砂礫質粘土(腐泥) 5~30cm, 風化花崗岩) ややLまる
5 7.5YR4/4 褐色砂礫質粘土(腐泥) 5~30cm, 内縁~室内縁, 3% Lまる



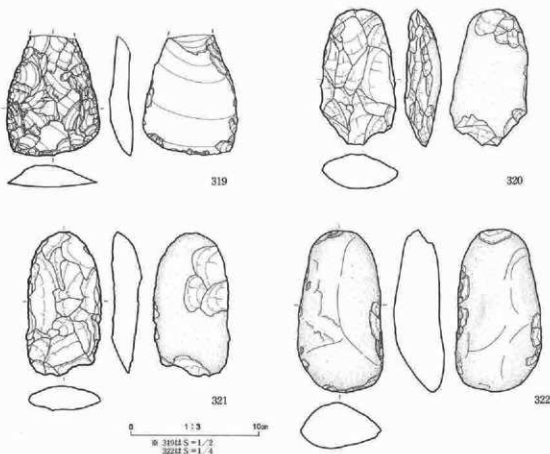
0 1:3 10cm
317・318G5-L/2

図版番号	登録番号	出土地点	層位	図様	部位	外面文様	内面調色	分類	器厚	備考
310	01-05	318号住居跡	床面	深鉢	口縁	紅		ナデ	約 12mm	植物繊維混入
311	01-10	318号住居跡	埋土上部	深鉢	口縁	紅		ナデ	約 8	植物繊維混入
312	01-14	318号住居跡	埋土下部	深鉢	口縁	紅		ナデ	約 9	植物繊維混入
313	01-15	318号住居跡	床面	深鉢	口縁	紅?	(不明), 先端に散乱の細面紅点文	ナデ	約 10	植物繊維混入
314	01-18	318号住居跡	埋土下部~底	深鉢	胴	赤結晶点状模文		ナデ	約 9	植物繊維混入
315	01-19	318号住居跡	埋土下部~底	深鉢	口縁	赤点文		ナデ	約 10	植物繊維混入
316	01-22	318号住居跡	床面	深鉢	口縁	赤点文		ナデ	約 10	植物繊維混入

図版番号	登録番号	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	石質	備考
317	1125	石鏃	318号住居跡	埋土上部	19.1	13.6	3.2	0.63	頁岩	
318	1126	石鏃	318号住居跡	埋土上部	(25.6)	16.2	7.2	3.3	頁岩	埋土下字欠損

第59図 318号住居跡・出土遺物 (1)

※ () 寸法欠損



図版番号	登録番号	器種	分期	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
319	1354	石鏡	I	318号住居跡 床	(64.2)	48.5	12.4	40.79	頁砂		基部欠損
320	1356	打製石斧	I	318号住居跡 床		107.1	99.7	25.0	193.8	砂岩	
321	1170	打製石斧	I	318号住居跡 埋土下部		114.6	98.8	20.7	166.1	砂岩	
322	1169	礫石		318号住居跡 埋土下部		171.4	89.7	53.1	1012.4	頁岩	

※ ()は欠損長

第60図 318号住居跡出土遺物(2)

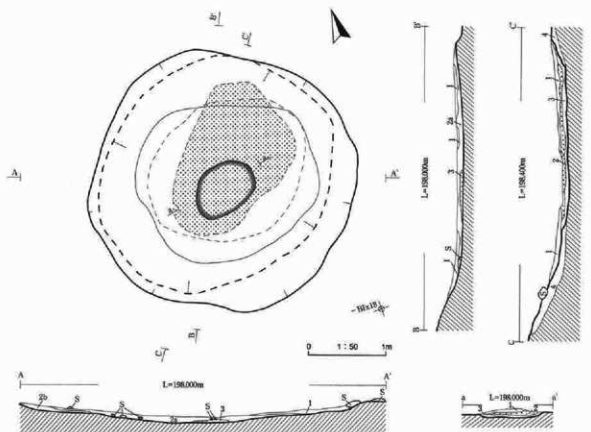
旧段階の窪みを利用しつつ規模をやや拡大して構築されている。

<形態・規模> 規模が約3.9mの不整な円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がるため、プランの周縁部では壁と床の境界は不明瞭である。

<埋土> 新段階の埋土は自然堆積で2層に大別される。上部層はIVb層(褐色粘土と砂礫互層)の下部褐色粘土層で本遺構の窪みを覆い隠すかのように厚く堆積する。下部層は黒褐色～オリーブ褐色中礫混粘土質シルトで土器片・石器片、炭化物片を含む。旧段階の埋土は1層のみである。やや多量に炭化物片を含む暗褐色砂細礫質シルトである。炭化物片をやや多く含み、壁際だけでなく焼土面上にも焼土を薄く覆うように均一に堆積していることから新段階の貼床の可能性が高い。

<壁> 新段階・旧段階ともにV層(縄文早期末葉包含層)およびその下位の砂礫層が壁となる。検出面から床面までの深さは、新段階で最大8cm、旧段階で最大12cmである。

<床> 既述のとおり新段階には貼床が施されていた可能性が高く、床面は他の住居跡に比して平坦となる。旧段階では砂礫層が床となるが、ここでも床面は比較的平坦とである。しかし、新段階に比して凹凸が大きい。



- AA' BB'
- 1 25Y2/4 暗赤褐色粘土質シルト (層厚20cm) 固くしまる
 - 2a 25Y2/2 黒褐色硬凝粘土質シルト (層厚30cm) 炭化物片 (10cm) 少量含 固くしまる
 - 2b 25Y4/3 オリーブ褐色硬凝粘土質シルト (層厚50cm) 炭化物片 (10cm) 多量含 固くしまる
 - 3 5Y2/4 暗赤褐色粘土質シルト 炭化物片 (10cm) 少量含 ややしまる
 - CC'
 - 1 5Y2/4 暗褐色砂礫質シルト (層厚10cm) 炭化物片 (5-10cm) 多量含 しまる
 - 2 5Y2/5 暗赤褐色砂礫質シルト (層厚50cm) しまる 焼土層
 - 3 5Y2/4 以上1-非褐色砂礫質シルト (層厚30-50cm) ややしまる 焼土層
 - 4 堆山
- aa'
 - 1 5Y2/4 暗赤褐色粘土質シルト 炭化物片 (10cm) 含 しまる 灰層
 - 2 25Y2/6 暗赤褐色粘土質シルト ややしまる 焼土層
 - 3 5Y2/5 暗赤褐色粘土質シルト ややしまる 焼土層



図録番号	登録番号	出土地点	層位	形状	部位	外観文様	内面調査	分類	器厚	備考
323	01-378	319号住居跡	埋土下層	波線	口縁	直.	ナデ	B'	9mm	埋土層底面
324	01-377	319号住居跡	埋土下層	波線	胴	磨赤文	ナデ	B'	11	埋土層底面
325	01-381	319号住居跡	床面	波線	胴	磨赤文	ナデ	B'	10	埋土層底面

第61図 319号住居跡・出土遺物 (1)

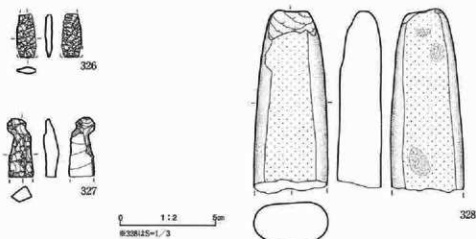
い。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 新段階ではプラン中央部に1基の焼土遺構が認められた。規模は90×62cmと比較的大きい。旧段階ではプラン中央部から北東側にかけて認められ、規模は2.12×1.35mと大きな焼土遺構である。平面形は不整で、厚さは最大7cmである。

遺物 土器片の胎土に植物繊維を混入させる斜縄文と磨赤文土器片が出土している。323の原体は太いものが使われる。石器は石鏃3点、石匙1点、磨製石斧1点が出土している。すべて欠損品である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



図録番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	尺mm	径mm	厚mm	重量g	材質	備考
326	1332	石皿	IA2	319号住居跡	焼土	(23)	10.0	4.0	1.11	真石	左縁・左側下部・右縁缺損
327	1333	石皿		319号住居跡	焼土	(31)	14.0	8.0	3.26	真石	下部下半欠損
328	1230	磨製石斧		319号住居跡	焼土	140.5	57.5	32.7	478.12	砂岩	下半欠損

第62図 319号住居跡出土遺物(2)

※()は欠損長

320号住居跡(第63図、写真図版40・125)

<位置> 7区-A I x20~21区に位置する。

<検出状況> 319号住居跡の検出状況と同様である。旧河床に広がるIVb層褐色粘土を除去後にほぼ円形に窪むプランを確認し、プラン中央付近に焼土遺構を検出し住居跡と認定した。埋土上部層の褐色粘土層はほとんど除去してしまった。検出層位はV層中位である。地床炉は上下に近接して分布し、2時期に亘り利用されている(新段階と旧段階)。プラン規模の変遷は確認できなかった。

<形態・規模> やや不整な楕円形を呈し、規模は3.35×3.25mである。断面形は浅い皿状である。

<埋土> 水中堆積層であるIVb層褐色粘土1層で埋積されている。

<壁> V層が壁となる。きわめて緩やかに立ち上がり、床面と壁との境界は明確ではない。検出面から床面までの深さは、最大7cmである。

<床> V層が床面となる。多少凹凸があるが、比較的平坦である。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央部に焼土遺構が2基検出された。新段階(実線)の焼土は平面形がヒョウタン形で、規模は63×40cmである。旧段階の焼土は平面形が不整形形で、規模は88×84cmである。新段階の焼土の方がやや暗色である。

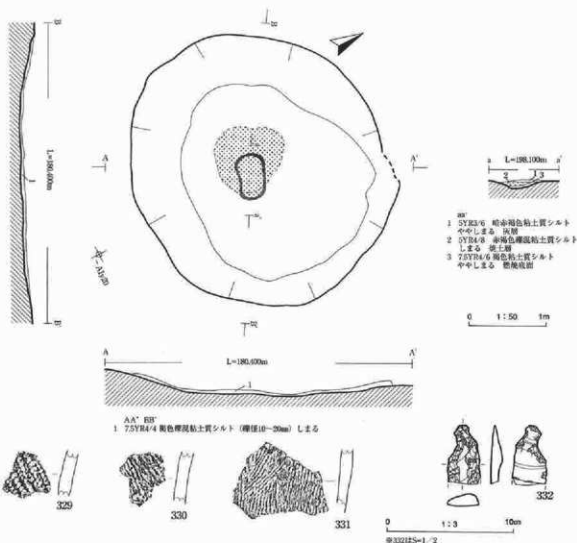
遺物 床面出土遺物は少ないが、地床炉周辺からプラン西側にかけて分布している。斜縄文と燃糸文の土器片が出土している。土器片の胎土には植物繊維を含む。文様が不鮮明のものが多く、石器は欠損した石器1点のみ出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期未葉頃と考えられる。

321号住居跡(第64図、写真図版41・125)

<位置> 6区-B I a・b15区に跨いで位置する。

<検出状況> 6区の土層堆積状況を把握するため重機掘削により試掘調査を行った。IVb層までの約2mの表土を剥ぎ取り、Ⅲ層(To-Cu)から検出精査を行った。自然堤防と旧河床を結ぶ斜面中間地点(住居跡



図録番号	登録番号	出土地点	層位	層種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
329	01-382	320号住居跡	埋土下層	埴輪	胴	RL		ナデ	厚 9cm	植物繊維混入
330	01-384	320号住居跡	床面	埴輪	胴	RL? (不明)		ナデ	厚 5	植物繊維混入
331	01-383	320号住居跡	床面	埴輪	胴	捺糸文		ナデ	厚 9	植物繊維混入

図録番号	登録番号	層種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	材質	備考
332	01390	石塊		320号住居跡	床面	131	17.0	7.0	3.06	頁岩	刃部が半欠損

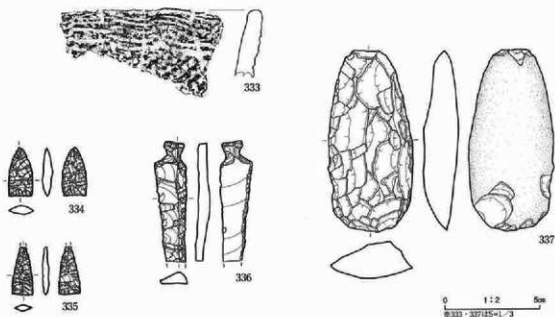
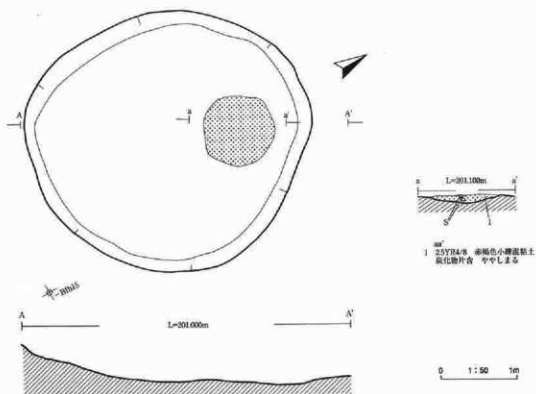
第63図 320号住居跡・出土遺物

※()は欠損長

南壁付近)でまとまって土器片が出土した。遺構に伴う遺物なのかを確認するために旧河床部分に厚く堆積する(2次堆積を含む約50cm) V層を掘り下げた。土層観察用ベルトで下方に緩く湾曲するⅢ~Ⅳb層を確認した。住居跡と推定し精査をすずめたが、遺物は出土せず、奇跡も検出できないため自然の窪みと判断した(1次精査)。Ⅳb~V層を掘りぬきⅢc層上面でV層が不整な楕円形状に残った。1次精査結果から自然の窪みと再度判断して掘り下げた。埋土から遺物が出土するとともに底面から奇跡とみられる焼土遺構を検出したため住居跡と認定した。検出面はⅢc層上面である。調査経過を振り返り、1次精査でのⅣb~V層の湾曲は本住居跡が埋積される過程で生じた堆積構造であると判断した。

<形態・規模> やや不整な円形を呈し、規模は約3.4mである。

<埋土> 2次検出でプランを確認した時点での埋土は1層(Ⅳb層土部)である。暗褐色砂礫質粘土で土



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外周文様				内面文様	分類	器厚	備考
						片数	幅mm	厚mm	重量g				
333	01-194	321号住居跡	灰土下層	深鉢	口縁	L.R. 先端縁面片石							
図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	片数	幅mm	厚mm	重量g	石質			備考
334	1175	石鏃	IA1	321号住居跡	床面	25.8	13	5	1.54	頁岩			
335	1176	石鏃	IA1	321号住居跡	床面	(25.0)	11.2	2.8	1.06	頁岩			先端欠損
336	1177	石鏃		321号住居跡	床面	(63.0)	36	4.6	6.5	頁岩			片縁先端欠損
337	1179	打製石斧	I	321号住居跡	床面	141.3	65.3	28.8	316.93	砂岩			

第64図 321号住居跡・出土遺物

器片・石器・炭化物片を混入させる。

<壁> Wc～Wb1層（Wc層が分布しないところがある）が壁となる。きわめて緩やかに立ち上がり、床面と壁との境界は明確ではない。検出面から床面までの深さは最大15cmである。

<床> Wc～Wb1層が床面となる。比較的平坦で堅く締まっている。

<柱穴> 検出されていない。

<灰跡> 北壁寄りでも1基検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は約径90cmである。顕著な割り込みはなく、厚さは約10cmである。

遺物 南壁付近と灰跡周辺で出土している。小片が多い。333は焼成が良く、先端付近は横位の燃糸文で施文されている。石器は石鏃5点、石匙1点、打製石斧1点が出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

323号住居跡（第65図、写真図版42・125）

<位置> 6区北側中央部（旧河床）の-B1a・b12～13区に跨いで位置する。

<検出状況> Wc～Wb1層面でV層が残る不整形プランを検出した。西に隣接する321号住居跡の状況と類似するため遺構を想定した精査をすすめた。浅い皿状に窪み、プラン中央北寄りに焼土遺構を検出したため住居跡と認定した。Wc～Wb1層（Wc層は山体よりのみ分布）が検出面である。北壁の一部は調査区外に延びている。

<形態・規模> 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北3.2m以上、東西4.3mである。

<埋土> 自然堆積層で、2層に大別できる。上部層は暗灰黄色粘土質シルトに、下部層は暗オリーブ礫混粘土質シルトである。下部層には下位ほど風化燧礫（花崗岩）とみられる角礫が多く混入させる。

<壁> V層が壁となり、検出面から床面までの深さは最大28cmである。やや凹凸を持ちながら極めて緩やかに立ち上がり、皿状を呈する。床面との境界も不明瞭である。

<床> V層およびWc～Wb1層が床面となる。明確な平坦面は認められず、微妙な凹凸がある。

<柱穴> 検出されていない。

<灰跡> プラン中央部から50cmほど北寄りに地床が1基検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は65×45cmである。

遺物 埋土および床面より少量の上器片と石器片が出土した。顕著な分布の偏りはない。上器片の胎土に植物繊維を混入させる。燃糸文土器片が出土している。石器は石鏃と打製石斧の各1点が出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

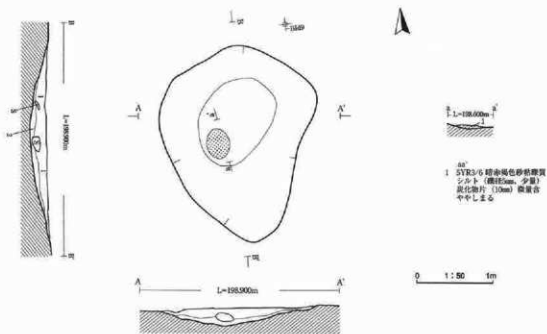
324号住居跡（第66図、写真図版43・125）

<位置> 5区の西寄り-B1d9～10区に跨いで位置する。

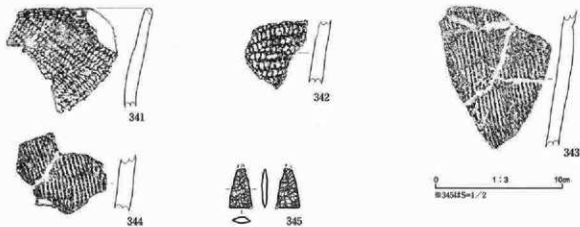
<検出状況> Wb2層オリーブ褐色砂質粘土層上にV層が残る不整形プランを検出した。321号・323号住居跡と同様な検出状況であったため、遺構を想定した精査をすすめた。浅い皿状の窪み、プラン中央西寄りに焼土遺構を検出し、住居跡と認定した。Wb2層（Wc～Wb1層は分布しない）が検出面である。

<形態・規模> 平面形は先端がやや尖り気味となる洋梨形を呈する。規模は南北に長軸を持つ2.6×2.1mで、321号・323号より小型である。

<埋土> 自然堆積層で、2層に区分できる。下部層には炭化物片と細礫を多量に混入させる。



A-A' 18' 1 25Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト しまる
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘結土質シルト (暗径5mm, 少量) 炭化物片 (10mm) 含まれる



採取番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	材質	外周文様	内径調整	分厚	器厚	備考
341	04-201	324号住居跡	黒土上部	深鉢	13縁	先導線状物面圧痕文 非粘着質焼文 (9歩)		ナデ	Ⅴ	7mm	植物繊維混入
342	04-207	324号住居跡	黒土上部	深鉢	胴	横縄文 (R1)		ナデ	Ⅴ	8	植物繊維混入
343	04-202	324号住居跡	黒土上部	深鉢	胴	先導文 煎餅付面に横位・斜位波線文		ナデ	Ⅴ	10	植物繊維混入
344	04-208	324号住居跡	黒土上部	深鉢	胴	煎餅文		ナデ	Ⅴ	10	植物繊維混入

採取番号	登録番号	器種	分厚	出土地点	層位	径mm	高さmm	厚mm	重量g	材質	備考
345	1216	行儀	LA1	324号住居跡	黒土上部	(22)	12.2	3.2	0.01	貝骨	先導部及び右側基部欠損

第66図 324号住居跡・出土遺物

※ () は欠損長

<壁> Ⅴb2-X層が壁となる。極めて緩やかに立ち上がり、床面との境界が不明瞭である。検出面から床面までの深さは最大22cmである。

<床> Ⅴb2-X層が床となる。皿状に落ち込んでおり、明瞭な平坦面は認められない。

<柱穴> 検出されていない。

<印跡> プラン中央から約20cm西側に地床印が検出された。平面形は楕円形で、規模は38×28cmである。

遺物 同一個体とみられる燃糸文の土器片が、プラン中央付近の黒土上部から近接して出土した。床面からの出土はなかった。土器片の胎土に植物繊維を混入させる。341は軽く外反しながら立ち上がる。先端に同

原体の縦位側面斥痕が施されている。343は深く浅い横位沈線を顔部付近に、さらに斜位沈線が左上方向に施されている。石器は石鏃1点のみが出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

400号住居跡（第67・68図、写真図版44・126）

<位置> B I k16・17～H6・17区に跨いで位置する。

<検出状況> 埴土と地山の識別は難しいが、遺物の出土量で遺構の存在が考えられた。埴土上部で比較的多く遺物が出し、さらに10cm掘り下げたところ、締りのよい床面と見られる面と焼土を検出したため、住居跡と認定し精査をすすめた。東側およそ1/3は2000年度調査で終了している。一部畑を造成するときに削られているが、20号住居跡を調査中に遺物の出土状況から西側に遺構の可能性があった。

<形態・規模> 床面の広がりから両丸形状を呈すると推測される。規模は長軸（東西）が最大5.4m以上、短軸が4.6mである。

<埋土> 黒褐色小砂礫質粘土の単層で覆われている。調査前の生活用道路面からは約1.5m下に床面があり、埴土の10～15cm上にはTo-Cuが塊状に介在する。

<床・壁> 遺物出土量から遺構の推定をし、最大約15cm掘り下げたところで締りのよい床面を検出した。周囲に比し方形に床面が広がる。北側で緩い壁の立ち上がりを確認できたが、他の3方向での壁は不明瞭で検出できなかった。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 地床が4基検出された。中央南北方向線上に3基、西側壁側に1基である。このうち前者の1基は長軸約80cmが整な楕円形状を呈する。いずれも燃焼部は約5cmと薄い。

遺物 土器片すべてに植物繊維が混入し、断面は黒色である。厚さは7～9mmと厚い。0段多糸縄文が多く、摺糸文が少量出土する。木住居跡周辺からは短沈線と非結束羽状縄文で施された口縁部下部付近の土器片が出土し、本住居跡と同時期の遺物とみられる。346～348、351は口縁部で、351は摺糸文で他は0段多糸縄文である。348は口唇に原体斥痕が施文される。352は胴下部、焼成が良好である。石器は石鏃が4点、石匙が1点出土している。すべて基部は挟りがなく平基である。355を除いて先端部が欠損している。356は縦長で、体部下半にアスファルトが付着している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

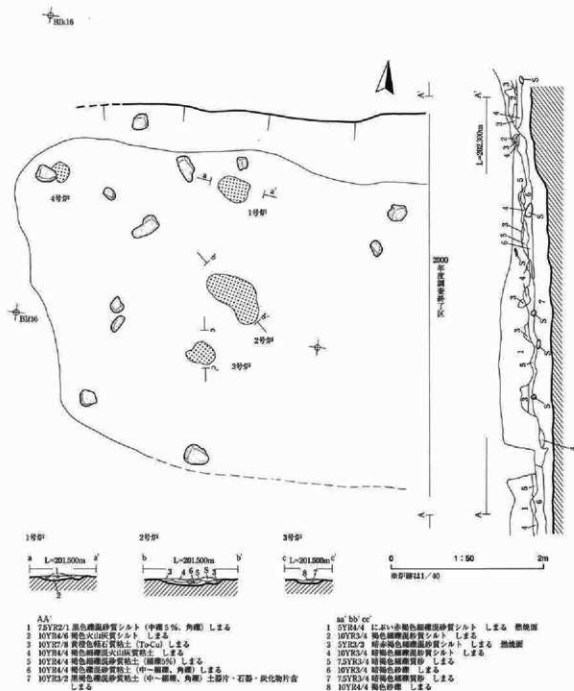
404号住居跡（第69図、写真図版45・126）

<位置> B I k5～k6区に跨いで位置する。

<検出状況> 縄文時代前期初頭面を検出していた頃から、調査区南境の土層断面に下方に緩く湾曲するTo-Cu層が観察された。遺構の可能性も考えて検出をすすめたが、埋土や遺物の出土量など特異な兆候はみられなかった。木火山灰層下位は砂質土と粘土の互層（旧気仙川堆積物）よりなり、最下位の粘土層を検出した頃より遺物の出土量が多くなり、湾曲した上層断面に調和する褐色粘土の楕円形状プランを検出した。精査が進むにつれ、プラン中央の床面で地床跡を検出したため、住居跡と認定した。

<形態・規模> 楕円形状で浅い皿状を呈する。南側の一部は調査区外に延びる。規模は長軸（北東南西）が3.2m以上（推定4m）、短軸が3.7mである。

<埋土> におい黄褐色粘土と黒褐色砂質粘土で覆われている。調査前の水田面からは約2.4m下に床面がある。

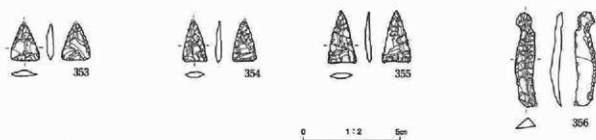
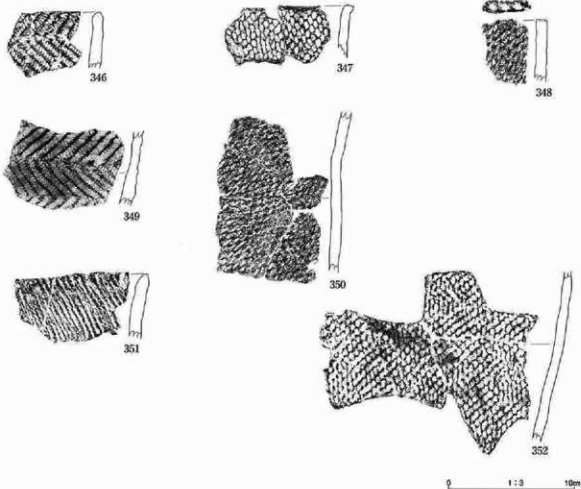


第67図 400号住居跡

<床・壁> 床面は締りがよい。調査区外に延びる南壁を除く三方向で緩い立ち上りを確認できた。

<柱穴> 検出されていない。

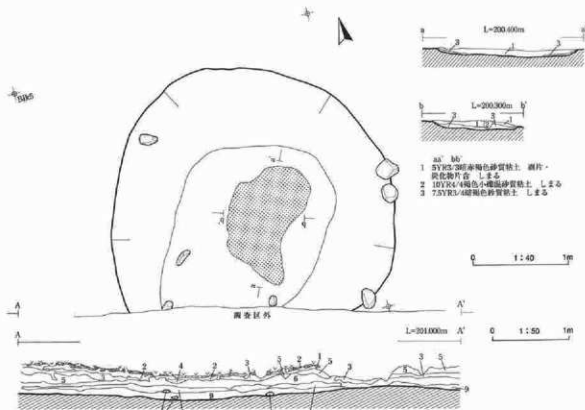
<炉跡> 床面中央で1基検出された。南北方向に長軸をもつ不整な楕円形状を呈する。燃焼部は7cmである。遺物 土器片すべてに植物繊維を混入し、断面は黒色である。厚手で文様の不鮮明なものが多く、掲載以外に燃糸文と斜縄文の小片がある。360は燃糸文で施文される。先端が軽外反し、不鮮明であるが先端と口唇に絡糸体圧痕文が施され、口唇は小波状を呈する。358は結束羽状縄文で口唇にも斜体圧痕文が施される。



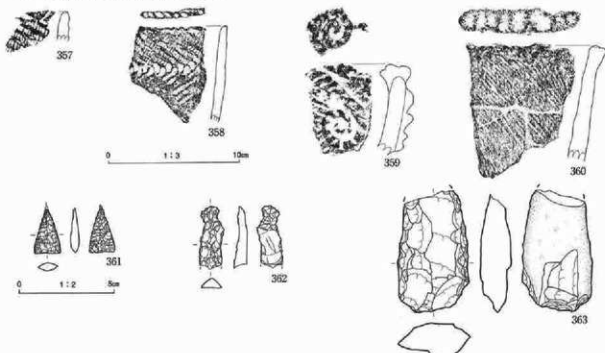
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考	
346	02-1	400号住居跡	遺跡	器底	口	連続菱形織文 (0多)	ナデ	織	9mm	植物繊維混入	
347	02-2	400号住居跡	下部	器底	口	ビッチリ織文	ナデ	織	7	植物繊維混入	
348	02-3	400号住居跡	上部	器底	口	1.R (0多)、口縁：扇形織文	ナデ	織	8	植物繊維混入	
349	02-5	400号住居跡	下部	器底	胴	連続菱形織文 (0多)	ナデ	織	8	植物繊維混入	
350	02-6	400号住居跡	表面	器底	胴下～胴	1.R (0多)	ナデ	織	8	植物繊維混入	
351	02-4	400号住居跡	表面	器底	口	扇形織文	ナデ	織	9	植物繊維混入	
352	02-7	400号住居跡	上部	器底	胴	ビッチリ織文	ナデ	織	7	植物繊維混入	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地式	層位	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
353	525	石鏃	1A1	400号住居跡	表面	220	15	3	0.91	頁岩	先端部欠損
354	523	石鏃	1B1	400号住居跡	表面	211	13	3	0.86	頁岩	先端部欠損
355	526	石鏃	2A1	400号住居跡	表面	28	15	3	0.99	頁岩	表面に発露時の織物あり
356	545	石笄	1B	400号住居跡	表面	50	(11)	6.5	2.67	頁岩	下半にアスファルト付着

第68図 400号住居跡出土遺物

※ ()は欠損



- AA'
- 1 10YR7/6 黄褐色砂質粘土 (Ta-Cu) しまる
 - 2 10YR2/4 暗褐色粘土 しまる
 - 3 10YR6/4 に高い黄褐色粘土 しまる
 - 4 10YR2/2 に高い黄褐色粘土 しまる
 - 5 10YR5/4 に高い黄褐色小礫質粘土 (礫径=5mm) しまる
 - 6 10YR5/4 に高い黄褐色粘土 しまる
 - 7 10YR4/2 に高い黄褐色粘土 上部で部分的に炭化土層 しまる
 - 8 10YR5/2 に高い黄褐色小礫質粘土 (礫径20%) しまる
 - 9 10YR3/2 黒褐色硬質砂質粘土 (礫径0.5mm) しまる



図録番号	登録番号	出土地点	層位	部材	形状	外面文様				内面調整		分類	部厚	備考
						肌	凸部	凹部	重量g	ナデ	IV			
357	02-27	404号住居跡	床面	陶片	L1	肌	(凸部)	口縁キザシ			ナデ	IV	8mm	動物繊維混入
358	02-15	404号住居跡	床面	陶片	L1	結末羽状調文	(凸部)	(凹部)	無調整		ナデ	IV	5	動物繊維混入
359	02-16	404号住居跡	床面	陶片	L1	無調整		口縁からのびる連続褐色状隆起帯			ナデ	IV	11	動物繊維混入
360	02-14	404号住居跡	床面	陶片	L1	熟本文 (L形)	先端・口唇部	無調整			ナデ	IV	12	動物繊維混入
図録番号	登録番号	部材	分類	出土地点	層位	肌	凸部	凹部	重量g	石質		備考		
361	005	石鏃	IA1	404号住居跡	床面	CB1	14	5	1.08	頁岩	先端部欠損			
362	039	石鏃		404号住居跡	床面	CB3	13	7	2.67	頁岩	体部下半欠損			
363	066	打製石斧	I	404号住居跡	床面	96	56	27	160.64	砂岩	上部欠損 裏面自然剥			

第69図 404号住居跡・出土遺物

※()は欠損部

359は側面正痕文上に、口唇上の渦巻と連結した逆向きの波巻状隆帯が貼付されている。隆帯上にも正痕文が施される。石器は石鏃3点、石匙2点、打製石斧1点が出土している。石鏃は無茎、石匙はすべて緩型である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末から前期初頭頃と考えられる。

405号住居跡（第70図、写真図版46・126）

<位置> B1k7~k8に跨って位置する。

<検出状況> 縄文時代前期初頭検出面から下位検出面の状況を把握するために小規模のトレンチを設定して数10cm下げたところ、底面で炭化物片混じりの褐色粘土層を検出した。本粘土層は下位検出面として判断したため、観察土層を設定せずそのまま検出をすすめた。褐色粘土層からさらに数cm下げたところ暗褐色砂質粘土層を地山とするか跡を1基検出し、さらにその周辺から集中して土器片が出土した。この時点で発跡を中心とする緩い皿状の凹地形を呈したため、住居跡と認定した。なお、南側は417号住居跡に接するが、その新山は土質からは判断できなかった。

<形態・規模> 長軸が北西-南東方向に向く楕円形で浅い皿状を呈する。規模は長軸が4mで短軸が3.4mである。

<埋土> トレンチ断面からは、暗褐色砂質粘土層を地山とし褐色粘土層とオリブ褐色小砂礫層の互層で埋められていた。埋土最下層は厚さ約5cmの褐色粘土層である。本層からは土器片と炭化物片が出土する。

<床・壁> 北側（山側）から常時湧水があり、本来の土質が不明である。壁は西側で明瞭な緩い立ち上がりを確認できた。南側は417号住居跡に接し、識別できなかった。

<柱穴> 東側で本住居跡に属するとみられる柱穴を1基検出した。暗褐色土の地山に明瞭な褐色土で埋められていた。規模は東西方向に長軸を持つ50×20cmの楕円形を呈する。深さは12cmである。なお、調査中に台風で調査区全域が冠水したため、東側半分が崩れてしまった。

<炉跡> 床面中央で2基検出された。南北一直線上に並んで検出され、規模は60×46cmと70×50cmである。厚さは、ともに1cmである。炉周辺からは炭化物片が比較的多量に出土した。

遺物 土器片すべてに植物繊維を混入し、断面は黒色である。さらに364の表裏面には植物痕跡がみられる。365は口縁部片で先端が軽く内湾する。石器は石鏃が2点出土した。ともに小形で先端部が欠損している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末頃と考えられる。

407号住居跡（第71図、写真図版47・127）

<位置> B1j1~2区に跨いで位置する。

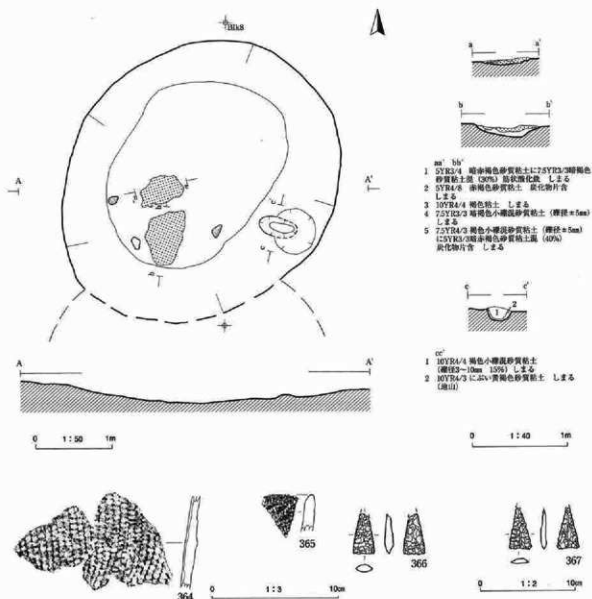
<検出状況> To-Cu層下位の褐色粘土とオリブ褐色小砂礫層互層を掘り抜いたところ暗褐色粘土を地山として褐色粘土が円形に残る部分を検出した。グリッド区画に沿って十字にベルトを設定し掘り下げた。周辺部に比し遺物出土量が多くなり、床面とみられる面から焼土を検出し、住居跡と認定した。本住居跡は台風6号の大雨により山側法面が崩落し、精査直後に埋没し補足調査ができなかった。

<形態・規模> 南西側辺がやや内側に窪んだ楕円形を呈する。規模は3.4×3.3mである。

<埋土> 暗褐色土が主体をなし、上位の粘土砂礫互層最下部が主体層の埋め残しの緩く窪んだ部分を埋める。層相から廃棄後に河川の洪水等による埋積を受けたと考えられる。

<床・壁> 壁は全体的に緩やかに立ち上がる。南東側は比較的きつく立ち上がる。床面は堅くしめる。

<柱穴> 検出できなかった。

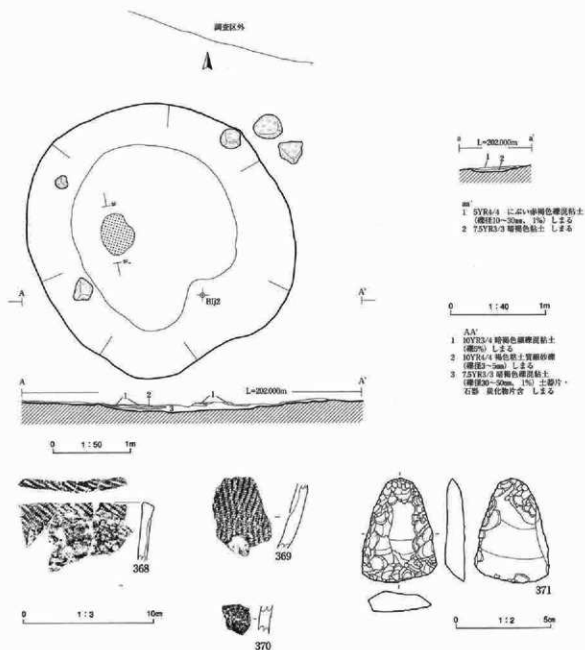


採取番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分層	器厚	備考	
364	02-29	405号住居跡	床面	陶鉢	胴	SL				植物繊維混入	
365	02-28	405号住居跡	床面	陶鉢	口	LR, 先端先端・唇内溝				ナマ	
採取番号	登録番号	器種	分層	出土地点	層位	Hcm	幅mm	厚mm	重量g	石炭	備考
366	680	石炭	1B1	405号住居跡	粘土下部	(21.5)	11	4	0.87	貫首	北上山地 先染欠損
367	686	石炭	1B1	405号住居跡	粘土下部	22D	12	3	0.83	貫首	先染欠損

※ () は欠損長

第70図 405号住居跡・出土遺物

<炉跡> 中央西寄りに1基検出された。不整な楕円形を示し、規模は55cm×43cm、厚さは最大15cmである。
 遺物 土器片すべてに植物繊維を混入し、断面は黒色である。厚さは8mm前後である。斜縄文が多く、燃糸文が少量出土する。368は外面が破損している。先端が軽く外反し、口唇に斜位胴体側面圧痕が施される。
 時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。



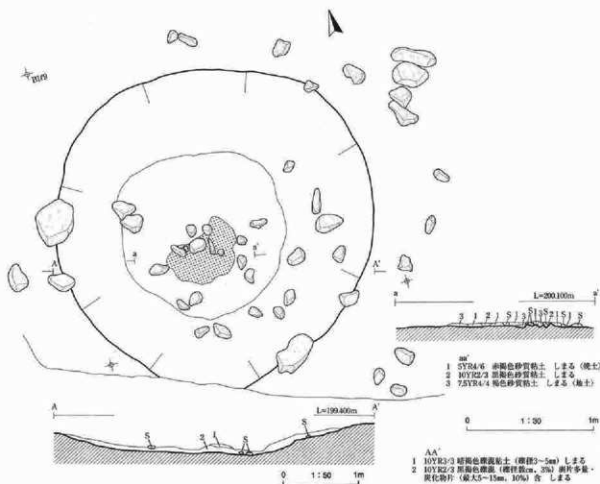
調査番号	登録番号	出土地点	層位	層種	部位	外面文様				備考	
						内面文様	分類	器厚	器容		
368	05.21	407号住居跡	床面	漆絵	口	斜. (0多)	破損有	ナデ	V	8mm	植物繊維混入
369	05.22	407号住居跡	床面	漆絵	側下	樹志織文 (0多)		ナデ	V	8	植物繊維混入
370	05.23	407号住居跡	床面	漆絵	口	L:地文上に樹志織文		ナデ	V	8	植物繊維混入
調査番号	登録番号	層種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
371	602	石器		407号住居跡	床面	94.5	39	11	26.32	頁岩	北上山由

第71図 407号住居跡・出土遺物

408号住居跡 (第72・73図、写真図版48・49、127)

<位置> BI19区に位置する。

<検出状況> 暗褐色粘土を床面に持つ207号住居跡の直下で検出された。207号住居跡の地山確認のために掘り下げたところ、炭化物片と剥片を多く含む黒色土が広がり、約10cm下位で新たな焼土を検出し、住居跡と認定した。207号住居跡と同様な正円形に近い掘り込みを持つ。他住居跡に比べて剥片と炭化物片の出土量が多い。上下に重なる2つの住居跡の検出状況から考えると、408号住居跡を利用した後に廃棄場所として利用され、本住居跡を含む周辺域が褐色粘土を堆積させるようなできごとのために水没し、その後再度住



第72図 408号住居跡

層として利用されたと考えられる。

<形態・規模> 南壁の一部が調査区外に延びるが、円形を呈すると見られる。規模は約4.1mである。

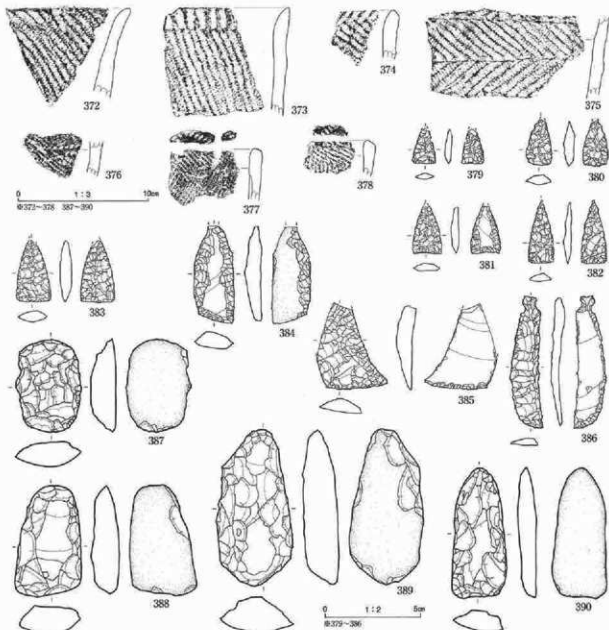
<埋土> 207号住居跡地床下の暗褐色土と黒色土の2層に区分できる。住居跡中央の床面は調査前の水田から約2.5m下にある。南側の調査区外境の土層断面にはTo-Cu層は介在しないが、本火山灰層の特徴的な上下層の対比から想定すると、床面から約40cm上位にあったと考えられる。

<床・壁> 東西両壁の立ち上がりは明瞭で、緩やかに立ち上がる。北壁と西壁での壁高は20cmであるが、東壁では30cmを越える。床面は10～数10cmの礫(亜円礫)混じりのオリーブ褐色の砂質粘土でしまりがよい。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉跡> 中央付近で1基検出された。不整な楕円形を呈する。規模は長軸1m、短軸60cm、厚さは最大8cmである。

遺物 土器片全てに植物繊維が混入し、断面は黒色である。372は先端で軽く外反する。373の縦位短沈線の上半分は押し引かれたように窪んでいる。377と378は同一文様と見られるが、口唇の絡条体疋文の向きが異なる。文様が浅く不鮮明であるが、摺糸文で先端付近とその下では施文の向きが異なる。石器は土器片より出土量が多く、石錐17点、石匙7点、不定形石器1点、打製石斧4点の他チップが多く出土した。石錐は先端部が欠損しているものが多い。石匙はすべて縦型である。打製石斧はすべて裏面に自然面を残す。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外観文様	内面痕跡	分厚	器厚	備考
372	02-58	408号住居跡	機土	漆鉢	□	RL (0多)				漆物繊維混入
373	02-59	408号住居跡	床面	漆鉢	□	RL (0多石筋) 先端：縦切痕跡	ナデ	V	8	漆物繊維混入
374	02-54	408号住居跡	床面	漆鉢	□	RL (0多) □1号：キウミ	ナデ	V	8	漆物繊維混入
375	02-53	408号住居跡	床面	漆鉢	楕	非筋葉羽状網文 (0多)	ナデ	V	8	漆物繊維混入
376	02-57	408号住居跡	床面	漆鉢	楕	RL地文上に縦切の線面(注釈文、印本)	ナデ	V	8	漆物繊維混入
377	02-52	408号住居跡	床面	漆鉢	□	機糸文 □1号：縁状付凸底	ナデ	V	8	漆物繊維混入
378	02-59	408号住居跡	機土	漆鉢	□	機糸文 □1号：縁状付凸底	ナデ	V	8	漆物繊維混入

図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
379	608	石皿	1B1	408号住居跡	床面	139	12	4	0.63	頁岩	先端欠損
380	642	石皿	IIA2	408号住居跡	床面	124	14	6	19.5	頁岩	先端欠損
381	643	石皿	IIA1	408号住居跡	床面	121	15	4	1.67	頁岩	先端欠損
382	745	石皿	IA1	408号住居跡	床面	123	14	5	18.8	頁岩	先端欠損
383	316	石皿	IA1	408号住居跡	床面	124	18	6	3.28	頁岩	先端欠損
384	259	石皿	IA	408号住居跡	床面	124	21	9	8.59	頁岩	先端欠損
385	647	石皿	IB	408号住居跡	床面	140	17	10	8.72	頁岩	つまみ部欠損
386	654	石皿	IA	408号住居跡	床面	29	17	7	5.83	頁岩	つまみ部、縁部上半欠損
387	642	打製石斧	I	408号住居跡	床面	74	51.5	20	96.76	砂岩	北上山地
388	647	打製石斧	I	408号住居跡	床面	86	52	22	127.17	砂岩	北上山地
389	649	打製石斧	I	408号住居跡	床面	124.5	60	28.5	256.3	砂岩	北上山地
390	641	打製石斧	I	408号住居跡	床面	103.5	42	16	69.9	砂岩	北上山地

第73図 408号住居跡出土遺物

※ ()は欠損長

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

409号住居跡 (第74～76図、写真図版50・128)

<位置> B I k5～k6に跨って位置する。

<検出状況> 404号住居跡の精査後、地山の砂礫層を確認するために土層観察ベルトを設定して掘り下げた。20cm下げたところ焼土を検出し、その直上から392と395の土器片が出土した。さらに埋土と地山の識別が難しいため、2方向に設定したベルト断面から緩い壁の立ち上がりを確認し、住居跡と認定した。完掘後、以前から検出していた南東辺に扇形に広がる暗褐色濁りを精査した。緩い壁の立ち上がりと2基の地床炉を検出し、本住居跡に切られるもう一つの住居跡(422号住居跡)があることを確認した。

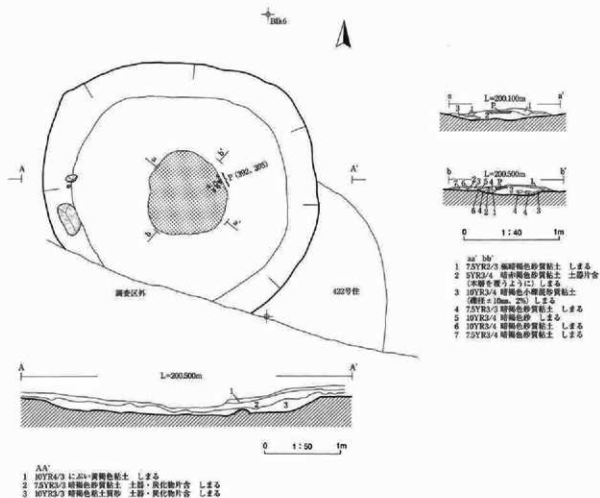
<形態・規模> 南側の一部が調査区外に延びるが、およそ円形を呈する。規模は東西方向に長軸をもち、 $3.6 \times 3\text{m}$ 以上である。

<埋土> 3層に区分された。下部の暗褐色粘土質砂は地山と同様な土質である。

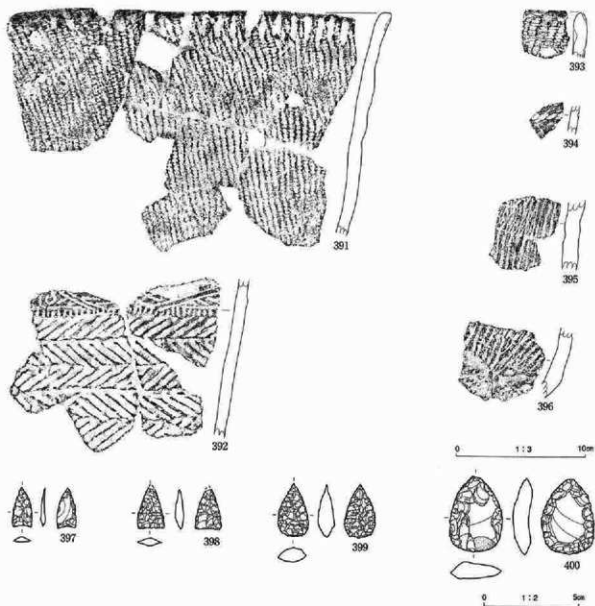
<床・壁> 床面はやや締りがよい。壁は緩く立ち上がる。東西南北のベルト断面からは明瞭に観察できた。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 地床炉を1基検出した。円形を呈し、規模は約1.1mである。内部からは覆い被せた土器片391が



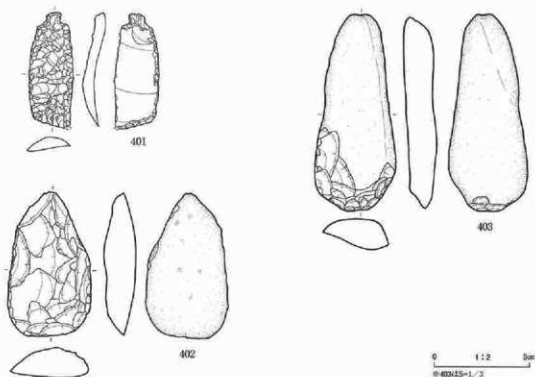
第74図 409号住居跡



図録番号	登録番号	出土地点	層位	形状	素材	外面文様	内面調整	分類	材質	備考	
391	02-68	409号住居跡	基床中内	漆鉢	口	LR (少), 先端線位短式様		V	10mm	植物繊維混入	
392	02-70	409号住居跡	基床中直上	漆鉢	口一側	文様帯・垂糸体(縦文(渦巻, 山形筋)) 胴部結末段伏線文		V	7	植物繊維混入	
393	02-74	409号住居跡	甕土上部	漆鉢	口	KL (少) 縞筋(短)		V	9	植物繊維混入	
394	02-68	409号住居跡	甕土下部	漆鉢	口	無筋(直線文)		V	6	植物繊維混入	
395	02-75	409号住居跡	基床中直上	漆鉢	胴	無赤文 (LR)		V	12	植物繊維混入	
396	02-73	409号住居跡	床前	漆鉢	胴下	無赤文 (LR)		V	11	植物繊維混入	
図録番号	登録番号	形状	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量g	材質	備考
397	699	石磯	IA1	409号住居跡	甕土	22	11	3	0.54	頁岩	北上山地
398	601	石磯	IA1	409号住居跡	甕土下部	220	14	4	1.13	頁岩	北上山地
399	609	石磯	IA2	409号住居跡	甕土下部	26.5	16	9	3.16	頁岩	北上山地
400	614	石磯	IA2	409号住居跡	甕土下部	40	36	10	11.67	頁岩	北上山地

※ () は欠損部

第75図 409号住居跡出土遺物 (1)



図版番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量(g)	材質	備考
401	607	石塊	I B	409号住居跡	残土下部	61.3	23.5	11	10.38	砂岩	北上山地
402	320	打製石斧	I	409号住居跡	残土下部	115	65	25	227.42	砂岩	北上山地
403	645	磨石		409号住居跡	床面	155	63	24	345	砂岩	北上山地

第76図 409号住居跡出土遺物(2)

出土した。

遺物 土器片すべてに植物繊維が混入し、断面は黒色である。縄文のほかに燃糸文が出土する。391は縦走縄文で口縁部先端に上方向からの縦位の刻目(スリット)が施されている。392は山形状・渦巻き状などの側面圧痕文のみで施文されている。接合はできなかったが、口縁部端小片も出土している。文様帯幅は狭い。石器は石鏃6点、石匙2点、打製石斧2点出土している。石鏃は無茎で抉りのないものが多い。石匙は縦型のみである。打製石斧はともに裏面に自然面を残すもので、402は滴形である。403は自然の形状を生かし、刃部のみに調整を加え、他の表面は自然面を残す。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

410号住居跡(第77図、写真図版51・129)

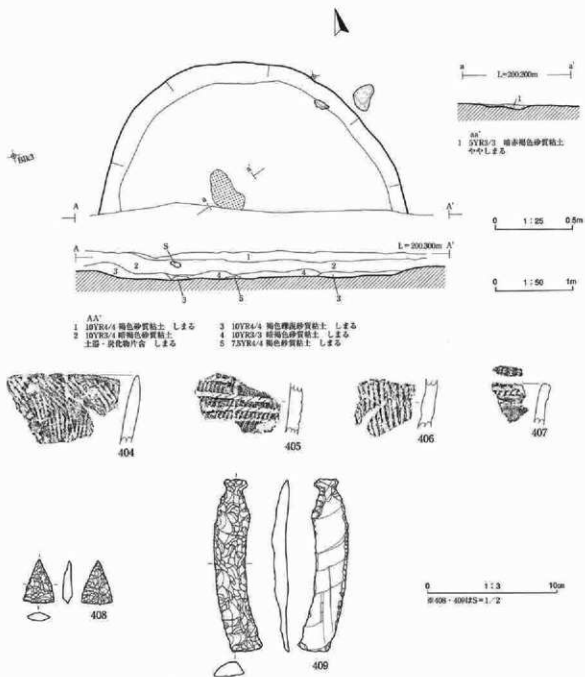
<位置> B I k3区に位置する。

<検出状況> 調査区南境の西側土層断面に褐色粘土の緩い落ち込みを確認し、経験上遺構の可能性も考えて精査を進めたところ、暗褐色土面で焼土2基を検出するとともに周囲に比し多くの遺物が出土した。平面からのプラン検出は難しいものの、上記3つの状況から住居跡に認定した。

<重複関係> 本住居跡北側に418号住居跡が隣接するが、新旧関係は不明である。両遺構から出土する遺物からは時間のずれはさほどないようにみえる。

<形態・規模> 南側半分が調査区外に延びるが、検出形状からおおよそ円形を呈すると考えられる。規模は直径約4mである。

<埋土> 本遺構は地表面から約2m下位で検出されているが、直接的な埋土はTo-Cu層下位の粘土と砂細礫互層 (IVb層) からであり、主体は暗褐色砂質粘土である。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	図種	部位	内容文様	内面測値	分類	器厚	備考	
404	02-43	410号住居跡	床面	図録	口	R		V	8mm	器物繊維混入	
405	02-43	410号住居跡	床面	図録	口	地文 (R/L)、上に4本の横位欄間圧痕		V	10	器物繊維混入	
406	02-304	410号住居跡	床面	図録	胴	流糸文 (L/E)		V	8	器物繊維混入	
407	02-41	410号住居跡	床面	図録	口	1段の横位欄交列、口唇に横位圧痕		V	6		
図版番号	登録番号	図種	分類	出土地点	層位	径cm	径mm	厚mm	重量g	材質	備考
408	020	石皿	IA1	410号住居跡	床面	25	16	4.5	1.24	頁岩	
409	021	石皿	IB	410号住居跡	床面	31	24	9	14.22	頁岩	

第77図 410号住居跡・出土遺物

<床・壁> 床面は砂礫層にのる暗褐色砂質粘土でしまりがよい。壁は土層断面西側で確認され、緩やかに立ち上がる。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 住居跡を認定した時点で炉跡とみられる焼土遺構を2基検出したが、西側の遺構は精査中に消失した。残った炉跡の規模は60×30cmの不整な楕円形を呈する。厚さは4cmと薄い。

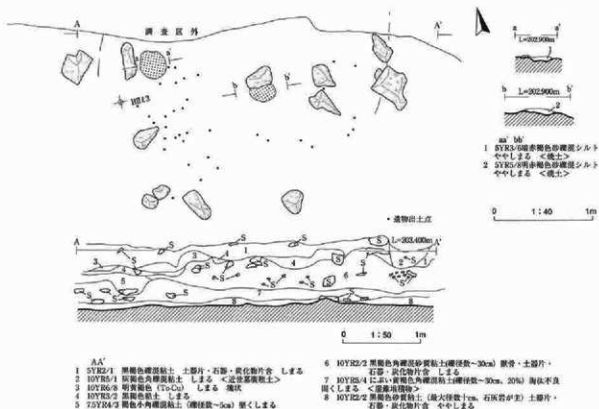
遺物 ほとんどの土器片に植物繊維が混入する。全体的に厚手の土器片が多く、脆い。捺糸文の土器片がやや多めに出土している。404は無節縄文(R)で口縁先端が細くなる。407は表表面に条痕が施され、頸部に横位横位連続刺突による盛り上がりが見られる。石器は石鏃と石匙の各1点の出土である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

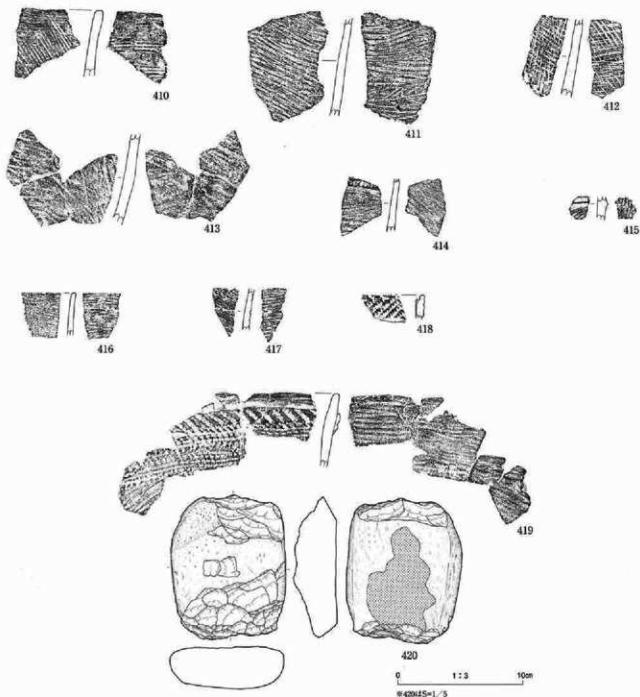
412号住居跡 (第78・79図、写真図版52・129)

<位置> BⅡk・Ⅱ3区に跨いで位置する。

<検出状況> To-Cuを挟んで上下に縄文晩期末～弥生時代初頭包含層と縄文前期前半包含層が検出された。精査が終了した時点で地山とみられた黄褐色崖堆積物を掘り下げたところ、ほぼ直下から黒褐色崖堆積物混粘土層を検出した。本層からは上層で出土した土器片とは一変し、縄文を伴わない条痕-条痕土器片が焼土遺構周辺から出土した。崖堆積物は焼土遺構周辺に厚く堆積し、南・東方向にやや急激にせん滅する。偶然の埋積か緩やかな窪みがあったために埋き止められたかは判断しにくい。これを根拠として住居跡と認定した。縄文早期末～前期初頭頃の住居跡(たとえば408号住居跡)では自然の緩やかな窪みを生かしたり、浅く掘り込む構築法を考えると、本住居跡のようにさらに古い遺構ではより浅い場合も考えられる。



第78図 412号住居跡



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	壁厚	備考	
410	02-05	412号住居跡	灰層	深鉢	口	条状文、先端階段・掬りめ	条痕	I	6mm	植物繊維混入	
411	02-09	412号住居跡	灰層	深鉢	胴	条状文、斜め	条痕	I	5	植物繊維混入炭化物付着	
412	02-03	412号住居跡	灰層	深鉢	胴	条状文、交差状	条痕	I	6	植物繊維混入、焼点	
413	02-04	412号住居跡	灰層	深鉢	胴下	条状文、斜め	条痕	I	8		
414	02-01	412号住居跡	灰層	深鉢	口~胴	横位階段起線文+条状文	条痕	I	4	植物繊維混入	
415	02-02	412号住居跡	灰層	深鉢	口~胴	横位階段起線文+条状文	条痕	I	5		
416	02-147	412号住居跡	灰層	深鉢	口	横位階段+条状文	条痕	I	4	焼点	
417	02-02	412号住居跡	灰層	深鉢	胴	横位階段文	条痕	I	4	焼点	
418	02-146	412号住居跡	灰層	深鉢	口	横位階段+横文、口唇：巨直文	横溝	I	-	植物繊維混入	
419	02-153	412号住居跡	灰層	深鉢	口	押入状条痕・裏面巨直付着帯	条痕	I	7	植物繊維混入	
420	772	磨石	分類	出土地点	層位	長cm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
420	772	磨石		412号住居跡	床面	182	152	97	2500	磨石	北上山地
■420L5=1/3											

第79図 412号住居跡出土遺物

<形態・規模> 北側半分が調査区外に延びるため不明であり、しかも明瞭な掘り込みがないため、2基の焼土・土層と遺物の分布、屋簷堆積物の末梢位置からプランの一部を推定した。東西方向に3.6m前後の円形状の遺構であると考えている。

<埋土> 炭堆積物の単層である。10～数10cm大の石灰岩亜角礫を混ぜる粘土であり、後背の石灰岩山に由来するものである。非常に締りがよい。

<床・壁> 床面はややしまりがよい。東西方向の土層断面では壁はゆるやかに立ち上がる。平面的には黒褐色土中の浅い掘り込みのためか、確認はできなかった。

<柱穴> 明瞭な柱穴は確認されていない。

<炉跡> 2基検出された。1号炉（西側）は円形状、2号炉（東側）は楕円形状で、規模はそれぞれ38×34cm、35×20cmである。ともに炉跡脇に座りの良い扁平な巨礫を伴っている。厚さは約5cmである。

遺物 薄手の土器片で植物繊維を含むものがある。縄文土器片は出土していない。内外面に条痕がみられ、微塵起線が施されるものがある（414・415）。細い沈線で幾何学的文様が推定されるもの（416・417）、隆帯が貼り付けられているもの（419）がある。石器は1点出土している。河床の扁平な重礫の両端に調整を加えた石器である。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期後葉頃と考えられる。

413号住居跡（第80図、写真図版53・130）

<位置> 8区の-A I s-r25区に跨いで位置する。

<検出状況> 2日に調査した7区の検出状況から、To-Cu層直下とその下位の炭堆積物下に検出面があることが予想された。トレンチを設定し2面を検出することにした。重機により約2mの表土を除去し、その後人力検出精査を行った。1面では遺物の出土もなく、遺構も検出できなかったため、さらに重機により80cm掘り下げた。暗褐色土から遺物が出土したことから8区全体を暗褐色土上面まで1度に掘り下げた。検出精査で遺物が集中する場所を確認し、精査が進むにつれて焼土遺構を確認できたことから住居跡と認定した。この時点で山体側北壁東西断面に下に湾曲する暗褐色土を確認し、粗掘で壁まで掘りすぎていることが判明した。したがって、床面は検出できたものの、壁はこの東西断面と南北土層断面に残った壁のみの検出となった。Wb2層が検出面である。

<形態・規模> 北側半分が調査区外に延びるため検出できた南側半分の床面の広がりから、平面形は不整な楕円形状を呈すると推測される。規模は東西断面から観察できる壁と検出した床面の広がりから2.6以上×3mである。

<埋土> 自然堆積層で、2層に区分できる。上層は後背の山体から流れ下った堆積物で、淘汰が悪く大～中サイズの角礫を含む褐色砂礫質粘土層である。下部層は暗褐色砂礫質粘土層で、土器片・石器片・炭化物片を含む。

<壁> 北壁東西断面で観察すると、東西壁の傾きが異なるようにみえるが、東壁は東側の自然の高まりを利用しつつ、西壁同様に約20cmの浅い掘り込みでつくられていると考えられる。両壁ともに緩く立ち上がる。

<床> Wb2層が床となる。よく締まっている。およそ平坦である。川原石（数10cmの重円礫）が地床跡周辺で検出される。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央付近で東西方向に長い不整形の地床が1基検出された。規模はそれぞれ最大1.02×0.42mである。厚さは5cmである。

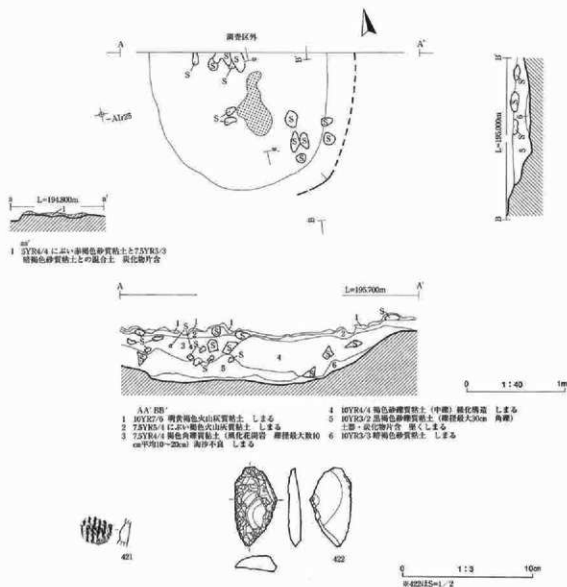
遺物 少量の遺物が戸の周辺から出土している。非常に脆く小片でしか観察できない。植物繊維を胎土に含み、厚手の土器片である。石器は不定形石器1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

414号住居跡 (第81図、写真図版54・130)

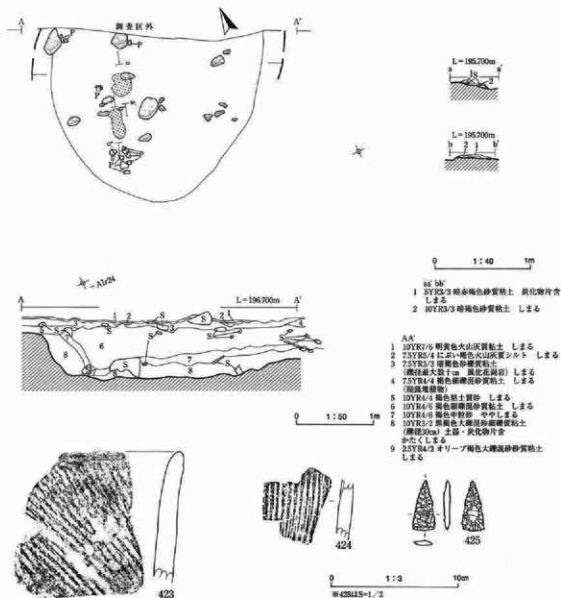
<位置> 8区413号住居跡の東側、-A Tr.s24区に位置する。

<検出状況> 第413号住居跡と同様な検出で、暗褐色土の検出精査中に遺物の出土および下部層で地床跡



第80図 413号住居跡・出土遺物

国取番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	図号	備考	
421	02-023	413号住居跡	粘土下層	埴輪	胴	無赤文	-	IV	-	内面破損 植物繊維混入	
国取番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
422	715	不定形	Ⅱ	413号住居跡	床面	41.0	21.3	7.3	10.0	頁岩	



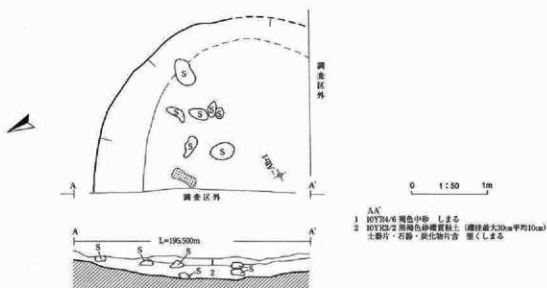
図面番号	絵図番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考	
423	02-07	414号住居跡	床	漆器	口縁	幾文文	ナデ	IV	13mm	植物繊維混入	
424	02-06	414号住居跡	床	漆器	胴	幾文文	ナデ	IV	3	植物繊維混入	
図面番号	絵図番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	口径mm	厚mm	重量g	材質	備考
425	063	石鏝	TA1	414号住居跡	埋土下部	27.0	12.0	4.0	0.78	頁岩	

第81図 414号住居跡・出土遺物

を検出し、住居跡と認定している。検出精査中に北壁東西断面で下に湾曲する暗褐色土を確認している。本住居跡と413号住居跡の境界に高さ約70cmの鳥状の高まりがあり、これを壁として両住居跡ともに利用している。M_{b2}層が検出面である。

<形態・規模> 北側半分が調査区外に延びるため検出できた南側半分の床面の広がりから、平面形は不整な楕円形状を呈すると推測される。規模は東西断面から観察できる壁と検出した床面の広がりから2.15以上×3.2mである。

<埋土> 自然堆積層で、2層に大別できる。上位層は後背の山体から流れ下った堆積物で、淘汰が悪く大～巨礫サイズの角礫を含む褐色砂礫質粘土層である。下部層は黒褐色砂細礫質粘土層で、土器片・石器片・



第82図 415号住居跡

炭化物片を含む。V層に相当する。

<壁> 413号住居跡を画する自然の高まりを西壁に利用し、やや急に立ち上がる。東壁は緩やかに立ち上がる。413号住居跡と対称的な構造となっている。

<床> Vb層が床となる。粗掘・検出で壁を検出できなかったために、東西断面の壁の立ち上がりから床面範囲を推定している。およそ平坦で、よく締まっている。川原石（数10cmの垂円礫）が地床炉周辺で検出される。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央からやや西寄りで地床炉を2基検出している。ほぼ南北方向に並ぶ。2基とも不整形で、規模は南側のものから42×18cm、36×25cmである。厚さはともに3cmである。周辺で土器片がまとまって出土している。

遺物 粗土下部および炉の周辺から遺物が出土している。植物繊維を粘土に含む。すべて燃永文の土器片で、厚い。石炭が1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

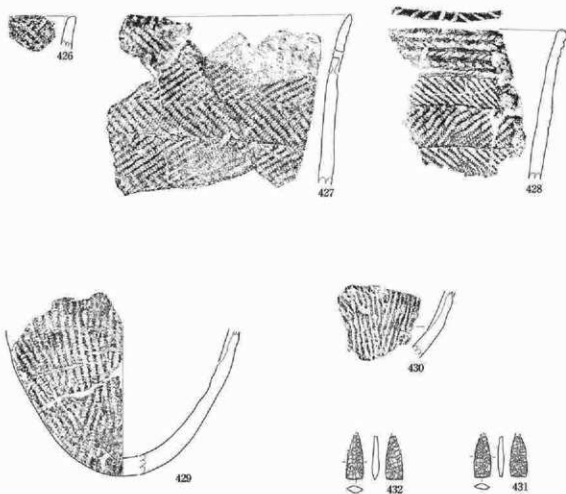
415号住居跡（第82・83図、写真図版55・130）

<位置> 8区の-A II r・s1区に跨いで位置する。

<検出状況> IVc層崖線堆積物下部（褐色中粒砂）下位V層暗褐色砂礫質粘土層を除去中、多量の土器片が出土した。V層は10cmと薄く、遺物を探り上げさらに精査を続けたところ締りの良い床面を、また西側調査区外を画する土壁付近で弱い焼成の焼土遺構を検出したため、住居跡と認定している。Vc層が検出面である。

<形態・規模> 西側と南側の半分以上が調査区外に延びるため検出した部分から推定すると、平面形は楕円形状である。規模は検出部分で2.80以上×2.35m以上である。

<粗土> 自然堆積層で、2層に区分できる。上層は後背の山体から流れ下った堆積物の末端部分で、細粒



0 1:3 10cm
※431・432は1/2

図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考	
426	02-122	415号住居跡	原土上部	漆鉢	口縁	赤結瓦形状織文	ナデ	Ⅱ	6mm	漆物編織混入	
427	02-131	415号住居跡	床	漆鉢	口縁	赤結瓦形状織文、光線に縦位斜み	ナデ	Ⅱ	9	漆物編織混入	
428	02-127	415号住居跡	床	漆鉢	口縁	矢羽状斜位直文、赤結瓦形状織文	ナデ	Ⅱ	10	漆物編織混入	
429	02-128	415号住居跡	床	漆鉢	底面	縦織文(縦)、瓦底	ナデ	Ⅱ	13	漆物編織混入	
430	02-125	415号住居跡	原土上部	漆鉢	胴下部	無文	ナデ	Ⅱ	9	漆物編織混入	
図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚	重量	材質	備考
431	796	石鏃	IA	415号住居跡	原土下部	131	13.0	5.0	1.6	頁岩	先端部欠損・左側部欠損
432	795	石鏃	IA	415号住居跡	原土下部	131	14	6	2.42	頁岩	先端部欠損

第83図 415号住居跡出土遺物

の堆積物(中粒砂)である。下部層は黒褐色砂礫質粘土層(V層)で、土器片・石器片・炭化物片を含む。

<壁> Ⅱc層が壁となる。きわめて緩やかに立ち上がり、床面と壁との境界は明確ではない。検出面から床面までの深さは最大20cmである。

<床> Ⅱc層が床面となる。比較的平坦で固く締まっている。やや掘り過ぎたためか地山の礫上部が露出する部分がある。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> 調査区外を跨する西壁際で1基検出された。平面形は中央部分が内湾した隅丸方形で、規模は34×15cmである。

遺物 床全面に出土している。土器片の胎土には植物繊維を含む。427は先端が先細り、軽外反する。先端に棒状工具による縦位の刻みがある。428は先端が軽外反する。熱りの異なる原体を交互に圧痕している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

417号住居跡（第84・85図、写真図版56・130・131）

<位置> 3区のB I k・17～8区に跨って位置する。本住居跡の東側には408号住居跡が、西側には409号住居跡が隣接する。

<検出状況> 本住居跡の両側に隣接する住居跡の精査に伴い地山（Ⅷb層）が検出されたが、本住居跡部分はⅣb層下部褐色粘土層が南北方向に長い楕円形状に残った。遺構の可能性も考えながら精査をすすめ、浅く窪む底面から土器片が出土するとともに地床炉と考えられる焼土遺構を検出したことから住居跡と認定した。Ⅷb2層が検出面である。

<重複関係> 北側で接する405号住居跡と重複するが、その新旧は埋土からは判断できなかった。埋土の様子からは大きな時差はないと考えられる。

<形態・規模> 南側のおよそ1/3が調査区外に延びる。検出された部分から平面形は楕円形状と推定される。規模は3.1以上×4mである。

<埋土> 自然非積層で、2層に大別できる。上層はⅣb層（褐色粘土と砂礫互層）下部褐色粘土層で、周辺住居跡と同じである。下部は暗褐色土で、地山（Ⅷb2）に接する部分は砂質土に漸移する。下部層からは土器片が出土する。

<壁> Ⅷb2層が壁となる。緩やかに立ち上がる。東側は比較的急に立ち上がる。他住居跡に比べて壁と床の境は識別しやすい。検出面から床面までの深さは最大25cmである。

<床> Ⅷb2層が床面となる。比較的平坦で固く締まる。一部掘りすぎたためX層（腰層）が露出した。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央からやや北東寄りで地床炉を1基検出している。平面形は中央部分がやや窪む不整な楕円形状で、規模は58×38cmである。厚さは約6cmである。炉の東側でまともに土器が出土している。

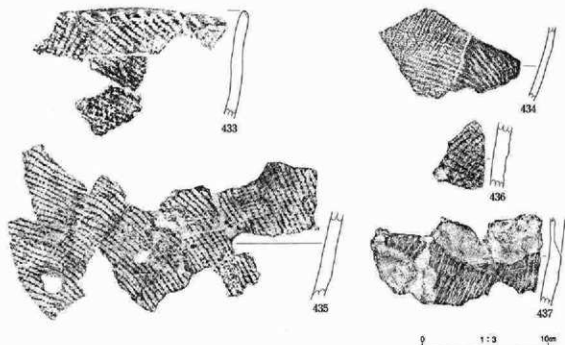
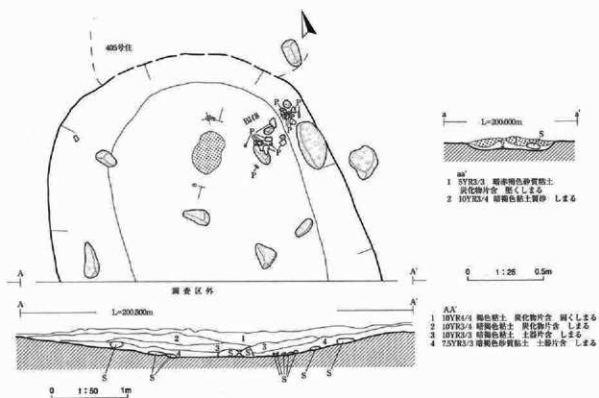
遺物 埋土下部から床面から出土している。土器片の胎土に植物繊維が混入する。433は先端が軽外反する。口唇には棒状工具による斜め方向の刻みが増えられる。434は胴下部の施文方向を変えているため、羽状に見える。435は炉東側で出土した胴下部の土器片である。左下側に補修孔がある。437の破損部分から胎土に含まれる植物繊維がはっきり認められる。石器は石鏃3点、石匙2点、不定形石斧1点、打製石斧1点が出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

第418号住居跡（第86図、写真図版57・131）

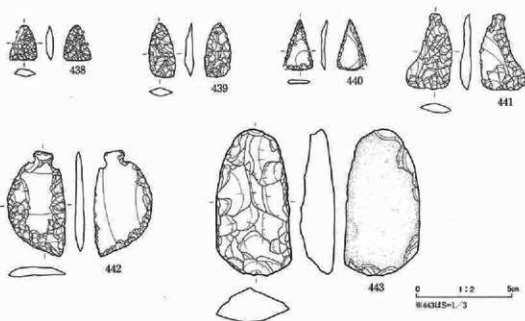
<位置> 3区のB I j・k3～4区に跨って位置する。第410住居跡が南に隣接する。

<検出状況> Ⅷb層下部褐色粘土で遺構を検出中に非常に淡い暗赤褐色な部分を検出した。住居跡の可能性も視野に入れながら掘り下げたところ明瞭な焼土遺構が検出され、その南側ではまもなく土器が出土したため住居跡と認定した。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考	
433	02-104	417号包蔵跡	Ⅱ	漆鉢	口縁	点、口砂・刻み		ナテ	V	5mm	植物繊維混入
434	02-104	417号包蔵跡	Ⅱ	漆鉢	胴下部	点、縦刻線		ナテ	V	5	植物繊維混入
435	02-100	417号包蔵跡	Ⅱ	漆鉢	胴下部	点、横刻線		ナテ	V	10	植物繊維混入
436	02-105	417号包蔵跡	Ⅱ	漆鉢	胴	無	赤結定母状陶文	ナテ	V	10	植物繊維混入
437	02-100	417号包蔵跡	Ⅱ	漆鉢	胴下部	無	赤陶文	ナテ	V	10	植物繊維混入

第84図 417号住居跡・出土遺物(1)



図面番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
438	704	石皿	IA1	417号住居跡	埋土下部	18.5	(14.5)	4.0	0.96	頁岩	左側縁欠損
439	705	石皿	IA1	417号住居跡	埋土下部	29.0	14.0	5.0	1.83	頁岩	
440	706	石皿	IB1	417号住居跡	埋土下部	27.0	(35.0)	3.0	0.93	頁岩	左側縁欠損
441	713	石皿	IB	417号住居跡	埋土下部	40.0	23.5	5.5	4.07	頁岩	
442	714	石皿	IA	417号住居跡	埋土下部	96.0	30.5	3.0	16.1	頁岩	
443	712	打製石斧	I	417号住居跡	埋土下部	116.0	59.0	27.5	223.75	砂岩	裏面が自然面

第85図 417号住居跡出土遺物 (2)

※ (14次調査)

<重複関係> 410号住居跡と南辺が一部重複するが、その新旧は判断できなかった。2つの住居跡の埋土に違いが認められないため大きな時期差はないと考えられる。

<形態・規模> 北側のおよそ1/2は法面保護のために埋め戻した調査区に延びる。検出された部分から推定すると平面形は楕円形状と推定される。規模は1.85以上×3.3mである。

<埋土> 自然堆積層で、2層に区分できる。上層はIVb層下部褐色粘土層で堅く締まり、下部層は黒褐色土で遺物や最大約30cmの扁平な重円礫が出土する。地山(VIb層)とは識別しづらい。

<壁> VIb層に相当する黒褐色土が壁となる。壁の立ち上がりは東西断面の東壁付近で褐色粘土層がゆるく上がることから確認された。検出面から床面までの深さは最大25cmである。

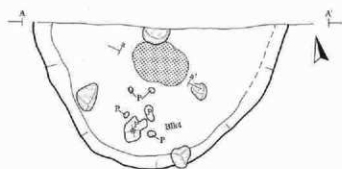
<床> VIb層が床面となる。平坦で堅く締まる。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央付近で地床炉が1基検出された。不整な楕円形状を呈し、規模は78×58cmである。台風通過に伴う水没・クリーニングで薄くなってしまった。

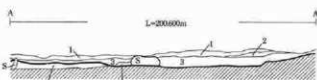
遺物 主に埋土下部で出土した。地床炉南側で燃糸文の土器片がまとまって、遺構全体では斜縄文小片が出土している。胎土には植物繊維が混入する。444は先端で軽く外反する。445は444と同一個体とみられ、その傾きから丸底と考えられる。石器は石鏃2点、石錐1点、石匙1点、不定形石器1点が出土した。448は先端に磨耗痕と長軸と直交する回転痕が何本か観察される。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



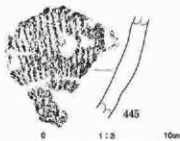
- 1 5YR3/3 褐色細砂質粘土 L₁まる
 2 7.5YR4/3 暗褐色小砂質粘土 (厚15-10cm 2%) L₁まる
 3 10YR3/2 黒褐色小砂質粘土 L₂まる

0 1:40 1m



- AA
 1 10Y4/4 褐色砂質粘土 固くしまる
 2 7.5YR4/3 にぶい褐色砂質粘土 固くしまる
 3 10YR3/2 暗褐色砂質粘土 土器・石器・炭化物片含 しまる
 4 10Y2/2 黒褐色砂質粘土 しまる

0 1:50 1m



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文				内面調査		分類	器厚	備考
						熱赤文	熱赤文	熱赤文	熱赤文	ナア	V			
444	02-110	418号住居跡	埋土下部	漆器	口縁	熱赤文					ナア	V	Sh	植物繊維混入
445	02-406	418号住居跡	埋土下部	漆器	腹下部	熱赤文					ナア	V	II	植物繊維混入
図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考			
446	651	石版	EA1	418号住居跡	埋土	215	18.0	4.0	1.34	頁岩				
447	740	石版	EA1	418号住居跡	埋土下部	250.0	17.0	4.0	1.44	頁岩				右側基部欠損
448	739	石版		418号住居跡	埋土下部	280	6.0	6.0	1.1	頁岩				基部先端に埋藏管状痕有
449	602	不定形	IV	418号住居跡	埋土	22.0	13.0	3.5	0.06	頁岩				

第86図 418号住居跡・出土遺物

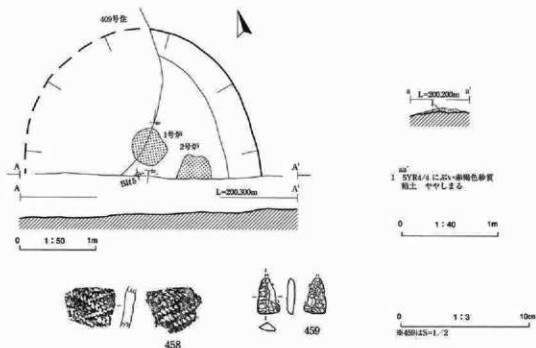
※ (1)42号頁

420号住居跡 (第87図、写真図版58・131)

<位置> 3区のB1f 9区に位置する。408号住居跡が南側に隣接する。

<検出状況> IVb層下部褐色粘土層下のIVb層オリーブ褐色砂質粘土層を検出中に暗褐色砂質粘土の円形状のプランを確認した。プラン検出以前から遺物出土量が比較的多かった。精査がすすむにつれ、プラン中央付近で焼土遺構を、北側で2つの楕円形状土坑を検出し、住居跡と認定した。

<形態・規模> 平面形は上下が潰れた卵形を呈する。規模は3.8×3.45mである。



調査番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外寸(mm)			内径調整	分類	器厚	備考
428	02-106	422号住居跡	Ⅲ	磁器	口縁	11.7			11.7	V	5mm	植物繊維混入
調査番号	発掘番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考	
459	749	石器		422号住居跡	Ⅲ	19.0	11.5	4.5	0.51	凝灰岩	右側無縁部欠損	

第88図 422号住居跡・出土遺物

<埋土> 自然堆積層で、暗褐色砂質粘土層に覆われる。下部ほど炭化物片の出土量が多くなる。

<壁> Ⅲb層が壁となる。きわめて緩やかに立ち上がり、床面と壁との境界は明確ではない。検出面から床面までの深さは、最大6cmである。

<床> Ⅲb層が床となる。比較的平坦で、堅くしまる。

<柱穴> 検出されていない。

遺物 斜縄文と燃糸文の土器片が出土している。土器片の胎土には植物繊維を含む。450・454は軽く内湾しながら立ち上がる。450～454のすべては先端で先細る。450・451・453・454は口唇に棒状工具による刻みがある。石器は石鏃3点が出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

422号住居跡 (第88図、写真図版59・132)

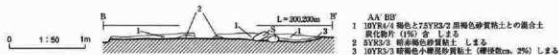
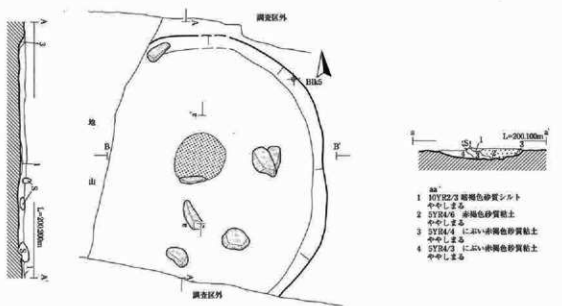
<位置> 3区のB115～6区に跨って位置する。

<検出状況> 409号住居跡を精査中に東壁で焼土遺構を検出した。409号住居跡に伴う遺構とは考えにくく、さらに東側に精査範囲を広げた。東側でさらにもう1基の焼土遺構を検出し、壁の立ち上がりも確認できたことから住居跡と認定した。

<重複関係> 409号住居跡に西側半分を切られている。

<形態・規模> 南側半分は調査区外に延び、西側1/4が第409号住居跡に切られている。推定される平面形は楕円形状で、規模は3.1×2m以上である。

<埋土> 409号住居跡と同様な埋土状況である。主に自然堆積層と考えられる。重複する部分は人工的な部分もあると考えられるが、識別できない。埋土下部層は暗褐色砂質粘土よりなる。



調査番号	登録番号	出土地点	層位	器種	高さ	外面文様		内面調査		備考		
						形状	方位	形状	方位			
460	02-108	423号住居跡	床	小型破片	口縁	なし (施文方向が不明)		なし	V	6cm	植物繊維混入	
461	727	石皿	B/A1	423号住居跡	床	31(6)	10(0)	3.5	0.89	頁田	石質	
462	660	石皿	I/A2	423号住居跡	床	39.0	12.0	6.5	1.79	頁田	石質	先端・基部両側欠損

第89図 423号住居跡・出土遺物

※ () は大径長

<壁> VIIb2層が壁となる。東壁で観察される立ち上がりは緩やかである。検出面から床面までの深さは最大12cmである。

<床> VIIb2層が床面となる。X層の糠層が頭を出し、やや凹凸がみられる。固く締まっている。

<柱穴> 検出されていない。数十cmの楕円形状溝りを4ヶ所で検出したが、非常に浅く柱穴とは考えにくい。

<炉跡> プラン中央付近で1号炉を、その東側で2号炉を検出した。1号炉は不整な楕円形状で、規模は48×42cmである。2号炉は南側半分が調査区外にのびる。平面形は不整な楕円形で、規模は45×30cm以上である。ともに薄く、1号炉では約5cmである。

遺物 少量の遺物が出土している。458は薄く、焼成が良い。施文方向の異なる縄文が「く」字状に交差す

る。石蔵が1点出土した。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

423号住居跡（第89図、写真図版60・132）

<位置> 3区西側のB I jk4～5区に跨って位置する。西側に410・418号住居跡、東側に409号住居跡が隣接する。

<検出状況> IVb層褐色粘土を掘り下げV層との層界付近で滲りだような皿状の焼土と直立する扁平な椀を検出した。住居跡の可能性も考え精査をすすめ、扁平な椀付近に広がる円形状の焼土遺構を検出した。東西土層断面で暗褐色土にのる褐色土と黒褐色土の混合土が東側で緩く立ち上がることを確認できたことにより住居跡と認定した。プラン全体で埋土上部層と下部層の識別は容易ではなく、焼土遺構と椀の検出状況から床面を、三方向の土層断面から壁を推定している（西側は掘りすぎ）。

<形態・規模> 南側の一部が調査区外に延び、西側1/3は掘りすぎている。推定される平面形は円形状で、規模は3.25以上×2.9m以上である。

<埋土> 2層に区分される。とくに上部層はその土質の様子から人工的な埋め戻しの可能性もあるが、断定はできない。

<壁> VIIb層が壁となる。全般的に緩く立ち上がる。検出面から床面までの深さは最大10cmである。

<床> VIIb層が床面となる。床面は平坦で締りがよい。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央付近で不整な円形の地床が検出している。規模は70×65cmで、厚さは12cmである。検出時点でやや削り過ぎているためそれ以上の厚さがあると考えられる。か跡の周辺からかきに使われたと考えられる数10cmの扁平な重円礫が出土した。顕著な被熱は観察できなかった。

遺物 地床の周辺から少量の遺物が出土している。460は小型深鉢の胴下部で尖底をもつと推定される。石器は石蔵2点、不定形石器1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

425号住居跡（第90図、写真図版61・132）

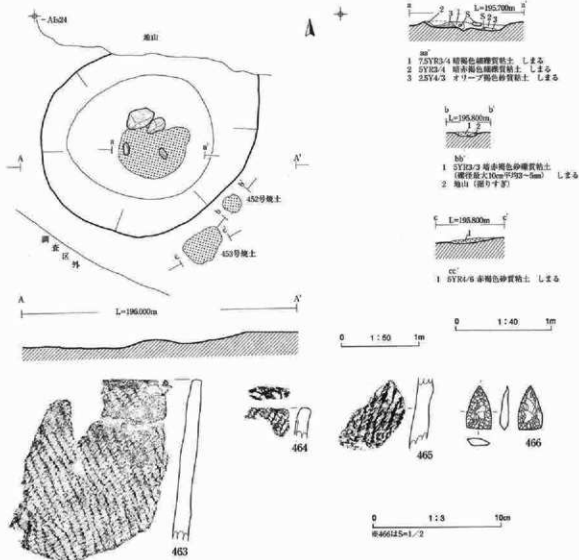
<位置> 8区南側の-A I s24区に位置する。南東側に第452・453号焼土遺構が隣接する。

<検出状況> 8区内の上捨て場としていた部分を重機により剥ぎ取り、人力で検出を始めたところ、焼土遺構を3基検出した。この中の1基はさらに15cm掘り下げると規模が大きくなり、その面で周辺を検出し直したところ浅い皿状となった。このことより住居跡と認定した。他の2基の焼土遺構はプランの外側で検出され、本住居跡の付属施設とも考えられたが、断定できる証拠がないためそれぞれ単独の焼土遺構としている。かの規模に対してプランが小さいと思われたが、焼土遺構の位置・レベルからは妥当なプランと考えられる。

<形態・規模> 北側の一部が粗掘段階で掘りすぎたために失われている。推定される平面形は北東方向に長軸をもつ卵形で、規模は2.8以上×2.4mである。

<埋土> 住居跡を想定しなかったために上層断面を設定しなかったが、VIc層暗褐色砂礫質粘土単層で覆われる。自然堆積層である。

<壁> VIc層褐色砂礫質粘土（崖線堆積物本端）が壁となる。壁から床にかけて明瞭な境界はなく、浅い皿状を呈する。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外国文種	内径測定	分厚	器厚	備考	
463	03-220	425号住居跡	現土下層	竪穴	口縁	SL		ナテ	5	10cm 植物繊維混入	
464	03-222	425号住居跡	現土下層	竪穴	口縁	LR		ナテ	7	植物繊維混入	
465	03-225	425号住居跡	現土下層	竪穴	側	洗赤文		ナテ	5	8 植物繊維混入	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
466	742	石鏃	1A1	425号住居跡	床	25.0	14.0	5.0	1.64	頁岩	

第90図 425号住居跡・出土遺物

<床> VIIc層が床面となる。比較的平坦で固く締まる。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン中央に1基検出されている。平面形は洋ナシ状を呈する。規模は100×75cmである。炉の北側に数10cmの角礫が検出された。

遺物 炉の周辺から遺物が出土している。土器片の胎土に植物繊維が混入する。土器片は全体的にもろくなっている。464は口唇に原体末端の圧痕文が施されている。石器は石鏃1点と不定形石器1点が出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

2. 竪穴状遺構

28号竪穴状遺構 (第91図、写真図版62)

<位置> 1区のB I n・o23区に跨って位置する。

<検出状況> 21号住居跡の南壁精査中に暗褐色土のプランを検出した。断面精査により大型の土坑とも考えられたが、北壁上に焼土を検出したことより竪穴状遺構とした。

<重複関係> 21号住居跡の南壁が埋土の一部となる。

<形態・規模> 東側焼土遺構付近がやや膨らんだ卵形を呈する。規模は3.29×3.14mである。

<埋土> 土質と堆積状況から自然堆積層と考えられる。暗褐色砂質シルトが主体である。

<壁> VIIb層が壁となる。壁から床にかけて明瞭な境界はなく、浅い皿状を呈する。検出面から床面までの最大深さは20cmである。

<床> やや凹凸があり、全体的に南側に傾斜する。

<柱穴> 検出されていない。

<炉跡> プラン北東隅で検出されるが、非常に薄く焼成も悪い。流れ込みの可能性もある。

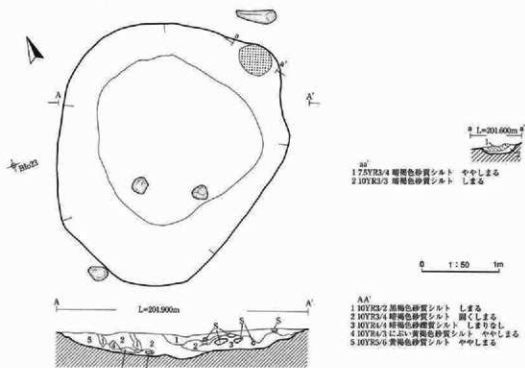
遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

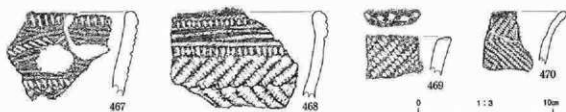
第29号竪穴状遺構 (第29・30・92図、写真図版63・132)

<位置> 1区中央西寄りのB I k・l20区に跨って位置する。

<検出状況> pp35 (当初20号住居跡の柱穴状土坑とした)の精査中に底部付近で黒褐色土を検出した。その検出層位から遺物が出土することから土坑として精査をすすめた。大きくほぼ垂直に立ち上がる壁と壁際に廻る柱穴状小土坑などから竪穴状遺構とした。



第91図 28号竪穴状遺構



調査番号	発見番号	出土地点	層位	器種	部状	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考
467	00-511	29号竪穴状遺構	下部	漆器	口縁	短沈線文 幾何文様				漆器繊維混入
468	00-514	29号竪穴状遺構	上部	漆器	口縁	短沈線文 幾何文様				漆器繊維混入
469	00-502	29号竪穴状遺構	下部	漆器	口縁	1層:定体木線短沈文、外面:1及10多				漆器繊維混入
470	00-403	29号竪穴状遺構	下部	漆器	口縁	赤結東湖縄文(10多)、口縁先端幾何文				漆器繊維混入

第92図 29号竪穴状遺構出土遺物

<重複関係> 30号住居跡の東壁に西側が切られ、37号竪穴状遺構南壁を切る。

<形態・規模> 不整な隅丸正方形を呈し、規模は3.6×3.52mである。

<埋土> 土質と堆積状況から自然堆積層と考えられる。砂礫を多く含む暗褐色土が主体である。非常に堅く締まる。埋土下位層は壁の崩落と考えられる礫層に覆われる。

<壁> Ⅱb層が壁となる。北壁から東壁にかけては大きくほぼ垂直に立ちあがる。壁高は北壁45.6cm、東壁52cmである。南壁はなだらかな掘り込みがみられる。

<床> X層が床面となる。締りが良いが凹凸がある。

<柱穴> 6基の柱穴状土坑を検出した。pp34と34は床面の中央付近に位置し、10cmと浅い。他の4基は径15~20cmで壁際を巡る。壁柱穴を構成する可能性がある。

<その他> 東側に土坑p1が検出された。平面形は隅丸台形で、規模は1.68×0.86cmである。断面形は台形状を呈する。埋土には礫を含まず、炭化物が混入する。本体遺構埋土とは異なっている。

遺物 467と468は側面圧痕文と短沈線文で文様帯を構成するものである。467はやや内湾気味に立ち上がる。469は先端付近で軽く外反する。467~469は同一時期のもので、出土層位から流れ込みの可能性もある。470は焼成が良く、薄手で先端で強屈曲する。他の3土器片とは異質で、本遺構に伴うものと考えられる。石器は出土していない。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

32号竪穴状遺構 (第93図、写真図版64)

<位置> 3区西側のBii・j7区に跨って位置する。

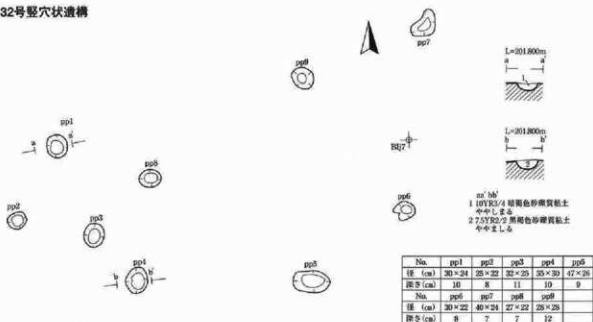
<検出状況> 3区内での試掘調査からⅡb層では遺構・遺物が検出されなかったことより3区西側全面(Bii・j4~9区)をⅡb層まで機械掘削で除去し、Ⅲ~Ⅳbから人力検出を始めた。Ⅲ層(To-Cu)がところどころ検出されたものの全体的にはⅣb層褐色砂細礫質粘土で検出を行い、Ⅳb層中に暗褐色土~黒褐色土を埋土とする径30cm前後の柱穴状土坑が検出された。遺物は出土しないものの、半円形状に柱穴状土坑が巡ることより竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 柱穴状土坑の配置から推定される平面形は円形状で、規模は約5mである。

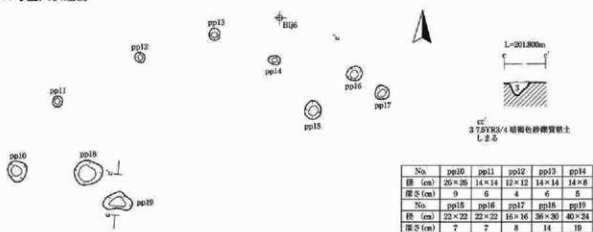
<柱穴> 平面形は円形~楕円形状を呈し、規模は30cm前後、平均の深さは9cmである。主に暗褐色土が埋土である。

時期 遺物が出土しないことより、検出層位と他調査区の検出状況から縄文時代後期~晩期頃と考えられる。

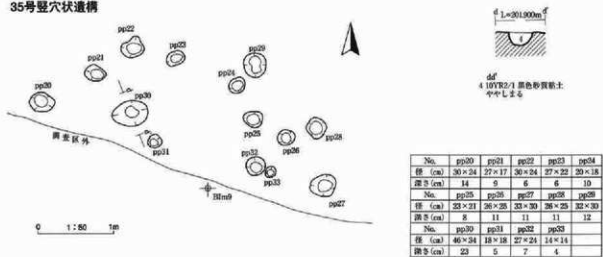
32号竖穴状遺構



33号竖穴状遺構



35号竖穴状遺構



第93図 32・33・35号竖穴状遺構

33号竪穴状遺構（第93図、写真図版64）

＜位置＞ 3区西側のB1j6～7区に跨って位置する。

＜検出状況＞ 32号竪穴状遺構と同様な検出状況で、32号竪穴状遺構よりも個々の柱穴状土坑規模、配列から想定されるプラン規模ともに小さい。遺物は出土しない。

＜形態・規模＞ 柱穴状土坑の配置から推定される平面形は円形状で、規模は約4.2mである。

＜柱穴＞ 平面形は円形～楕円形状を呈し、規模は平均20cm、平均の深さは8.5cmである。主に暗褐色土が埋土である。

時期 遺物が出土しないことより、検出層位と他調査区の検出状況から縄文時代後期～晩期頃と考えられる。

35号竪穴状遺構（第93図、写真図版65）

＜位置＞ 3区中央南側のB1i8～9区に跨って位置する。

＜検出状況＞ 32号竪穴状遺構と同様な検出状況である。配列に規則性が見られるので遺構として扱う。32号竪穴状遺構よりも柱穴状土坑の検出数が多い。配列から想定されるプラン規模は最低2通りある。遺物は出土しない。

＜形態・規模＞ 柱穴状土坑の配置から推定される平面形は円形状で、規模は約4mと3.2mである。

＜柱穴＞ 15基検出された。平面形は円形～楕円形状を呈し、大きい方のプランを構成する柱穴状土坑規模は平均29cm・深さ11cm、小さい方の規模は平均24cm・深さ9cmである。調査区外を画する土層断面にかかる柱穴状土坑の断面からIIb層から掘り込まれていることが分かる。埋土は黒褐色砂礫質粘土である。

時期 遺物が出土しないことより、検出層位と検出状況から縄文時代後期～晩期頃と考えられる。

36号竪穴状遺構（第94～95図、写真図版66・132）

＜位置＞ 1区南側縁のB1o24～25区に跨って位置する。

＜検出状況＞ 調査区外とを分ける東西断面で焼土遺構を検出した。プランははっきりしないが、浅く窪む地形から竪穴状遺構とした。周辺では現代の掘削（ゴミ穴）や墓塚などが確認されるため、全体的に保存状態が悪い。住居跡の認定条件を備えているが、検出状況を考えて竪穴状遺構とした。

＜形態・規模＞ 南側半分が調査区外に延び、東側は掘削を受けている。推定される平面形は円形状で、規模は3.6以上×2.75m以上である。

＜埋土＞ 断面中央付近のみに本来の埋土を残すのみで、全体的に掘削を受けている。暗褐色土が主体である。

＜壁＞ 北壁を検出した。緩やかに立ち上がり、壁高は約5cmである。

＜床面＞ VIIb層の砂質粘土が床面であるが、掘削等のためかX層の礫が露出する部分がある。

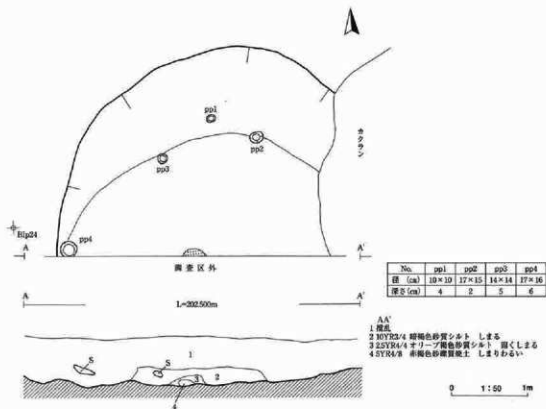
＜柱穴＞ 小形の壁柱穴状土坑を1基検出している。いずれも北側壁に連る。

＜加跡＞ 調査区外とを区画する東西断面中央付近で焼土遺構の北側半分を検出した。平面形は円形状と推定される。規模は30cm以上である。

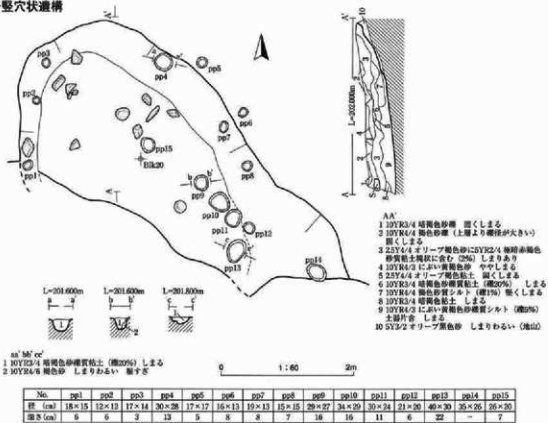
遺物 埋土上部から少量遺物が出土している。遺構の検出状況を考えて本遺構に属すると断定はできない。

時期 出土遺物を参考にしながら、検出層位と遺構の構造から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

36号壑穴状遺構



37号壑穴状遺構



第94図 36・37号壑穴状遺構



図面番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	数量	備考
471	00-000	30号竪穴状遺構	埋土上部	漆器	口縁	段段彫線文	漆灰文	漆	1	植物繊維混入
472	00-091	30号竪穴状遺構	埋土上部	漆器	胴部	貝殻線彫線文	漆灰文	ナデ	6	
473	00-105	37号竪穴状遺構	床面	漆器	胴部	貝殻押し引き文	ナデ	7		

第95図 36・37号竪穴状遺構出土遺物

37号竪穴状遺構（第94・95図、写真図版67・132）

<位置> 1区西側の住居跡密集検出域のB I k19~20区に跨いで位置する。

<検出状況> 20号住居跡のプランを確認するための精査中、20号住居跡の埋土に類似する暗褐色土の埋土を確認した。同住居跡の同埋土からは20号住居跡から出土する土器片より古いと考えられるものが出土し、かつ埋土を掘り上げたプランが20号住居跡のプランの一部にするには重くなった。このため20号住居跡とは別に竪穴状遺構と考えた。

<重複関係> 南側を20号住居跡・29号竪穴状遺構に切られている。

<形態・規模> 新期住居跡に南側が切られているため全形は不明であるが、検出された部分から不整な楕円形状と推測される。北西-南東方向に長軸を持ち、規模は5.2以上×3.25m以上である。

<埋土> 自然堆積層と考えられる。埋土は9層に細部され、後背の状況から供給された砂礫と粘土互層の堆積物と考えられる。

<壁> Wb層が壁となる。北から東壁が検出され、非常に緩やかに立ち上がる。

<床> Wb層が床となる。一部X層の礫が点在する。やや凹凸がみられる。

<柱穴> 壁沿いに15基検出している。径12~40cmで、10cm以下の深さを持つものが多い。

遺物 床面から少量の土器片が出土している。石器は出土していない。

時期 出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えられる。

301号竪穴状遺構（第96図、写真図版68・132）

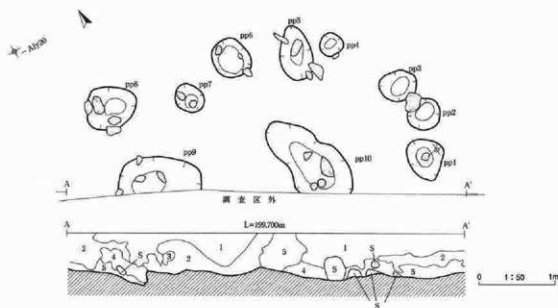
<位置> 7区旧自然堤防上の-A I y20区に位置する。

<検出状況> 1m数10cmの黒褐色土を機械で除去し下位暗褐色土層を検出中（1面検出）に、植物繊維を混入させる熱赤文土器片が数点出土した。プランは検出されず、他調査区の調査結果から1面は縄文時代晩期末~弥生時代初の生活面と考えられたので、流れ込みなどによるもののみとした。試掘からは地山まで数mと予想されていたので、さらに機械掘を実施したところ、数10cm下位で暗褐色粘土層に径数10cmの巨礫を含む層を検出した。地山の礫層に近いものと判断し、人力で検出を行った。黒褐色土を埋土とし半円形状に巡る柱穴群を検出した。さらに柱穴群内部で打製石斧や石鏃が出土し、竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 円形状を呈するとみられるが、南側半分が調査区外に延びるため全形は不明である。規模は長軸方向で約4mである。

<埋土> 調査区境土層壁で観察し、5層に細分した。不安定な堆積状況を示し、人為的攪乱原因の可能性は薄いため、自然現象(洪水等)による攪乱を受けている可能性がある。概ね黒褐色土と褐色土に大別される。

<床・壁> X層が床面で砂~細礫を基質とする礫層であることから、本遺構の床面付近は凹凸が見られるので不連続ではあるが、褐色粘土層を貼床としていた可能性がある。壁は土層帯東西端で緩く立ち上がるよ

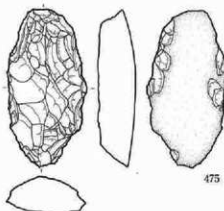


- AA'
- 1 10YR2/1 褐色砂礫質シルト (粒径平均約15mm最大値5cm、厚角礫) ややしまる
 - 2 7.5YR2/1 褐色砂礫質シルト (粒径10cm、厚角礫、1%) ややしまる
 - 3 10YR2/2 黄褐色砂質粘土、ややしまる
 - 4 10YR2/2 黄褐色砂質シルト (粒径10cm、厚角礫、1%) ややしまる
 - 5 7.5YR4/2 褐色砂質砂質粘土 (粒径平均約15mm最大値5cm、厚角礫、厚角礫) ややしまる

Nm	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5
径 (cm)	55×47	44×38	50×40	32×20	72×43
高さ (cm)	11	5	18	8	11
Nm	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10
径 (cm)	54×50	38×35	60×56	108×90	140×75
高さ (cm)	5	10	26	24	20



0 1:2 5cm
474a,b = 1/3



図録番号	登録番号	器物	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
474	3039	石鏃	TB1	301号竪穴状遺構	床面	119.0	12.3	3.8	1.01	頁岩	先端欠損
475	3070	打製石斧	T	301号竪穴状遺構	床面	124.5	62.5	25.5	280.12	凝灰岩	断面自然面

※ ()は欠損

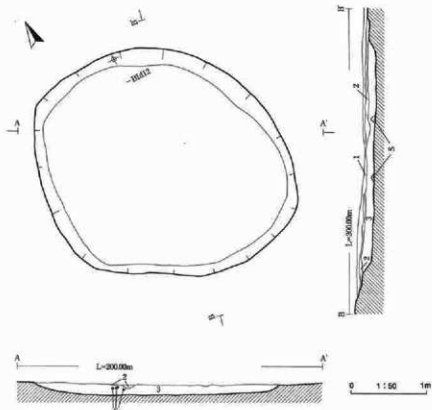
第96図 301号竪穴状遺構・出土遺物

うに見えるが、断定はできない。 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

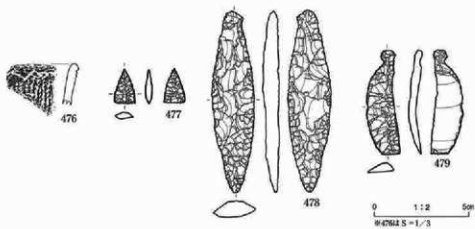
<柱穴> 10基検出した。開口部の大きいものを除いて、長軸は32~72cm・平均51cm、深さは5~26cm・平均12cmである。しまりのわるい砂礫層に構築されているため、崩落により原形を留めていないと推測される。

遺物 石鏃1点と打製石斧1点が出土している。打製石斧は片面に自然面を残すものである。

時期 片面に自然面を残す打製石斧は、本遺跡の縄文時代早期末葉頃の住居跡から出土する例が多いことから、本竪穴状遺構も同様の時期に構築された可能性がある。



AA' BF
 1 10YR2/4 オリーブ褐色粘土、黄褐色小土塊多し ややしまる
 2 10YR7/4 黄土赤土山吹灰(カキ) 暗褐色小土塊が多少 ややしまる
 3 10YR3/3 暗褐色腐質粘土 (層厚20cm以下) ややしまる



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様		内面周数	分割	器型	番号
						形状	口縁				
476	01-324	304号竪穴状遺構	灰土	深鉢	口縁			ナゲ	5		動物繊維混入
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
477	100	石葉	1A1	304号柱状遺構	灰土	18.0	11.0	4.0	0.82	頁岩	
478	802B	石葉		304号柱状遺構	上部	121.0	20.0	12.0	34.06	頁岩	
479	802C	石葉	1B	304号柱状遺構	上部	68.5	21.5	9.0	3.85	頁岩	

第97図 304号竪穴状遺構・出土遺物

304号竪穴状遺構 (第97図、写真図版69・132)

<位置> 6区自然堤防上の-B I d11~12区に跨って位置する。

<検出状況> VIIb2層上に暗オリーブ褐色土の不整な楕円形状の広がりを検出した。埋土からは遺物が出土したが、床土などを検出できなかったことから竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 平面形は不正形な楕円形状をする。規模は4×3.9mである。

<埋土> 堆積状況は、単層で暗オリーブ褐色粘土層であり、自然堆積であると考えられる。下層には黒褐色粘質土層が堆積しているが、それを剥ぐと裸層であること、303号住居跡では黒褐色の上面に焼土が形成されていること、黒褐色粘質土層はオリーブ褐色粘土層の下層に一樣に存在するのではなく、一部の遺構内のみ存在することから考えると、本住居跡の黒褐色土層も貼り床である可能性が高い。したがって、黒褐色土層上面が床面となる。

<壁> VIIb2層が壁となる。壁は緩やかに立ち上がるためにプランの周縁部では壁と床の境界は不明瞭である。検出面から床面までの深さは、最大20cmである。

<床> VIIb2層が床となる。ところどころでX層の隙が突出している。

<柱穴> 明確な柱穴は検出されていない。

遺物 少量の遺物が出土している。476は口縁部先端に幅2mmの山形状の沈線文を左から右に連続して施文している。石器は石鏃2点、石槍1点、石匙1点出土している。

時期 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

306号竪穴状遺構 (第98図、写真図版70・132)

<位置> 6区自然堤防上の-B I d13~14区に跨って位置する。

<検出状況> VIIb2層上でVIIc層暗オリーブ褐色砂質粘土の不整な楕円形状の濁りを検出し、緩い壁の立ち上がりを確認できたことより竪穴状遺構とした。

<重複関係> 307号竪穴状遺構により北西側の一部が切られている。

<形態・規模> 南側半分が調査区外へと延びるため全体形や規模は不明であるが、平面形は楕円形状で、規模は3.5以上×1.6m以上である。

<埋土> VIIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の単層で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<壁> VIIb2層が壁である。やや緩やかに立ち上がる。

<床> VIIb2層が床面である。平坦でやや堅くしまる。

<柱穴> 検出されなかった。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

307号竪穴状遺構 (第98図、写真図版71・132)

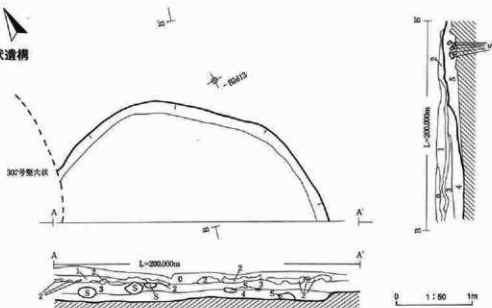
<位置> 6区自然堤防上の-B I d14~15区に跨って位置する。

<検出状況> VIIb2層上でVIIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の不整な楕円形状の濁りを検出し、埋土から遺物が出土することより竪穴状遺構とした。

<重複関係> 南東側で306号竪穴状遺構の一部を切っている。

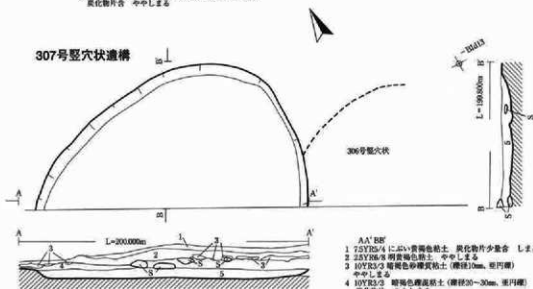
<形態・規模> 南西側半分が調査区外へと延びるため全体形や規模は不明であるが、平面形は長軸が東西方向にある楕円形状と推定され、規模は2.2以上×1.5m以上である。

306号竪穴状遺構



- AA'剖面
- 0 10YR2/2 黒褐色粘土 しまる
 - 1 7.5YR5/4 濃い黄褐色粘土 炭化物片少量含 しまる
 - 2 2.5YR6/3 暗褐色粘土 中やしまる
 - 3 10YR3/3 暗褐色凝灰粘土 (層厚20~30cm, 垂直線) 炭化物片含 ややしまる
 - 4 10YR2/3 暗褐色凝灰粘土 (層厚10cm, 垂直線) ややしまる
 - 5 2.5YR4/4 オリーブ褐色凝灰粘土 (層厚30cm, 垂直線) ややしまる

307号竪穴状遺構



- AA'剖面
- 1 7.5YR5/4 濃い黄褐色粘土 炭化物片少量含 しまる
 - 2 2.5YR6/3 暗褐色粘土 中やしまる
 - 3 10YR3/3 暗褐色凝灰粘土 (層厚10cm, 垂直線) ややしまる
 - 4 10YR2/3 暗褐色凝灰粘土 (層厚30~30cm, 垂直線) 炭化物片 中やしまる
 - 5 2.5YR4/4 オリーブ褐色凝灰粘土 (層厚30~40cm, 垂直線) ややしまる



480



481

0 1:50 1m

0 1:3 10cm

●481はS=1/3

図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分輪	部厚	備考
480	01-326	307号竪穴状遺構	扉蓋	扉蓋	蓋	黒点文	ナシ	鈔	7cm	植物繊維織入
481	1321	扉蓋	1A2	307号竪穴状遺構	埴土	縞目	147	5.3	2.02	長径
										先周大甕

第98図 306・307号竪穴状遺構・出土遺物

※()は矢張り

<埋土> VIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の単層で埋積されている。自然堆積層と考えられる。306号竪穴状遺構の埋土と同様であるが、炭化物片を少量含む点で識別している。

<壁> VIb2層が壁である。やや緩やかに立ち上がる。

<床> VIb2層が床面である。平坦でやや固くしまる。

<柱穴> 検出されなかった。

遺物 埋土から捻糸文の土器片が数点出土している。石器は石鏃1点、不定形石器1点が出土している。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

309号竪穴状遺構 (第99・100岡、写真岡版72・133)

<位置> 5区南東側自然堤防上の-B I c12区に位置する。

<検出状況> VIb2層上でVIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の不整な楕円形状の溝を検出し、埋土から遺物が出土することより塚穴状遺構とした。

<形態・規模> 約3/4が調査区外に延びる。平面形は楕円形状と推測され、規模は検出規模の最大で3.2×1.7m以上である。

<埋土> VIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の単層で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<壁> VIb2層が壁である。やや緩やかに立ち上がる。

<床> VIb2層が床面である。VIb層の礫がところどころで露出する。

<柱穴> 明確な柱穴は検出されなかった。

遺物 埋土から斜縄文、捻糸文の土器小片が出土している。石器は出土していない。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

311号竪穴状遺構 (第99・100岡、写真岡版73・133)

<位置> 5区南東側自然堤防上の-B I f9区に位置する。

<検出状況> VIb2層上でVIb1層暗オリーブ褐色砂質粘土の不整な楕円形状の溝を検出し、埋土から遺物が出土することより塚穴状遺構とした。

<重複関係> 西側を314号竪穴状遺構により切られている。

<形態・規模> 314号竪穴状遺構により壊されているが、平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形と推測され、規模は2.4以上×2.7mである。

<埋土> 暗オリーブ褐色砂質粘土の単層で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<壁> VIb2層が壁である。緩やかに立ち上がる。

<床> VIb2層が床面である。X層の礫がところどころで露出する。

<柱穴> 明確な柱穴は検出されなかった。

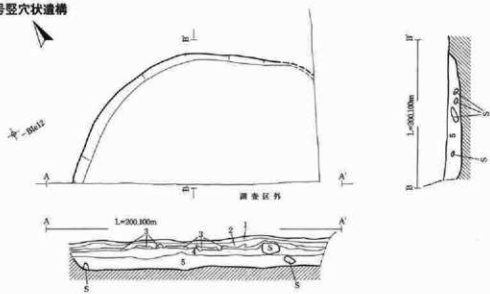
遺物 埋土から斜縄文や条痕文の土器片などが出土している。483は細い刻み入り隆帯を持つもので遺跡内では特異の出土例である。石器は石鏃2点と石匙1点が出土している。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

312号竪穴状遺構 (第101岡、写真岡版74・133)

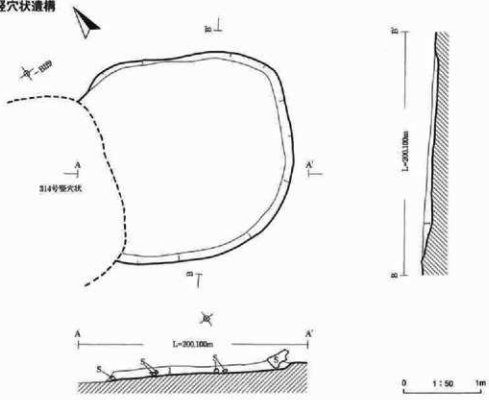
<位置> 5区南側自然堤防上の-B I e11区に位置する。

309号竖穴状遺構



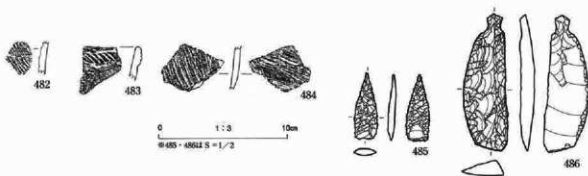
- AA' BB'
- 1 黒褐色粘土 しまる
 - 2 赤い黄褐色粘土 炭化物片少量含 しまる
 - 3 赤い黄褐色粘土 ややしまる
 - 4 赤褐色粘粘土 (炭灰鉄燧、重厚燧、7%) ややしまる
 - 5 赤褐色粘粘土 (燧径50~30mm、重厚燧) 炭化物片含 ややしまる

311号竖穴状遺構



- AA' BB'
- 1 赤い黄褐色粘土 炭化物片少量含 しまる

第99図 309号・311号竖穴状遺構



図面番号	登録番号	出土地点	層位	形状	部位	外面文様	内面調整	分層	器厚	備考
482	01-108	309号竪穴状遺構	床面	窪跡	側	熟赤文	-	IV	-	内面破損
483	01-200	311号竪穴状遺構	黄土	窪跡	口縁	黒み緑文段帯	ナデ	IV	5mm	
484	01-195	311号竪穴状遺構	床面	窪跡	側	赤赤文		IV	5	

図面番号	登録番号	器種	分層	出土地点	層位	径mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
485	1340	石鏃	IA1	311号竪穴状遺構	床面	35.0	12.0	4.0	5.93	頁岩	
486	1339	石鏃	IB	311号竪穴状遺構	床面	71.7	22.3	8.0	15.71	頁岩	

第100図 309・311号竪穴状遺構出土遺物

<検出状況> VIIb層上でVIIb層暗オリーブ褐色砂質粘土の不整な楕円形状の濁りを検出し、埋土から遺物が出土することより竪穴状遺構とした。東側の一部が現代の攪乱を受けている。

<形態・規模> 平面形は東西方向に長軸を持つ長楕円形状を呈し、規模は3.7×2.4mである。

<壁> VIIb層が壁である。やや緩やかに立ち上がる。検出面から床面までの深さは最大20cmである。

<床> VIIb層が床面である。やや堅くしまっている。X層の礫上面がときどき露出する。

遺物 埋土から斜縄文と燃赤文の土器片が出土している。器厚は前者が薄く、後者が厚い。石器は石鏃1点が出土している。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

314号竪穴状遺構 (第102図、写真図版75・133)

<位置> 5区西側自然堤防上の-BIF9・10区に跨いで位置する。

<検出状況> VIIb層上でVIIb層暗オリーブ褐色砂質粘土の楕円形状の濁りを検出し、埋土から遺物が出土することより竪穴状遺構とした。

<重複関係> 東側で311号竪穴状遺構を切っている。また、西側の一部は現代の攪乱により壊されている。

<形態・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は2.6×2.2mである。

<埋土> 暗オリーブ褐色砂質粘土の単層で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

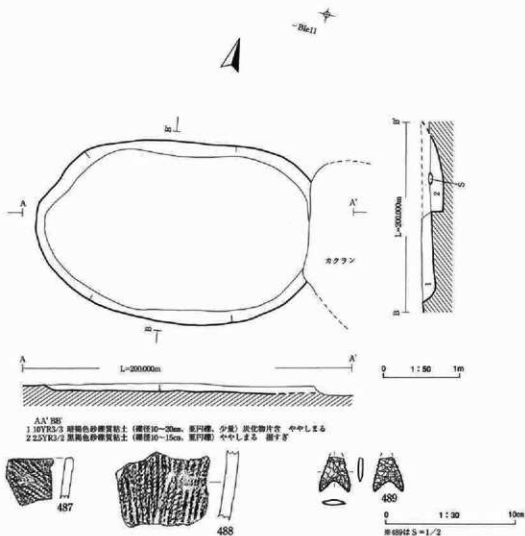
<壁> VIIb層が壁である。やや緩やかに立ち上がる。

<床> VIIb層が床面である。X層の礫上面が一部で露出する。検出面から床面までの深さは最大20cmである。

<柱穴> 平面形が円形状の柱穴状小土坑が3基検出された。いずれも15cm前後と浅い。

遺物 埋土から斜縄文の極小片が出土している。厚手で植物繊維を含む。石器は石匙1点が出土した。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外表文様	内面文様	分類	器厚	備考	
487	01-197	312号壱穴状遺構	埋土	罎鉢	口縁	乱	ナゲ	IV	6mm		
488	01-199	312号壱穴状遺構	埋土	罎	胴	乱本文	ナゲ	IV	7	器物線図記入	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	径mm	厚mm	重量g	石質	備考
489	1062	石罎	IIA1	312号壱穴状遺構	埋土	(13)	16.0	3.0	0.64	頁岩	先端欠損

第101図 312号壱穴状遺構・出土遺物

※()は寸法

315号壱穴状遺構 (第102図, 写真図版76・133)

<位置> 7区南側田自然堤防上の-B Ia18~19区に跨いで位置する。

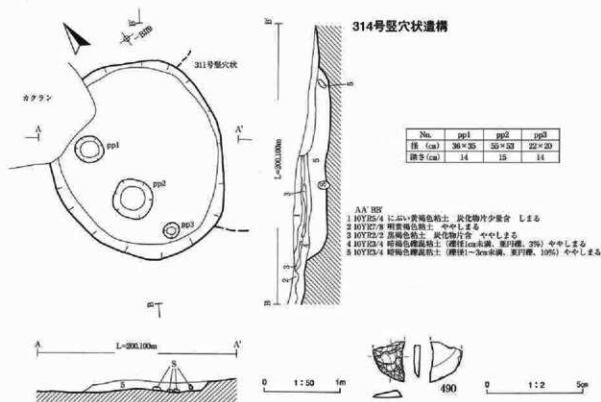
<検出状況> 301号壱穴状遺構の検出同様に黒褐色土除去後の暗褐色土検出中に斜縄文の土器片が出た。その時点ではプラン等は検出できず、さらに数10cm下げた地山とみられる砂礫層面で半楕円形状のプランを確認した。精査をすすめが跡は検出できなかったが、柱穴状小土坑を2基検出し壱穴状遺構とした。

<形態・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈するとみられるが、半分は南側調査区外に広がるため全体形は確定できない。規模は最大で3.1mである。

<埋土> 黒褐色砂礫質粘土層で埋められている。

<壁> X層が壁である。緩く立ち上がるが、地山上面はしまりが悪く原形を留めていない可能性がある。

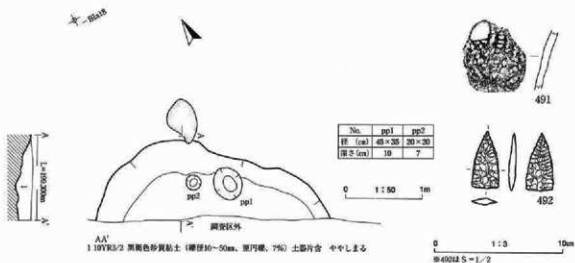
<床> 地山は砂～細礫を基質とする礫層で、地山を直接床面とするには凹凸が激しいため貼床をしていたと推測される。土層断面では識別できなかった。



調査番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	高さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
490	1289	石鏡	TA	314号壑穴状遺構	粘土	21.4	17.8	4.9	1.36	頁岩	つまみ～体面上半欠損

※ () は欠損長

315号壑穴状遺構



調査番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考
491	04-375	315号壑穴状遺構	砂面	漆器	胴	BL? (不明)	ナ? (不明)	IV	6mm	植物繊維混入

調査番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	高さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
492	1167	石鏡	TA	315号壑穴状遺構	粘土	30.0	14.0	3.5	1.58	頁岩	

第102図 314・315号壑穴状遺構・出土遺物

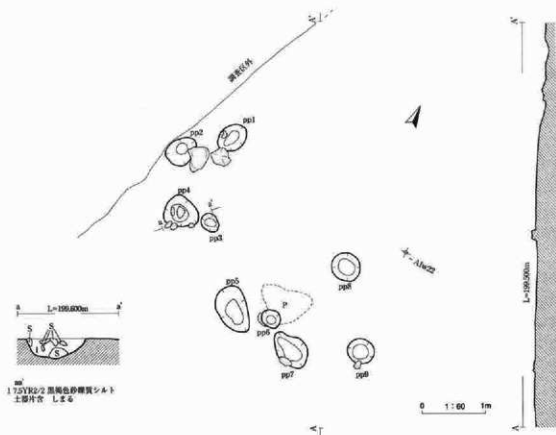
<柱穴> 平面形が円形～楕円形の柱穴状小土坑を2基検出した。深さは7～10cmと浅い。ともに黒褐色砂礫質粘土層で埋められている。

遺物 埋土から斜縄文の土器片が出土している。施文が不鮮明で詳細は不明である。石器は石鏃1点が出土した。

時期 出土遺物と周辺の検出遺構の時期から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

316号竪穴状遺構 (第103図、写真図版77・133)

<位置> 7区西側の-A I v・w22～23区に跨いで位置する。



No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9
径 (cm)	50×38	50×42	34×25	50×50	26×50	33×24	60×45	46×45	40×40
深さ (cm)	15	28	11	14	30	30	11	9	8



図版番号	器物番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分類	器厚	備考
403	01-303	316号竪穴状遺構	床面	深鉢	口	1.8	ナデ	甕	6cm	器物破断片入
404	01-304	316号竪穴状遺構	床面	深鉢	胴	1.8	ナデ	甕	9	器物破断片入

第103図 316号竪穴状遺構・出土遺物

<検出状況> 301号竪穴状遺構の検出同様に黒褐色土除去後その下位の暗褐色土を掘り下げたところ、大～巨礫の角礫を含む明褐色粘土層（Ⅳc層）を検出した。東に位置する301号・315号竪穴状遺構の地山と異なり、北側の山体から崩落した崖錐堆積物と考えられた。木堆積物面で半円形状に巡る柱穴群を検出し、さらに比較的まとまった土器片が出土したため、竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 柱穴の並びから推定される形状は円形で、規模は4～5mである。

<床・壁> 推定されるプラン中心付近約2m四方は角礫がほとんどなく、堅くしまっている。土器片が暗褐色上下部から崖錐堆積物面上部にかけて出土しているため、角礫のない崖錐堆積物を床面としていた可能性がある。壁は検出できなかった。

<柱穴> 9基検出された。西側の掘りすぎている可能性のある1基を除いて、規模は長軸が33～76cm・平均50cm、深さが8～15cm・平均11cmである。これらの柱穴群は崖錐堆積物供給源の反対側である南側で検出された。北側にも構築されていた可能性もあるが、検出できなかった。

遺物 いわゆるピッチリ縄文の土器片が少量まとまって出土した。石器は出土していない。

時期 中振火山灰層下位の暗褐色粘土層下で検出されていることと出土遺物から、縄文時代前期前葉頃と考えられる。

322号竪穴状遺構（第104・105図、写真図版78・133・134）

<位置> 6区中央旧河床の-B I a・b13～14区に跨って位置する。

<検出状況> 包含層（Ⅴ）を除去した砂質粘土～砂礫層（Ⅵb2～Ⅹ）上で不整な楕円形状に広がる粘質土を検出した。瓦跡は検出されず、浅い皿状の竈みで埋土から少量の遺物が出上ることより竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 平面形は不整な楕円形状で、規模は3×2.5mである。

<埋土> 自然堆積層で2層に区分される。灰オリーブ色を呈し、上部層が粘土質、下部が細礫質である。下部層ではやや多量の炭化物片を含む。

<壁> Ⅴ層が壁となる。やや凹凸を持ちながら、極めて緩やかに立ち上がる。プラン西側と北側では壁が立ち上がる角度は相対的にきつい。床面との境界は不明瞭である。検出面から床面までの深さは最大16cmである。

<床> Ⅴ層が床となる。皿状に窪んでおり、明確な平坦面は認められない。

<柱穴> 床面北端で柱穴状小土坑が1基検出された。平面形は楕円形状である。埋土に少量の炭化物片が含まれる。

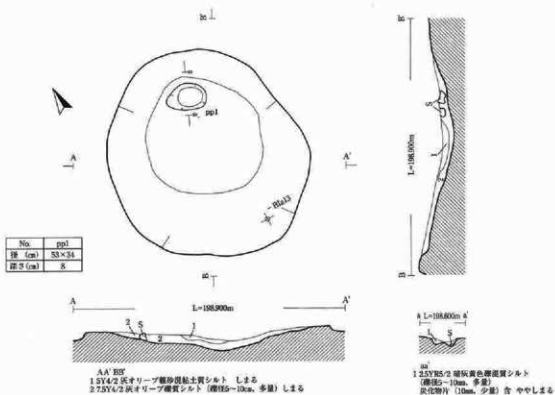
遺物 埋土から少量の遺物が出土したが、分布に偏りはない。柱穴からの出土もない。斜縄文、横縄文、縦縄文と熱糸文などの土器片が出土している。495～497は口縁部で程度の差はあるが外反する。496は縄文の地文上に深い横位歯面斥痕が施文されている。497は内面にも横位の沈線様のものが施される。501は丸底の破片である。石器は埋土上部から石鏃6点、石匙4点、不定形石器3点、打製石斧2点が出土している。石匙はすべて縦長でほとんど欠損している。508は裏面の左右側縁部に調整がみられる。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期前葉頃と考えられる。

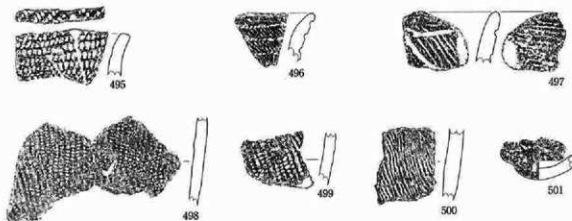
325号竪穴状遺構（第106・107図、写真図版79・134）

<位置> 7区中央の旧自然堤防と旧河床跡を結ぶ斜面上の-A I w・x19～20区に跨って位置する。

<検出状況> To-Cu直下の縄文前期前葉の遺構検出が終わり、重機によりII層を剥ぎ取り人力で検出を



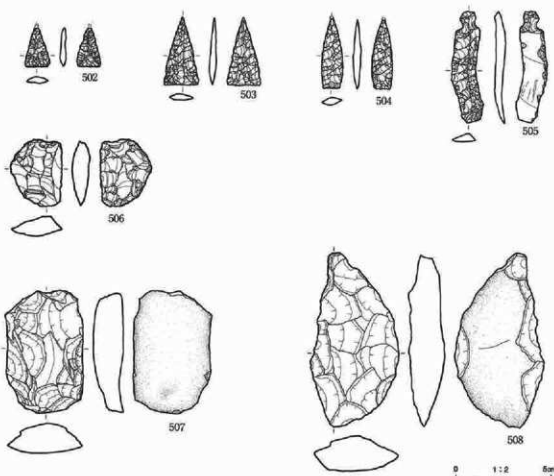
0 1:50 1m



0 1:2 10cm

図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	描写文様	内面調査	分類	図取	備考
495	01-210	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	口縁	1.R (縦斜紋) 口唇: 斜付葉状圧痕	ナテ	B'	3cm	横切線断面
496	01-204	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	口縁	2.R 胎紋上に2Rの横付葉状圧痕	ナテ	B'	9	横切線断面
497	01-175	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	口縁	胎赤文、沈線文	胎赤文?	B'	12	横切線断面
498	01-202b	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	側	1.R	ナテ	B'	8	横切線断面
499	01-205	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	側	2.R	ナテ	B'	9	横切線断面
500	01-174	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	側	胎赤文	ナテ	B'	11	横切線断面
501	01-173	322号壺穴状遺構	瓶土下部	深鉢	底縁	胎赤文	ナテ	B'	10	横切線断面

第104図 322号壺穴状遺構・出土遺物 (1)



図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さmm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
502	1195	石鏃	IB1	322号竪穴状遺構	埋土下部	120.3	12.5	3.8	0.98	頁岩	先端欠損
503	1196	石鏃	IB1	322号竪穴状遺構	埋土下部	35.0	17.0	4.4	2	頁岩	
504	1264	石鏃	IA2	322号竪穴状遺構	床面	(30.7)	11	4.7	1.67	頁岩	先端欠損
505	1278	石鏃	IB	322号竪穴状遺構	埋土下部	99.0	15.1	5.6	4.37	頁岩	
506	1268	不定形	B'	322号竪穴状遺構	床面	36.2	27	10	10.62	頁岩	
507	1270	打製石片	I	322号竪穴状遺構	床面	65.5	40.2	16.5	56.5	砂岩	
508	1271	打製石片	I	322号竪穴状遺構	床面	90.3	47.7	19.4	84.53	凝灰岩	

※ ()は欠損長

第105図 322号竪穴状遺構出土遺物 (2)

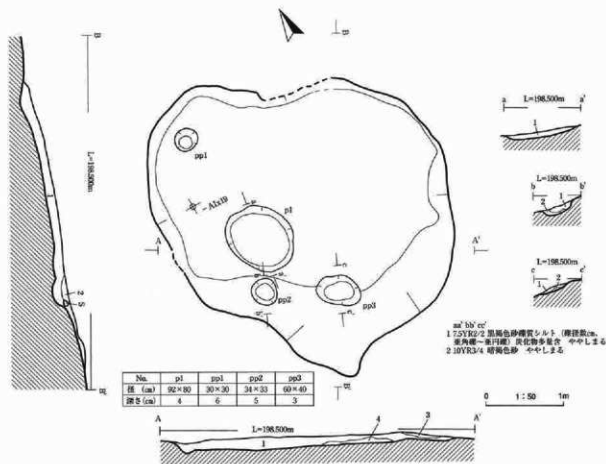
始めた。旧自然堤防と旧河床跡を結ぶ斜面上にはX層の砂礫が広がったが、本遺構周辺では朝顔葉様の平面形をもつ黒褐色細礫質粘土層の広がりを検出した。当初は包含層(V)の一部と考えられたが、斜面上で唯一の検出であること、浅い掘り込みであること、柱穴状小土坑を検出したことより竪穴状遺構とした。

<形態・規模> 平面形は朝顔葉様で、規模は3.9×3.8mである。

<埋土> 自然堆積層で、主に黒褐色細礫質粘土に覆われる。土器片・石器の他に多量の炭化物片や溶けかかった骨粉が含まれる。

<壁> Ⅵb2層が壁となる。やや緩やかに立ち上がる。旧自然堤防側の南西側壁は非常に緩く立ち上がる。

<床> Ⅵc層崖錐堆積物末端の細粒部分(褐色細礫)ないしⅥb2層オリープ褐色砂質粘土が床となる。前者は旧河床側のプラン半分に分布する。比較的平坦である。Ⅵb2層の床面はしまりがよいが、Ⅵc層の床面はそれほどしまりがよくない。



AA' 断面

1 25YR2/2 黒褐色小砂礫質粘土 (層厚5~10cm、角一歪角礫、海法不貞)
 土器片・石器・灰化物片 付片含 ややしまる
 2 25YR4/3 褐色砂礫質粘土 (層厚10~20cm、歪角礫一帯付露、海法不貞)
 灰化物片含 しまる

3 10YR2/3 暗褐色砂礫質粘土 (層厚平均約10cm、最大15cm、崖内側) しまる
 4 10YR4/4 褐色小砂礫 (層厚5~10cm、角礫一帯角礫) ややしまる

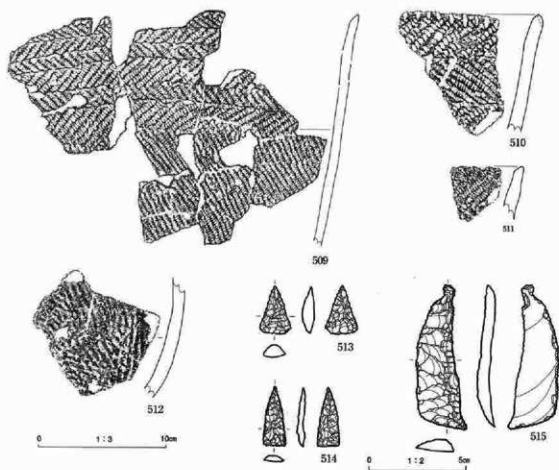
第106図 325号壁穴状遺構

<柱穴> 西から南側壁付近で柱穴状小土坑を3基検出した。平面形は円形～楕円形状で深さは5cm前後と浅い。本壁穴状遺構と同様な埋土で埋められている。

<その他> 床面南西側で土坑を1基検出した。平面形は楕円形状である。規模は92×80cmで、深さは4cmと浅い。

遺物 埋土から遺物が出土している。土器片の胎土には植物繊維を含む。509は口縁部に非結束羽状縄文が施文される。上部は施文幅約15mm、下部は20mmである。先端は先細り軽く外反し、外面には斜位の刻みが施される。510は先端が軽く外反し、縦位の刻みが、511は先端に縦位の側面圧痕が施される。512は胴下部で丸底とみられる。石器は石鏃3点、石匙3点が出土している。石匙はすべて縦長である。

時期 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



図版番号	登録番号	出土地点	層位	部位	外部文様	内面調整	分類	図尺	備考
509	01-3054	325号竪穴状遺構	焼土	口一側	赤結東羽状縄文。R.L. (0多)。先端：斜位刻み	ナデ	瓦	3cm	植物繊維混入
510	01-305	325号竪穴状遺構	焼土	口縁	赤結東羽状縄文 (0多)。先端：斜位刻み	ナデ	瓦	8	植物繊維混入
511	01-145	326号竪穴状遺構	焼土	口縁	赤結東羽状縄文。先端：斜位刻み	ナデ	瓦	10	植物繊維混入
512	01-144	328号竪穴状遺構	焼土	口縁	赤結東羽状縄文。先端：斜位刻み	ナデ	瓦	8	植物繊維混入

図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	径mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
513	1077	石皿	1B1	325号竪穴状遺構	焼土	28.0	17.0	7.0	1.90	黄岩	
514	1050	石皿	1A1	325号竪穴状遺構	焼土	32.0	13.0	4.0	1.1	黄岩	
515	1076	石皿	1B	325号竪穴状遺構	焼土	77.0	26.0	10.0	12.26	黄岩	

第107図 325号竪穴状遺構出土遺物

3. 焼土遺構

2・3号焼土遺構 (第108図、写真図版80)

<位置・検出状況> 2遺構ともに1区西側のB I j18区 Nas 層上面で検出された。2号焼土遺構北側には径数10cmの垂角礫が散在する。

<平面形・規模> 平面形は2号焼土遺構が洋梨形、3号焼土遺構が不整円形を呈し、規模はそれぞれ58×34cm、50×47cmで、厚さは最大9cmと11cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から非結東羽状縄文土器破片とみられる斜縄文 (0多) が出土している。

<時期> 20号住居跡と同一検出面にあり、検出層位から縄文時代前期前半頃と考えられる。

4号焼土遺構 (第108・119図、写真図版80・134)

<位置・検出状況> 1区西側のB I k18区南西側IVa3層で検出された。本遺構周辺では数十cmの亜円盤が出土し、北側では2・3号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は44×26cm、厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 本遺構を覆うように非結束羽状縄文の土器片が出土している。

<時期> 出土遺物と検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

6号焼土遺構 (第108図、写真図版80)

<位置・検出状況> 1区西側のB I k17区IVa3層で検出された。4号焼土遺構が東側に隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整形で、規模は46×39cm、厚さは最大で6cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

7号焼土遺構 (第108図、写真図版81)

<位置・検出状況> 1区のB I j19区IVa3層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形で、規模は38×28cmで、厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

8・9号焼土遺構 (第108図、写真図版81)

<位置・検出状況> 両遺構は近接して3区中央北側で検出された。8号焼土遺構はB I i10区に、9号焼土遺構は1m南東側のB I j10区に位置する。IVa3層上面で検出された。2遺構の周辺は締りがよく、本遺構を含む7.3×4.2mの楕円形状の範囲には土器が15片、炭化物片(最大10mm平均5mm)が90点以上出土した。住居跡等の施設の可能性もあり精査を進めたが、断定はできなかった。

<平面形・規模> 平面形は両遺構ともに不整形で、規模は8号焼土遺構が73×55cm、9号焼土遺構が51×50cmで、厚さはそれぞれ最大3cmと4cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から非結束羽状縄文(0多)などの土器片が出土している。

<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

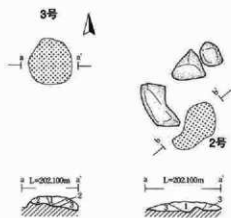
10号焼土遺構 (第109図、写真図版81)

<位置・検出状況> 3区中央付近のB I j10区に位置する。IVa3層で検出された。北東方向に隣接する9号焼土遺構周辺を精査中に検出した。本遺構の周辺から土器片12片、炭化物32点以上、鹿の歯1点が出土した。住居跡等の施設の可能性もあり精査を進めたが、断定はできなかった。

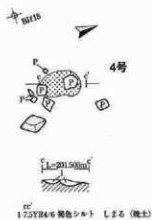
<平面形・規模> 東西方向に長軸を持つ不整形で、規模は71×45cmで、厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から非結束羽状縄文(0多)などの土器片が出土している。

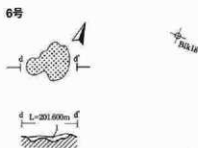
<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代前期前葉頃と考えられる。



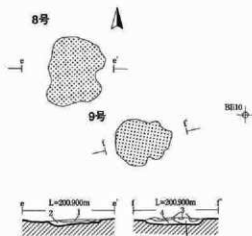
ef' bb'
 1 5YR4/5 赤褐色シルト 露出 しまる (焼土)
 2 10YR3/4 暗褐色粘土 しまる
 3 10YR3/4 暗褐色砂質 しまる



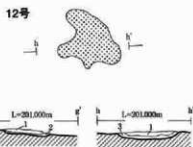
ef'
 1 7.5YR4/6 褐色シルト しまる (焼土)



od'
 1 5YR4/8 赤褐色砂質凝灰シルト しまりなし (焼土)



ee' ef'
 1 5YR4/5 赤褐色砂質シルト 炭化物片含 (焼土)
 2 7.5YR2/4 暗褐色砂質粘土 土器・炭化物片含 しまる
 3 5YR3/3 暗赤褐色砂質シルト 土器片含 しまる (焼土)
 4 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 しまる
 5 7.5YR4/5 褐色砂質粘土 炭化物片含 ややしる



ef' bb'
 1 7.5YR2/4 暗褐色砂質シルト しまる (焼土)
 2 10YR2/4 暗褐色砂 (赤褐色土、片礫) しまる
 3 10YR3/4 暗褐色砂 しまる

ef'
 1 5YR4/8 赤褐色砂質凝灰シルト (礫10%) しまりなし (焼土)

0 1:40 1m

第108回 焼土遺構 (1)

11・12号焼土遺構（第108、写真図版82）

<位置・検出状況> 両遺構ともに2区中央付近のB I j11区のⅣa3層上面で検出された。11号焼土遺構の約1m南方向に12号焼土遺構が位置する。本遺構の周辺から土器片が9点、炭化物片が7点以上出土した。住居跡等の施設の可能性もあり精査を進めたが、断定はできなかった。

<平面形・規模> 平面形は両遺構ともに不整形で、規模はそれぞれ約50×40cm、約75×44cmで、厚さは最大4cm、6cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から側面圧痕と短沈線で施文された土器片や非結束羽状縄文の土器片が出土している。

<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代前期前葉と考えられる。

13号焼土遺構（第109図、写真図版82）

<位置・検出状況> 1区北側のB I i20区に位置する。北側水路脇を拡張するために表土を約1mほど下げた黒褐色土（Ⅱb層）で多量の土器片とともに検出された。状況から住居跡の可能性も考慮して精査をすすめたが単独の焼土遺構として検出された。

<平面形・規模> 平面形は隅丸三角形を呈し、規模は22×18cmである。厚さは最大8cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位から縄文時代晩期末葉～弥生時代初めと考えられる。

14号焼土遺構（第109図、写真図版82）

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I i11区V層で検出された。15号焼土遺構が約2.5m南方向に隣接する。

<平面形・規模> 平面形は北東方向に長軸を持つ不整形で、規模は約90×47cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から「く」字状に外反する非結束羽状縄文や側面圧痕文の土器片、ニホンジカの臼歯片が出土した。

<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

15号焼土遺構（第109図、写真図版83）

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I i11区V層で検出された。14号焼土遺構が約2.5m北方向に隣接する。

<平面形・規模> 平面形は東西方向に長軸を持つ不整形を呈し、規模は約34×33cmである。厚さは最大3cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

16号焼土遺構（第109図、写真図版83）

<位置・検出状況> 3区北西側のB I i13区V層で検出された。ほぼ中央に炭化物が集中する範囲がある。

<平面形・規模> 平面形はほぼ円形を呈し、規模は約60cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

17号焼土遺構 (第109図、写真図版83)

<位置・検出状況> 3区北東端のB I i 3～14区に跨って位置する。V層で検出された。1.7m南東側には第18号焼土遺構が隣接する。同一面ではこの他に120号土坑と16号焼土遺構が検出されている。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は60×40cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。周辺から斜縄文や側面圧痕文の土器片が出土している。

<時期> 検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

18号焼土遺構 (第109・119図、写真図版83・135)

<位置・検出状況> 3区北東端のB I j 14区V層で検出された。1.7m北西側には17号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は70×40cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 上面で517が内面を向けて出土した。小波状の口縁部片で波状の側面圧痕文が施されている。

<時期> 出土遺物と検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

19・21号焼土遺構 (第109図、写真図版84)

<位置・検出状況> 3区北西端のB I i 3区VIIa層下部で検出された。地山確認のための深堀で両遺構ともに東側半分が失われている。両遺構ともに砂質シルトで、19号焼土遺構には炭化物片の他に溶けかかった骨片が混入している。

<平面形・規模> 平面形はともに東西方向に長い不整形を呈し、規模は19号が65以上×40cm、21号が45以上×18cmである。厚さは最大4cmと3cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 本遺構周辺から出土した土器片、検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

20号焼土遺構 (第110図、写真図版84)

<位置・検出状況> 3区南東端のB I i 15区IVa層で検出された。検出時にやや多めに剥したため残りが良くない。

<平面形・規模> 平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は50×43cmである。厚さは最大4cmである。

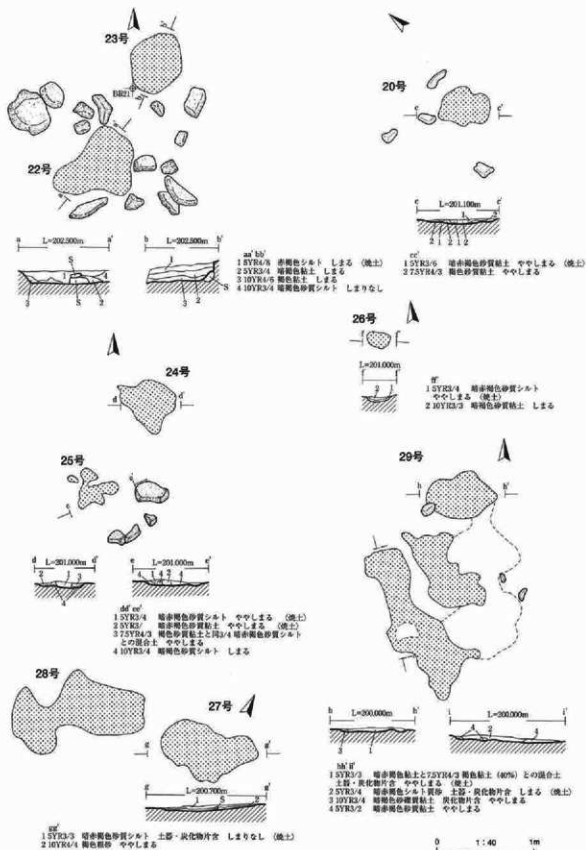
<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

22・23号焼土遺構 (第110図、写真図版84)

<位置・検出状況> 両遺構ともに1区北側V層で検出され、22号焼土遺構の1.2m北西側に23号焼土遺構が位置する。前者はB I i 20区に、後者はB I h 21区にある。両遺構は46号住居跡埋土最上面にあり、22号焼土遺構は同住居跡の埋土と地山に跨って検出されている。周辺には数10cmの礫が散在している。

<平面形・規模> 22号焼土遺構はやや歪な洋梨形、23号焼土遺構は不整な楕円形を呈し、規模は93×75



第110図 焼土遺構 (3)

cm、66×54cmである。厚さは最大14cmと8cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

24・25号焼土遺構 (第110図、写真図版85)

<位置・検出状況> 両遺構ともに3区南東側のB I 14区V層で検出された。24号住居跡検出面下で、38号住居跡と同一面で検出された。24号焼土遺構の1.2m南西側に25号焼土遺構が、2m西側に26号焼土遺構が位置する。

<平面形・規模> 平面形は両遺構ともに不整形を呈し、規模は58×56cm、46×41cmである。厚さは最大6cmと5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

26号焼土遺構 (第110図、写真図版85)

<位置・検出状況> 3区南東側のB I 13区に位置し、V層で検出された。2m南東側に24・25号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は25×15mである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位および隣接する遺構の時期から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

27・28号焼土遺構 (第110・119図、写真図版85～86・135)

<位置・検出状況> 3区北東側のB I 13区に位置し、Ⅵa2層で検出された。19号焼土遺構の1.3m西側に27号焼土遺構、2.5m西側に28号焼土遺構がほぼ一直線上に並ぶ。数cmの炭化物片が焼土内外に点在する。

<平面形・規模> 平面形は両遺構ともにおよそ東西方向に長軸を持つ不整形を呈する。規模は27号焼土遺構が102×60cm、28号焼土遺構は138×59cmである。厚さは両遺構ともに最大4cmである。

<出土遺物> 27号焼土遺構から薄手の斜縄文(0多)の土器片が出土している。

<時期> 検出層位および出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

29号焼土遺構 (第110・119図、写真図版86・135)

<位置・検出状況> 3区北東側のB I 13区に位置し、Ⅵa2層で検出された。27・28号焼土遺構が木道構北西部分直上で検出されている。3つの広がりで見出され、両端の焼土をつなぐように炭化物密集部分が東側に分布する。検出状況から1遺構と判断している。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は24×1.6mである。厚さは最大10cmである。

<出土遺物> 薄手の斜縄文(0多)の土器片が出土している。焼成は良好である。

<時期> 検出層位および出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

200・206号焼土遺構 (第111図、写真図版86・88)

<位置・検出状況> 3区北東側に位置し、200号焼土遺構はB I 12区、206号焼土遺構はB I 11区のⅥa2層で検出された。2基はそれぞれ東西方向に長軸を持ち、その方向に一直線上に並ぶ。検出当初周辺から遺

物が比較的多く出土し、住居跡も視野にいれば調査をすすめたが、明瞭なプランを確認できず焼土遺構とした。

<平面形・規模> 平面形はともに東西方向に長軸を持つ、不整な楕円形を呈し、規模はそれぞれ110×65cm、160×72cmである。厚さはともに最大7cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位および出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

201・202号焼土遺構 (第111図、写真図版86～87)

<位置・検出状況> 両遺構ともに2区北側のBI10区に位置し、IVa層で検出された。201号焼土遺構の1m南東側に202号焼土遺構が隣接する。2遺構周辺はしまりが良い。

<平面形・規模> 平面形は第201号焼土遺構が不整な楕円形を、202号焼土遺構は爪形状を呈する。規模はそれぞれ50×42cm、38×24cmで、厚さはともに最大2cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

203・204号焼土遺構 (第111図、写真図版87)

<位置・検出状況> 両遺構ともに3区南側のBI1・m10区に位置し、V層で検出された。第203号焼土遺構の1m南側に204号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は両遺構ともに不整な楕円形を呈する。規模はそれぞれ50×40cm、46×40cmで、厚さはともに最大2cm、3cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

205号焼土遺構 (第111図、写真図版87)

<位置・検出状況> 3区中央のBIk9区に位置し、V層で検出された。本遺構の約4m南側に207号住居跡が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は北東-南西方向に主軸を持つ不整な楕円形を呈し、規模は80×50cmで、厚さは最大2cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

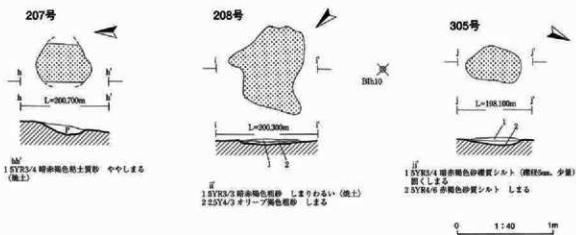
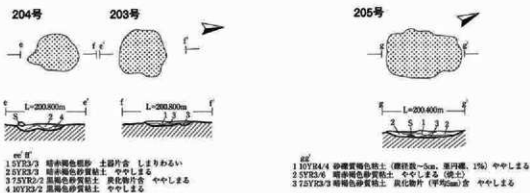
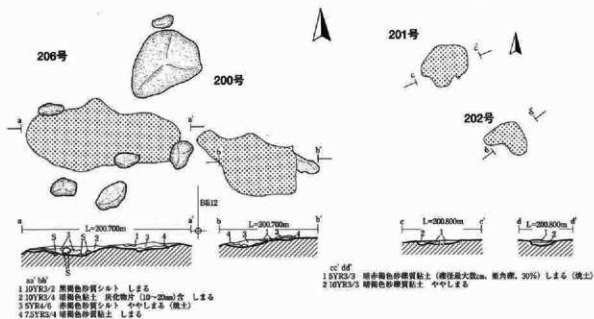
207号焼土遺構 (第111図、写真図版88)

<位置・検出状況> 3区中央のBIj9・10区に跨って位置し、IVb層で検出された。本遺構は土層観察用のベルト上で検出され、東西両辺が欠けている。

<平面形・規模> 平面形は不整な円形を呈すると推測される。規模は58×44cm以上で、厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。



第111図 焼土遺構 (4)

208号焼土遺構 (第111図、写真図版88)

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I i11区に位置し、Waz層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形を呈する。規模は88×60cmで、厚さは最大2cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

209号焼土遺構 (第112・119図、写真図版88・135)

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I i10区に位置し、V層で検出された。本遺構周辺では10～50cm大の重円礫が、南東側約1mで土器片がまとめて出土した。

<平面形・規模> 平面形は略円形を呈し、規模は45cmで、厚さは最大3cmである。

<出土遺物> 近接して非結束羽状縄文の土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

300号焼土遺構 (第112図、写真図版89)

<位置・検出状況> 9区中央北側の-A I i p 7区に位置し、IVb層で検出された。本遺構の半分は調査区外に延びる。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈すると推測される。規模は50×34cm以上で、厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

301号焼土遺構 (第112・119図、写真図版89・135)

<位置・検出状況> 7区中央北側旧河道内の-A I y17区に位置し、V層で検出された。本遺構周辺では5～20cm大の重円礫が出土し、北東側約1mで土器片がまとめて出土した。内面を表向きにし、円形状に並べたように検出された。部位は口縁部である。出土状況から本遺構に伴うと考えられる方が妥当である。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は80×56cmで、厚さは最大10cmである。

<出土遺物> 遺構内から石鏃が、また周辺から地文上に4条の横位偏面圧痕文が施された土器片が出土した。この土器片の口唇部には刺突が施される。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

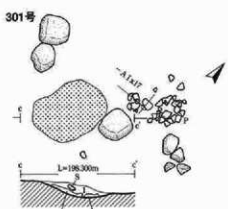
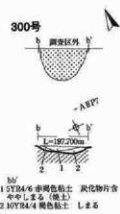
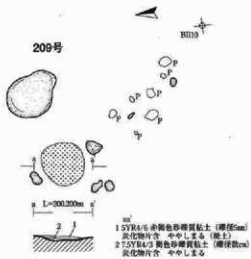
302号焼土遺構 (第112・120図、写真図版89)

<位置・検出状況> 6区東側旧河道内の-B I c11区に位置し、V層で検出された。本遺構周辺ではややまとまった土器片や数10cm大の重円礫が出土した。炭化物片が本遺構を取り囲むように広がり、長期間あるいは比較的大規模に使用されていた可能性がある。

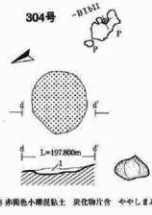
<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は100×80cmで、厚さは最大10cmである。

<出土遺物> 炭化物分布範囲から燃糸文の土器片や、石鏃、石匙が出土している。

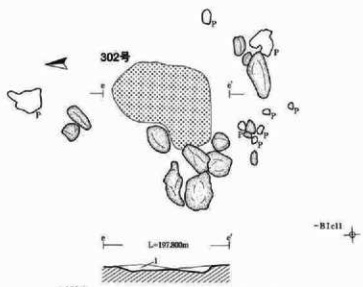
<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。



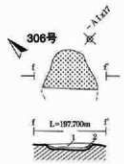
30
1 5YR4/5 赤褐色礫質粘土質砂 (礫径最大10cm、重円礫、角状不具) ややしまる (焼土)
2 7.5YR3/4 暗褐色砂質粘土 ややしまる



30
1 2.5YR4/6 赤褐色小礫質粘土 炭化物片含 ややしまる
(焼土)



30
1 2.5YR4/6 赤褐色小礫質粘土 炭化物・骨片含 ややしまる (焼土)



30
1 2.5YR2/4 暗赤褐色砂質シルト ややしまる (焼土層)
2 2.5YR2/6 暗赤褐色砂質シルト ややしまる (焼土層)

0 1:40 1m

第112図 焼土遺構 (5)

304号焼土遺構（第112図、写真図版89）

＜位置・検出状況＞ 6区東側旧河道内の-B I b11区に位置し、V層で検出された。本遺構周辺では数10cmの亜円礫が、南東側約90cmで土器片がややまとまって出土した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形状を呈し、規模は66×60cmである。厚さは最大6cmである。

＜出土遺物＞ 周辺から土器が出土している。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

305号焼土遺構（第111図、写真図版90）

＜位置・検出状況＞ 7区中央北側の-A T w19区に位置し、V層で検出された。本遺構の約1.9m北西側に320号住居跡が隣接する。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は57×36cmである。厚さは最大5cmである。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

306号焼土遺構（第112図、写真図版90）

＜位置・検出状況＞ 7区北東側の-A I w18区に位置し、V層で検出された。検出時に作業指示の手違いから遺構の一部を掘りすぎてしまった。本遺構の南西側には319号住居跡が隣接する。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整な楕円形を呈すると推測される。規模は41以上×58cmである。厚さは最大4cmである。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

400号焼土遺構（第113図、写真図版90）

＜位置・検出状況＞ 2区北側のB I j15区に位置し、IVa1層で検出された。本遺構の約2m東側には401号焼土遺構が隣接する。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整な四角形状を呈する。規模は46×36cmである。厚さは最大9cmである。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

401号焼土遺構（第113・120図、写真図版90・135）

＜位置・検出状況＞ 2区北側のB I j16区に位置し、IVa2層で検出された。本遺構の南東側の一部が自然の働きで攪乱をうけている。本遺構の約2m西側には400号焼土遺構が、約2m東側には402号焼土遺構が隣接する。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は75×50cmである。厚さは最大9cmである。また、焼土のまわりを幅10～20cmでドーナツ状に炭化物が集中している。

＜出土遺物＞ 非結東羽状縄文の土器片が出土した。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

402号焼土遺構（第113図、写真図版91）

<位置・検出状況> 2区北側のB I j 6区に位置し、IVa1層で検出された。本遺構の西側の一部が自然の働きで攪乱をうけている。本遺構の約2m西側には401号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な四角形状を呈する。規模は50×44cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

403号焼土遺構（第113図、写真図版91）

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I j 5区に位置し、V層で検出された。本遺構の約1.6m南側に407号焼土遺構が隣接する。本遺構は検出後に台風6号通過に伴う大雨で崩落した土砂に埋まり、調査不能となったため、断面観察は行っていない。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は50×48cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

404号焼土遺構（第114図、写真図版91）

<位置・検出状況> 4区東側の-B I i 2区に位置し、IVa2層で検出された。IVa2層はTo-Cu直下の褐色粘土層で多くの炭化物片が本遺構周辺に分布する。また、本遺構の西側には410・408・409号焼土遺構が、北側には400号炭化物集積遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形はアルファベットのFを横にしたような形状を呈する。規模は28×15cmで、厚さは約1cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

405号焼土遺構（第113図、写真図版91）

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I k 8区に位置し、V層で検出された。本遺構の約2m南西側には405号住居跡が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は74×48cmで、厚さは最大6cmある。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

406号焼土遺構（第113図、写真図版92）

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I j 6区に位置し、V層で検出された。本遺構の約4m西側には403・407号焼土遺構が隣接する。本遺構は検出後に台風6号通過に伴う大雨で崩落した土砂に埋まり、調査不能となったため、断面観察は行っていない。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は54×39cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

407号焼土遺構 (第113図、写真図版92)

<位置・検出状況> 3区中央北側のB I j 6区に位置し、V層で検出された。本遺構の約1.6m北側に403号焼土遺構が隣接する。本遺構は検出後に台風6号通過に伴う大雨で崩落した土砂に埋まり、調査不能となったため、断面観察は行っていない。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は37×21cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

408号焼土遺構 (第114図、写真図版92)

<位置・検出状況> 4区東側の-B I h 3区に位置し、IVa層で検出された。本遺構の北側は試掘トレンチで掘抜かれており、全体形は不明である。検出上は2遺構に見えるが、前記の理由で本来的には1遺構であったと推測した。本遺構周辺には炭化物片が散在する。西側には409号焼土遺構が、西側には410・404号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は歪な三角形と四角形を呈する。規模は22×16cm、25×23cm、厚さは0.5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

409号焼土遺構 (第114図、写真図版92)

<位置・検出状況> 4区東側の-B I h 3区に位置し、IVa層で検出された。本遺構の約2.0m東側には408号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は円形状を呈する。規模は13×11cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

410号焼土遺構 (第114図、写真図版92)

<位置・検出状況> 4区東側の-B I h 3区に位置し、IVa層で検出された。本遺構の約1.5m西側には408号焼土遺構が、約3m東側には404号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は隅丸で歪な三角形形状を呈する。規模は48×35cmで、厚さは約1cmある。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

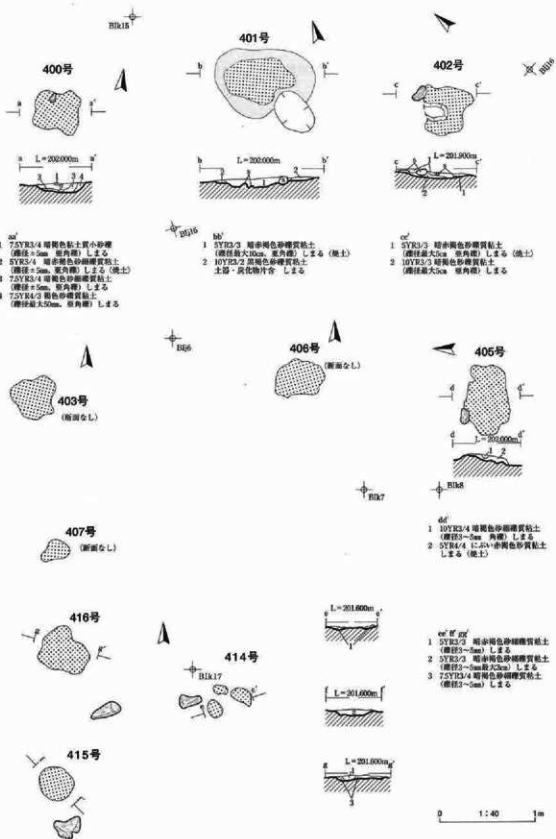
414号焼土遺構 (第113図、写真図版92)

<位置・検出状況> 2区東側のB I k 17区に位置し、V層で検出された。検出時にやや掘りすぎ厚い部分が残ったため、見かけ上3遺構になってしまったが、本来的には1遺構であった。本遺構の約1.7m西側には416号焼土遺構が、約2m南西側には415号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は3遺構ともに不整な楕円形状を呈する。規模は大きいものから25×15cm、18×14cm、15×8cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。



第113図 焼土遺構 (6)

415号焼土遺構 (第113図、写真図版93)

<位置・検出状況> 2区東側のB I k16区に位置し、V層で検出された。本遺構の約2m北西側には414号焼土遺構が、約1.5m北側には416号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈し、規模は37×34cmである。厚さは最大7cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

416号焼土遺構 (第113図、写真図版93)

<位置・検出状況> 2区東側のB I j16区に位置し、V層で検出された。本遺構の約2m南東側には414号焼土遺構が、約1.5m南側には415号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は50×48cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

417号焼土遺構 (第114図、写真図版93)

<位置・検出状況> 2区東側のB I j15区に位置し、V層で検出された。近接する小規模な焼土群を1つの焼土遺構として扱った。

<平面形・規模> 平面形はいずれも歪な楕円形状を呈し、規模は大きいもので30×15cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

418号焼土遺構 (第114図、写真図版93)

<位置・検出状況> 2・3区を区画する土層ベルトのB I j14区に位置し、IVa2層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は18×16cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

419号焼土遺構 (第114図、写真図版93)

<位置・検出状況> 2・3区を区画する土層ベルトのB I j14・15区に跨って位置し、IVa2層で検出された。本遺構の約1m北東側に420号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整形を呈し、規模は65×56cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

420号焼土遺構 (第114図、写真図版94)

<位置・検出状況> 2・3区を区画する土層ベルトのB I j15区に位置し、IVa2層で検出された。土層観察用ベルト内にあり、調査の手順上ベルトを外せなかったために2回に分けての検出となった。

<平面形・規模> 平面形は不整な四角形を呈し、規模は41×32cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

422号焼土遺構 (第114・120図、写真図版94・135)

<位置・検出状況> 0区東側のBⅡm6・7区に跨って位置し、VIa相当層で検出された。本遺構に近接して比較的まとまって土器片が出土した。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈し、規模は20×16cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 周辺から撚糸文で施文された土器片が出土した。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

423号焼土遺構 (第114・120図、写真図版94、120)

<位置・検出状況> 0区東端のBⅡm8区に位置し、Ⅸ層で検出された。本遺構の一部周辺で炭化物片が多く出土した。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は50×32cmである。厚さは最大8cmである。

<出土遺物> 本遺構内から斜縄文の土器片が出土した。

<時期> 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

424号焼土遺構 (第114図、写真図版94)

<位置・検出状況> 4区中央付近の-BⅠh4区に位置し、Ⅴ層で検出された。本遺構の約2m北西側に425号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は55×43cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

425号焼土遺構 (第114図、写真図版95)

<位置・検出状況> 4区中央付近の-BⅠh4区に位置し、Ⅴ層で検出された。本遺構の約2m南東側に424号焼土遺構が隣接する。本遺構は比較的規模が大きく、周辺から出土する遺物や炭化物の量から住居跡の可能性があったが、台風6号による法面崩落のために南側の一部が調査不能となり全貌が明らかにならなかったために焼土遺構として認定した。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈すると推測される。規模は85以上×60cmである。厚さは最大11cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

426号焼土遺構 (第115・120図、写真図版95・135～136)

<位置・検出状況> 2区中央西寄りのBⅠℓ15区に位置し、Ⅳas層で検出された。本遺構に近接して南側で土器片が出土した。約2m北側には427号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整なハート形状を呈する。規模は33×34cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 近接して斜縄文の土器片が出土した。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

427号焼土遺構 (第115・120図、写真図版95・136)

<位置・検出状況> 2区中央西寄りのB I k15区に位置し、V層で検出された。本遺構に近接して西側で土器片が出土した。約2m南側には426号焼土遺構が隣接する。

<出土遺物> 近接して非結東羽状縄文の土器片が出土した。口唇部に斜位の側面圧痕文が施文される。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

432号焼土遺構 (第115・120図、写真図版96)

<位置・検出状況> 2区中央東寄りのB I k16～17区に跨って位置し、V層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は68×50cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

433号焼土遺構 (第115・120図、写真図版96)

<位置・検出状況> 2区北側のB I j15～16区に跨って位置し、V層で検出された。近接する焼土群を1つの遺構として扱った。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形・三角形・コの字形を呈し、規模は大きいもので50×41cmである。厚さは最大7cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

434号焼土遺構 (第115・120図、写真図版96)

<位置・検出状況> 2区北側のB I i16区に位置し、V層で検出された。本遺構は4.5×2.5m範囲内に5基検出された焼土群の1つで、東側に位置している。

<平面形・規模> 平面形は不整形を呈し、規模は110×30cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 下部から無文の土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

435号焼土遺構 (第115・120図、写真図版96)

<位置・検出状況> 2区北側のB I i15区に位置し、V層で検出された。本遺構は4.5×2.5m範囲内に5基検出された焼土群の1つで、北側に位置している。

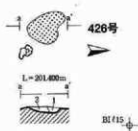
<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は56×37cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 側面圧痕文で施文された土器片と斜縄文が出土している。

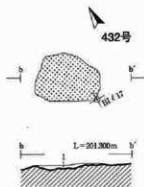
<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

436号焼土遺構 (第115図、写真図版96)

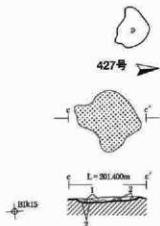
<位置・検出状況> 2区北側のB I i15区に位置し、V層で検出された。本遺構は4.5×2.5m範囲内に5基検出された焼土群の1つで、西側に位置している。



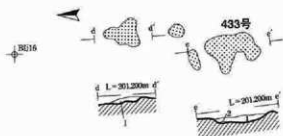
- 1 5YR3/4 暗赤褐色砂礫質粘土
固くしまる (焼土)
2 7.5YR3/4 暗褐色砂礫質粘土
固くしまる



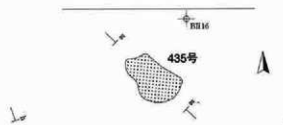
- 1 5YR3/2 暗赤褐色砂質シルト
固くしまる (焼土)



- 1 5YR4/6 赤褐色砂礫質粘土
しまる (焼土)
2 10YR3/4 褐色粘土質砂礫
(厚径約5mm) 固くしまる



- 1 10YR3/3 暗赤褐色砂 ややしまる (焼土)
2 7.5YR3/3 暗褐色砂質粘土 しまる



- 1 5YR3/4 暗赤褐色砂礫質粘土と
7.5YR3/4 暗褐色砂礫質粘土との
混合土 しまる (焼土)
2 7.5YR3/3 暗褐色砂礫質粘土
土器片・石器・炭化物・骨片を
しまる

- 1 7.5YR3/3 暗褐色黄砂質粘土
(厚径10cm, 中央部) しまる (焼土)
2 5YR3/2 黒褐色砂礫質粘土
しまる

- 1 5YR3/6 暗赤褐色砂礫質粘土
しまる (焼土)
2 10YR3/4 暗褐色砂礫質粘土
(厚径最大約5mm) しまる

- 1 5YR3/3 暗赤褐色砂礫質粘土
しまる

- 1 5YR3/4 暗赤褐色砂礫質粘土
炭化物片 (3%) を含くしまる (焼土)
2 7.5YR3/4 暗褐色砂礫質粘土
しまる (焼土)



第115図 焼土遺構 (8)

<平面形・規模> 平面形は不整形を呈し、規模は55×46cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 本遺構に近接して側面正痕文で施文された土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

437号焼土遺構（第115図、写真図版97）

<位置・検出状況> 2区北側のB I i16区に位置し、V層で検出された。本遺構は4.5×2.5m範囲内に5基検出された焼土群の一つで、南側に位置している。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は42×26cmである。厚さは最大3cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

441号焼土遺構（第116図、写真図版97）

<位置・検出状況> 2区北側のB I i15区に位置し、V層で検出された。本遺構は8基検出された焼土群の中の最西端に位置する3基の一つである。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は95×47cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

442号焼土遺構（第116図、写真図版97・135）

<位置・検出状況> 2区北側のB I i15区に位置し、V層で検出された。本遺構は8基検出された焼土群の中の最西端に位置する3基の一つである。

<平面形・規模> 平面形は不整形を呈し、規模は55×40cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 薄手の側面正痕文の土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

443号焼土遺構（第116・120図、写真図版97）

<位置・検出状況> 2区北側のB I i15区に位置し、V層で検出された。本遺構は8基検出された焼土群の中の最西端に位置する3基の一つである。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は95×47cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

444号焼土遺構（第116図、写真図版97）

<位置・検出状況> 0区東側のB II n 7区に位置し、X層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は100×57cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期後葉～前期初頭頃と考えられる。

445号焼土遺構 (第116図、写真図版98)

<位置・検出状況> 3区中央南側のBI f 7区に位置し、V相当層で検出された。本遺構周辺は跡りが良く、住居跡の可能性も考えたが、プランを確認できず単独の焼土遺構とした。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は50×38cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

446号焼土遺構 (第116図、写真図版98)

<位置・検出状況> 2区中央付近のBI j16区に位置し、IVa層で検出された。検出当初住居跡の可能性も考えたが、本遺構の規模や住居プランなどの明瞭な構造を確認できないため単独の焼土遺構とした。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は29×25cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

447号焼土遺構 (第115図、写真図版98)

<位置・検出状況> 2区北側のBI i15・16区に跨って位置し、V層で検出された。本遺構は8基の焼土群の南側に位置する1基である。

<平面形・規模> 平面形は歪な長方形形状を呈し、規模は77×47cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

448号焼土遺構 (第116・120図、写真図版98・135)

<位置・検出状況> 3区西側のBI k 5区に位置し、V層で検出された。本遺構は423号住居跡の北西側に隣接している。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は76×64cmである。厚さは最大13cmである。

<出土遺物> 薄手の斜縄文の土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

452・453号焼土遺構 (第90図、写真図版100～101)

<位置・検出状況> 8区南側の-A I s24区に位置し、V層で検出された。2遺構は近接して検出され、425号住居跡の南東側に隣接し、その屋外かの可能性もある。

<平面形・規模> 平面形はともに不整な楕円形状を呈し、規模は452号焼土遺構が25×21cm、453号焼土遺構が54×42cmある。厚さは両遺構ともに5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

455号焼土遺構 (第116図、写真図版99)

<位置・検出状況> 2区東側のBI j・k17区に跨って位置し、V層で検出された。上層観察用バルト内で検出され、バルト外の部分は掘削段階で検出できず剥失してしまった。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈すると推測され、規模は38以上×39cmである。厚さは最大9cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

456号焼土遺構 (第116図、写真図版99)

<位置・検出状況> 0区中央南寄りのB II 4区に位置し、X層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は54×51cmである。厚さは最大7cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期後葉～前期初頭頃と考えられる。

457号焼土遺構 (第116図、写真図版99)

<位置・検出状況> 2区北側のB I 15～16区に跨って位置し、Ⅶa2層で検出された。本遺構下で461号焼土遺構が検出されており、本遺構使用前に利用されたと考えられる。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は120×72cmである。厚さは最大9cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

458号焼土遺構 (第116図、写真図版99)

<位置・検出状況> 2区東側のB I j17区に位置し、土層観察用ベルト内のⅦa2層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は82×36cmである。厚さは最大4cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

459号焼土遺構 (第117図、写真図版100)

<位置・検出状況> 2区東側のB I k17区に位置し、土層観察用ベルト内のⅦa2層で検出された。3年目調査当初から2区東側断面をクリーニング中に確認されていたもので、東端縁が割裂されている。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈すると推測され、規模は81×38cm以上である。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

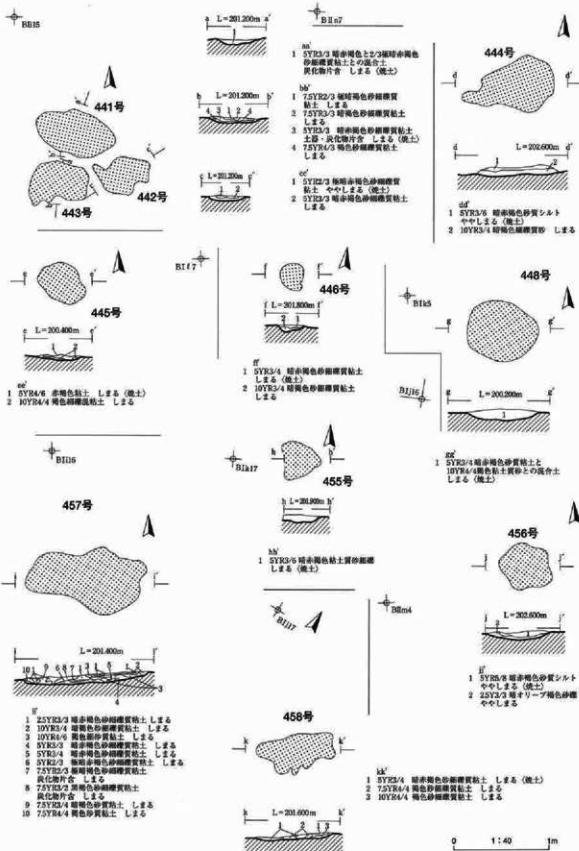
460号焼土遺構 (第117図、写真図版100)

<位置・検出状況> 3区西側のB I j3区に位置し、Ⅶb層で検出された。本遺構検出面の上位層Ⅴ層で第418号住居跡が検出されている。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は30×26cmである。厚さは最大5cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。



第116図 焼土遺構 (9)

461号焼土遺構（第117・120図、写真図版100・136）

<位置・検出状況> 2区北側のB I i 6区に位置し、Ⅳa3層で検出された。本遺構上で457号焼土遺構が検出されており、本遺構使用後に利用されたと考えられる。

<平面形・規模> 平面形は歪な台形状を呈し、規模は180×97cmである。厚さは最大6cmである。

<出土遺物> 焼土内から斜縄文と貝殻文の上器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉頃と考えられる。

462号焼土遺構（第117図、写真図版101）

<位置・検出状況> 4区西端の-B I h 7区に位置し、Ⅳa3層で検出された。本遺構の南側に隣接して最大長120cmの炭化木が2本出土している。2本ともに北東-南西方向に並ぶ。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は76×42cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

4. 炭化物集積遺構

300号炭化物集積遺構（第117図、写真図版101）

<位置・検出状況> 7区北西側の-A I v 20区に位置し、To-Cu直下のⅣb層で検出された。北側の一部は調査区外に延びる。炭化物片は平均約1cm、最大数cmの長方形状で脆い。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈すると推測される。規模は155×75cm以上で、厚さは最大3cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

400号炭化物集積遺構（第118図、写真図版102）

<位置・検出状況> 4区東側の-B I i 2区に位置し、To-Cu直下のⅣb層で検出された。北側の一部は調査区外に延びている。炭化物片の特に密集する部分とその東西方向両側に密度の薄い部分が検出された。炭化物片は最大数cmの長方形状で、脆い。中央の炭化物密集部分下から小規模な焼土遺構が検出された。

<平面形・規模> 全体的に不整形である。炭化物密集部分は歪な楕円形状で東西方向に長軸を持つ。規模は234×143cmで、厚さは最大2cmである。焼土遺構は不整形でともに東西方向に長軸をもつ。西側の位置するものは規模が42×27cmで、厚さは最大1cmである。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

401号炭化物集積遺構（第118図、写真図版102）

<位置・検出状況> 4区西側の-B I h 7区に位置し、To-Cu直下のⅣb層で検出された。Ⅳb層は薄く、本層下にはⅣb層の礫層が広がる。炭化物片は最大数cmの長方形状で脆い。

<平面形・規模> 平面形は歪な楕円形状を呈し、北西-南東方向に長軸を持つ。規模は270×120cmで、厚さは最大4cmである。

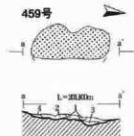
<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

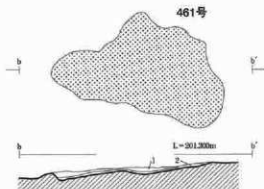
B1117



- 461号
- 1 5YR3/4 暗赤褐色粘土質砂礫層 土器片含
ややしまる
- 2 10YR4/4 褐色砂礫層 ややしまる
(障山)

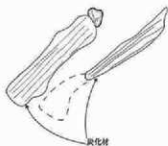


- 459号
- 1 7.5YR4/4 赤褐色砂礫層質粘土
しまる
- 2 5YR4/6 赤褐色粘土 炭化物片
含しまる
- 3 5YR3/4 暗赤褐色砂質粘土
しまる
- 4 7.5YR4/4 褐色砂質粘土
しまる

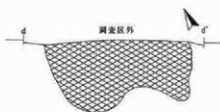
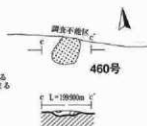


B1268

462号



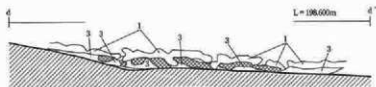
- 462号
- 1 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 ややしまる
- 2 5YR4/4 に3:1赤褐色砂質粘土 しまる



300号炭化物集積遺構

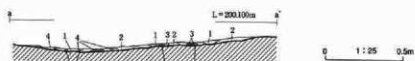
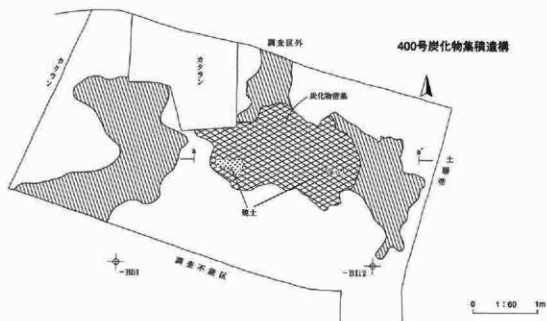
A1720

- 300号
- 1 10YR7/4 に3:1黄褐色火山灰質シルト しまる (To-Cu)
- 2 7.5YR2/7 褐色 炭化物片含 ややしまる
- 3 7.5YR4/3 褐色粘土 炭化物片含 しまる

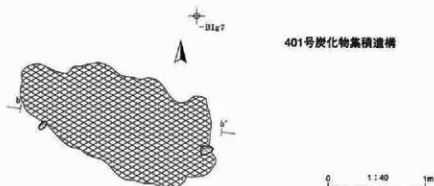


0 1:40 1m
S=1:20

第117図 焼土遺構 (10)・炭化物集積遺構 (1)

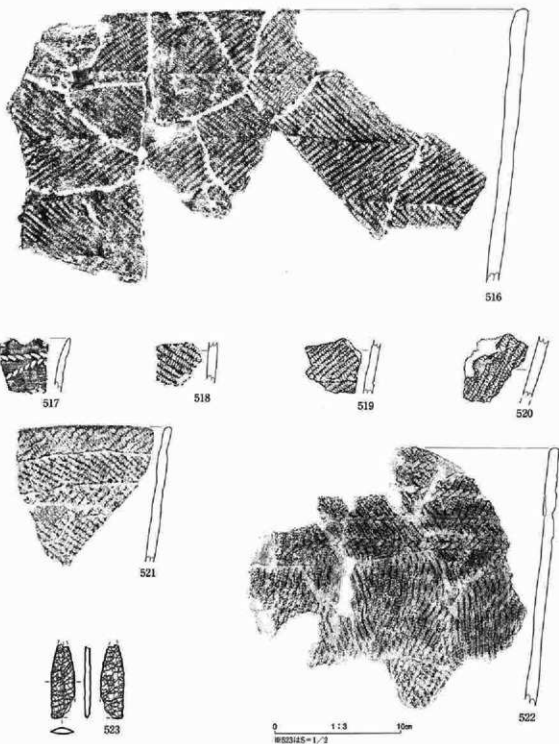


- aa'
- 1 5YR3/2 暗赤褐色粘土炭化物片 (1~2cm, 50%) 含 しまる
 - 2 10YR3/3 暗褐色粘土 炭化物片 (=2cm, 20%) 含 しまる
 - 3 5YR4/6 赤褐色粘土 炭化物片 (5~20cm, 15%) 含 しまる
 - 4 10YR3/3 暗褐色粘土 しまる



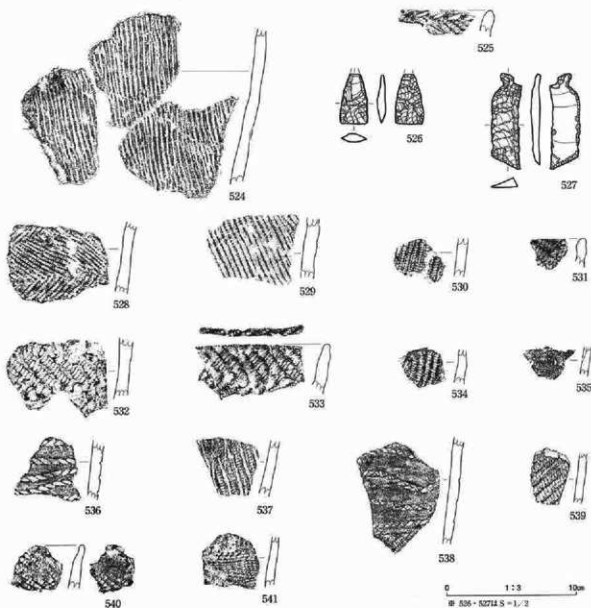
- bb'
- 1 10YR3/4 暗褐色粘土 炭化物片・塊状明黄褐色火山灰質シト多量含 しまる
 - 2 10YR3/4 暗褐色砂礫粘土 L 2.0

第118図 炭化物集積遺構 (2)



図版番号	登録番号	出土地点	層位	形状	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
516	00-352	4号焼土遺構	露上	浮体	口縁	多岐安部状縄文	ナデ	Ⅲ	10mm	植物繊維混入
517	00-356	18号焼土遺構	焼土内	浮体	口縁	多岐任意文(横説・斜説)、先周筋状、斜列足	ナデ	Ⅲ	5	植物繊維混入
518	00-442	27号焼土遺構	焼土内	浮体	胴	斜	ナデ	Ⅱ	7	植物繊維混入
519	00-441	29号焼土遺構	焼土内	浮体	胴	斜	ナデ	Ⅱ	6	植物繊維混入
520	00-437	29号焼土遺構	焼土内	浮体	胴	斜	ナデ	Ⅱ	6	植物繊維混入
521	01-342	209号焼土遺構	周込一筋	浮体	口縁	多岐系羽状縄文	ナデ	Ⅲ	7	植物繊維混入
522	01-2090	301号焼土遺構	周込一筋	浮体	口縁	縄文上に横位斜筋任意文	ナデ	Ⅲ	7	植物繊維混入
523	1139	石質								先周・石基部欠損

第119図 焼土遺構出土物(1)



図録番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器厚	備考	
524	01-2005	302号焼土遺構	層位一括	漆鉢	胴	無文				植物繊維混入	
525	01-202	302号焼土遺構	層位一括	漆鉢	口	凡、口唇：刻み					
526	1039	石炭	IA	302号焼土遺構	胴部	縦筋	26	15	5	1.83	頁岩
527	1079	石炭	IB	302号焼土遺構	胴部	縦筋	50.5	15.5	5	4.66	頁岩
528	02-219	401号焼土遺構	焼土下部	漆鉢	胴	垂直波状縄文					
529	02-293	423号焼土遺構	層位一括	漆鉢	胴	無文					
530	02-216	423号焼土遺構	焼土内	漆鉢	胴	凡					
531	02-203	436号焼土遺構	層位一括	漆鉢	口縁	凡					
532	02-204	436号焼土遺構	層位一括	漆鉢	胴	凡					
533	02-205	427号焼土遺構	層位一括	漆鉢	口縁	垂直波状縄文 口唇に舞面汗流文					
534	02-217	432号焼土遺構	焼土内	漆鉢	胴	凡					
535	02-212	434号焼土遺構	焼土下部	漆鉢	口縁	無文					
536	02-214	435号焼土遺構	焼土下部	漆鉢	口縁	舞面汗流文(横状・斜状)					
537	02-215	435号焼土遺構	焼土内	漆鉢	胴	凡					
538	02-213	440号焼土遺構	焼土下部	漆鉢	口縁	舞面汗流文(横状・斜状)					
539	02-218	448号焼土遺構	焼土内	漆鉢	胴	凡					
540	02-210	451号焼土遺構	焼土内	漆鉢	口縁	凡					
541	02-209	451号焼土遺構	焼土内	漆鉢	胴	舞面汗流文					

第120図 焼土遺構出土遺物(2)

5. 土坑

53号土坑 (第121図、写真図版103)

<位置・検出状況> 1区南西端のB1n18区に位置し、Ⅲ層で検出された。本遺構の約2m北東側に55号土坑が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が166×118cm、底部が138×80cm、深さが12cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 主に暗褐色土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。Ⅲ層が底となる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 出土遺物は2次的混入とみられ検出層位から縄文時代晩期頃と考えられる。

55号土坑 (第121・127図、写真図版103・136)

<位置・検出状況> 1区南西側のB1m18区に位置し、Ⅲ層で検出された。本遺構の約2m南西側に53号土坑が隣接する。

<平面形・規模> 平面形はやや不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が120×90cm、底部が64×53cm、深さが14cmである。断面形は段付の皿状を呈する。

<埋土> 主に暗褐色土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。Ⅲ層が底となる。

<出土遺物> 短沈線文と刺突文で構成される文様を持つ土器片が出土している。

<時期> 検出層位から縄文時代晩期頃と考えられる。

56号土坑 (第121・127図、写真図版103・136)

<位置・検出状況> 1区西側のB1k19区に位置し、Ⅳa層で検出された。本遺構は20号住居跡のプランを検出中にその北側で検出されたものである。

<平面形・規模> 平面形はやや不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が128×115cm、底部が96×66cm、深さが52cmである。断面形はやや直な逆舟形状を呈する。

<埋土> 8層に区分される。主に砂礫質土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 短沈線文と側面圧痕文で施文される土器片が出土している。

<時期> 検出層位と出土遺物から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

57号土坑 (第121図、写真図版103)

<位置・検出状況> 1区西側のB1k18区に位置する。30号住居跡を精査中に検出され、埋土からⅣa層から掘り下げられていると判断した。

<平面形・規模> 平面形はやや不整な円形状を呈する。規模は、開口部が98×87cm、底部が44×40cm、深さが23cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 暗褐色土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

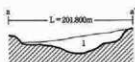
<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

113号土坑 (第122図、写真図版104)

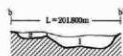
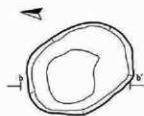
<位置・検出状況> 3区中央付近のB1k12区に位置し、Ⅳa層で検出された。

53号



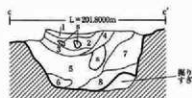
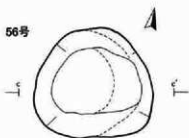
- a-a'
1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
上部に10YR2/3 黒褐色シルト混入 (60%)
しまる

55号



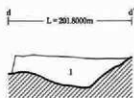
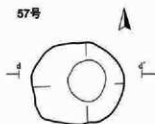
- b-b'
1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 固くしまる
2 10YR4/4 褐色砂質シルト しまる

56号



- c-c'
1 10YR3/4 浅黄褐色砂 しまる (To Cu)
2 10YR3/6 褐色砂礫 (粒径20cm以下, 50%) しまる
3 10YR3/4 暗褐色砂礫 (粒径1cm, 50%) 固くしまる
4 7.5YR3/6 褐色砂質シルト しまる
5 10YR3/2 黒褐色砂礫 (粒径1cm以下, 30cm) 土器片含 固くしまる
6 10YR3/2 黒褐色硬質粘土 しまる
7 10YR3/6 褐色砂礫 固く
8 10YR3/4 暗褐色粘土、石礫含 固くしまる

57号



- d-d'
1 10YR3/4 暗褐色砂礫質粘土 しまる

0 1:40 5m

第121図 土坑 (1)

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が164×102cm、底部が76×43cm、深さが14cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 2層に区分され、主に砂礫質粘土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

120号土坑 (第122図、写真図版104)

<位置・検出状況> 3区北東側のB I j13区に位置し、IVa層で検出された。本遺構の約1.8m東側に第18号焼土遺構、約2.4m北東側に17号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が103×78cm、底部が65×40cm、深さが8cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 2層に区分される。粘土質な地山に対して細礫質土と砂質土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

200号土坑 (第122・127図、写真図版104・136)

<位置・検出状況> 3区中央付近のB I j12区に位置し、IVa層で検出された。土器片がとくに多く出土し、シルト～粘土で埋められ、明瞭なプランで検出された。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が142×82cm、底部が96×45cm、深さが18cmある。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 3層に区分される。砂礫質な地山に対して褐色シルトと暗褐色粘土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 側面土痕文と短沈線文で構成されたものや非紡束羽状縄文で施文された土器片が出土している。

<時期> 検出層位と出土遺物から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

201号土坑 (第123図、写真図版104)

<位置・検出状況> 3区南側のB I k 8～9区に跨って位置し、IVa層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が170×133cm、底部が150×100cm、深さが22cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 3層に区分される。砂礫質な地山に対して大礫～巨礫を含む暗褐色粘土で埋積されている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

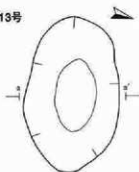
<時期> 検出層位から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

202号土坑 (第123・127図、写真図版105・136)

<位置・検出状況> 3区南側のB I f11区に位置し、V層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が107×91cm、底部が80×68cm、深

113号



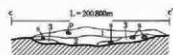
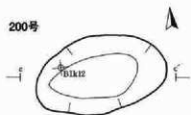
- 1 25Y4-3 オリーブ褐色粘土質砂礫
(直径10cm、内縁～室外縁) しまる
2 10YR4-3 に近い黄褐色砂礫質粘土
(直径5cm、内縁) ややしまる

120号



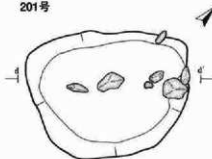
- 1 10YR2-2 黒褐色砂質土礫
(厚径3-5cm、室内縁) 高さ良、しまりわるい
2 10YR5-4 に近い黄褐色砂 炭化物片含 しまる

200号



- 1 10YR4-4 褐色砂礫質シルト
(直径平均5cm) 土器片、炭屑、炭化物片含 しまる
2 10YR5-4 暗褐色砂礫質粘土
(直径平均5cm) ややしまる
3 10YR6-7 に近い黄褐色砂礫
(直径平均5cm最大50cm、室内縁) しまる

201号



- 1 10YR2-4 暗褐色砂礫質粘土
(直径平均5cm最大20cm、室内～室外縁) しまる
2 10YR2-5 暗褐色砂礫質粘土 しまる
3 7.5YR4-3 褐色粘土質砂礫
(直径平均3-5cm) しまる 地山 (掘りすき)

0 1:40 1m

第122図 土坑 (2)

さが13cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 黒褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 薄手の斜縄文の上濬片が出土している。口唇部に指頭状圧痕文が施文され、小波状を呈する。

<時期> 検出層位と出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。

203号土坑 (第123図、写真図版105)

<位置・検出状況> 2区南側のB1c17区に位置し、X層で検出された。本遺構周辺ではX層(砂礫)上に直接II層が堆積している。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が140×123cm、底部が78×43cm、深さが18cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 4層に区分された。主に黒褐色雑泥シルトで埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代晩期末～弥生時代初頃と考えられる。

204号土坑 (第123・127図、写真図版105)

<位置・検出状況> 3区中央付近のB1j10区に位置する。土層観察川断面でV層を掘り込む断面が確認された。半分は削平され底部のみが検出された。木造構の約2m西側に207号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が93以上×34cm以上、底部が53×46cm、深さが20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 黒褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

307号土坑 (第123・127・128図、写真図版105・136・137)

<位置・検出状況> 6区南側(旧自然堤防上)の-B1c13区に位置し、V層で検出された。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が198×187cm、底部が167×157cm、深さが21cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 2層に区分された。主に暗褐色粘土で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 縦走する摺糸文の1器片が出土している。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

308号土坑 (第124・127図、写真図版106・137)

<位置・検出状況> 6区南側(旧自然堤防上)の-B1c14区に位置し、V層で検出された。

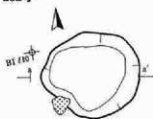
<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が108×98cm、底部が92×80cm、深さが14cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 黒褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 縦走する摺糸文の1器片が出土している。

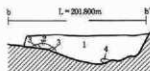
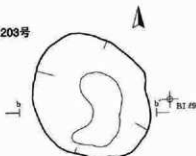
<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

202号



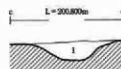
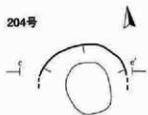
- a-a'
- 1 10YR3/2 黒褐色凝縮砂質粘土 (層厚10-30cm, 2%)
ややしまる
 - 2 10YR3/3 暗褐色粘土質砂礫
(層厚平均10-20cm最大30cm, 東門側) ややしまる (鏡りすず)

203号



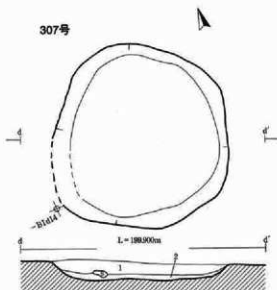
- b-b'
- 1 5YR2/1 黒褐色凝縮シルト
(層厚10-50cm, 東門側, 1%) ややしまる
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色凝縮シルト質粘土
(層厚約10cm, 東門側, 1%) ややしまる
 - 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質粘土 ややしまる
 - 4 10YR3/2 黒褐色砂 ややしまる

204号



- c-c'
- 1 10YR3/2 黒褐色砂礫質粘土 (層厚平均6cm)
炭化物片含 しまる

307号



- d-d'
- 1 10Y3/4 暗褐色砂礫質粘土 (層厚20cm, 東門側)
土器・炭化物片含 ややしまる
 - 2 10YR2/2 黒褐色凝縮質粘土 (層厚10cm未満, 東門側)
土器・右器片含 ややしまる

0 1:40 1m

第123図 土坑 (3)

310号土坑 (第124図、写真図版105)

<位置・検出状況> 7区南東側(旧自然堤防上)の-B I a17区に位置し、X層で検出された。本遺構周辺数m以内に312号~314号土坑が隣接する。本遺構周辺ではX層上に直接IVa層が堆積している。

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が200×108cm、底部が132×52cm、深さが17cmである。北東壁はやや急に立ち上がり、南西壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 2層に区別される。下に黒色シルトで埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代晩期末~弥生時代初頃と考えられる。

312号土坑 (第124図、写真図版106)

<位置・検出状況> 7区南東側(旧自然堤防上)の-B I a17区に位置し、X層で検出された。本遺構周辺数m以内に310号・313号・314号土坑が隣接する。本遺構周辺ではX層上に直接IIb層が堆積している。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が105×90cm、底部が55×30cm、深さが20cmである。北東壁はやや急に立ち上がり、南西壁は緩やかに立ち上がる。

<埋土> 暗褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代晩期末~弥生時代初頃と考えられる。

313号土坑 (第124図、写真図版106)

<位置・検出状況> 7区南東側(旧自然堤防上)の-B I a17区に位置し、X層で検出された。本遺構周辺数m以内に310号・312号・314号土坑が隣接する。本遺構周辺ではX層上に直接IIb層が堆積している。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が90×73cm、底部が37×28cm、深さが8cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 黒褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代晩期末~弥生時代初頃と考えられる。

314号土坑 (第124図、写真図版107)

<位置・検出状況> 7区南東側(旧自然堤防上)の-B I a17区に位置し、X層で検出された。本遺構周辺の数m以内に310号・312号・313号土坑が隣接する。本遺構周辺ではX層上に直接IIb層が堆積している。

<平面形・規模> 平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部が90×73cm、底部が37×28cm、深さが8cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

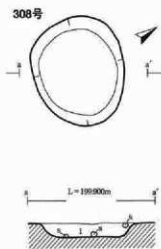
<埋土> 黒褐色粘土の単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

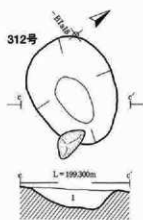
<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代晩期末~弥生時代初頃と考えられる。

317号土坑 (第125図、写真図版107)

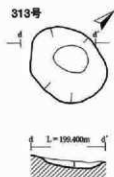
<位置・検出状況> 7区北西側(旧河道上)の-A I v21区に位置し、V層で検出された。本遺構の約2m北西側に321号土坑、南側に318号住居跡が隣接する。



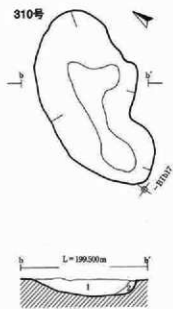
1 23Y3-2 黒褐色砂礫質粘土
(層厚50mm以下、底円錐) 土面片倉 中々しまる



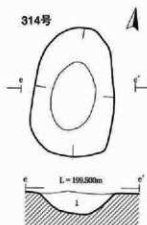
1 10YR3-2 暗褐色砂礫質粘土
(層厚平均3-5cm、最大10cm) 中々しまる



1 10YR3-2 暗褐色砂礫質粘土
(層厚最大10cm、底円錐) 中々しまる



1 7.5YR2/1 黒色砂質シルト 中々しまる
2 10YR3-2 暗褐色砂礫質粘土 中々しまる



1 10YR3-2 暗褐色砂礫質粘土
(層厚最大30cm、底円錐) 中々しまる

0 1:40 1m

第124図 土坑(4)

<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が157×137cm、底部が110×84cm、深さが8cmである。断面形は浅い皿状を呈する。

<埋土> 褐色粗細質シルトの単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。

318号土坑（第125図、写真図版107）

<位置・検出状況> 7区北西側（旧河道上）の-A I v20区に位置し、V層で検出された。遺構の一部が調査区外に延びる。本遺構の約2m南東側に319号土坑、南西側に320号住居跡が隣接する。

<平面形・規模> 遺構の一部がしか検出できないため平面形の詳細は不明である。規模は、開口部が37以上×30以上cm、底部が30以上×25以上cm、深さが23cmである。壁は凹凸が激しく、比較的急角度で立ち上がる。

<埋土> 暗オリーブ色のシルトの単層で埋められている。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。

319号土坑（第125図、写真図版107）

<位置・検出状況> 7区北側（旧河道上）の-A I w19区に位置し、V層で検出された。遺構の一部が調査区外に延びる。本遺構の約2m南東側に305号焼土遺構が隣接する。

<平面形・規模> 検出した部分からは不整な楕円形を呈すると推測されるが、詳細は不明である。規模は、開口部が110cm以上×100cm以上、底部が103以上×68cm以上、深さが23cmである。西壁は緩やかに立ち上がり、東壁はやや急角度で立ち上がる。

<埋土> 3層に区分される。オリーブ色系の粘土質シルトで埋められ、上下層では約1cmの炭化物片が混じる。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。

321号土坑（第125・127・128図、写真図版107・137）

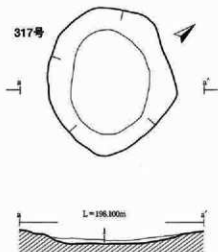
<位置・検出状況> 7区北西側（旧河道上）の-A I u21・22区に跨って位置し、V層中位で検出された。遺構の一部が調査区外に延びる。本遺構の南西から南東にかけて317号・318号住居跡、317号土坑が隣接する。

<平面形・規模> 検出した部分からは不整な楕円形を呈すると推測されるが、詳細は不明である。規模は、開口部が125cm以上×118cm以上、底部が78以上×102cm、深さが32cmである。壁は丸みをおびつつ、比較的急角度で立ち上がる。

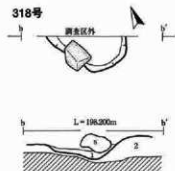
<埋土> 3層に区分される。主にぶい黄褐色とにぶい褐色砂質シルトで埋められる。自然堆積層と考えられる。

<出土遺物> 斜縄文で施文された口縁部と胴下部の上層片が出土している。口縁部片は先端で軽く外反する。胴下部の上層片の傾きから丸底と推測される。

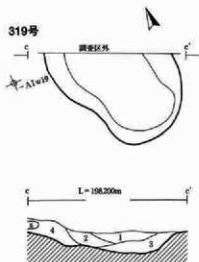
<時期> 検出層位と埋土の状況から縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。



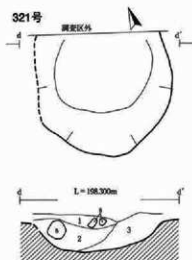
- 1 2SY4-6 褐色粘土質シルト しまる



- 1 5Y4/3 暗オリーブ粘土質シルト
炭化物片少量 (1mm) 散在しつまる
2 10Y2.5/4 暗褐色砂礫質シルト (粒径10mm)
炭化物片 (5-10mm) 多量含 しまる



- 1 5Y4/2暗オリーブ粘土質シルト
炭化物片少量 (1mm) 散在しつまる
2 5Y3.5/4 オリーブ色礫混粘土質シルト (粒径5mm)
多量) しまる
3 2SY4/3 オリーブ褐色粘土質シルト
炭化物片少量 (1-10mm) 含しまる



- 1 2SY2.4/3 褐色砂礫質シルト
(粒径平均5mm, 炭化層) しまる
2 10Y2.4/3 におい黄褐色砂礫質シルト
(粒径10-20mm, 均織, 多量) 散くしまる
3 10Y2.4/4 褐色砂礫質シルト
(粒径5mm, 炭化層)

0 1:40 1m

第125図 土坑 (5)

403号土坑（第126・128図、写真図版107）

＜位置・検出状況＞ 0区西側のBⅡ-Ⅱ3区に位置し、Ⅲ層上面で検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が158cm×110cm、底部が117cm×60cm、深さが50cmである。壁は比較的急角度で立ち上がる。

＜埋土＞ 黒褐色礫混シルトの単層で埋められる。遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

＜出土遺物＞ 薄手の斜縄文、沈線文の土器片、厚手の非結束羽状縄文の土器片とともに骨片が出土した。

＜時期＞ 0区の最西側で近世墓廣が複数検出され、骨片は人骨の可能性があり、本遺構の西側で複数検出された近世墓廣の平面形と類似すること、出土遺物が複数の時期の土器片であることを考えると近世墓廣の可能性が大きい。ゆえに、近世墓廣から人骨とともに出土した副葬品の時期から江戸時代末～明治時代初め頃と考えられる。

405号土坑（第126・128図、写真図版108）

＜位置・検出状況＞ 3区中央のBⅠk-Ⅱ8～9区に跨って位置し、V層上面で検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は、開口部が275cm×258cm、底部が157cm×137cm、深さが59cmである。壁はやや緩やかに立ち上がる。底面にはX層の礫が点在する。

＜埋土＞ 15層に区分される。全層が両側に急角度で傾斜し、中心より東寄りに地山X層の礫が同様の角度で傾斜している。自然堆積と考えられる。

＜出土遺物＞ 薄手の斜縄文、摺糸文の土器片が出土している。

＜その他＞ 埋上の堆積状況から風倒木跡の可能性がある。

＜時期＞ 検出層位から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

406号土坑（第126図、写真図版108）

＜位置・検出状況＞ 3区西側のBⅠj2～3区に跨って位置し、V層上面で検出された。遺構の一部が調査区外にのびる。本遺構の北側に407号住居跡が隣接する。

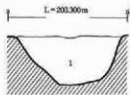
＜平面形・規模＞ 平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は、開口部が194cm×118cm、底部が128cm×50cm、深さが42cmである。壁はやや急角度で立ち上がる。

＜埋土＞ 2層に区分される。主に褐色粘土と灰褐色火山灰質シルトの混合土で埋められている。自然堆積と考えられる。

＜出土遺物＞ 出土していない。

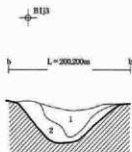
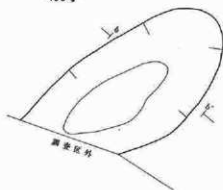
＜時期＞ 検出層位から縄文時代早期末～前期初頭頃と考えられる。

403号



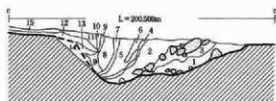
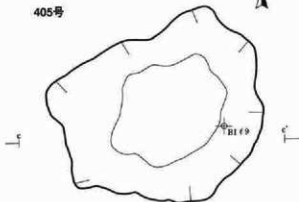
1 10YR17/1褐色薄泥シルト 土器片・炭屑を含み 止まる

406号



1 10YR4/6 褐色粘土に7.5YR5/2灰褐色火山灰質シルトが塊状に混入 (1%) 固く止まる
2 10YR4/3 に6Y・黄褐色砂礫質粘土 止まる

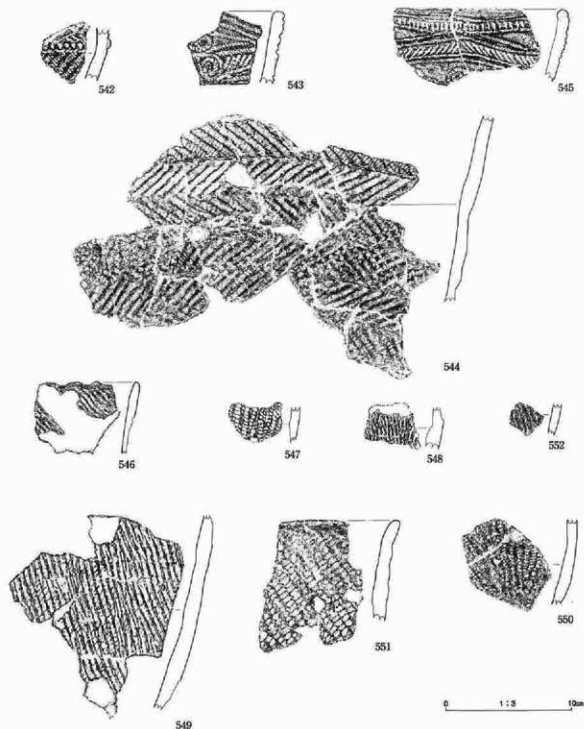
405号



- 1 10YR2/4 暗褐色粘土質砂礫 (層厚5~10cm, 底角傾) 固く止まる
2 10YR2/2 黒褐色硬粘土質砂 (層厚5~10cm, 底角傾) 土器片等 止まる
3 大塚遺跡之質砂 (底角傾一底角傾)
4 10YR2/3 暗褐色砂質粘土 止まる
5 10YR2/3 暗褐色砂礫 (層厚5~10cm, 角傾) 固く止まる
6 10YR4/3 砂礫質粘土 (層厚5~10cm, 底角傾一底角傾, 2%) 止まる
7 10YR2/4 暗褐色砂礫質粘土 (層厚5~10cm, 底角傾, 2%) 止まる
8 10YR2/3 砂礫 (層厚5cm, 底角傾) 止まる
9 10YR2/4 砂礫 (層厚5~10cm, 底角傾) 止まる
10 10YR4/3 に6Y・黄褐色砂礫質粘土 (角傾) 止まる
11 10YR2/3 暗褐色砂礫 (層厚5~10cm, 角傾, 10%) 止まる
12 10YR4/4 褐色砂礫 (層厚5~10cm, 角傾, 10%) 止まる
13 10YR4/3 に6Y・黄褐色砂礫 (層厚5~10cm, 底角傾, 30%) 止まる
14 掘りすぎ
15 10YR3/4 暗褐色硬粘土 (層厚2%) 止まる

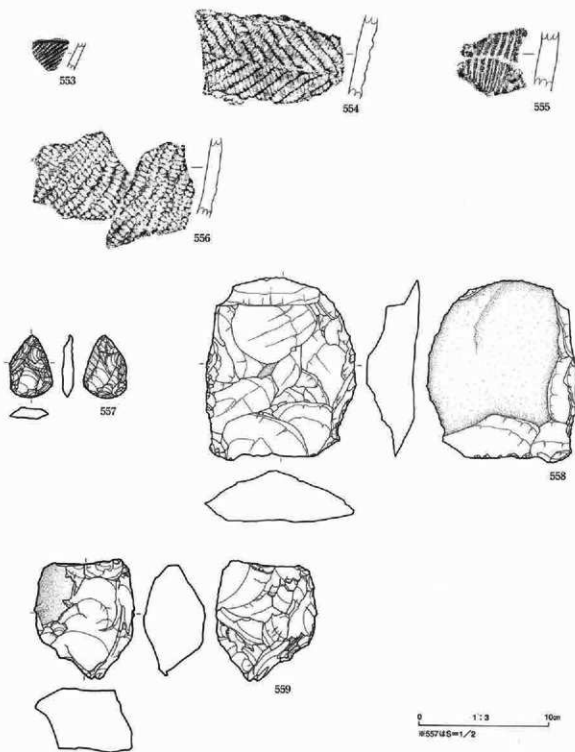
0 1:40 1m

第126図 土坑 (6)



図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
542	00-404	55号土坑	雑土	深鉢	口下部	斜紋線文・斜交斜二重帯+LR (0歩)	ナデ	X	8mm	器物縁破没入
543	00-374	56号土坑	雑土	深鉢	口	斜交斜二重帯+短直線文；由形・透巻斜紋線文	ナデ	Ⅷ	8	器物縁破没入
544	01-3048	300号土坑	雑土	深鉢	胴	平筋重出線文 (0歩)	丁字交ナデ	Ⅷ	9	器物縁破没入
545	01-381	300号土坑	雑土	深鉢	口	斜交斜二重帯+短直線文	ナデ	Ⅷ	10	器物縁破没入
546	01-353	302号土坑	雑土	深鉢	口	記。(横前転)。口唇：小波状	ナデ	Ⅷ	5	器物縁破没入
547	01-356	304号土坑	雑土	深鉢	胴	LR (横前転)	破損不明	Ⅷ	—	器物縁破没入
548	01-387	307号土坑	下部	深鉢	胴	斜交文 (LR横前転)	破損不明	Ⅷ	—	器物縁破没入
549	01-3038	308号土坑	上層	深鉢	胴	斜交文 (LR横前転)	ナデ	Ⅷ	9	器物縁破没入
550	01-2044	321号土坑	雑土	深鉢	胴下部	LR (横前転)	ナデ	Ⅷ	8	器物縁破没入
551	01-390	321号土坑	雑土	深鉢	口	記。(横前転)。先端：斜交文	ナデ	Ⅷ	11	器物縁破没入
552	01-294	321号土坑	雑土	深鉢	胴	記。(横前転)	ナデ	Ⅷ	5	器物縁破没入

第127図 土坑出土遺物 (1)



図版番号	登録番号	出土地点	層位	図様	部位	外面文様	内面文様	分類	図寸	備考	
553	00-555	403号土坑	埋土	縞線	取	L.R. 波線		土片等	X 3cm		
554	00-556	403号土坑	埋土	縞線	取	半結晶粗粒陶文		土片	Ⅳ 10	埋跡確認品	
555	00-558	408号土坑	3層	縞線	取	無文		土片	V 14	埋跡確認品	
556	00-211	408号土坑	3層	縞線	取	L.R.		土片	V 9	埋跡確認品	
図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
557	1294	不定形	瓦	307号土坑	埋土	31.7	22.5	6	4.18	頁岩	
558	1027	チャップラー		307号土坑	埋土	144	117	43	744.93	頁岩	
559	1302	石椀		321号土坑	埋土	95.4	87.8	53	400.63	頁岩	

第128図 土坑出土遺物(2)

V. 遺構外出土遺物

1. 土器 (第129図～第152図)

3ヵ年の調査で出土した土器はコンテナで約40箱である。採取した土器袋は採取場所・層位で整理し、接合を行った後、層位ごとに掲載土器を抽出した。復元できた個体は少ないため、掲載土器は破片が多くなった。遺跡を埋めている土層は均質ではなく、出土時期を細分できるような明瞭な包含層をもった場所もあれば、土層の斜方変化が激しく細分できない場所もあるため、出土遺物と層位関係は各区で基本土層を作成して把握するとともに、他区との関係は可能な限り現地で対比しながら最終的に室内整理で確定している。出土遺物は全遺物を観察しているが、整理の都合上0・1・2・3・5～7区で出土した遺物を中心に載せた。掲載土器は接合後各採取袋から文様ごとに選び(第一次抽出)、層位ごとに各文様等を代表するものを選んだ(第二次抽出)。明瞭な包含層から採取した遺物は概ね同一時期に属するものと考えられるが、大別した土層では複数の時期に属する遺物が出土している。以下、層位の項で述べた層順と文様・胎上で土器の分類を行う。

- 第I群土器 IX層から出土している土器群 縄文時代早期後葉頃(吉田浜下層式)
- 第II群土器 VIIa3～az層・VIIb1層から出土している土器群 縄文時代早期末葉頃(梨木畑式)
- 第III群土器 V層(1区-10層、2区-17層、3区山体側同一層)から出土している土器群
縄文時代早期末葉頃
- 第IV群土器 V層(4区-16層、7区-11層)から出土している土器群
縄文時代早期末葉頃(吉田浜上層式)
- 第V群土器 V層(3区畑圃)から出土している土器群
縄文時代早期末葉～前期初頭頃(梨木畑式～上川名式(堂森B))
- 第VI群土器 VI層(0区)、IVb層(3区)から出土している土器群
縄文時代早期末葉～前期前葉頃(吉田浜上層式～上川名式(原頭第II群))
- 第VII群土器 IVa4層(2区-13層)から出土している土器群 縄文時代前期前葉頃
- 第VIII群土器 IVa3層(1区-7層、2区-9層)から出土している土器群
縄文時代前期前葉頃(上川名式(原頭第II群))
- 第IX群土器 IVa2層(2区-7層)から出土している土器 縄文時代前期前葉
- 第X群土器 IIb層から出土している土器群 縄文時代後期、晩期末葉～弥生時代
- その他 I層から出土している土器(攪乱層)

第I群土器(第129図、写真版138図)

条痕条痕文土器で主に構成される土器群である。吉田浜下層式土器に類似すると考えられる。これに貝殻文の土器片が少量含まれる。412号住居跡を検出した層から出土しているが、近世墓廣の攪乱を受け、上層からの2次的に混入した土器片(洋銃東羽状縄文、摺糸文、短沈線・側面疋痕文)も認められる。

1～9は条痕条痕文土器片で内面の条痕は横位のものが多く、外面は斜位に施されている。4～6は細い隆帯が削付られ、その上に刻目が入っている。6は細線であるが、4と5は比較的太い。隆帯は、4と5は横位に、6は斜位に貼られている。4と5では隆帯に平行して波状、直線の浅い沈線が引かれる。1と2は口縁部で、斜位刻目入り隆帯を挟んで上位に横位沈線、下位に小波状沈線が引かれる。口唇部には刻目が入る(縁に対して直交、斜位)。3も口縁部と見られるが、先端が欠損している。隆帯にあたる部分には縦位の短い刻目が施されている。7も口縁部で、胴部は斜位沈線が施される。8は平底の破片である。9は内外

面ともに横位の条痕で、外面には2本セットでX字状の細い沈線が引かれていた。焼成が良い。10～12は貝殻緑圧痕・沈線・刺突文で幾何学的に施文されている。

第Ⅱ群土器 (第139・141図、第143・144、第151図、写真図版147～149、150・151、157図)

表裏縄文、斜行縄文、非結束羽状縄文、縦走縄文、菱形縄文、側面圧痕文、条痕条痕文、微隆起線文、貝殻文などで構成される土器群である。文様・胎土の特徴から栗木式土器に類似すると考えられる。燃糸文は確認していない。器形は深鉢で、口縁部が外反するものが多く、強く屈曲するものも少数ある。胎土に植物繊維を含むものが多い。

外面に斜行縄文のみを施される土器片には0段多条のものがある。口唇部には、側面圧痕、刺突、指痕状圧痕が施されるもの(139-10、11、143-3～7)が多く見られ、口縁先端で折り返しがあるものがある(139-12、143-2)。

内外面に縄文を施されるものは出土点数の少なくとも2割をしめる。内面の縄文は口縁の先端部ばかりでなく広い範囲に施文されている。焼成は良好で、堅緻のものもある。浅い施文も見られる。口唇部には刺突(139-10、143-6・7)、側面圧痕(139-13) 原体末端圧痕(143-5)が施文されるものが多い。

弧状や直線的に側面圧痕文を施されるものが少数ある。139-8は130-1と同様の器形と見られ、浅ボール状を呈すると考えられる。143-14は薄く、口縁に小突起をもつ。

微隆起線文で施文された中には、梯子状(140-7、144-3)に施文されるものがある。

貝殻文土器片は、貝殻緑圧痕文・沈線文・刺突文で幾何学的に施文されるものが多いが、貝殻緑圧痕文(140-16)だけのものや、押し引き文(139-2)で施文されるものがある。

第Ⅲ群土器 (第141図、第144・145図、写真図版149図)

斜行縄文、非結束羽状縄文、側面圧痕文、燃糸文、貝殻文、微隆起線文、表裏縄文などで構成される土器群である。胎土に植物繊維を含むものが多い。

外面に斜行縄文のみを施される土器片には0段多条のものがある。口唇部には側面圧痕、刻みが施されるものがある(144-8、12)。144-12は先端が先細り、やや外反する。

非結束羽状縄文が比較的多く出土している。口唇部に原体末端圧痕や、先端に縦位の刻み目が施されるものがある(144-13、14)。側面圧痕文の土器片には、口縁部が小波状のものや、小突起を呈するものがある(145-1、2)。145-4は燃糸文の土器片で口唇部に側面圧痕が施される。

第Ⅳ群土器 (第151・152図、写真図版157・158図)

斜行縄文、燃糸文、非結束羽状縄文、側面圧痕文、縦走縄文などで構成される土器群である。文様・胎土の特徴から古田浜上層式土器に類似する。7区出土した土器片の出土割合は斜行縄文、燃糸文>非結束羽状縄文、側面圧痕文(施文上)、縦走縄文である。無遺物層に挟まれた土層であるため、単一時期の遺物包含層である。

内面に縄文が施されるものはない。胎土に植物繊維を含む。焼成が良好なもの(151-4)と非常に脆いもの(152-5)がある。口縁部は軽く外反するもの(151-2、151-7、152-1)、先細りもの(152-1)がある。

縄文は0段多条で施文されるものが多い。斜行縄文の土器片には口唇部に刻みが施されるものがある(151-4)。非結束羽状縄文は明確な施文をされるものが多い。口唇部に側面圧痕(151-7)、先端部分に

刻目(152-1, 2)が施されるものがある。地文上に横位の側面圧痕が施されるものが少数あり、さらに先端に半弧状の圧痕が施されるもの(152-6)がある。152-3はL唇部に刺突が施される。

第V群土器(第146・147図、写真図版153~155図)

斜行縄文、非結束羽状縄文、表裏縄文、撚糸文、短沈線・側面圧痕文、側面圧痕文、貝殻文、微隆起線文、条痕文、縄文条痕文で構成される土器群である。旧自然堤防上に構築された住居跡を抽出した層から出土したもので、一つの型式だけに属さないとと思われる。

胎土に植物繊維を含むものが多く、縄文原体は0段多条を用いたものも多い。口縁部先端が先細るものや、先端部が軽く外反するものがある。

斜行縄文の土器片には施文方向が一定でないもの(146-1)がある。L唇部には側面圧痕(146-3)や刻み(146-4)が、口縁先端に斜位刻み(146-2)が施されるものがある。非結束羽状縄文は明確な施文をされるものが多い。原体はほとんどが2段のものが用いられているが、146-9のように2段と1段のものを組み合わせて施文しているものも少数ある。L唇部には刻みが入るもの(146-9, 11)や、先端に縦位・斜位刻みが施されるもの(146-8, 10, 12)がある。L唇部が軽く外反するものが多い。先端が先細るもの(146-7, 11)もある。146-14は409号住居跡で出土した堂森Bタイプ土器片の胴部施文と同じである。147-1は胴下部の上器片で、その傾きから底部は丸底状と推測される。

側面圧痕文で施文される土器片には、無文上に縦位方向の圧痕を施されるもの(147-5)や、縄文の地文上に横位数字の側面圧痕が施されるもの(147-2~4)がある。撚糸文土器片は縦位や斜位に施文され、器厚の厚いものがある。L唇部には側面圧痕(147-7)、竹管状土具による刺突(150-11)や、口縁先端付近に横位(147-8)、斜位(147-9)、縦位(147-10)に側面圧痕が施されるものがある。

第VI群土器(第130~132, 148・149図、写真図版153~155図)

斜行縄文、非結束羽状縄文、短沈線・側面圧痕文、側面圧痕文、撚糸文、条痕条痕文、微隆起線文、貝殻文、縦走縄文で構成される土器群である。堆積環境上複数の時期の遺物を含んでいると考えられる。

胎土に植物繊維を混入するものが多い。L唇部は軽く外反するものも多く、先端が強く屈曲するものが少数ある。斜行縄文の土器片L唇部には、原体末端圧痕(148-10)、側面圧痕(130-4, 6)、指頭状圧痕(130-2, 148-11)が施文されるものがある。非結束羽状縄文の土器片L唇部には側面圧痕(130-7)や2列の刺突(149-1)が、口縁先端部では縦位~斜位刻み(148-14, 15)が施されるものがある。縦走縄文土器片131-1のL唇部にはX字状刻みが連続して施される。縄文と組み合わせ側面圧痕文が施されるものがある。130-1は浅ボール状を呈し、口縁先端に縦位刻み、胴部中央付近に波状の圧痕群が、胴下部は縦走縄文が施される。130-3はL唇部に弧状の圧痕群が施される。148-1~7, 132-1~2は短沈線と側面圧痕文で施文されるもの、2, 3は渦巻状部が浮き上がっている。

第VII群土器(第141, 145, 150図、写真図版149・152・153・157図)

非結束羽状縄文、斜行縄文、側面圧痕文、短沈線・側面圧痕文、撚糸文、縦走縄文、条痕文、貝殻文、沈線文などで構成される土器群である。胎土に植物繊維が混入し、焼成はあまり良くない。

短沈線・側面圧痕文で施文される145-10はNao層で出土する土器片より粗い施文である。非結束羽状縄文は0段多条で網目の粗いものが多い。150-2はL唇部に刻みが入る。145-12は胴下部の土器片で、その器形から丸底状と考えられる。

第Ⅶ群土器（第134・135・141・142図、写真図版142～143、149図）

短沈線・側面圧痕文、斜行縄文、非結束羽状縄文、結束羽状縄文で構成される土器群である。胎土に植物繊維が含まれ、焼成はあまり良くない。口縁部文様帯の特徴から縄文時代前期前葉頃の原頭第Ⅱ群土器に比定される。

口縁部文様帯を持つもの（141-6、142-1～2）は、横位・斜位・渦巻状の側面圧痕文と縦位・斜位に短い沈線を組み合わせて施文される。胴部は0段多条の非結束羽状縄文で施文される。内面はなだらかで非常に丁寧に磨かれているものが多い。

第Ⅷ群土器（第142図、写真図版150図）

ほぼ完形の不整帯糸文で施文された小形の深鉢（142-6）を包含する層位で出土した土器片をまとめて本群とした。

142-6は口唇部に凹形刺突が施されている。142-3、4は同一個体とみられる。142-4は口縁部片とみられる。

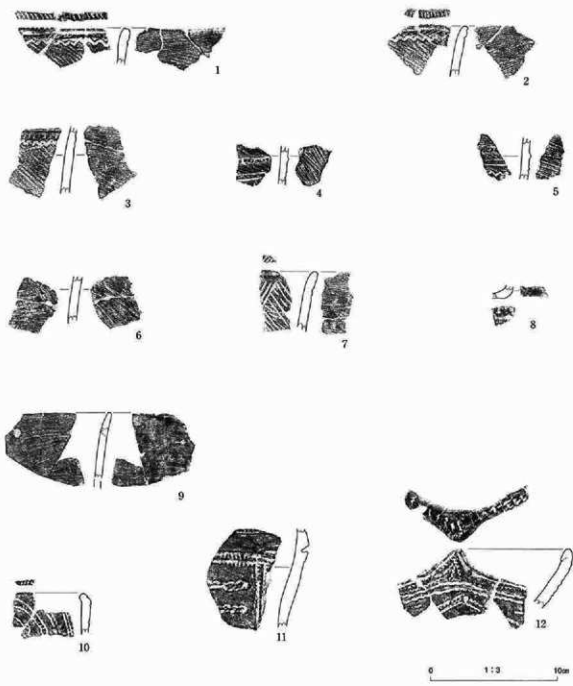
第Ⅸ群土器（第132・133、136～138、150図、写真図版140・141、143～146、157図）

縄文時代晩期末～弥生初頃の土器を中心に包含する層であるが、少縄文時代後期初頭頃や弥生時代終末頃の土器片が含まれる。

136-1、2は沈線で区画された外側に磨消縄文がみられる土器片で、縄文時代後期初頭頃の土器に属すると考えられる。第137図、第138図は粗製土器で、変形上字文の土器片と供伴している。口縁部が無文で胴部の地文とは沈線で区画されるもの（137-5、8）や直接接するもの（137-7）がある。口唇部には指頭状圧痕（137-6）、棒状工具による刺突（137-7）、側面圧痕（137-8）が施されるものがある。138-7～9と137-1、2はそれぞれ同一個体とみられる。後者は口縁先端に2つの横位隆帯が貼付られている。132-4～15、136-4～8、150-6は体部上半に沈線と粘土瘤で文様が構成され、口縁内面に横位沈線が施文される。136-13、14は退化交互刺突文で施文されている。

その他（第136図、写真図版144図）

第Ⅰ層攪乱層から奈良時代頃と考えられる甕底部片が出土している（136-15）。



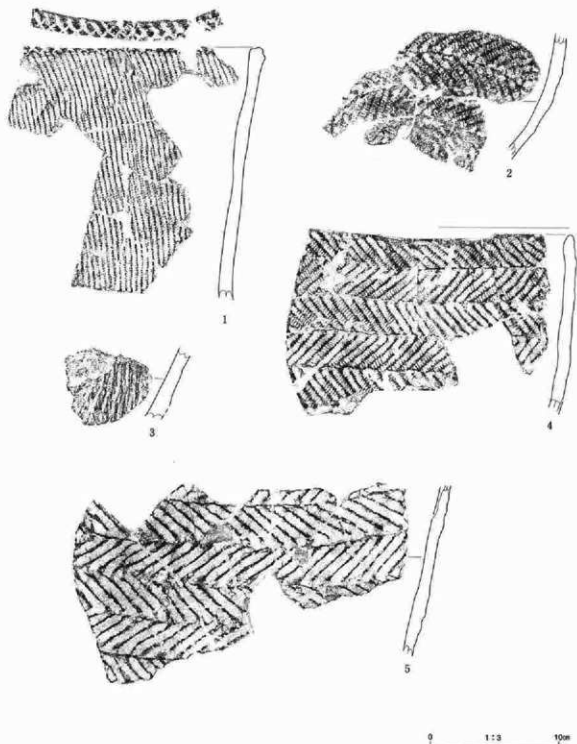
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分個	器厚	備考
1	02-296	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口縁	赤褐色文上に斜刻人面陰帯、波状水沈線	赤褐色文	I	6cm	
2	02-295	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口縁	赤褐色文上に斜刻人面陰帯、波状水沈線	赤褐色文	I	6	
3	02-297	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口一側	赤褐色文上に波状水沈線、縦位波文	赤褐色文	I	6	
4	02-301	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口一側	赤褐色文上に斜刻人面陰帯、縦位波文	赤褐色文	I	6	
5	02-302	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口一側	赤褐色文上に斜刻人面陰帯、波状水沈線	赤褐色文	I	6	
6	02-299	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口一側	赤褐色文上に斜刻人面陰陰帯	赤褐色文	I	6	
7	02-298	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口一側	斜刻人面陰帯、縦位波文	赤褐色文	I	7	口縁に斜刻刻
8	02-300	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	底縁	波文	ナシ	I	4	守蓋
9	02-157	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口縁	赤褐色文上に文字状縦式線文	赤褐色文	I	6	表裏入層彫孔
10	02-292	DⅡB-2	Ⅲ	漆器	口縁	斜刻人面陰帯、波状水沈線	赤褐色文	I	6	左端縁部波文、ナシ
11	02-163	DⅡB-3	Ⅲ	漆器	腹	貝殻文、波線文、斜刻文による幾何学的文様	ナシ	I	10	
12	02-162	DⅡB-3	Ⅲ	漆器	口縁	貝殻文、波線文、斜刻文による幾何学的文様	赤褐色文	I	9	口縁小突起

第129図 遺構外出土土器 (1) 0区Ⅲ層



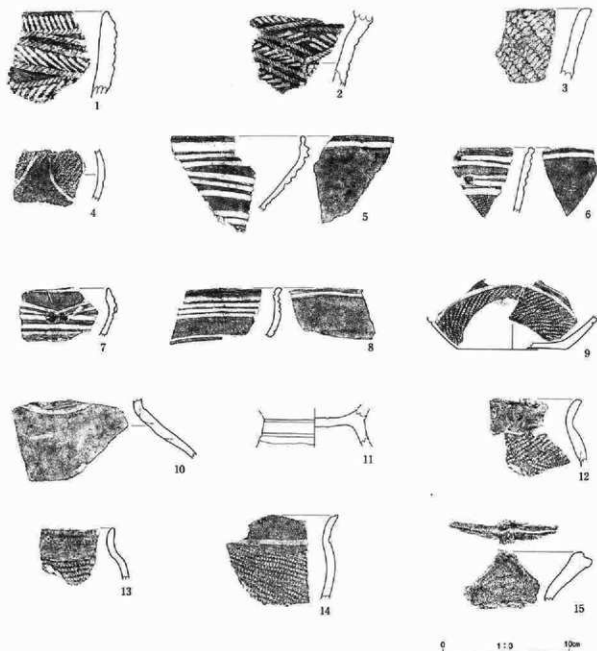
図版番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器形	備考
1	02-165	B II 23・4	Va	浅鉢	口一側	縦位刻み、垂結文斜状織文、横面片状織文、縦点織文	ナデ	VI	Yes	植物繊維混入
2	02-277	B II m7-2	Va	深鉢	口	刻、横位器状斜状織文、口特：器面状片状	丁寧なナデ	VI	8	植物繊維混入
3	02-257	B II m6-4	Va	深鉢	口一側	垂結状斜状織文、縦点織文	ナデ	VI	10	植物繊維混入
4	02-281	B II m7-3	Va	深鉢	口	LR、口特：LR	へら状工具のナデ	VI	7	植物繊維混入
5	02-298	B II n7-2	Vb	深鉢	口	刻、先周曲線	ナデ	VI	8	植物繊維混入
6	02-294	B II m7-1	Va	深鉢	口	刻、口特：LR、先周曲線	ナデ	VI	5	植物繊維混入
7	02-280	B II m6-1	Va	深鉢	口	垂結状斜状織文、口特：LR	ナデ	VI	10	植物繊維混入

第130図 遺構外出土器(2) 0区 Va、Vb層-1



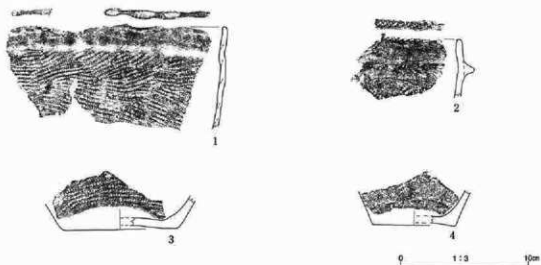
图版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分期	器厚	備考
1	02-402	日置 no-1	Ⅳb	甕鉢	口一層	ⅡL. 口唇: 五字状筋文	十字	Ⅳ	4mm	埴物線漆流入
2	02-276	日置 no-3	Ⅳb	甕鉢	胴下部	赤粘土斜状筋文	十字	Ⅳ	11	埴物線漆流入
3	02-280	日置 no-1	Ⅳb	甕鉢	胴	赤土文	丁字十字	Ⅳ	10	埴物線漆流入
4	02-282	日置 no-3	Ⅳb	甕鉢	口	赤粘土斜状筋文	十字	Ⅳ	10	埴物線漆流入
5	02-229	日置 no-1	Ⅳb	甕鉢	胴	赤粘土斜状筋文	十字	Ⅳ	9	埴物線漆流入

第131图 遺構外出土土器 (3) 0区Ⅳb層-2



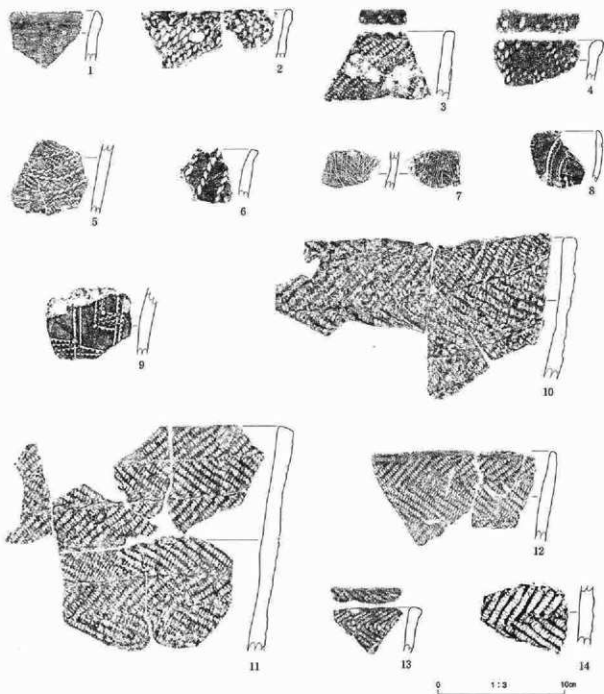
圖版番号	器物番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考	
1	02-261	ⅡB m=3	Ⅱb	深鉢	口	短波線、斜面半首文		丁字化ナゲ	Ⅵ	14cm	動物線彫刻人
2	02-285	ⅡB m=4	Ⅱa	深鉢	口	短波線、斜面半首文		ナゲ	Ⅵ	11	動物線彫刻人
3	02-284	ⅡB m=1	Ⅱa	深鉢	口	短波線		ナゲ	Ⅵ	8	動物線彫刻人
4	02-300	ⅡB m=4	Ⅱb	壺	胴	波線、LR		ナゲ	X	6	
5	02-197	ⅡB m=2	Ⅱb	鉢	口	波線(変形工字文)、内面:波線		ミガキ	X	6	
6	02-194	ⅡB m=2	Ⅱb	浅鉢	口	波線、粘土層(変形工字文)		ミガキ	X	6	
7	02-187	ⅡB m=2	Ⅱb	浅鉢	胴	波線、粘土層(変形工字文)		ミガキ	X	4	
8	02-184	ⅡB m=2	Ⅱb	鉢	口	波線、内面:波線		ミガキ	X	4	
9	02-188	ⅡB m=2	Ⅱb	浅鉢	胴一底	波線、LR		ミガキ	X	5	
10	02-198	ⅡB m=3	Ⅱb	壺	胴	波線		ナゲ	X	6	
11	02-268	ⅡB m=3	Ⅱb	台付浅鉢?	台付	波線、内面:内短波線		ミガキ	X	6	
12	02-183	ⅡB m=3	Ⅱb	深鉢	口一胴	LR		ナゲ	X	7	
13	02-169	ⅡB m=2	Ⅱb	深鉢	口一胴	短波線文(LR)		ナゲ	X	6	
14	02-170	ⅡB m=2	Ⅱb	深鉢	口一胴	波線、斜面:LR		ナゲ	X	7	
15	02-195	ⅡB m=2	Ⅱb	深鉢	口	波文、小突起痕跡:粘土層、口唇:波線		ナゲ	X	10	

第132図 遺構外出土土器(4) 0区Ⅱa、Ⅱb層-3、Ⅱb層-1



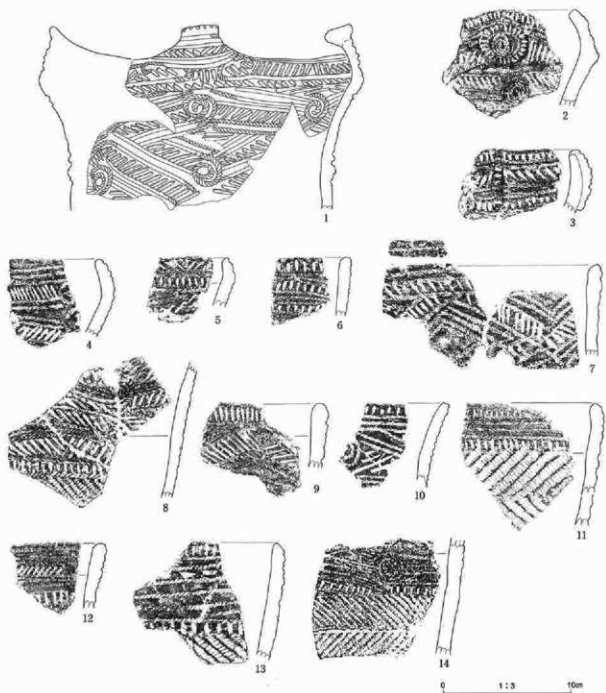
国庫番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分限	部厚	備考
1	02-179	BⅡ13-3	Ⅱb	漆器	口～胴	LR	ナナ	Ⅹ	5mm	輪紋痕
2	02-183	BⅡ13-4	Ⅱb	漆器	口	RL	ナナ	Ⅹ	5	
3	02-171	BⅡ13-2	Ⅱb	漆器	胴～底	胴部：横走線文 (LR)	ナナ	Ⅹ	7	
4	02-196	BⅡ13-5	Ⅱb	漆器	胴～底	無文	ナナ	Ⅹ	6	

第133図 遺構外出土土器 (5) 0区Ⅱb層-2



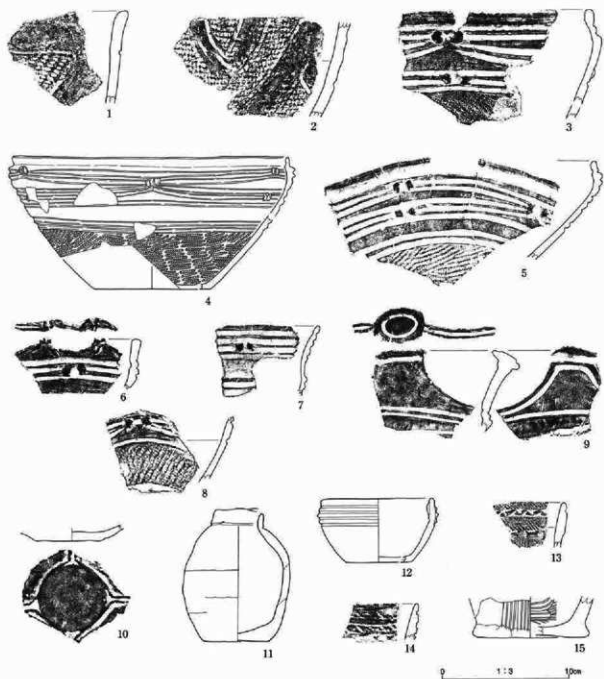
図録番号	発掘番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	図号	備考	
1	00-15	B 1 j21	V	油埴	口	無文		ニガキ	Ⅲ	6cm	
2	00-826	B 1 i-a18	V	油埴	口	L.R. 口唇：原形未確定瓦文 L.R. 口唇：熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	8	植物線状瓦入	
3	00-444	B 1 i-a18	V	油埴	口	L.R. 口唇：熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	10	植物線状瓦入	
4	00-428	B 1 i-a18	V	油埴	口	L.R. 先端：原形瓦文?	ナデ	Ⅲ	7	植物線状瓦入	
5	00-406	B 1 j18	V	埴	7	解	瓦文上 (L.R) 口縁位～表状熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	8	植物線状瓦入
6	00-373	B 1 j22-4	V	油埴	口	斜交熊面瓦文、小表状 (斜交瓦文)	ナデ	Ⅲ	8	植物線状瓦入	
7	00-426	B 1 j21	V	油埴	解	熊面瓦		急須	Ⅲ	6	
8	00-347	B 1 j29	V	油埴	口	波線、熊面文、反紋熊面瓦文、内面：貝面文	ニガキ	Ⅲ	4		
9	00-416	B 1 j29	V	油埴	解	斜交瓦文、波線文、熊面文		Ⅲ	10		
10	00-451	B 1 k18	Ⅱas	油埴	解	斜交熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	10	植物線状瓦入	
11	00-640	B 1 m10	Ⅱas	油埴	口	斜交熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	12	植物線状瓦入	
12	00-253	B 1 j20	Ⅱas	油埴	口	斜交熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	9	植物線状瓦入	
13	00-530	B 1 j10	Ⅱas	油埴	口	斜交熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	8	植物線状瓦入	
14	00-61	B 1 j23	Ⅱas	油埴	解	斜交熊面瓦文	ナデ	Ⅲ	11	植物線状瓦入	

第134図 遺構外出土土器 (6) 1区V、Ⅱas層-1



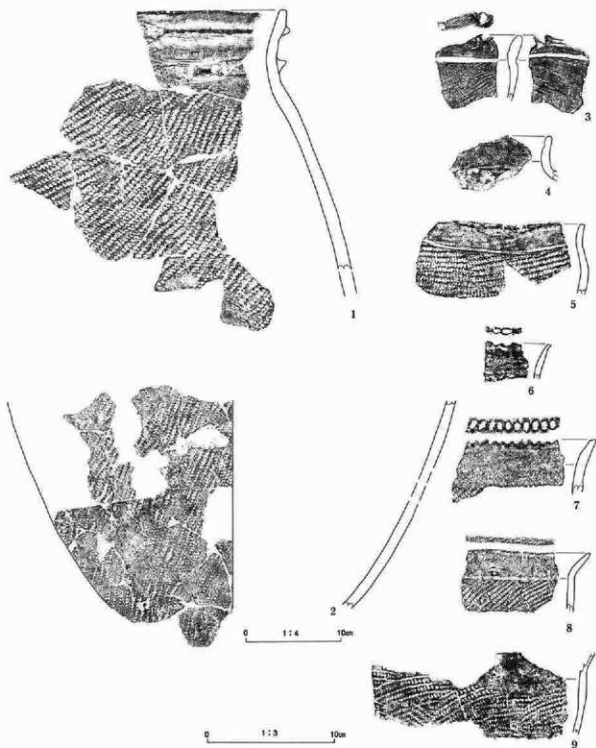
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
1	00-805	B 1 m19	Na3	浅鉢	E1	短比線、横線圧紋文、先端突起	ナデ	Ⅲ	5mm	植物繊維混入
2	00-9	B 1 l20	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文、底状溝帯貼付	丁字女ナデ	Ⅲ	12	植物繊維混入
3	00-1	B 1 l20	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文、縦線溝帯（閉み）	ナデ	Ⅲ	8	植物繊維混入
4	00-262	B 1 l23-4	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	丁字女ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入
5	00-341	B 1 k19+20	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	丁字女ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入
6	00-27	B 1 l23	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	ナデ	Ⅲ	5	植物繊維混入
7	00-847	B 1 j19	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	ナデ	Ⅲ	11	植物繊維混入
8	00-390	B 1 k20	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文、罫：乱（9多）	ナデ	Ⅲ	8	植物繊維混入
9	00-658	B 1 k19-30	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	ナデ	Ⅲ	12	植物繊維混入
10	00-270	B 1 l19-1	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	丁字女ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入
11	00-656	B 1 k118	Na3	深鉢	E3-罫	短比線、横線圧紋文、罫：糸結帯羽状縄文	ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入
12	00-507	B 1 k20	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文	丁字女ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入
13	00-264	B 1 l23	Na3	深鉢	E3-罫	短比線（縦位・横位）、横線圧紋文、罫：乱（9多）	ナデ	Ⅲ	12	植物繊維混入
14	00-392	B 1 l23	Na3	深鉢	E3	短比線、横線圧紋文、罫：糸結帯羽状縄文	ナデ	Ⅲ	0	植物繊維混入

第135図 遺構外出土土器 (7) 1区IVa3層-2



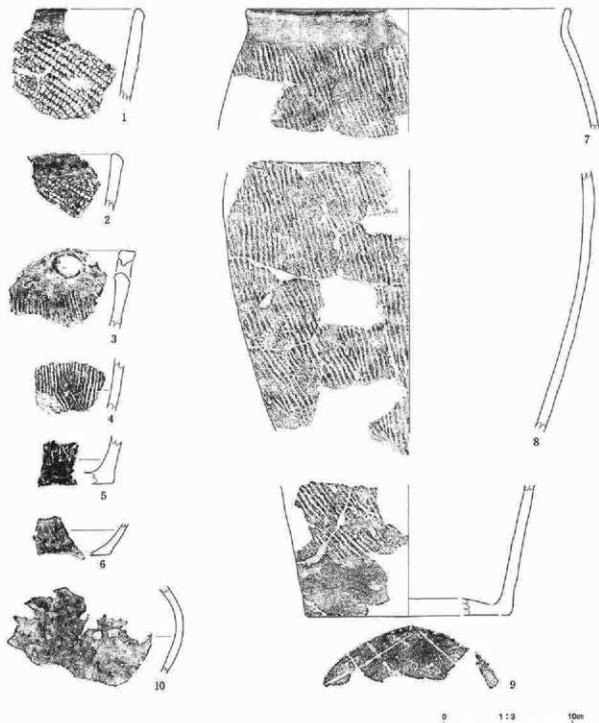
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調査	分相	直径	備考
1	00-585	B1h20	5b	甕鉢	口	沈線、凹。(磨前織文)、本突起	十字	X	7mm	
2	00-588	B1h20-4	5b	甕鉢	胴	沈線、LR(磨前織文)	十字	X	10	
3	00-559	B1119	5b	浅鉢	口~胴	沈線、粘土瘤(変形工字文)、磨:凹。(浅い)	十字	X	5	
4	00-612	B1h21	5b	浅鉢	口	沈線粘土瘤+LR(変形工字文)	十字	X	4	
5	00-610	B1122	5b	浅鉢	口~胴	沈線、粘土瘤(変形工字文)、凹。	十字	X	4	
6	00-8	B1h20-3	5b	浅鉢	口	沈線、粘土瘤(変形工字文)、突起	内面:沈線	X	5	
7	00-611	B1h20	5b	壺	口	沈線、粘土瘤(変形工字文)	十字	X	5	
8	00-659	B1h20	5b	浅鉢	口~胴	沈線、粘土瘤(変形工字文)、磨:LR	十字	X	5	
9	00-379	B1119	5b	鉢	口	沈線 突起 内面:沈線	十字	X	7	
10	00-690	B1h21	5b	浅鉢?	底	沈線	十字	X	6	
11	00-862	B1123	5b	小型壺		沈線II	十字	X	5	
12	00-568	B1120	5b	鉢		沈線	十字	X	6	
13	00-671	B1120	5b	甕鉢	口	凹、沈線、磨突文(磨交互刺突文)、口唇:沈線	十字	X	7	
14	00-552	B1130	5	甕鉢	口	沈線、磨突文(磨交互刺突文)	十字	X	6	
15	00-664	B1116	I	壺	底	十字リ	十字	X	7	

第136図 遺構外出土土器(8) 1区IIb層-1、I、II層



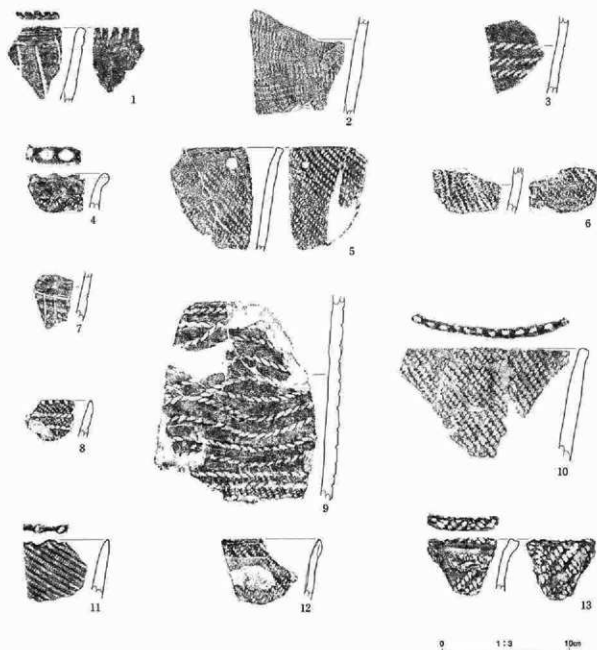
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	表面文様	内面文様	寸法	器厚	備考
1	00-855a	B1 h20	Bb	深鉢	口一隅	横位幾何2本. 網: K1. (縦)	なし	X	10mm	
2	00-855c	B1 h20	Bb	深鉢	胴	凡. (縦)	なし	X	10	
3	05-2	B1 h20-3	Bb	鉢	口一隅	沈線. L.R. 突起. 口縁内面: 沈線	なし	X	7	
4	05-24	B1 h20-4	Bb	深鉢	口	無文. 小突起	ナシ	X	5	
5	05-839	B1 h20	Bb	深鉢	口	L.R.	ナシ	X	6	
6	05-255	B1 h20-3	Bb	深鉢	口	無文. 口唇: 指節状圧痕	なし	X	4	
7	05-28	B1 h20	Bb	深鉢	口	無文. 口唇: 棒状工具による圧痕	なし	X	7	
8	05-300	B1.122	Bb	深鉢	口一隅	無文. 網: L.R. 口唇: 側面圧痕	なし	X	6	
9	05-838	B1.122	Bb	深鉢	口	凡.	ナシ	X	5	

第137図 遺構外出土土器 (9) 1区IIb層-2



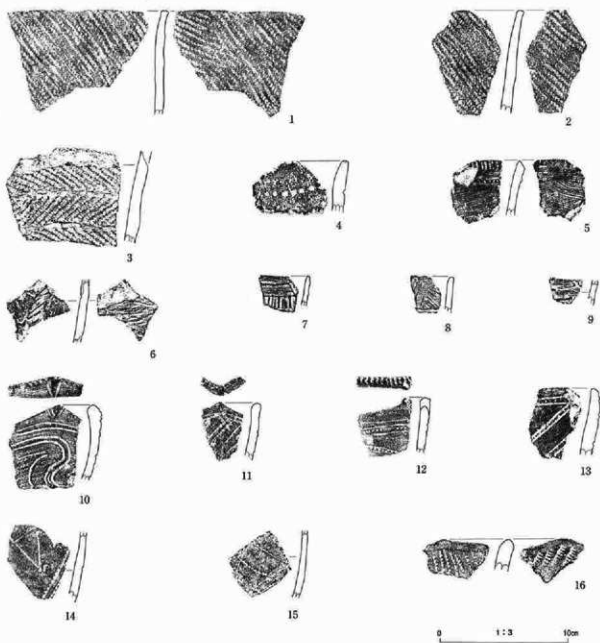
図版番号	登録番号	出土地点	形状	器種	部位	外面文様	内面調整	分損	器厚	備考
1	00-432	B1 k20	片断	深鉢	口	HL	ミダナ	Ⅹ	8	
2	00-200	B1 k18-3	片断	深鉢	口	HL	ミダナ	Ⅹ	8	
3	00-364	B1 k19	片断	口	器底文 (B)、小突起 (B/L)	ナデ	ナデ	Ⅹ	10	
4	00-410	B1 k20-4	片断	深鉢	胴	器底文 (B)	ナデ	Ⅹ	8	
5	00-471	B1 k20	片断	胴一底	胴：網目状器底文	ナデ	ナデ	Ⅹ	11	
6	00-489	B1 k20	片断	深鉢	胴一底	器底文 (B)	ミダナ	Ⅹ	5	
7	00-464	B1 k19	片断	口	器底文、器底器底文 (B)	ミダナ	Ⅹ	8		
8	00-464	B1 k19	片断	胴	器底器底文 (B)	ミダナ	Ⅹ	7		
9	00-464	B1 k19	片断	胴一底	胴：器底器底文 (B)、底：直線	ミダナ	Ⅹ	8		
10	00-457	B1 k19	片断	底	底	無文	ナデ	Ⅹ	5	

第138図 遺構外出土土器 (10) 1区Ⅱb層-3



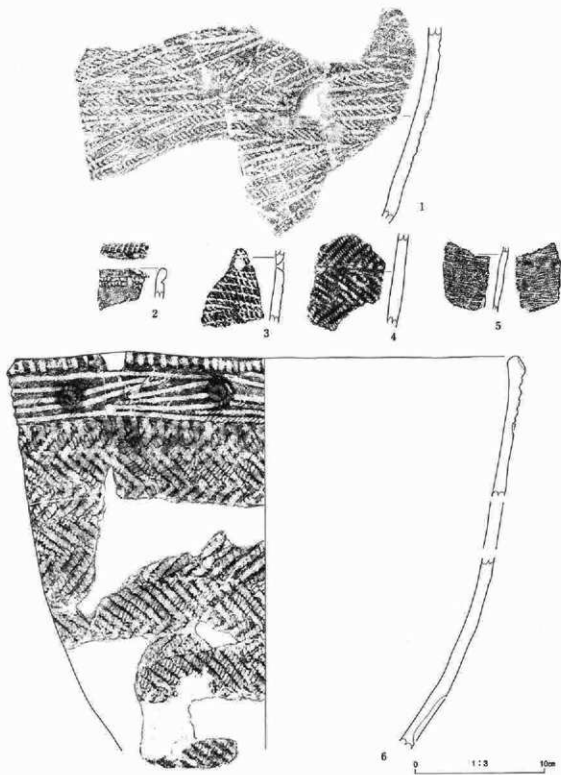
图版序号	登錄番号	出土地点	单位	器種	部位	外面文様	内面文様	分層	器厚	備考
1	02-304	B1116-4	Was	酒器	口	貝殼紋斜行直文、波線文	先端部位貝直文、十字	Ⅱ	8mm	
2	02-305	B1116-4	Was	酒器	胴	貝殼紋斜行直文	十字	Ⅱ	9	
3	02-311	B1116-1	Was	酒器	口-胴	接位3段貝殼紋斜行直文	十字	Ⅱ	7	
4	02-377	B1116-2	Was	酒器	口	L.R.T.、口唇：波線直文	十字	Ⅱ	6	
5	02-379	B1117-1-4	Was	酒器	口	貝	貝	Ⅱ	7	
6	02-383	B1116-3	Was	酒器	胴	貝	貝	Ⅱ	6	
7	02-321	B1116-3	Was	酒器	胴	波線	十字	Ⅱ	7	
8	02-396	B1116-3	Was	酒器	口	口上に2段波線直文、口唇：十字	十字	Ⅱ	6	器物破断入り
9	02-387	B1116-3	Was	酒器	口-胴	波線直文、胴：貝	十字	Ⅱ	10	器物破断入り
10	02-337	B1115-1	Was	酒器	口	貝、口唇：波線	十字	Ⅱ	10	器物破断入り
11	02-330	B1115-1	Was	酒器	口	貝、口唇：波線直文	十字	Ⅱ	5	器物破断入り
12	02-362	B1115-2	Was	酒器	口	貝、先端唇与直し	十字	Ⅱ	7	
13	02-375	B1116-1	Was	酒器	口	L.R.、口唇：波線直文	L.R.	Ⅱ	6	器物破断入り

第139图 遺構外出土土器(11) 2区Was、Waz層-1



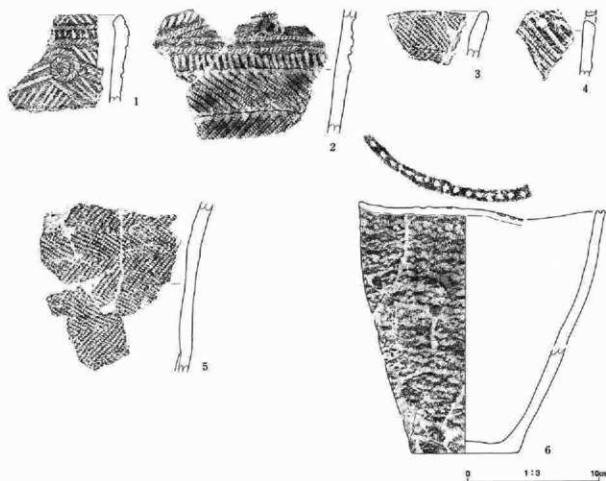
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	形状	外面文様	内面文様	分數	部厚	備考
1	02-328	B1J17-1	Ⅱas	深鉢	口	肌	肌	Ⅱ	2mm	
2	02-324	B1J16-3	Ⅱas	深鉢	口	肌	肌	Ⅱ	8	
3	02-396	B1I18-1	Ⅱas	深鉢	胴	赤銅葉形瓦文	1ガキ	Ⅱ	9	植物模印痕
4	02-390	B1I18-4	Ⅱas	深鉢	口	條状刺突	ナデ	Ⅱ	9	
5	02-395	B1J16-4	Ⅱas	深鉢	口	条状文、片瀬人指箸、先細縦瓦文	条状	Ⅱ	5	
6	02-368	B1J16-1	Ⅱas	深鉢	胴	斜位横起線文	条状	Ⅱ	5	
7	02-345	B1I18-1	Ⅱas	深鉢	口	微起線文(輪子状)	ナデ	Ⅱ	7	
8	02-382	B1J16-2	Ⅱas	深鉢	口	斜位横起線文	ナデ	Ⅱ	5	
9	02-372	B1J16-2	Ⅱas	深鉢	胴	斜位横起線文	ナデ	Ⅱ	5	
10	02-366	B1J16-3	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文、祝線、先細小波状	1ガキ	Ⅱ	7	
11	02-304	B1I16-1	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文、祝線、先細小波状	先細縦瓦文	1ガキ	Ⅱ	5
12	02-312	B1I16-2	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文、祝線、先細小波状	先細縦瓦文	1ガキ	Ⅱ	6
13	02-399	B1I16-3	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文、祝線	1ガキ	Ⅱ	6	
14	02-352	B1I18-2	Ⅱas	深鉢	胴	貝殻横起線文、祝線	1ガキ	Ⅱ	6	
15	02-380	B1I18-3	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文、祝線	1ガキ	Ⅱ	5	
16	02-365	B1I18-4	Ⅱas	深鉢	口	貝殻横起線文	1ガキ	Ⅱ	10	

第140図 遺構外出土土器(12) 2区Ⅱa2層-2



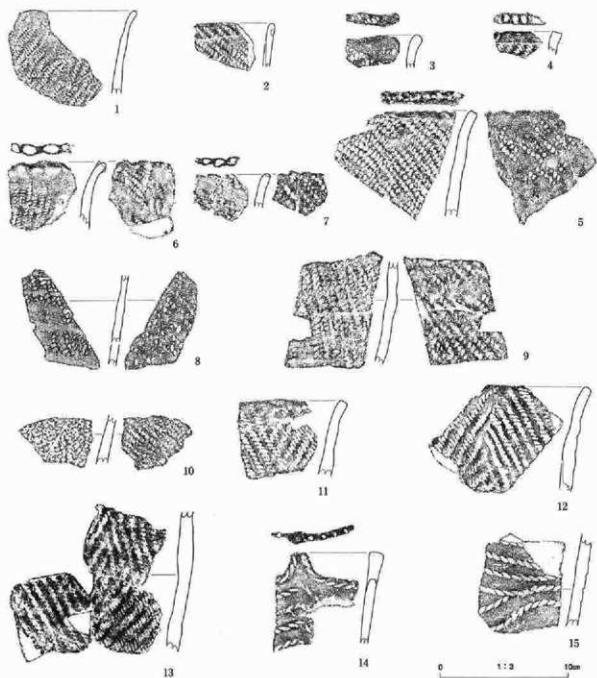
图版序号	登錄番号	出土地点	层位	器类	部位	纹饰	外部纹饰	内部纹饰	分型	器厚	备注
1	02-493	B1119-2	IVa3	漆器	刷	地文(II1) 上以斜向纹	十字	正	11mm	植物纤维混入	
2	02-376	B1116-3	V	漆器	口	斜向斜纹, 斜纹, 先密后疏纹	先密斜纹压文, 十字	正	5		
3	02-368	B1116-3	IVa4	漆器	口	地文上以斜向纹, 斜纹	十字	正	5		
4	02-356	B1117-2	IVa4	漆器	刷	非斜向斜纹	十字	正	10	植物纤维混入	
5	02-400	B1116-3	IVa4	漆器	刷	条状	条状	正	5		
6	02-363	B1117-1	IVa3	漆器	口-刷	短此端, 斜向纹, 刷: 斜向斜纹	十字	正	12	植物纤维混入	

第141图 遺構外出土土器(13) 2区Waz層-3、IVa3層-1



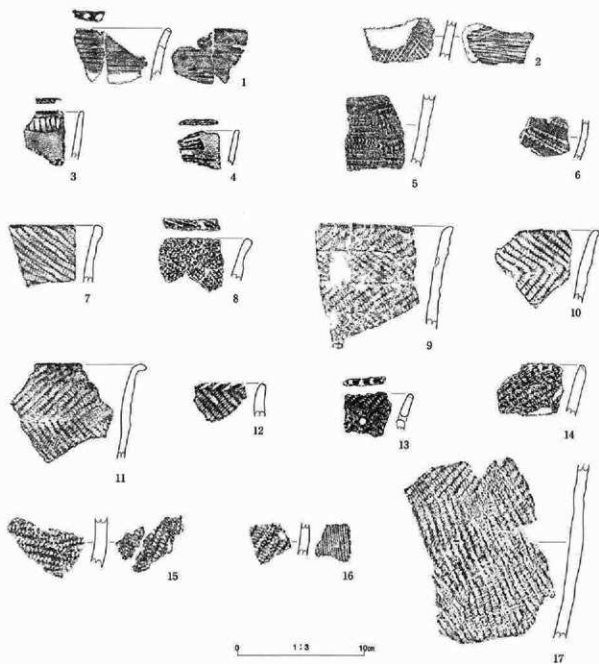
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	表面文様	内面調整	分數	器厚	備考
1	02-254	B1 J17-2	IVa2	深鉢	口	短比喙、横面打痕	丁家々ナテ	Ⅻ	10mm	植物繊維混入
2	02-384	B1 J16-4	IVa2	深鉢	口～胴	短比喙、横面打痕、割；非結晶状塊文	丁家々ナテ	Ⅻ	11	植物繊維混入
3	02-385	B1 J16-4	IVa2	深鉢	胴	非結晶状塊文	ナテ	Ⅺ	9	植物繊維混入
4	02-360	B1 J16-1	IVa2	深鉢	胴	横面打痕文、縦筋孔	ナテ	Ⅺ	10	植物繊維混入
5	02-383	B1 J16-4	IVa2	深鉢	胴	非結晶状塊文	ナテ	Ⅺ	9	植物繊維混入
6	02-254	B1 J17-2	IVa2	深鉢		不要擦糸文、L特；内唇削突	ナテ	Ⅺ	7	

第142回 遺構外出土土器 (14) 2区IVa3層-2、IVa2層



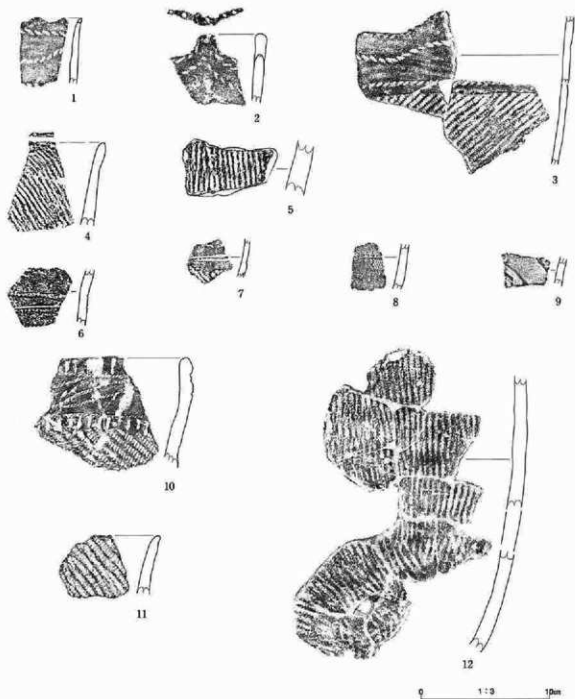
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面文様	分期	器厚	備考
1	01-584	B1141	Waz	酒杯	口	LR (0本)	ナデ	Ⅱ	7mm	器物線跡混入
2	05720	B1144-1	Waz	酒杯	口	RL, 光線形9本止	ナデ	Ⅱ	5	器物線跡混入
3	01-59	B1142	Waz	酒杯	L1	斜縄文, 口唇: 斜面圧痕	ナデ	Ⅱ	5	器物線跡混入
4	00734	B1144-2	Waz	酒杯	L1	LR, 口唇: 斜面圧痕	ナデ	Ⅱ	7	器物線跡混入
5	01-73	B1142B-4	Waz	酒杯	L1	RL, 口唇: 底体未端圧痕	肌	Ⅱ	9	器物線跡混入
6	05729	B1141-1-2	Waz	酒杯	口	縦糸縄文 (RL), 口唇: 竹筴刺突, 小点状	肌	Ⅱ	7	
7	00704	B1144-1	Waz	酒杯	口	RL, 先端斜文, 口唇: 刺突	肌	Ⅱ	6	
8	00489	B1144-1	Waz	酒杯	胴?	RL, 水平線痕7本	肌, (不明)	Ⅱ	7	地成良好
9	00723	B1144-1	Waz	酒杯	胴	肌	肌	Ⅱ	6	地成良好
10	00719	B1144-1	Waz	酒杯	胴下部	肌?	肌	Ⅱ	8	
11	00721	B1144-1	Waz	酒杯	口	縦糸縄文	ナデ	Ⅱ	8	器物線跡混入
12	00736	B1144-4	Waz	酒杯	口	縦糸縄文	ナデ	Ⅱ	8	器物線跡混入
13	00722	B1144-1	Waz	酒杯	胴	縦糸縄文	ナデ	Ⅱ	9	器物線跡混入
14	00731	B1144-4	Waz	酒杯	L1	斜面圧痕文, 先端小突起, 口唇: 刺突	ミダキ	Ⅱ	7	器物線跡混入
15	00497	B1144-1	Waz	酒杯	L1	斜面圧痕文	ミダキ	Ⅱ	10	器物線跡混入

第143図 遺構外出土土器 (15) 3区 (山体側) Waz層-1



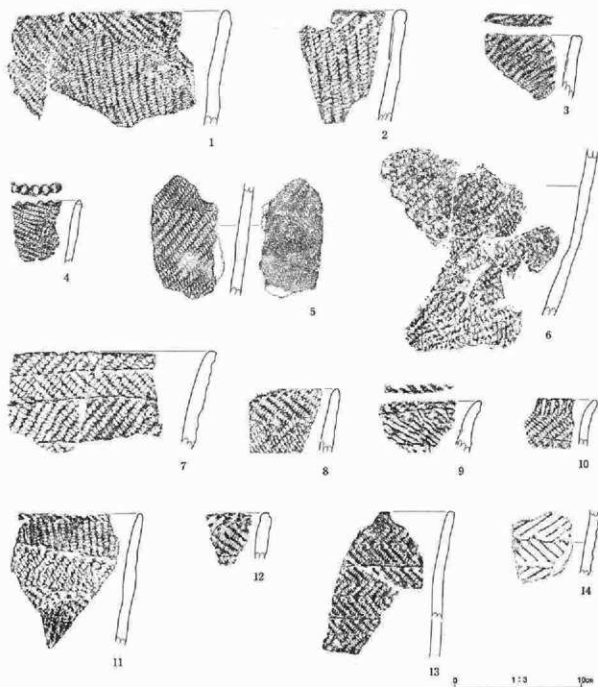
編年番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外壁文様	内面調整	分層	器厚	備考
1	00-27	B1104	Was	埴輪	口	条状、口唇：斜向	条状	Ⅱ	9mm	
2	00-28	B1104	Was	埴輪	胴	条状 (斜位)	条状 (横位)	Ⅱ	7	
3	00-713	B1104	Was	埴輪	口	階段段線文 (横位)	ナデ	Ⅱ	5	
4	00-698	B1104	Was	埴輪?	胴	階段段線文 (横位)	条状	Ⅱ	5	
5	00-351	B1124	Was	埴輪	胴	具敷物線押し引込文?	ナデ	Ⅱ	7	
6	00-56	B1124	Was	埴輪	胴	具敷物線押込、沈層、削突	ミダケ	Ⅱ	5	
7	00-3	B1113	V	埴輪	口	HL (0多)	ミダケ	Ⅲ	7	植物繊維混入
8	00-278	B1111	V	埴輪	口	HL (不明)、口唇：斜位圧入?	ナデ	Ⅲ	6	
9	00-343	B1093	V	埴輪	口	条状羽状縄文	ナデ	Ⅲ	9	植物繊維混入
10	00-674	B1113-4	V	埴輪	口	条状羽状縄文	ナデ	Ⅲ	7	
11	00-673	B1113-2	V	埴輪	口	条状羽状縄文 (0多)	ナデ	Ⅲ	6	植物繊維混入
12	00-353	B1112	V	埴輪	口	HL (0多)、口唇：斜向	ナデ	Ⅲ	9	植物繊維混入
13	00-276	B111-4	V	埴輪	口	条状羽状縄文、口唇：扉体先端圧入、種付孔	ナデ	Ⅲ	6	植物繊維混入
14	00-277	B1111	V	埴輪	口	条状羽状縄文、先端縦位端本	ナデ	Ⅲ	9	植物繊維混入
15	00-716	B1103	V	埴輪	胴	HL	ナデ	Ⅲ	10	
16	00-370	B1093	V	埴輪	胴?	L型	条状	Ⅲ	7	
17	00-344	B1093	V	埴輪	胴	条状羽状縄文+HL (0多)	ナデ	Ⅲ	10	植物繊維混入

第144図 遺構外出土土器 (16) 3区 (山体側) Wa2層-2、V層-1



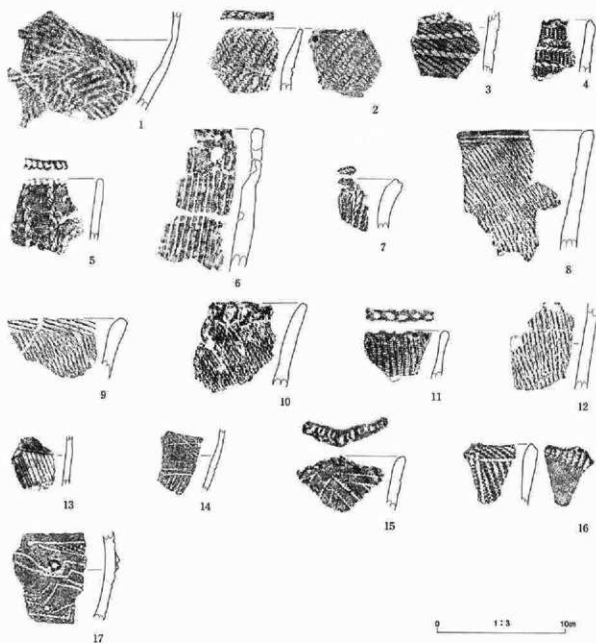
国図番号	発祥番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器取	備考
1	00-482	B I 115	V	漆鉢	口	横面圧文、先端小波状	ナデ	Ⅱ	6cm	植物線織込入
2	00-346	B I 112-4	V	漆鉢	口	横面圧文、先端小波状、口唇：刺突	ミダキ	Ⅱ	7	植物線織込入
3	00-843	B I 112-4	V	漆鉢	口	横面圧文、網：LR (0多)	ミダキ	Ⅱ	6	植物線織込入
4	01-367	B I 110-4	V	漆鉢	口	横赤文、口唇：刺突圧痕	ナデ	Ⅱ	9	植物線織込入
5	01-75	B I 111-3	V	漆鉢	胴	横赤文	ナデ	Ⅱ	14	植物線織込入
6	01-350	B I 111-2	V	漆鉢	胴	具散線斜圧痕、沈線	ミダキ	Ⅱ	6	
7	00-482	B I 115-4	V	漆鉢	胴	具散線斜圧痕、沈線、刺突	ミダキ	Ⅱ	4	
8	00-480	B I 115	V	漆鉢	胴	具散線斜圧し引凸文?	ナデ	Ⅱ	6	
9	00-457	B I 113-4	V	漆鉢	胴	縦線刺突文	赤塗	Ⅱ	6	
10	00-343	B I 112-1	Ⅱa4	漆鉢	口	横面圧痕、短沈線 網：赤紅塗后状刺突文	ミダキ	Ⅱ	9	植物線織込入
11	00-458	B I 113	Ⅱa4	漆鉢	口	短L (0多)	ナデ	Ⅱ	8	植物線織込入
12	00-828	B I 112-2	Ⅱa4	漆鉢	胴	縦赤刺突 (短L)	ナデ	Ⅱ	10	植物線織込入

第145図 遺構外出土土器 (17) 3区(山体側)V層-2、IVa4層



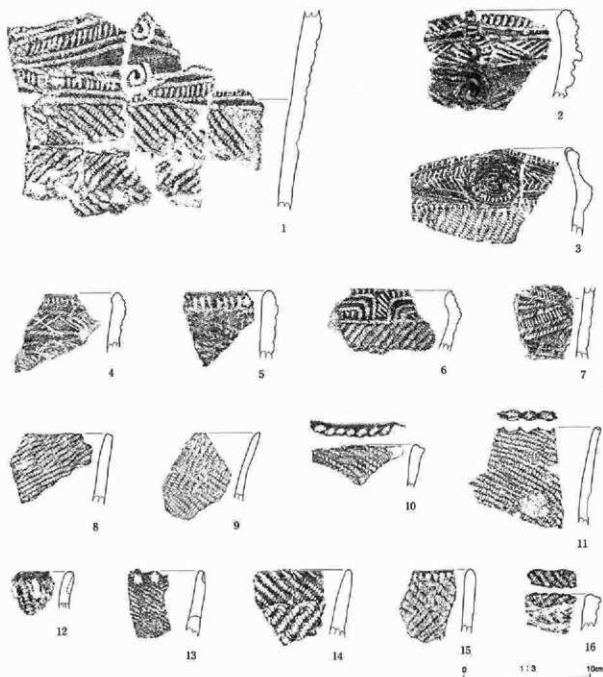
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	器位	外面文様	内面調物	分類	器厚	備考	
1	02-130	B1104-V	V	深鉢	口	斜		ナデ	V	11mm	植物繊維混入
2	01-314	B1104-V	V	深鉢	口	縦条織文(7段)、先端斜位斜糸		ナデ	V	10	植物繊維混入
3	01-38	B104-V	V	深鉢	口	L.R. 口唇: 斜糸		ナデ	V	8	植物繊維混入
4	00-429	B1111-V	V	深鉢	口	L.R. 口唇: 斜糸		ナデ	V	7	植物繊維混入
5	00-733	B1103-V	V	深鉢	口一側	L.R. (口唇)		L.R.	V	9	植物繊維混入
6	01-01	B1104-V	V	深鉢	胴	L.R. (流し織文)		ナデ	V	9	植物繊維混入
7	00-535	B1m121-V	V	深鉢	口	連続斜位織文		ナデ	V	10	植物繊維混入
8	02-19	B1473-V	V	深鉢	口	連続斜位織文、先端斜位斜糸		ナデ	V	8	植物繊維混入
9	02-249	B1451-V	V	深鉢	口	連続斜位織文(1段+0段)、先端斜位斜糸、口唇: 斜糸		ナデ	V	6	植物繊維混入
10	01-329	B1103-V	V	深鉢	口	連続斜位織文、先端斜位斜糸		ナデ	V	7	植物繊維混入
11	02-48	B1092-V	V	深鉢	口	連続斜位織文、口唇: 斜糸		ナデ	V	7	植物繊維混入
12	02-05	B104-V	V	深鉢	口	連続斜位織文、先端斜位斜糸		ナデ	V	10	植物繊維混入
13	00-596	B1m131-V	V	深鉢	口	連続斜位織文		ナデ	V	8	植物繊維混入
14	01-205	B103-V	V	深鉢	胴	連続斜位織文		ミダナ	V	9	植物繊維混入

第146図 瀬横外出土土器(18) 3区(畑側) V層-1



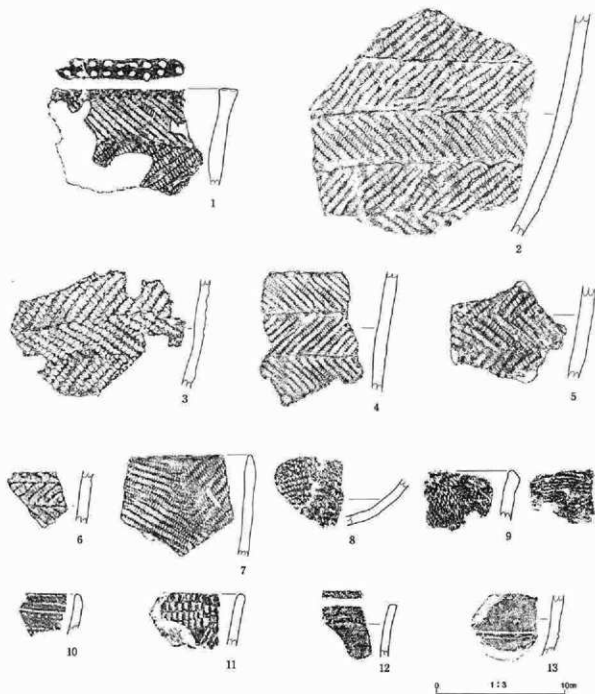
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分級	器型	備考	
1	03-237	B1 k9-2	V	深鉢	胴下部	赤絵朱引刺織文	ナデ	V	9cm	器物編入	
2	03-229	B1 k9-2	V	深鉢	口	LR上に横筋面圧痕、口唇：縹泥圧痕	LR	V	9	器物編入	
3	03-14	B1 j11-9	V	深鉢	胴	RL上に2段横筋面圧痕	ナデ	V	7	器物編入	
4	03-30	B1 j11-2	V	深鉢	口	RL上に2段横筋面圧痕、口唇：縹泥圧痕	ナデ擦痕	V	9	器物編入	
5	03-82	B1 k6-1	V	深鉢	口	横筋圧痕文、口唇：刺突	ナデ擦痕	V	6	器物編入	
6	03-86	B1 k6-4	V	深鉢	口	熟赤文、縹筋孔	ナデ	V	13	器物編入	
7	03-119	B1 k7-4	V	深鉢	口	熟赤文、口唇：縹泥圧痕	ナデ	V	10	器物編入	
8	03-238	B1 k8-2	V	深鉢	口	熟赤文、先筒面圧痕	ナデ	V	10	器物編入	
9	03-242	B1 k8-2	V	深鉢	口	熟赤文、先筒面圧痕	ナデ	V	10	器物編入	
10	03-17	B1 k8-1	V	深鉢	口	熟赤文、先筒面圧痕	ナデ	形痕?	V	10	器物編入
11	03-63	B1 k4-2	V	深鉢	口	熟赤文、口唇：骨管状刺突	ナデ	V	5	器物編入	
12	03-268	B1 j19-3	V	深鉢	胴	熟赤文	ナデ	V	8	器物編入	
13	03-145	B1 j7-1	V	深鉢	胴	縹泥刺織文	縹泥	V	4		
14	03-940	B1 j13-2	V	深鉢	胴	沈澱、縹泥?	ナデ	V	5		
15	03-45	B1 m16-1	V	深鉢	口	具段縹緑圧痕、沈澱、先筒小瓶状	ナデ、先筒部位圧痕	V	8		
16	03-151	B1 k4-2	V	深鉢	口	具段縹緑圧痕文、先筒小瓶状	ナデ、先筒部位圧痕	V	8		
17	03-744	B1 m13-2	V	深鉢	胴	具段縹緑圧痕、沈澱、刺突、粘土層	ミダホ	V	8		

第147図 遺構外出土土器 (19) 3区(畑側) V層-2



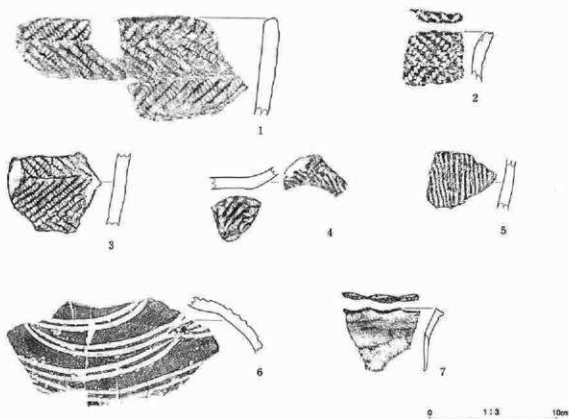
图版序号	登錄番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面裝飾	分壱	胎厚	備考
1	05-849	B113-2	B7b	深鉢	口一側	短沈線、斜面任意、斜：非結家羽狀織文	ミダキ	VI	12mm	植物繊維混入
2	01-039	B149-2	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意、斜位帶	ミダキ	VI	13	植物繊維混入
3	02-113	B171-1	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意、斜：非結家羽狀織文?	ミダキ	VI	9	植物繊維混入
4	04-041	B1103-3	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ミダキ	VI	9	
5	04-357	B159-2	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ミダキ	VI	13	植物繊維混入
6	00-135	B159-4	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ミダキ	VI	9	植物繊維混入
7	00-114	B177-1	B7b	深鉢	胴	短沈線、斜面任意	ミダキ	VI	8	植物繊維混入
8	01-39	B159-4	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	9	植物繊維混入
9	04-268	B111-4	B7b	深鉢	口	非結家羽狀織文	ミダキ	VI	8	植物繊維混入
10	00-26	B158	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	8	植物繊維混入
11	00-54	B110-2	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	7	植物繊維混入
12	02-118	B147-4	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	9	
13	01-360	B111-2	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	9	植物繊維混入
14	02-87	B146-1	B7b	深鉢	口	非結家羽狀織文、先端斜位帯	ナダ	VI	11	植物繊維混入
15	01-287	B149-2	B7b	深鉢	口	非結家羽狀織文、先端斜位帯	ナダ	VI	8	植物繊維混入
16	00-19	B110-1	B7b	深鉢	口	短沈線、斜面任意	ナダ	VI	12	植物繊維混入

第148図 遺構外出土土器 (20) 3区(烟筒)IVb層-1



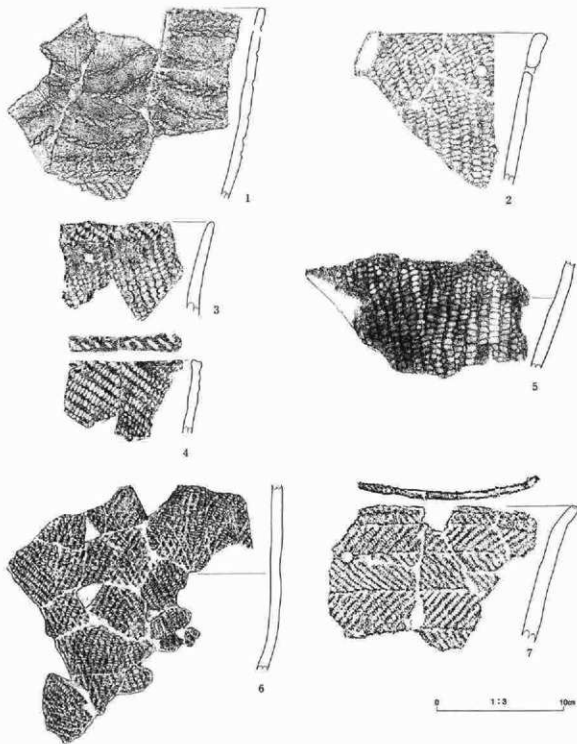
国庫番号	記録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面状態	分組	数量	備考
1	02-366	B.I.16-2	3b	深鉢	口	厚結糸羽状織文、口唇：網交2列	ナデ	Ⅵ	10m	植物繊維混入
2	01-365	B.I.19-2	3b	深鉢	胴	厚結糸羽状織文	ナデ	Ⅵ	12	植物繊維混入
3	02-127	B.I.19-4	3b	深鉢	胴	厚結糸羽状織文	ナデ	Ⅵ	9	植物繊維混入
4	02-092	B.I.110	3b	深鉢	胴	厚結糸羽状織文	ミダキ	Ⅵ	9	植物繊維混入
5	02-708	B.I.11-3	3b	深鉢	胴	厚結糸羽状織文	ナデ	Ⅵ	11	植物繊維混入
6	01-345	B.I.18-3	3b	深鉢	胴	厚結糸羽状織文	ミダキ	Ⅵ	8	
7	02-123	B.I.19-3	3b	深鉢	口	厚結糸織文	ナデ	Ⅵ	7	植物繊維混入
8	02-40	B.I.16-2	3b	深鉢	底	平織?	ナデ	Ⅵ	7	植物繊維混入
9	02-41	B.I.16-2	3b	深鉢	口	熟糸文、先端斜位片度	ナデ、裏面片度、熟糸文	Ⅵ	9	植物繊維混入
10	01-346	B.I.18-1	3b	深鉢	口	横位垂し引き文、口唇：網交	ミダキ	Ⅵ	7	
11	02-36	B.I.11-4	3b	深鉢	口	横位垂し引き文	ナデ	Ⅵ	6	
12	02-117	B.I.17-3	3b	深鉢	口	縦位網入人股帯、口唇：熟糸	ナデ	Ⅵ	6	
13	02-116	B.I.17-3	3b	深鉢	底	沈織	ナデ	Ⅵ	7	

第149図 遺構外出土土器(21) 3区(畑側) IVb層-2



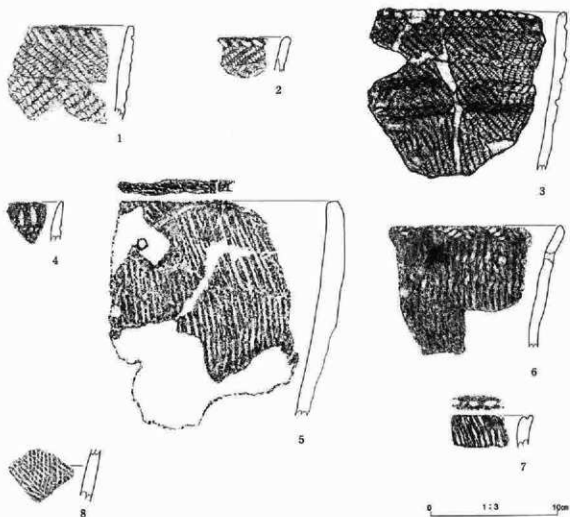
図版番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	図解	備考
1	00-852	B 1115-1	IVa4	深鉢	口	条線支那状縄文	ナデ	Ⅱ	12mm	植物繊維混入
2	00-29	B 1115-1・4	IVa4	深鉢	口	条線支那状縄文、口唇：刷毛	ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
3	00-639	B 1115-1・4	IVa4	深鉢	胴	条線支那状縄文	ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
4	00-655	B 1115-2	IVa4	深鉢	底唇	横線任意文（渦巻?）	ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
5	00-659	B 1115	IVa4	深鉢	胴	刷毛文	ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
6	00-808	B 1115	IIb	深鉢	胴	粘土磨、沈線（虎彫工字文）	ナデ	X	8	
7	00-3	B 1115	IIb	深鉢	口	欠損不明、口唇：磨線任意以小波状	ナデ	X	5	

第150図 遺構外出土土器 (22) 3区(山体側) IVa4、(畑側) IIb層



採取番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様	内面調整	分類	器形	備考
1	01-2000	-A 1x17	Ⅴb2	深鉢	口	無面付横文、網；口、(非目?)、口唇；削み?	ナデ	Ⅱ	7m	植物繊維混入
2	01-307	-A 1x18	V	深鉢	口	RL (南北方向、先周斜行)、植物孔	ナデ	Ⅱ	7	植物繊維混入
3	01-89	-A 1x20	V	深鉢	口	RL (南北方向、先周斜行)	ナデ	Ⅱ	7	植物繊維混入
4	01-157	-B 1x09	V	深鉢	口	RL、口唇；削み	ナデ	Ⅱ	6	植物繊維混入
5	01-2002	-A 1x19	V	深鉢	胴下部	縦糸織文	ナデ	Ⅱ	9	植物繊維混入
6	01-2021	-A 1x16-4	V	深鉢	胴下部	不整織文 (RL)	ナデ	Ⅱ	7	植物繊維混入
7	01-2002	-B 1x10	V	深鉢	口	非斜交用長織文、口唇；無面付面、植物孔	ナデ	Ⅱ	11	植物繊維混入

第151図 遺構外出土土器 (23) 5~7区Ⅴb2、Ⅴ層-1



図版番号	登録番号	出土地点	層位	形種	器位	外面文様	内面文様	分類	器厚	備考
1	01-208	-A 1 u2	V	深鉢	口	串刺定斜状縄文、先端斜位刻み	ナシ	V	8mm	継ぎ縄跡混入
2	01-203	-A 1 x17	V	深鉢	口	串刺定斜状縄文、先端斜位刻み	ナシ	V	8	継ぎ縄跡混入
3	01-2011	-A 1 x17	V	深鉢	口	口上に横周圧痕、口唇に割痕	ナシ	V	7	継ぎ縄跡混入
4	01-161	-A 1 x17	V	深鉢	口	横周圧痕、先端に斜位刻み	ナシ	V	8	継ぎ縄跡混入
5	01-163	-A 1 x17	V	深鉢	口	横糸文、口唇に横周圧痕、磨粉孔	ナシ	V	14	継ぎ縄跡混入
6	01-2029	-B 1 s15-3	V	深鉢	口	横糸文上に2本の横周圧痕、先端斜状圧痕、磨粉孔	ナシ	V	8	
7	01-162	-A 1 x17-3	V	深鉢	口	横糸文、口唇に厚体束指圧痕	ナシ	V	9	
8	01-306	-A 1 x18	V	深鉢	胴	横糸文	ナシ	V	10	継ぎ縄跡混入

第152図 遺構外出土土器 (24) 5~7区V層-2

2. 石器 (第153図～第163図)

遺構外から出土した石器は、石鏃、石錐、石匙、不定形石器、石笥などの剥片石器と、打製石斧、すり石、凹石などの礫石器および石核である。各器種・形態により分類し、その特徴を述べる。3ヵ年にわたって採取した石器は1,010点である。器種別では、石鏃525点、石槍5点、石錐2点、石匙264点、石笥8点、不定形石器134点、打製石斧45点、凹石3点、擦石9点、石核3点などである。

上器で行ったように個別に細分すべきであったが、整理時間の都合で時期的な違いを考慮に入れずに器種別に分類した。しかしながら、調査段階では打製石斧は縄文早期末の包含層からの出土量が5割を占める。

石鏃 (第153～155図)

両面加工により扁平な尖頭部を作出する剥片石器で、小型で左右対称なもの。基部形状、側縁部形状、身部最大幅で次のように細分し、それらの組み合わせでIA1のように表記する。

(基部形状) I類：平基 II類：凹基 III類：凸基 (側縁部形状) A類：外湾するもの B類：直線的なもの C類：内湾するもの (身部最大幅) 1：基部で最大幅 2：身部で最大幅

IA類：側縁部が外湾するものが多い。基部に最大幅を持つものの中には比較的小形のものが多く、裏面が同縁調整だけのもの(155図-1)がある。また、調整が途中のものもある。身部に最大幅を持つものは長軸が長いものに多い。

IB類：A類より少ない。

IIA類：基部の挟りの大きいものは少ない。小形のものは調整途中のものや裏面が同縁調整だけのものがある。

IIB類：A類より少ない。

IIC類：1点出土した(154-24)。深い挟りで両翼が鋭角的である。

III A類：基部が丸く、柳葉形状のもの(155-1、2)、円基状のもの(155-3)や、基部末端が尖頭部と同様に尖頭状に作り出されているもの(155-5)がある。

石槍 (第155図)

両面加工により扁平な尖頭部を作出する剥片石器で、大型で左右対称なもの。155-6は尖頭部が欠損している。155-7は基部、先端ともに尖頭状である。

石錐 (第155図)

棒状の尖頭部を作出するもの。次のように細分する。

I類：全体が棒状で握みを持たないもの

II類：全体に細部調整がなされ、握み部と錐部の境界が明瞭なもの

155-8、9ともに錐部先端に回転の痕跡が観察される。

石匙 (第155～158図)

両側からのノッチ状剥離により作出された握み部と刃部を持つもの。握み部軸線と体部軸線のなす角度(楕体角度)から以下のように細分する。

I類：楕体角度が鋭角($\alpha < 90^\circ$)である、いわゆる縦型石匙。刃部の数でさらに細分する。

I A類：摘み部と対になる端部が尖り、刃部が2辺のもの。155-16は摘み部の挟りが浅く、裏面の調整も部分的で未製品と考えられる。

I B類：摘み部と対になる辺も刃部になり、合計3辺の刃部を持つもの。このタイプが一番多い。アスファルトが付着しているもの(156-9、14)がある。

I類が9割を超える。摘みと剥片素材の打面部は同方向のものが多く、156-3、157-12のように逆方向のものがまれにある。摘み部軸線と体部軸線はほぼ平行するものが多く、156-2、3、157-10は摘み角度が 90° を超える。

II類：摘み部軸線と体部軸線が鈍角($90^\circ \leq \alpha$)である、いわゆる横型石匙。縦型に比べて少量である。

不定形石器 (第159図)

石鏃、石鏃、石匙、石筥を除く剥片石器とする。刃部がつくりだされている部位により、次のように分類する。

I類：剥片の1縁辺に2次加工が施されるもの。

II類：剥片の2縁辺に2次加工が施されるもの。

III類：剥片の3縁辺に2次加工が施されるもの。

IV類：剥片の全周に2次加工が施されるもの。

石筥 (第159図)

偏平な剥片を素材とし、縁辺のほぼ全周に両面加工による刃部を有するもの。長軸に直交する辺の片側が広がる鼻形状、木葉形がある。

打製石斧 (第160図)

敲打調整により整形し末端に刃部を有するもの。加工面と形状により次のように細分する。

I類：片面に素材礫の自然面をそのまま残すもの。9割以上をしめる。

形状は、A類：四角形状、B類：楕円形状、C類：滴形状である。ほとんどが加工面全面にわたって2次加工が施されるが、縁辺のみに調整するもの(160-1、4)がある。

II類：両面に加工を施すもの。形状はほぼ滴形状である。162-8の裏面は一次剥離面を残すのみである。

石材は剥片石器に比べて種類が多く、砂岩、凝灰岩、斑レイ岩などであり、花崗岩のように脆くなければ、加工しやすいものを選んでいようである。

擦石 (第163図)

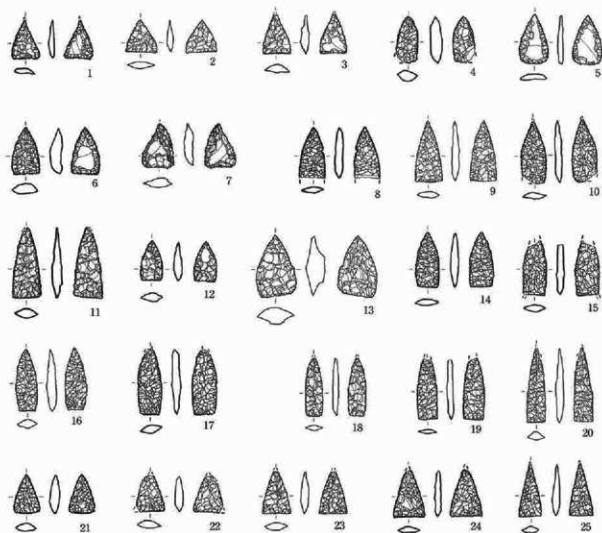
礫の一部に擦り面を残すもの。出土量は少ない。偏平礫の平坦面に擦り面を残すものが多く、163-3は頂端に敲打痕が認められる。

凹石 (第163図)

器体の中央部付近に凹痕を持つ礫を扱う。片面に持つもの、両面に持つものがある。

石製円盤 (第163図)

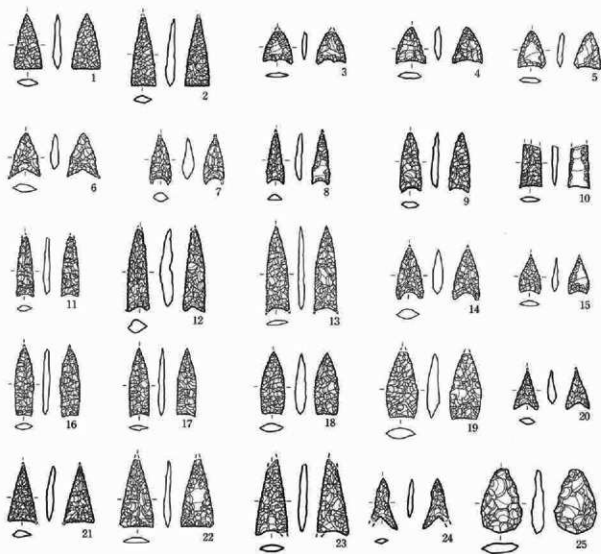
圓縁の敲打調整により円盤状に整形するもの。片面に自然面を残し、全周にわたって圓縁調整が施される。



図物番号	登録番号	部類	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	365	石器	I A1	B I 113-1-4	Ⅱa	20.5	14.3	3.2	0.8	頁岩	先端欠損
2	590	石器	I A1	B II 04	Ⅲ	16	17	4	0.82	頁岩	
3	1032	石器	I A1	B I 10-1	V	21	14	4.5	0.97	頁岩	先端欠損
4	1130	石器	I A1	-B I a14-2+3	V	24.1	11.1	6	1.06	頁岩	左側基部欠損
5	1277	石器	I A1	-A I w21	V	26.1	15.2	2.8	1.26	頁岩	
6	1322	石器	I A1	-B I b13	V	24.2	14.6	6.4	2.23	頁岩	
7	1315	石器	I A1	B I a12	Ⅱa	24	17	4.8	1.58	砂岩質	
8	1142	石器	I A1	-B I c11	V	27.4	13.4	4	1.4	頁岩	基部欠損
9	462	石器	I A1	-B I g5-2	Ⅱba	32	14	3.5	1.4	頁岩	
10	1203	石器	I A1	-A I c21	V	22.0	12.7	3.6	1.6	頁岩	左側基部、先端欠損
11	1086	石器	I A1	-A I w15-4	V wⅡba	38	15	5	2.23	頁岩	先端欠損
12	1067	石器	I A2	-A I w19-1	V	21	12	5	0.96	頁岩	
13	202	石器	I A2	B II 16-1-6	Ⅲ	33.5	20.5	9.5	4.65	頁岩	
14	1128	石器	I A2	-A I w20	V	29	12	4	1.47	頁岩	
15	1255	石器	I A2	-B I a13	V	29.1	12.2	4.1	1.83	頁岩	先端、左側基部欠損
16	533	石器	I A2	B I 16-3	Ⅱb	35	11.5	8	1.6	頁岩	
17	1099	石器	I A2	-A I w18	V	24.0	12.9	4.4	1.87	頁岩	先端欠損
18	585	石器	I A2	B I 16-2	Ⅱa	33	9	9	0.88	頁岩	先端欠損
19	1062	石器	I A2	-A I w23	V	22.5	11	3	1.37	頁岩	先端欠損
20	596	石器	I A2	-A B c1-1-4	V	16.9	10	4.5	1.7	頁岩	先端欠損
21	1214	石器	I B1	-A I w20	V	20	13	4.7	0.96	頁岩	
22	507	石器	I B1	B I 16-7	Ⅱa	12.9	13.1	5	1.14	頁岩	先端、左側基部欠損
23	474	石器	I B1	B I 16-4	V	23.5	15	4.5	1.14	頁岩	先端欠損
24	8	石器	I B1	B I 23-3	Ⅱb	24.6	16.1	3.4	1.26	砂岩質	先端欠損
25	1315	石器	I B1	-B I a13	V	27.4	11.6	3.6	0.84	頁岩	先端欠損

※ () 以内欠損

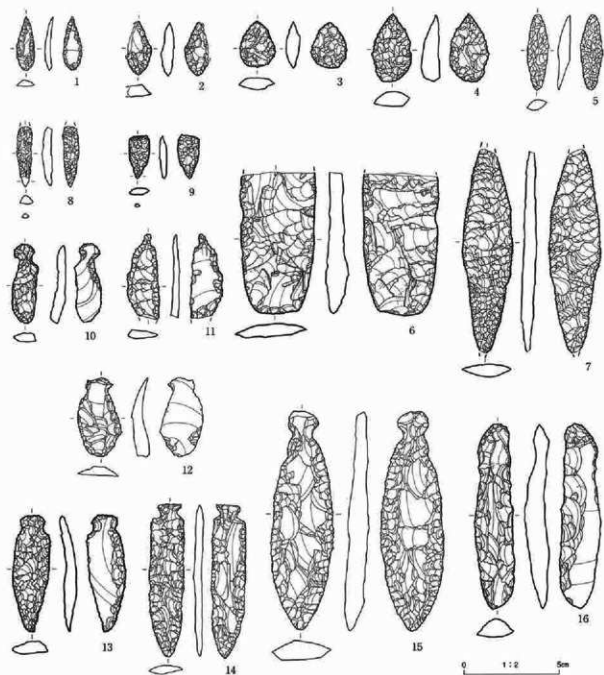
第153図 遺構外出土石器 (1)



編號	登錄號	器種	分類	出土地點	層位	長mm	寬mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	1306	石鏃	I B1 -A 1 a17	V	29.4	14.1	4.5	1.5	頁岩		
2	1276	石鏃	I B1 -A 1 w21	V	(36.4)	12.6	4.6	1.6	頁岩	先端欠損	
3	1035	石鏃	II A1 -A 1 y19	V	(16.3)	14.8	2.5	0.82	頁岩	先端欠損	
4	1017	石鏃	II A1 B 1 i10-1	IVa5	19.5	16	3.5	0.84	頁岩		
5	738	石鏃	II A1 B 1 i15z	IVa5	20	14	3.5	0.81	頁岩		
6	591	石鏃	II A1 B 1 i3-2	IV	23	16	4	1.04	頁岩	左側基部欠損	
7	733	石鏃	II A1 B 1 i6-1	IVa5	25	11	4.5	1.12	頁岩	右側基部欠損, 先端欠損	
8	71	石鏃	II A1 B 1 i14-1	V	(26.4)	8.8	3	0.5	頁岩	先端欠損	
9	1605	石鏃	II A1 -A 1 w19-3	V	32	14	3.5	1.1	頁岩	先端欠損	
10	1296	石鏃	II A1 B 1 m17-3	IVa5	(23)	11.5	2.5	1.0	頁岩	先端欠損	
11	632	石鏃	II A1 B 1 i16-4	V	(32)	9	2	0.78	頁岩	先端欠損	
12	17	石鏃	II A1 B 1 j23-4	IVb	43.4	11.5	6.5	2.84	頁岩	先端欠損	
13	253	石鏃	II A1 B 1 j16-4	IVa2	(45.5)	12	3	1.61	頁岩	基部欠損	
14	661	石鏃	II A1 -B 1 g5-2	IVb1	(26.6)	14.3	5.5	1.74	頁岩	先端欠損	
15	1387	石鏃	II A2 B 1 i13-4	IVa5	18.8	10.5	2.5	0.4	頁岩	先端欠損	
16	571	石鏃	II A2 -B 1 i5	IVb	(26)	10	3	1.06	頁岩	先端欠損	
17	522	石鏃	II A2 B 1 i14-1z	IVa	37	11	3	1	頁岩		
18	1292	石鏃	II A2 B 1 i10	V	32.4	12	4.5	1.8	頁岩		
19	572	石鏃	II A2 B 1 m5-2	IVb	(25)	16.5	6.5	2.1	頁岩	先端欠損	
20	1864	石鏃	II B1 -B 1 a15-2	V	30.9	12.3	3.9	0.6	頁岩	先端欠損	
21	349	石鏃	II B1 B 1 i10-2	IVa2	(26.1)	(14.7)	3.3	1.3	頁岩	先端, 右側基部欠損	
22	575	石鏃	II B1 B 1 m5-1	IVb	(26)	(20)	3.8	1.86	頁岩	先端, 左側基部欠損	
23	1355	石鏃	II B1 B 1 i9-2	V	(40)	(16)	3.8	2.1	頁岩	先端, 右側基部欠損	
24	290	石鏃	II C1 B 1 i20	IVa2	26.5	(13.5)	3	0.55	燧石	左側基部欠損	
25	1369	石鏃	II A1 -B 1 i14-2	v	33.7	21.8	4.5	4.5	頁岩		

※ () 為欠損

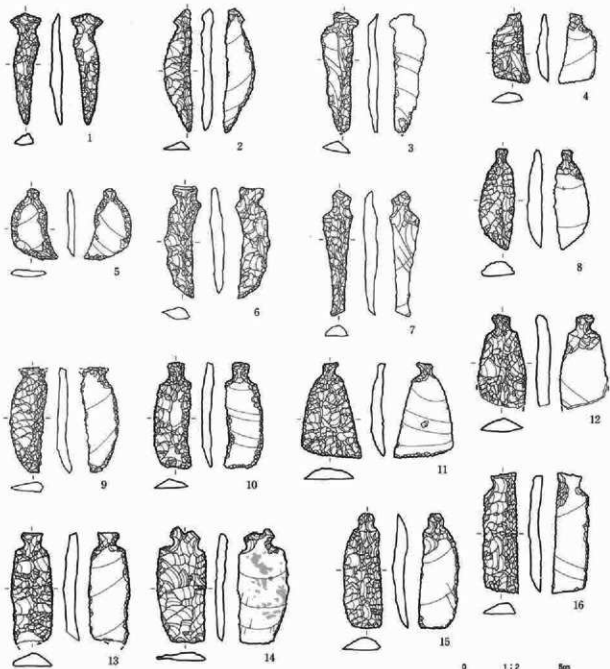
第154圖 遺構外出土石器(2)



編號	登錄番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	837	石鏃	IIA2	B111-1	Vh	39	10	4	6.68	頁岩	
2	38	石鏃	IIA2	B1m13-2	Vas	29	12.00	6.5	2.12	頁岩	左側上半欠損
3	1081	石鏃	IIA2	-A1v23	V	35	15	7	2.81	頁岩	
4	1024	石鏃	IIA2	B1112	Vas	35.9	20.5	8.2	6.61	頁岩	
5	821	石鏃	IIA2	B114-1A	Va	40	11	7	2.5	頁岩	
6	27	石鏃		B1115-1	Vas	75	40	12	22.82	チャート	尖端部欠損
7	1236	石鏃		-B1b13	V	(107)	26.4	7.6	30.6	頁岩	尖端部、基部欠損
8	736	石鏃	I	B114-2	Vas	(31.8)	7.6	5.4	1.4	頁岩	基部部欠損、先端部破損
9	1145	石鏃	II	-B1c12	V	(22.2)	11	5.6	6.9	頁岩	
10	294	石鏃	IA	B1m23	Va	41.1	13.3	8	3.26	燧石	
11	1127	石鏃	IA	-A1s17	V	45	17	5	4.62	頁岩	
12	716	石鏃	IA	B1m5-2	V	43	22.3	9.5	6.19	頁岩	基部先端欠損
13	1002	石鏃	IA	-B1b15	V	62	20	8.5	8.5	頁岩	
14	673	石鏃	IA	B1116-2	Vas	81	18	9	8.12	頁岩	
15	800	石鏃	IA	B1k15-1	Vas	116	32	13	40.07	頁岩	
16	294	石鏃	IA	B1120	Vas	98	20	12.5	17.97	燧石	赤錆品?

※ () は欠損長

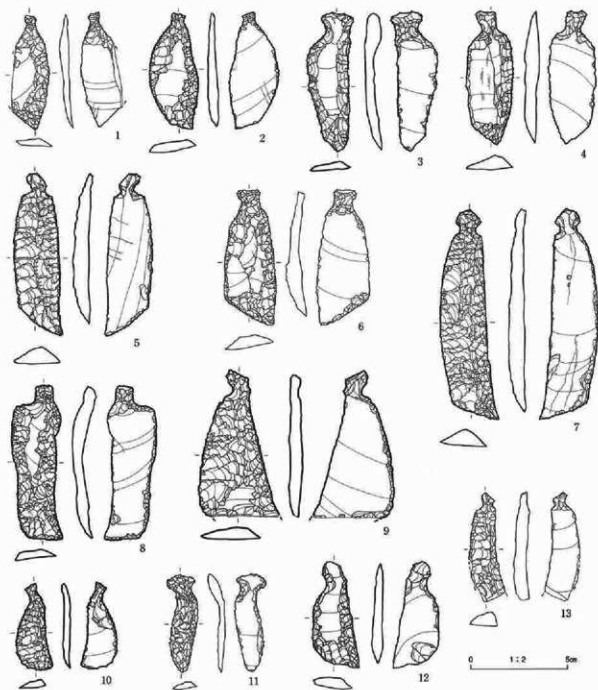
第165圖 遺構外出土石器(3)



図録番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長cm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	1030	石匙	1A	B149	IVb	89	18.5	6	3.66	頁岩	
2	144	石匙	1A	1区-弥生地	概説	44.8	14	6	4.57	頁岩	
3	727	石匙	1A	B105-4	Ⅱa	64	18.5	6	5.57	頁岩	体部先端欠損
4	1220	石匙	1B	-A1v20	V	28	18.5	6	4.18	頁岩	
5	389	石匙	1B	B1k7-2	IVb	38.5	24	4.4	4.01	頁岩	
6	617	石匙	1B	B103-34	Ⅱa	39	18.5	7.5	5.8	頁岩	
7	709	石匙	1B	B1a05-2	Ⅱc	67	15.5	7	5.16	頁岩	
8	245	石匙	1B	B1k16	Ⅱb	53.3	18.4	7.4	7.42	頁岩	
9	724	石匙	1B	B105-3	Ⅱa	55.5	19.5	7.5	5.97	頁岩	右側狭み部欠損
10	1918	石匙	1B	B102-4	Ⅱa	36	19	8.2	6.18	頁岩	
11	1329	石匙	1B	-A1w21	V	86.5	31.5	7.5	9.36	頁岩	
12	1142	石匙	1B	-B1b11-3	V	55.0	24.3	7.2	8.78	頁岩	体部先端欠損
13	1244	石匙	1B	-B1c9	V	58.7	21.1	7.3	8.60	頁岩	体部先端欠損
14	223	石匙	1B	B1j13-3	Ⅱa	48.3	28.2	8	8.69	頁岩	裏面アスファルト付着
15	1323	石匙	1B	-A1x18	V	61	20	8	8.75	頁岩	
16	1240	石匙	1B	-A1v20	V	63.5	19	6.5	8.76	頁岩	

※ () は欠損長

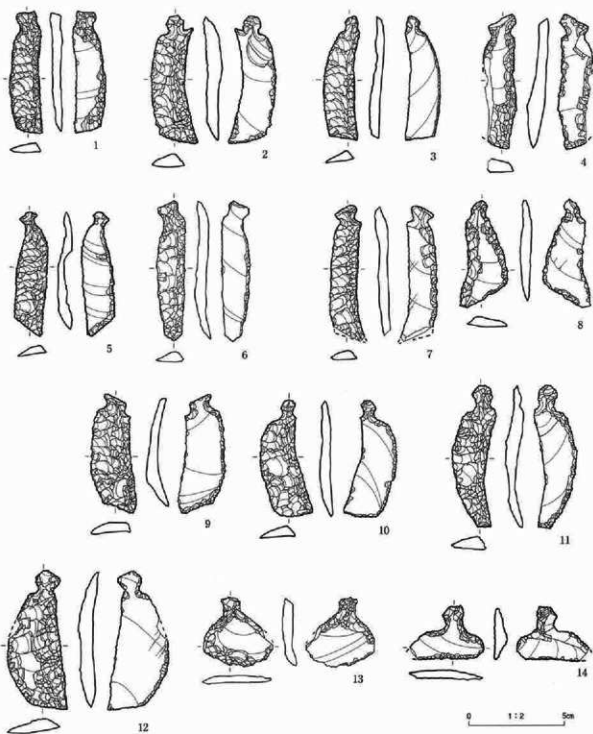
第156図 遺構外出土石器 (4)



図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	材質	備考
1	501	石匙	1B	B 1 j 17-1	Ⅱa	60.5	21.1	5	6.32	頁岩	左縁部欠損
2	1025	石匙	1B	B 1 j 11	V	62	25	6.5	8.74	頁岩	
3	101	石匙	1B	B 1 i 21-34	Ⅱa	73.5	24	10	10.43	頁岩	
4	251	石匙	1B	B 1 i 21	Ⅱb	71.2	24.6	8.6	14.71	頁岩	
5	1005	石匙	1B	- A 1 w 18	V	96	26	9	16.97	頁岩	
6	585	石匙	1B	B 1 i 15-1	V	72	27.5	10.5	14.32	頁岩	
7	1087	石匙	1B	- A 1 a 46-4	V	111	31	9	25.51	頁岩	
8	1161	石匙	1B	- B 1 d 9	V	82.1	25.3	7.7	15.06	頁岩	
9	1348	石匙	1B	- B 1 e 9	Ⅱb 1	78.11	42.6	6.2	19.94	頁岩	表面先端欠損
10	262	石匙	1B	B 1 i 10-2	Ⅱa	66	19	3.5	3.6	頁岩	
11	569	石匙	1B	B 1 i 10-7-4	Ⅱb	51.5	16.5	9	4.2	頁岩	
12	1031	石匙	1B	B 1 i 10-3	Ⅱa	96	24	6	9.16	頁岩	
13	623	石匙	1B	B 1 i 10 f	Ⅱa	150	119	8.5	6.15	頁岩	表面左側、先端欠損

※ () は欠損長

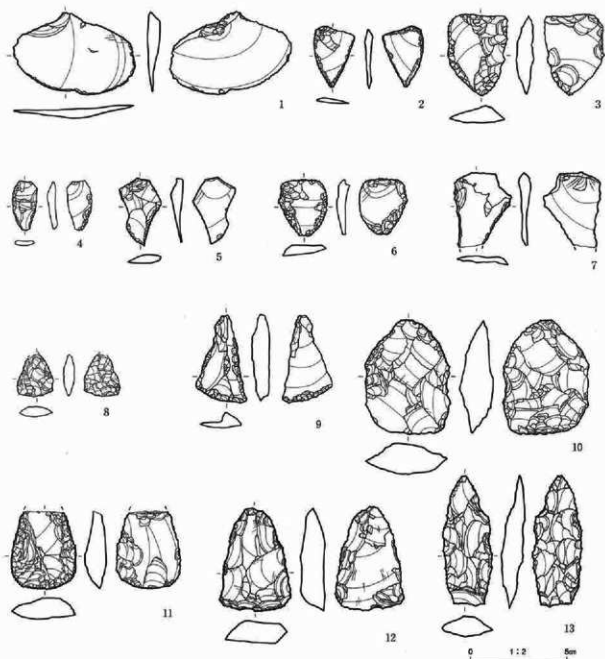
第157図 遺構外出土石器 (5)



図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量g	材質	備考
1	1173	石棍	1B	B110-3	V	64.5	17	6.5	7.03	頁岩	
2	1093	石棍	1B	-A1x18-4	V	69	24.5	10	8.24	頁岩	
3	1093	石棍	1B	-B1a13	V	66	18	7	6.94	頁岩	
4	1160	石棍	1B	B1c11	V	71.5	17.5	5.5	11.04	頁岩	体部先端欠損
5	1281	石棍	1B	-B1b13-1	V	66	17	7	7.14	頁岩	
6	508	石棍	1B	B1j15-4	Baa		15	8.5	6.96	頁岩	
7	1330	石棍	1B	-A1w21	V	72	18	9	7.68	頁岩	
8	1096	石棍	1B	-A1w18	V	57	25	6	7.26	頁岩	体部先端欠損
9	1141	石棍	1B	-A1v21	V	63.5	24	12	11.65	頁岩	
10	1088	石棍	1B	-A1y16-2.3	V	62	38	6.5	8.15	頁岩	
11	1029	石棍	1B	B1m10-2	V	76	22.5	9.5	16.36	頁岩	
12	1098	石棍	1B	-A1v20	V	74	11.5	11	18.51	頁岩	体部先端上半欠損
13	585	石棍	B1B	B1j16-1	Baa	36.5	(36.5)	7.5	6.5	頁岩	体部右側下半欠損
14	341	石棍	B1B	B1h13	Baa	39	36	7	4.4	赤色頁岩	体部先端欠損

※ () は欠損氏

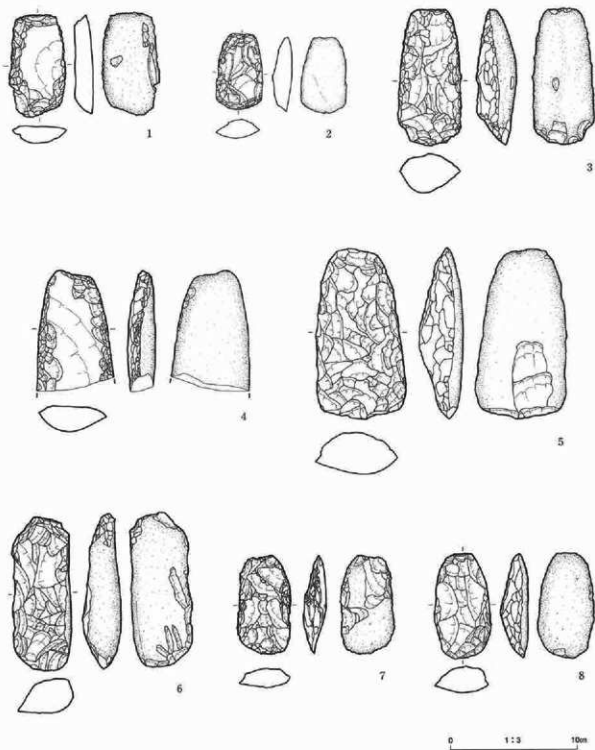
第158図 遺構外出土石器(6)



图版番号	登録番号	形種	分期	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	54	不変形	I	B11a45	V-VII	40	63	9	7.3	頁岩	
2	207	不変形	II	B11m12-1	IVb	30	22	5	2.14	頁岩	
3	1115a	不変形	II	-B11a44	V	43	31	8.5	11.81	頁岩	
4	735	不変形	II	B1114-2	IIIa	26.5	13.5	4	1.24	頁岩	
5	1310	不変形	II	-A11a16	IIIa	35	24	6.5	3.16	頁岩	
6	1201	不変形	II	-B11a15	V	30	25.1	5.5	4.28	頁岩	
7	16	不変形	II	B11j18	IVa	28.5	28.5	6	5.24	頁岩	先端欠損
8	10	不変形	II	B1123-3	IVb	22.5	18.5	5.5	2.67	頁岩	基部欠損
9	39	不変形	II	B11m13-2	IVa	46	26	8.5	4.53	頁岩	
10	1264	不変形	II	-A11a4-2	V	62.5	44.5	17.5	41.79	頁岩	
11	1064	石塊	II	-A11a17-1	V	(41)	34	11	17.78	頁岩	基部欠損
12	102	石塊	II	B1121-34	IVa	55	36.5	12.5	26.35	石英岩山岩	
13	119	石塊	II	B1120-2	IVa	60	35	12	16.72	頁岩	

※ () は欠損長

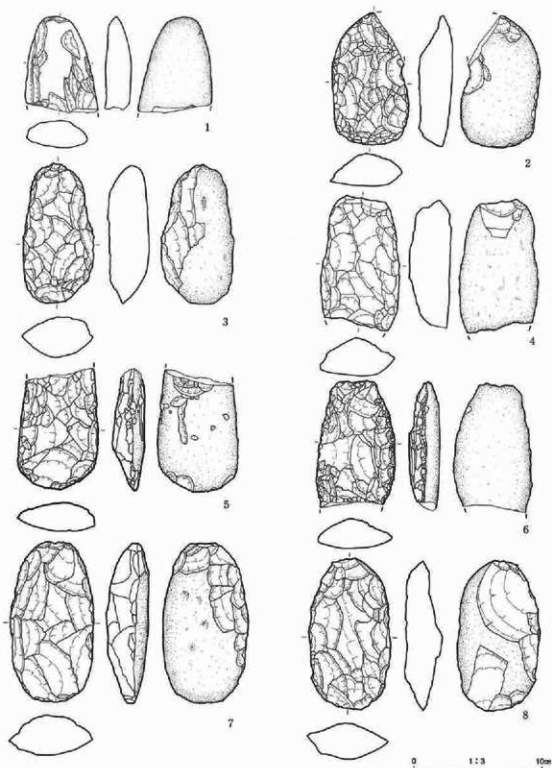
第159図 遺構外出土石器 (7)



国图序号	采集序号	器名	分期	出土地点	层位	长mm	宽mm	厚mm	重量g	石质	备注
1	607	打制石斧	IA	苏149-2	IVb	84	44.5	14	78.08	砂岩	
2	619	打制石斧	IA	苏14-1.4	Va	61.5	27.5	15.5	38.69	砂岩	
3	1322	打制石斧	IA	-A I x18	V	107.5	49	32	192.02	燧石岩	
4	1354	打制石斧	IA	-A II p0-2	V	100	61	20.5	156.34	頁岩	刃部欠残
5	1094	打制石斧	IA	-A I x21	V	134.5	71.5	32.5	368.46	燧岩	
6	1354	打制石斧	IA	-B I a13	V	121	45	30	328.01	燧石岩	
7	624	打制石斧	IB	苏114-2	Wab	77.5	42.5	16.5	58.03	砂岩	
8	1091	打制石斧	IB	-A I a22	V	83	45	21.5	92.95	燧石岩	

※ () 刃欠残

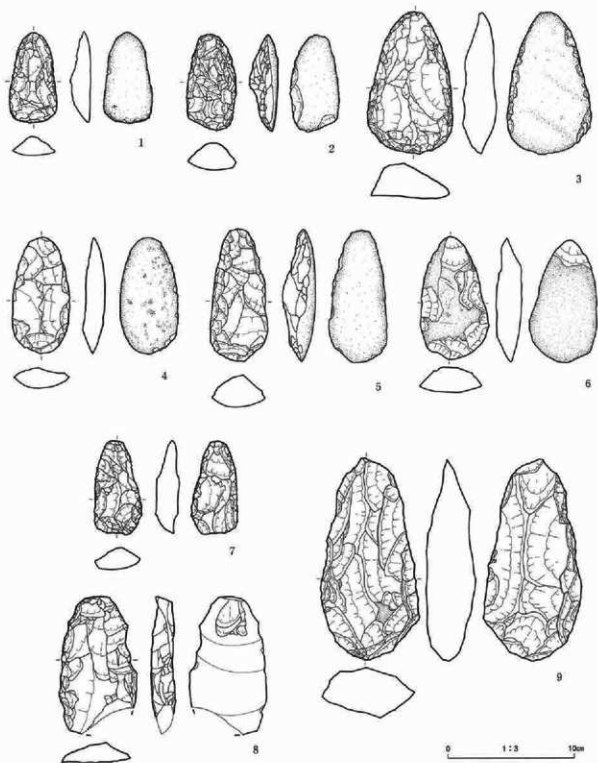
第160图 遼構外出土石器(8)



圖版番号	登錄番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	1363	打製石斧	1B	B1 m15-2	Ⅱa	77	22	58	116.26	燧石質	刃部欠損
2	355	打製石斧	1B	B1 k7-4	Ⅱb下部	104.5	181.5	26	203.53	砂岩	基部欠損
3	1074	打製石斧	1B	-A1 v23	V	119	31	33	270.32	砂岩	
4	680	打製石斧	1B	B1 l10-1	Ⅱb	137	61.5	31.8	264.92	砂岩	刃部欠損
5	1063	打製石斧	1B	-A1 v5	V	97	63	23.5	178.25	燧石質	基部欠損
6	1300	打製石斧	1B	-B1 d9	V	101.53	61	23.5	178.3	頁岩	刃部欠損
7	665	打製石斧	1B	B1 k3-1.2	V	127	67	31.5	345	砂岩	
8	519	打製石斧	1B	B1 m5-4	Ⅱb下部	120	66	29	270.65	砂岩	

※ () は欠損部

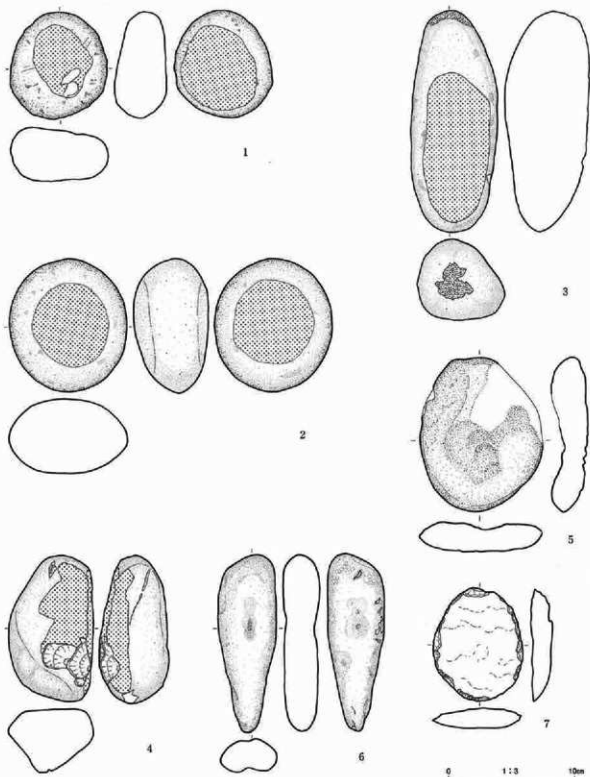
第161図 遺構外出土石器 (9)



国取番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長mm	幅mm	厚mm	重量g	石質	備考
1	1130	打製石斧	TC	-A Ⅱg2-2	V	72	37	16	41.43	砂岩	
2	1314	打製石斧	TC	B I Ⅱ0-3	V	76.5	39	21	72	凝レイ岩	
3	684	打製石斧	TC	B I Ⅱ1-3	V	112	67	28	299.32	砂岩	
4	1129	打製石斧	TC	-A Ⅱg2-2	V	92	46	18	79.82	凝灰岩	
5	1113	打製石斧	TC	-B I c ⅡB-2	V	135	46	26	145.46	凝レイ岩	
6	211	打製石斧	TC	B I c ⅡA-2	Ⅱa	950	510	195	117.5	カホンフェルス	
7	1252	打製石斧	BC	B I ⅡB-3	Ⅱa	74	36	18	47.15	頁岩	
8	1225	打製石斧	BC	-A Ⅱ23	V	1090	60	18	122.69	頁岩	方部欠損
9	11	打製石斧	BC	B I ⅡD-3	Ⅱb	192	76	29.5	421.3	頁岩	

※ () は欠損部

第162図 遺構外出土石器 (10)



図版番号	登録番号	器種	分類	出土地点	層位	長cm	幅cm	厚mm	重量g	石質	備考
1	195	磨石		B I 113	War	83	78.5	40	363.1	砂岩	
2	324	磨石		B I m12-4	Was	104	91	58	757.7	磨岩	
3	196	磨石		B I 113	War	172	87	65	849.6	砂岩	先端に敲打痕
4	216	磨石		B I 113-2	War	114	98	54	495.9	砂岩	
5	645	刮石		B I m5-1	S'b	122	98	24	470	磨岩	
6	394	刮石		B I 120	Was	138	44.5	26	240.4	頁岩	
7	309	石製内輪		B I 120	Wa	68.5	70	17.5	119.5	頁岩	

※ () は欠損部

第163図 遺構外出土石器 (11)

VI. まとめ

1. 土層

①斜面移動物質とその発生時期 調査中から崖錐性堆積物の多さとその規模に注目していた。老年期の山地であり、日本列島の基盤といわれる古期花崗岩や古生代から中生代の堆積物で構成される後背山地であればこそ日常茶飯事に物理的・化学的作用で大小の岩・砂・粘土が特に山麓付近の傾斜変換部に多く堆積するのであろうかと当初は考えていた。しかしながら、4区のTo-Cu直上の堆積物(約3m厚)を確認してからは一般的な風化浸食ではないことに気がついた。砂～粘土を基質として大小の角礫がランダムに入り込んでいる。非常に淘汰が悪い。後背には小規模な谷があり、普段は枯れ沢であるが台風とか豪雨時は滝のように水が流れてくる(平成13年・14年の8と9月の台風により遺跡は水没)。ここから流れ下ったものであろうことが推測された。この種の堆積物を調査区全域の土層内で探してみると、6層確認できた。To-Cu上位の黒色土内で最大4層、その下位で2層。気候変動が影響していると考えられた。平成12年調査の小松II遺跡でも黒色土内にとくに珪酸礫の多く混入する層を確認していた。つまり堆積物供給量で層相は異なるが、同じ気象条件の中で堆積したものであろうと考えられた。供給量が多い場合は崖錐性堆積物のみの層相(淘汰の悪い大小の角礫層、大小の角礫混じりの砂・粘土層など)、少ない場合は礫混じりの黒色土などである。どのような堆積環境にあるか(単一の堆積環境か、複数の堆積環境境界付近に位置するか)で決まると考えられる。崖錐性堆積物は、気候変化に伴う植生被覆度や斜面の粗粒物質質で変化し、これは遺跡周辺の局所的な気候ではなく、東北地方とかある規模の範囲内での気候であると考えられる。大平明夫(1997)は、約5,500～5,500R.P.に豪雨頻度の高い気象条件で斜面に粗粒物質が増加したことや、約3,500～2,000R.P.に寒冷化に伴い斜面の不安定物質が増加したことを考えており、遺跡内埋土の性格と共通すると考えられる。したがって、斜面からの物質供給量が多いと見られる山地内での調査では、後背山地からの岩屑(がんせつ)を多く含む層や土行流などは地層の堆積年代を知る一つの目安になる場合があると考えられる。

②包含層の分布 本遺跡内に分布する遺物を多量に含む層(以下包含層)は、遺跡埋土最上部のいわゆる黒色土内を除けば河川性堆積物と崖錐性堆積物内薄層(10～数10cm)として介在する。これら堆積物を構成する粘土層は褐色土、砂礫層はオリブ褐色を呈するのに対し、包含層は黒褐色ないし暗褐色を呈している。包含層は2タイプあり、土器・石器・炭化物のほかには獣骨を比較的多く含むAタイプと土器・石器・炭化物片にごくまれに獣骨を含むBタイプである。Aタイプは平場の縁辺で、山地体の迫出す0区(A1)と1～3区山体側の沢周辺(A2)に、Bタイプは3区窯圃周辺～8区に分布する。A2では明瞭な包含層は4枚(Ⅳa3、Ⅳa4、V、Ⅳa2)確認された(第5回参照)。Ⅳa2層は202号住居跡周辺と38号・49号住居跡周辺の旧久仙川河床部門地最底面付近に主に広がる。V層は層相を多少変化させながら1～8区付近までもっとも広範囲に広がる。Ⅳa4層は2区と2区寄り3区山体側周辺のみ局所的に分布し、小規模(約10m)な滝状半平面を早する広がり位置を変えながら複数枚広がっていると推測される。Ⅳa3層は1区西側～2区に分布し、他層に比し山体から半野側にかけての広がりが顕著である。これら包含層底面(下位層上面)では遺構が検出されるが、包含層タイプで検出される遺構の種類が明らかに異なっている。Aタイプでは焼土遺構が、Bタイプでは住居跡・堅穴状遺構が主に検出されている。とくにA2では焼土遺構が異常に多く、時々焼土内から骨粉とみられる白色粉が検出されことから、Aタイプ包含層分布域(沢を中心とする範囲)は解体・調理場として機能していた場所と推測される。これに対してBタイプ包含層分布域は居住域として住み分けしていたと考えられる。

2. 遺構

①分布 検出された遺構は10区を除くほぼ全域に分布する。住居跡・竪穴状遺構は、密度差はあるものの9・10区を除く全域で検出され、構築場所は旧自然堤防上、旧河床上と高さによる住み分けは第一番目の選定理由にはっていない様である。焼土遺構は複数枚の包含層が検出される2区後背の沢周辺に異常に多い。明瞭な炭化物集積は4～7区のTo-Cu直下の褐色粘土上で検出される。土坑は住居跡検出域で主に検出される。

②検出面と遺構 遺構は複数の面で検出されているが、約300mにおよぶ範囲で同一時間面で検出するのは困難であり、ある程度の精度でしか調査できなかつた。つまり、明瞭な包含層とか特徴となる土層を延々と識別できるのであれば比較的容易であったが、側方に変化するために調査時間の制約もあり複数の時間面でくってしまった層位もある。第8図基本土層に従って遺構を整理すると次表になる。

	IIb	III	IVa1	IVa2	IVa3	IVb	IVc	V	Va2	Va3	IX	X
	A			B			C			D		
住居			1	4				25	4	5		8
竪穴状			3				1	3				12
焼土	1		20	14		1		33	16	3	1	3
炭化物						3						
土坑	1	2				6	1	9				5

A：縄文晩期末～弥生初

B：縄文前期前葉

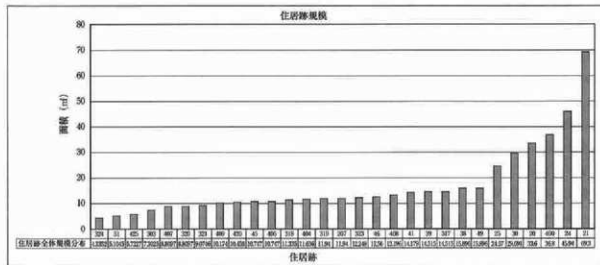
C：縄文早期末～前期初

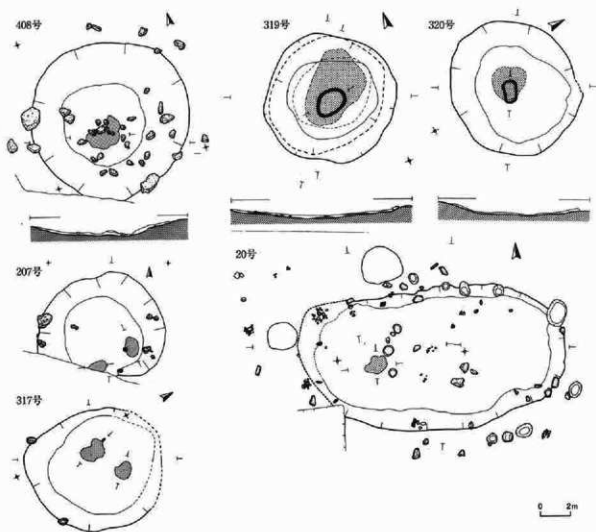
頭 D：縄文早期後葉

③検出状況 焼土遺構を除いて堀土により遺構を検出することは慣れないと非常に難しい。遺跡全体を埋めている堆積物は主に気仙川から供給されたものであるため、地山も埋土も同質でほとんど同じものが多。遺物が出土し、微妙な土層の変化を読みながら精査をすすめ、皿状の浅い窪みと地床炉の検出で住居跡と認定している（一部屋外炉を想定できる場合は遺構内部に炉が無くても住居跡としている）。竪穴状遺構は遺構内外で焼土遺構を検出できない場合に認定している。土坑も埋土の様子は同じであるが、住居跡より規模が小さい分やや識別しづらい。

④形態・規模

A)住居跡 形態は円形、楕円形、隅丸方形を呈する。Cの時期のもの（②時期区分参照、以下同）は円形～楕円形を呈し、Bの時期のものは隅丸方形～楕円形状を呈するようである。下表は全体形が明らかなもの、または、ほぼ全体系を推定できる住居跡を面積で並べた図である。C時期のもの（图中324～49号住居跡）は4～16㎡（単純平均10.9㎡）、B時期のもの（图中20～24号住居跡）は34～46㎡（単純平均38.8㎡）である。





第164図 住居跡形態（縄文早期末～前期前葉頃）

遺物から読みとれる住居跡の構築時期は縄文早期中葉から前期前葉頃である。精査前に明瞭なプランとして検出されたものはほとんどなく、精査中や精査結果として形態が判明したものが多く。

この中で早期末～前期初頭頃に構築されたと考えられる408号・319号・320号住居跡は、円形を基調とする形態を持つ。319号と320号は旧河床面、408号は旧自然堤防上で検出されたが、ほぼ同一時間面と考えているものである。中央に地床炉1基を持つ。中心から四方に緩く立ち上がる掘り込みで、浅い皿状である。319号と320号の炉跡は新田2期の痕跡が認められている。出土遺物量は少ない。柱穴は検出できなかった。207号・317号住居跡は比較的プランが明瞭なものである。207号は408号プランを再利用したもので、408号埋土中部の褐色粘土上に2基の地床炉が検出され（黒褐色土の埋土下部に対して非常に明瞭）、408号よりは新しい。317号は319号・320号と同様旧河床上で検出されたが、地山が異なり微妙な時期差を断定できない。しかしながら、それほど大きな時期差はないと考えられる。炉跡の形態から2遺構がおよそ同一時期であると仮定すると、207号の重複関係から上記グループよりはやや新しいと考えている。第20号・24号・26号・27号・400号住居跡は縄文前期前葉頃に構築されたと考えているものである。検出時のプランは不明瞭で、遺物出土量と炉跡の存在で確定された。隅丸方形～楕円形状を呈し、長軸が8m前後と規模が大きい。掘り込みが浅く、壁は緩く立ち上がる。地床炉を持ち、柱穴は検出できないことが多い。

イ) 竪穴状遺構 形態は楕円形～円形で、不整なものが多い。

ウ) 焼土遺構 大小の焼土遺構が多く検出され、その半数が2～3区山側周辺で検出された。後背山地から沢水が常時流れる場所で、獸骨・歯を多く含む包含層分布域である。不整な形態がほとんどであるが、第16号はほぼ円形で、5円玉様に中心に炭化物片を含む黒色土が分布する。尖底状の土器を差し込んだ可能性もある。単独で検出されたほかに2基一組で検出されたものが8組(8・9号ほか)、土器片を近接させるもの7基(301号ほか)、焼土遺構群として検出されたもの(434号～437号・417号)がある。

エ) 炭化物集積遺構 3遺構ともに検出状況は同じで、To-Cu直下で検出された。最大数cmの炭化物片が密集して検出された。400号では炭化物片の下に小規模な焼土遺構が検出されており、その場で火を利用し、その後炭化材を破棄する場所に使われた可能性もある。400号の炭化材同定、植物珪酸体分析結果などからすると周辺の樹木を燃料材として利用している。400号の炭化物片の放射性炭素年代は約5,800年前の値を示している。

ウ) 土坑 形態は不整な楕円形状を呈するものが多い。規模は約1～2mで、深さは10～20cmと浅いものが多い。

3. 遺物

(1) 土器

一般的に土器文様区分から推定される時期は、主に縄文時代早期中葉から弥生時代後期である。出土量からは早期末葉から前期前葉頃の遺物が多く、焼土遺構が密集する2～3区の沢川辺部では数mにおよぶ地層の中に包含する。そこから出土する土器片の文様構成で一つの型式を表現できるとは考えないが、ある文様の変遷は読みとれると考えている。

I群土器 調査区内で一番高い場所にあり、分布範囲も他の包含層に比べると狭い。他の明瞭な包含層とは分布域が異なるためはっきりとした時期的前後関係は不明である。復元できたものではなく破片から推定される器形は緩く外反する。平縁で内外面の条痕文を基本とした文様施文、平底であることから吉田浜下層土器に比定されたと考えられる。縄文で施文される土器片は出土していない。器厚は6mm前後と薄く、焼成も良好である。他時期の包含層に本群土器片が少量含まれることがあるが、本群での出土状況から2次の包含であると考えられる。

II群土器 2～3区山側の沢川辺部の砂礫層(地山)直上にある黒褐色～暗褐色砂礫質粘土層内で主に出土する。本群を構成する文様の中で斜行縄文の上器片の出土割合は大きい。中でも内面に縄文が施されるものが多く、内面に条痕が施文されるものが少量出土する。焼成がよく、薄い。この他に非結東羽状縄文、側面圧痕文、菱形状縄文や、条痕文、微隆起縄文、貝殻文の土器片が少量出土している。後者の条痕文土器片はI群に比べて胎土や施文方法が異なると考えられる。口縁部先端付近で強く屈曲するものが多い。口唇部には側面圧痕、竹管状刺突、指頭状圧痕、刻み、原体末端圧痕が施文されるものや、先端部で折り返しが見られるものもある。これらの特徴から粟本畑式土器(早稲田5類)に比定されたと考えられる。

III群土器 2～3区山側の沢川辺部のⅤa2層上位にのる黒褐色～暗褐色砂礫質粘土層(V層)内から出土する。調査時点で出土層を確認しながら採取しているもののⅤa2層分布域であるため、混入している可能性はある。IV群、V群土器出土層位と同じと推測しているが、同一層順と考えても土相が側方に変化し、その上下層からの遺物出土状況が同一でないため断定できず、同一グループにできなかった。口縁部先端に刻みが施される土器片が出土していることと出土層位から吉田浜上層土器を主体とすると考えられる。

IV群土器 旧河床上の北西～南東方向に100m以上連続する包含層から出土する土器群である。一ヶ所以下

位層からまともな土器片が出土したものの、全体的に上下位層では明瞭な包含層がなく、ごく少量の遺物（斜行縄文）しか出土していない。したがって、木群土器は上下位層からの遺物の混入がほとんどないと考えられる。7区のみで集計した土器文様は斜行縄文53%、撚糸文34%、非結東羽状縄文6%、側面圧痕文6%、縦走縄文1%である。斜行縄文には非結東羽状縄文の破損片も含まれると考えられる。I口唇部には側面圧痕、原体末端圧痕、刻み、竹管状突起が、I口縁先端には刻みが施文される。これらI口唇部での施文特徴はII群土器群と比較すると木群は非結東羽状縄文や撚糸文で施文される土器に多くみられる。また、地文上に横位の側面圧痕文を数本施文される土器が少数ある。内面には縄文が施文されるものはない。以上のことから木群は吉田浜上層土器に比定されると考えられる。

V群土器 3区畑圃砂礫層上にある暗褐色砂質粘土層から出土する土器である。上位層の細礫と粘土の薄互層にはV群土器の土器片が出土する。主にIV群土器と同様な文様構成をもつが、II群土器にみられる表裏縄文が混入することがあるためIV群土器とは別に設定した。

VI群土器 3区畑圃の細礫と粘土層の薄互層内から出土する土器である。側面圧痕と短沈線で施文される土器とI口縁先端に刻みがある土器が出土し、上下位層から出土する土器が混在する。IVa、IVb層堆積時期には水域であったとみられる。

VII群土器 3区山体側V層上位層の滴状の平面形をもつ黒褐色砂礫質粘土から出土する土器である。出土量は少ない。側面圧痕と短沈線で施文される土器が出土する。VIII群土器のものより粗雑に施文されているように見える。

VIII群土器 1～3区東側にかけて分布するIVa層から出土する土器である。I口唇部に側面圧痕と短沈線で構成される文様をもつ土器が特徴的で、これに伴って斜行縄文や非結東羽状縄文が出土する。前者の特徴から上川名式土器に比定され、相原（1990）の原頭第II群に相当すると考えられる。

IX群土器 2区山体側のIVa層直上にある褐色粘土層から出土する土器である。狭い範囲で確認した層位から出土したもので出土量は少ない。不整撚糸文で施文された小型深鉢から大木2式土器に属すると判断した。下位層から出土する土器とは異質で類似する土器も出土していない。

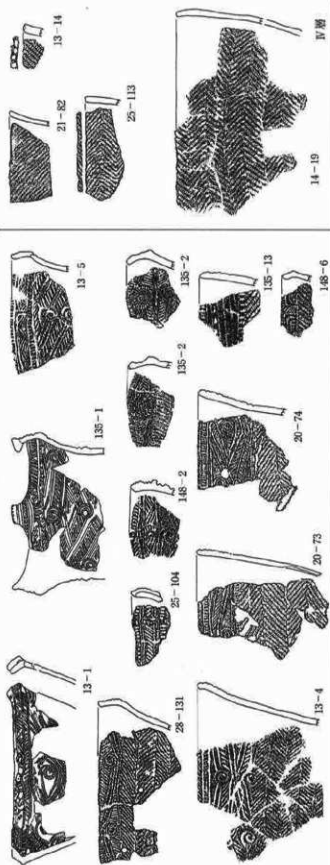
X群土器 0～2区山体側寄りの黒色土IIb層から出土する土器である。縄文後期初頭頃、晩期末～弥生初、弥生終末頃と考えられる土器片がほぼ同様な層位から出土した。黒色土内で検出面を識別できなかったためではあるが、遺物は混在していた。縄文晩期末～弥生時代初の土器片は大洞A'式に比定される。

その他 奈良時代頃の鹿地部片が1点出土したが、戦後の農地改良で表層1～2mは削平されているためにほぼ遺物はなくなっている。

第165図に上川名式土器とそれに伴する斜行縄文と非結東羽状縄文を載せている。出土層位に忠実に掲載したが、間違いがあるかもしれない。大局的にみると次のようになる。栗木畑式土器が出土するVIIa層からは上川名式土器の文様意匠を持つ土器は出土しないが、非結東羽状縄文の土器片は出土している。吉田浜上層土器に比定される土器が出土するV層からは上川名式土器と同様な文様意匠をもつ土器片が出土している。V層で検出された409号住居跡地床が直上から出土したもので、小型の深鉢と見られる。文様が側面圧痕文だけで施文されている。原体が細く丁寒な作りを持つ。文様帯は狭い。この住居跡地床炉内部からはI口縁先端に刻み（スリット）がはいった土器片が出土している。また415号住居跡からは横位の側面圧痕文で文様を構成するものが出土している。上川名式土器が出土するIV層からは上川名式土器の文様意匠を持つ土器片が比較的多く出土している。文様帯は側面圧痕と短沈線の組み合わせで施文されている。相伴して非結東羽状縄文の土器片が出土している。遺構外からは出土していないが、20号住居跡からI口縁先端にスリットがはいっているものが出土している。上川名式土器とともに出土しているためそのバリエーション

横位・斜位・渦巻状面圧直文または、それらと縦位・斜位短梳線文で構成される文様帯を持つ土器

共存する斜編文(縦編文)・非屈折状梳線土器



第165図 上川名式土器を中心にした出土層別土器

と見てしまったが、2次的な混入の可能性はある。

これら2層から出土する上川名式と言われる土器は、相原が細分した堂森B、原頭第Ⅱ群土器に相当すると思われる。堂森Bに相当する土器片はこの1点のみであるが、層位的に堂森Bと原頭第Ⅱ群土器は共存せず、明らかに前者が下位層から出土している。相原が述べているようにもっとも古いグループに属すると思われる。

口縁部文様帯が直線的・曲線的側面圧痕文で構成される土器片がⅧa2層(Ⅱ群土器)から出土している。上位層からも出土しているが、出現はⅡ群土器のものが最初である。地文上に横位や斜位の側面圧痕文が施されるものはⅤ層(Ⅳ群土器)から出土し、さらにこの時期に口縁先端にスリットが入るものが出現する。

Ⅳ群(Ⅴ層)での上川名式土器(165図75-392)出現は特異であり、Ⅱ群(Ⅷa2層)土器文様構成からの変遷とは考えにくい。Ⅳ群(Ⅳa3層)での上川名式土器(165図Ⅳ層土器)は、Ⅳ群(Ⅴ層)上川名式(165図75-392)、口縁先端スリット(165図75-391など)、口縁横位側面圧痕文(165図83-428)の文様の融合から発展した文様と考えることもできる。原頭第Ⅱ群土器に対比した土器には文様帯幅が比較的狭く、施文が粗いものがみられ(165図135-13、145図10)、145図10は下位のⅣa4層から出土していることから、その発展過程の中でできたと思われることもできる。

(2) 石器

遺構外石器の項では触れなかった層別の出土状況について述べる。各調査区での出土状況は下表の通りとなる。調査区により明瞭に出土層位を区分できず、複数層にわたって区分したところがある。

調査区別では3区が、層別ではⅤ層の出土数量が多い。全層位および出土数量が100個を超える3区Ⅳ層・Ⅴ層、5-7区Ⅴ層の各種別出土量はいずれも石鏃>石匙>不定形>打製石斧>その他(石筈、石槍、尖頭器、礫石器)である。

3区Ⅳ層・Ⅴ層、5-7区Ⅴ層の各種別の特徴は次の通りである。石鏃は3層ともに平基が多く、凹基であっても抉りの大きいものはごく少量である。また、柳葉様のものが少量出土した。石匙は3層ともに縦型のものほとんどで、三辺に刃部を持つものが多い。打製石斧は片面に自然面を残すもので、Ⅴ層からの出土量が多い。石材は剥片石器のほとんどが頁岩を使用し、礫石器は気仙川など周辺の河川で採取した砂岩、珩岩などを使用している。

層区分	調査区									
	0	1	2	3	4	5-7	8	9	合計	
Ⅷb		2								2
Ⅷb下層~Ⅷa3		7								7
Ⅷa	22	1	12							35
Ⅷa2		2								2
Ⅷa3			44	44						88
Ⅷa4				1						1
Ⅷa5				45	11					56
Ⅴ		9	14	104		164	6	14		311
Ⅴ~Ⅳ		4								4
Ⅴa	6									6
Ⅴa	3									3
Ⅷa		17								17
Ⅷa2			10	10						20
Ⅷa3			2	6						8
Ⅷa4				3	3	8				14
Ⅴ	7									7
合計	16	61	73	225	14	172	6	14		581

	个数	3区Ⅳ層	3区Ⅴ層	5-7区Ⅴ層
石鏃	275	53	65	80
石匙	170	28	23	53
不定形	65	14	13	18
打製石斧	27	4	3	10
その他	44	3		3
合計	581	102	104	164

※表中の数字は個数を表す。

引用・参考文献

- | | | |
|-------------------------|------|--|
| 住田町史編纂委員会 | 1977 | 「住田町史第1巻自然・考古編」 p.818～826 |
| 住田町史編纂委員会 | 2000 | 「住田町史第二巻通史編」 p.486～493 |
| 住田町教委 | | 「ふるさとのみちしるべ」 p.5,32 |
| 経済企画庁 | | 「盛」 |
| 大船渡市立博物館 | 1976 | 大船渡・気仙の地質「郷土の誕生」 |
| 縣長谷地質調査事務所 | 1981 | 北上川流域地質図（20万分の1）説明書 |
| 相原 淳 | 1990 | 「東北地方における縄文早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」
考古学雑誌76-1、pp.1～65 |
| 大平明夫 | 1997 | 「完新世における海岸沖積低地の地形形成環境の変遷に関する研究」
名古屋大学大学院文学研究科博士論文要旨 |
| 大船渡市編纂委員会 | 1978 | 「大船渡市史第一巻地質・考古編」 p.415～418 |
| 岸沢長介・林謙作 | 1965 | 「岩手県住田町蛇王洞洞穴」『石器時代』7 pp.1～16 |
| 岩手県立博物館 | 2000 | 「気仙郡住田町小松洞穴発掘調査報告書」
岩手県立博物館調査研究報告書第16冊 |
| (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | | |
| | 1998 | 「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集 |
| | 2002 | 「小松Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第392集 |

付編 小松 I 遺跡の自然科学的分析

<目次>

はじめに	233
I. 堆積物の年代観	233
1. 試料	233
2. 分析方法	234
(1) 放射性炭素年代測定	234
(2) テフラ分析	234
(3) 屈折率測定	234
3. 結果	234
(1) 放射性炭素年代測定	234
(2) テフラ分析	235
(3) 屈折率測定	235
4. 考察	235
II. 遺跡周辺の古環境と植物利用	236
1. 試料	236
2. 分析方法	237
(1) 花粉分析	237
(2) 植物珪酸体分析	237
(3) 微細遺物分析	237
(4) 炭化材同定	237
3. 結果	237
(1) 花粉分析	237
(2) 植物珪酸体分析	238
(3) 微細遺物分析	239
(4) 炭化材同定	239
4. 考察	240
III. 焼上遺構の内容物・用途推定	241
1. 試料	241
2. 分析方法	241
3. 結果	241
4. 考察	242
IV. 動物利用	243
1. 試料	243
2. 分析方法	243
3. 結果および考察	243
(1) 出土骨	243

(2) 総括	245
(3) あとがき	245
引用文献	246

<図表・図版一覧>

表1 放射性炭素年代測定結果	231
表2 植物化石分析試料の一覧	236
表3 植物珪酸体分析結果	238
表4 微細遺物分析結果	239
表5 炭化材同定結果	239
表6 土壌理化学分析結果	242
表7 骨同定結果	244
図1 放射性炭素年代測定値	235
図2 火山ガラスの屈折率	235
図3 植物珪酸体群集の層位分布	238
図版1 テフラ・花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体	247
図版2 炭化材(1)	248
図版3 炭化材(2)	249

小松 I 遺跡の自然科学的分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小松 I 遺跡（岩手県気仙郡住田町上有住字小松に所在）は、気仙川によって開析された谷底低地に位置する。これまでの発掘調査によって、旧気仙川河道の両岸から縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡や焼土遺構などが検出されている。特に、旧河道には、西側に伸びる河床部分に土器や石器を投棄したとみられる遺物包含層（捨て場）が確認されている。この捨て場で出土した遺物は、北側（山側）の岸から投棄されたと推定されていることから、集落の主体は山側にあったと考えられている。また、旧河道南側の自然堤防上には、竪穴住居跡が検出されている。

今回は、堆積物の年代に関する情報を得るために放射性炭素年代測定とテフラ分析・屈折率測定を、周辺の新規調査区河床部に関する情報を得るために花粉分析・植物珪酸体分析・材同定・微細遺物分析を、焼土遺構の内容物・用途について検討を行うために土壌化学分析を、また当時の動物利用に関する情報を得るために骨同定をそれぞれ実施する。

なお、本報告は、平成12年度～平成14年度にかけて、年度ごとに分析調査を実施した結果をとりまとめたものである。

I. 堆積物の年代観

1. 試料

調査区内の堆積物は、調査区が東西に約300mと長いので、地点により堆積状況が異なっている。ただし、おおよその傾向として、下位より、旧気仙川により運ばれてきた砂礫・粘土、遺跡後背山地から運ばれてきた土砂、火山灰層となっており、その上位に崩落土・表土となるとされる。この内、旧気仙川の氾濫堆積物と火山灰層に挟まれた層において、縄文時代早期末～前期初頭の包含層や遺構検出面が確認されている。また、新規調査区河床部の火山灰層直下で炭化物の集中が認められ、新規調査区自然堤防部の火山灰層より上位で溝跡なども検出されている。試料は、調査年次ごとに採取された。

平成12年度調査区では、捨て場と考えられている2層準から炭化物が採取された。1つは、縄文時代前期初頭の住居跡検出面より下位、縄文時代前期初頭の遺物（上川名Ⅱ式・花積下層式）包含層から出土した炭化物（C層炭化物）である。もう1つは、C層よりも約50cm下位に位置し、縄文時代早期末の遺物（燃糸文・表裏縄文）包含層から出土した炭化物（A層炭化物）である。これら炭化物について放射性炭素年代測定を実施する。その他、BIh10-4で、一辺約20cmの柱状ブロックが採取された。このブロック中央部で、帯状にみられる黄褐色を呈した部分を抽出し、テフラ分析および屈折率測定を実施する。

平成13年度調査区では、縄文時代早期末～前期初頭の包含層（V層）から検出された炭化物（炭化物D）が採取された。これについて放射性炭素年代測定を行う。平成14年度調査区では、火山灰直下で縄文時代前期初頭の炭化物集積区（400号炭）から3点（試料番号1～3）、縄文時代早期末～前期最初期の住居跡（408号住）埋土から2点（試料番号4・5）と同住居跡から1点（試料番号6）、また縄文時代早期末～前期最初期の屋外炉（457号焼）から1点（試料番号7）、合計7点の試料が採取された。これらの試料は、いずれも炭化物が混入する堆積物である。この内、400号炭から抽出した炭化物1点（試料番号3）と408号住埋土から抽出した炭化物1点（試料番号4）について、放射性炭素年代測定を実施する。

以上、分析点数は、放射性炭素年代測定が5点、テフラ分析が1点、屈折率測定が1点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。今回の測定は、液体シンチレーションを用いた β 線計数法を用いる。ただし、試料の量が少ない場合は加速器分析(AMS)法で行う。計算は、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用する。なお、炭化材は併せて樹種同定も行うが、結果の詳細は別記する。

(2) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にして超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(3) 屈折率測定

テフラ分析用に洗い出された試料から細粒な砂分を採取し、この中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置“MAIOT”(占澤, 1995)を用いて、火山ガラス30片程度を目標として計測する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図1に示す。表中に示した $\delta^{13}\text{C}$ の値は、質量分析器(AMS法の場合は加速器)を用い試料炭素中の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の測定値を基準とし、それからのずれを計算し、千分偏差(‰:パーミル)で表したものである。また、付記した誤差は、標準偏差に相当する年代(真の値が66.7%の割合でこの範囲内にあるということ)である。

今回の年代値は、この値に基づいて補正した年代である。測定の結果、C層炭化物が5540±100BP、A層炭化物が6460±170BP、炭化材Dが6560±100BP、SC400炭(No.3)が5830±130BP、SI408埋土(No.4)が5990±50BPの補正年代値が得られる。

表1 放射性炭素年代測定結果

調査 年次	採取位置	層位	性格	所見	質	試料名	測定 方法	同位体 補正年代	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代	測定番号
H12	B13-1	IVa4	捨て場	前期初頭	炭化材 ケヤキ	C層炭化物	β 線	5540±100	-28.4	5590±100	Gak-20756
H12	B13 B14 T114-1	IIIa2	捨て場	早期末	炭化材 カワラ	A層炭化物	β 線	6460±170	-31.2	6560±170	Gak-20757
H13		V	包含層	早期末～ 前期初頭	炭化材	炭化材D	β 線	6560±100	-27.8	6610±100	IAA-81
H14	400号炭	IV b	炭化物奥中	前期初頭	炭化材	SC400炭 (No.3)	β 線	5830±130	-24.5	5820±130	IAA-289
H14	408号住	V	住居址/毒	早期末～ 前期 最初期	炭化材	SI408埋土 (No.4)	AMS	3990±50	-23.11 ±1.33	5960±40	IAAA-30212

注1) 年代値: 1950年を基点とした値。注2) 半減期: LIBBYの半減期5568年を使用。

注3) 誤差: 標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代。

注4) $\delta^{13}\text{C}$: 試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器ないし加速器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値。

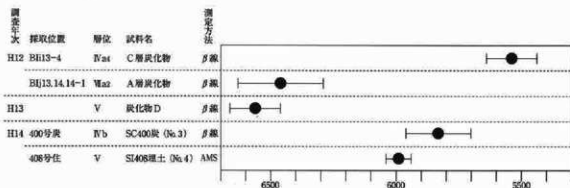


図1 放射性炭素年代測定値

(2) テフラ分析

試料中には、スコリアが含まれないが、多量の火山ガラスと中量の軽石が認められる。火山ガラスは、無色透明の軽石型が最も多く、無色透明のバブル型もわずかに含まれる。

また、軽石は、白色を呈し、発泡がやや良好である。軽石の最大粒径は約0.5mmである。細粒な軽石も認められ、淘汰は良くない。

(3) 屈折率測定

火山ガラスの屈折率測定結果を図2に示す。屈折率は、1.5104-1.5124で、1.511-1.512にピークが認められ、狭い範囲に集中して認められる。

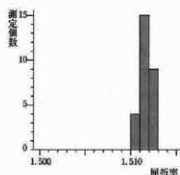


図2 火山ガラスの屈折率

4. 考察

平成12年度調査区および平成13年度調査区の縄文時代早期末～前期初頭包含層から出土した炭化材は、補正年代値で約6450～6550BP、測定年代値で約6550～6600BPを示す。これらの測定年代値は、各地の土器編年と放射性炭素年代測定の対応関係について調べたキーン・武藤（1982）の調査結果と比較すると、縄文時代早期頃の土器と対応する年代観となる。また、検出層位も十和田中塚火山灰の下位にあたることから矛盾がない。したがって、これらの年代は縄文時代早期末頃と考えられ、発掘調査所見と調和的な結果であり、捨て場の年代観を示している可能性がある。

これに対し、平成14年度調査の縄文時代早期末～前期最初期とされる408号住で出土した炭化材は、補正年代値で約6000BP、測定年代値で約5950BPを示す。この年代値は、縄文時代前期初頭に位置づけられる。この年代値に基づくと、上記した2点よりも若干新しい時期のものと思われる。この点に関しては、遺構の検出状況など、考古学的な調査所見と併せて検討することが望まれる。

また、前期初頭の包含層から検出された炭化材は、補正年代値で約5550～5850BP、測定年代値で約5600～5800BPを示す。同様にキーン・武藤（1982）と比較すると、縄文時代前期の土器と対応する年代観が得られる。また、縄文時代前期の住居址検出面よりも下位に位置することから、これらの年代値も遺構の年代観を示していると考えられる。

一方、これらの包含層・遺構検出面の上位には、黄褐色を呈する火山灰が堆積している。本火山灰層は、BH10-4で調査したところ、テフラの特徴と火山ガラスの屈折率、遺跡の地理的位置と採取層位を考慮する

と、十和田中樞テフラ (To-Cu; 早川, 1983) に由来すると考えられる。町田・新井 (1992) によれば、To-Cuは十和田火山を給源とし東北地方一帯に分布しているとされ、噴出年代は5500年前とされている。同文献では、火山ガラスの屈折率は1.510-1.514 (モードは1.511-1.513) とされており、発掘調査所見に矛盾せず、調和的な結果と言える。

II. 遺跡周辺の古環境と植物利用

1. 試料

平成13年度調査では、縄文時代早期末～前期初頭の包含層 (V層) から、一辺約20cmの柱状ブロックが採取された。試料を観察したところ、黒褐色を呈するシルト～砂礫からなり、上方細粒化を示す級化構造がみられた。そこで、上部と下部の2点を分析試料として抽出した (以下、V層上部・V層下部と表記する)。このV層上部・下部の2点について花粉分析を実施し、V層下部について植物珪酸体分析を実施する。なお、本層率は約6560±100BP (IAA-81) の放射性炭素年代測定値が得られた炭化物 (炭化物D) と同層率から採取されたものである。

平成14年度調査では、火山灰直下で縄文時代前期初頭の炭化物集積区 (400号炭) から3点 (試料番号1～3)、縄文時代早期末～前期最初期の住居址 (408号住) 埋土から2点 (試料番号4・5) と同住居跡から1点 (試料番号6)、また縄文時代早期末～前期最初期の屋外炉 (457号焼) から1点 (試料番号7)、合計7点の試料が採取された。これらの試料は、いずれも炭化物が混入する堆積物である。この内、試料番号2・5・7について植物珪酸体分析・微細遺物分析を実施する。

また、平成14年度調査において微細遺物分析で試料番号2から検出された炭化物の内、無作為に20点を抽出して樹種同定を行う。なお、樹種同定は、この他にも、平成12年度調査区で放射性炭素年代測定を実施した炭化物2点 (C層炭化物・A層炭化物)、平成12～14年度調査区の遺構・包含層などから採取された試料20・23～28の中から、炭化物14点を抽出して分析試料とする。

以上、各分析項目の分析点数は、花粉分析2点、植物珪酸体分析4点、微細遺物分析3点、樹種同定36点である。表2に分析試料の一覧を示す。

表2 植物化石分析試料の一覧

調査 年次	地点・層位等	性格	試料	時代	分析項目			
					P	PO	S	W
H12	B I i13-4 IVa1 層	捨て場	C層炭化物					●
H13	V層	捨て場	A層炭化物					●
		包含層	V層上部	縄文時代早期末～前期初頭	●			
H14	400号炭 408号住 457号焼	包含層	V層下部	縄文時代早期末～前期初頭	●	●		
		炭化物集積区	No.2	縄文時代前期初頭		●		●
		住居埋土上	No.5	縄文時代早期末～前期最初期			●	●
H12	B I i13 IVa1 層	屋外炉	No.7	縄文時代早期末～前期最初期			●	●
		捨て場	No.20	縄文時代前期前葉				●
H13	200号住 BWベルト	住居址埋土	No.23	縄文時代前期前葉				●
H14	400号炭	炭化物集積区	No.24	縄文時代前期前葉				●
H13	300号炭	炭化物集積区	No.25	縄文時代前期前葉				●
H13	318号住	住居址埋土	No.26	縄文時代早期末～前期初頭				●
H13	A I w19 V層	包含層	No.27	縄文時代早期末～前期初頭				●
H14	-B I h07 IVb層	To-Cu直下	No.28	縄文時代前期前葉				●

凡例) P: 花粉分析 PO: 植物珪酸体分析 S: 微細遺物分析 W: 樹種同定

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別（メッシュ60、250 μ m）、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラスに滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

なお、燃料材に関する調査で用いた試料では、珪化組織片の産状に注目する。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈する。ところで、植物珪酸体は、植物体が土壤中に取り込まれた後、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物体が燃えた後の灰には、組織構造が珪化組織片の形で残される場合が多い（例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社、1993a）。そのため、珪化組織片の産状により、過去の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植物について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(3) 微細遺物分析

土壌試料400cc程度を水に一晚液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。抽出した植物遺体は、48時間40℃で乾燥後、形態的特徴から種類を同定し、乾燥重量を求める。分析後の植物遺体等は、乾燥剤とともに種類毎にビンに入れて保存する。

(4) 炭化材同定

木口（横断面）・椀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 花粉分析

平成13年度調査区V層下部の試料では、木本花粉のエノキ属・ムクノキ属、草本花粉のヨモギ属、シダ類胞子が各1個検出される程度である。また、V層上部の試料では、木本類のヤマモミ属が僅かに1個検出されるだけである。これら僅かに検出される花粉・胞子は、いずれも保存状態が極めて悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表3、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。また、珪化組織片は、V層下部、400号炭、408号住、457号焼とも、全く認められない。以下に、試料ごとに産状を述べる。

<平成13年度調査>

・V層下部

検出された植物珪酸体の中では、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体ともにヨシ属の産出が目立つ。この他の種類としては、タケ亜科が多産し、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

<平成14年度調査>

・400号炭化物集積遺構(略名:400号炭)

試料番号2ではタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科が検出されるが、検出個数が少ない。

・408号住居跡(略名:408号住)

試料番号5では、平成13年度調査V層下部と同様に、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体ともに、ヨシ属が最も高率に産出し、次いでタケ亜科が産出する。この他に、ウシクサ族ススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出される。

・457号焼土遺構(略名:457号焼)

試料番号7では、400号炭の試料番号2と同様に検出個数が極めて少なく、タケ亜科やヨシ属などがわずかに認められるに過ぎない。

表3 植物珪酸体分析結果

種 類	H13		H14	
	V層下部	400号炭	408号住	457号焼
試料番号	2	5	7	
イネ科葉部短細胞珪酸体				
タケ亜科	71	15	47	-
ヨシ属	203	5	327	1
ウシクサ族ススキ属	16	1	21	-
イチゴツナギ亜科	9	1	13	-
不明ヒゲシバ類	21	-	13	-
不明ヒゲシバ類	56	-	94	-
不明ダンクシ	11	-	9	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
タケ亜科	15	6	35	1
ヨシ属	82	-	82	-
ウシクサ族	7	-	-	-
不明	8	6	6	1
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	387	22	524	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	112	12	123	2
総 計	499	34	647	4

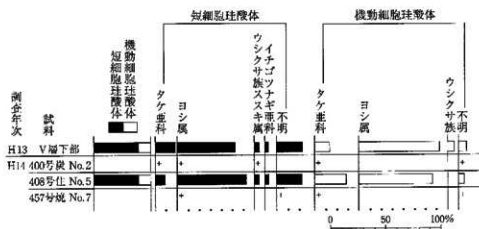


図3 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、+は100個未満の試料で算出された種類を示す。

(3) 微細遺物分析

微細植物片分析結果を表4に示す。篩別後の残渣からは、同定可能な種実遺体が検出されない。炭化材は、試料番号5・7が2～3mm以下の細かなものを中心に検出される。また、試料番号2で検出される炭化材は、5mm程度のものが含まれる。

検出される炭化物の内、試料番号2のものについては、無作為に20点を抽出して樹種同定を行った。その結果、1点がケヤキに同定されるが、その他残り大半がモクレン属に同定される。これら炭化材の形態学的記載については、炭化材の項で示す。なお、表中に示した不明炭化物とは、木材組織が認められない、部位および種類とも不明の炭化物片を示す。

(4) 炭化材同定

結果を表5に示す。平成13年度調査の318号住で2種類、平成14年度調査の400号住で3種類が認められる。これらの炭化材は、広葉樹5種類(ケヤキ・カツラ・モクレン属・ケンボナシ属・クマヤナギ属近似種)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表4 微細遺物分析結果

調査年次	地点	性格	試料番号	分析量	種類名	乾燥重量(%)
H14	400号炭	炭化物集積区	2	400cc	炭化材	2.32
					不明炭化物	0.02
			408号住	住居土壌	5	400cc
					不明炭化物	0.04
	457号炭	屋外分跡	7	400cc	炭化材	0.01
					不明炭化物	+

注) +は、0.01g以下を示す。

表5 炭化材同定結果

調査年次	採取位置	部位	性格	時代	試料	樹種
H12	B I H134	IVa4	捨て場	縄文時代前期初頭	C層炭化物	ケヤキ(1)
	B I j13,14,14-1	IVa2	捨て場	縄文時代早期末	A層炭化物	カツラ(1)
H14	400号炭	IV b	炭化物集中	縄文時代前期前葉	No.2	ケヤキ(1) モクレン属(19)
H12	B I H13	IVa4	住居跡	縄文時代前期前葉	No.20	クマヤナギ属近似種(2)
H12	200号住EWベルト	IV b	住居跡	縄文時代前期前葉	No.23	ケヤキ(2)
H14	400号炭	IV b	炭化物集中	縄文時代前期前葉	No.24	カツラ(2)
H13	300号炭	IV b	炭化物集中	縄文時代前期前葉	No.25	ケヤキ(2)
H13	318号住	V	住居跡	縄文時代早期末～前期初頭	No.26	ケンボナシ属(1) モクレン属(1)
H13	A I w19	V		縄文時代早期末～前期初頭	No.27	カツラ(2)
H14	- B I h07	IV b		縄文時代前期前葉	No.28	ケヤキ(2)

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、1～10細胞幅、1～60細胞高。放射組織の上下縁部を中心に結晶細胞が認められる。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～30細胞高であるが、あまり目立たない。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・ケンボナシ属 (*Ilovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で孔圍部は1~3列、孔圍外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では楕円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独および放射方向に2~3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~5細胞幅、1~50細胞高。

・クマヤナギ属 (*Berchemia* sp.) クロウメドキ科

散孔材で、道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって管径を減ずる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性、1~4細胞幅、1~30細胞高。

クマヤナギ属の現生標本では、大型の放射組織が認められるが、本試料では観察した範囲で大型の組織が認められなかったため、近似種とした。

4. 考察

平成13年度調査区のV層では、花粉化石がほとんど検出されない。僅かに検出される花粉化石、木本類のヤマモモ属・エノキ属-ムクノキ属、草本類のヨモギ属などは、その当時周辺に生育していた植物群に由来する可能性もある。一般的に花粉化石は、好気的な条件下において化学的な酸化や土壤微生物の影響によって、分解・消失することが知られている(例えば、中村, 1967)。僅かに検出される花粉化石の保存状態が悪いことを考慮すると、花粉化石は堆積後の経年変化によって分解・消失したことも考えられる。一方、植物珪酸体ではヨシ属が多産し、タケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科を伴う。これらの種類の中でヨシ属は、池沼縁辺部、湿地、沼池、河川沿いなど、湿潤な場所を好んで生育する大型の水生植物である。よって、旧気仙川沿いに沿ってヨシ属が分布しており、この他にもススキ属やイチゴツナギ亜科などのイネ科草本類も生育していたと考えられる。また、微高地部、山地斜面、林床などには、タケ・ササ類なども分布していたのであろう。このような環境の中、周辺は、旧気仙川の氾濫とともに遺物等が交差されるなどによって堆積が進んだが、その後には離水して乾いた状態になったと思われる。住居や屋外などは、このように周辺が離水した後に形成されたものと推定される。

ところで、400号炭、408号住、457号焼からは、珪化組織片が全く認められない。また、これらの遺構覆土では、種実遺体も検出されず、炭化材や炭化物が中心となっている。このような状況から、燃料材として木材を中心とした利用があったと考えられる。各遺構から出土した炭化材は、全て落葉広葉樹であり、ケヤキが多く見られ、他にカツラ、モクレン属、ケンボナシ属、クマヤナギ属近似種が認められた。遺構による樹種の違いは、用途別に種類を選択した結果の可能性はあるが、詳細は不明である。これらの種類が溪谷林・河畔林や谷筋などに分布する種類や山林内にごく普通に生育する種類であることから、本遺跡周辺に生育していた樹木を利用していたことが推定される。

なお、岩手県内では、岩手郡滝沢村に位置する大石渡遺跡(パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993b)や湯舟沢遺跡(松田, 1986)、二戸郡一戸町の御所野遺跡(パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993c)、九戸郡軽米町の大日向Ⅱ遺跡(パリオ・サーヴェイ株式会社, 1994)などにおいて、縄文時代の燃料材や構造物築材の検討が行われている。これらの結果をみると、コナラ亜属コナラ節やクリなどが多く検出されている。ただし、これらの調査は、いずれも縄文時代中期~晩期にかけてのものであり、縄文時代早期~前期とされる調査例はほとんどみられない。そのため、縄文時代早期~前期における木材利用の詳細は不明である。また、中期以降ではクリが比較的多く見られるが、本遺跡ではクリが認められていない。これが時期による植生や木材利用の違いを反映しているかどうかについても不明である。

今回、花粉化石が検出されなかったため、周辺植生を十分に検討することができないが、これら利用木材

と周辺植生がどのように関わり合っているのか今後とも注目される問題である。その意味でも今回の調査結果は、極めて貴重な資料となる。今後、さらに縄文時代各時期の植生復元や遺物・炭化物の樹種同定等を行い、植生と木材利用の関係について検討したい。その上で、今回の結果を改めて評価することが望まれる。

Ⅲ. 焼土遺構の内容物・用途推定

1. 試料

試料は、平成13年度調査区および平成14年度調査区の住居址炉覆土 (No.1～9) と焼土遺構覆土 (No.10～17) から採取された。この内、No.5は、同一遺構から2点試料が採取されている。なお、住居址では、2基の伊が検出されたもの (No.1～4)、中央に直径約80cmの円形地床炉が1基検出されたもの (No.5～9) が認められている。また、焼土遺構は、同一場所で検出面の異なるものがあり、No.11・12が第1面、No.13・14が第2面、No.15・16が第3面、No.17が第4面とされている。

これら住居址炉および焼土遺構から採取された計18点について、土壌理化学分析を行う。また、比較対照試料として、骨片が多量に認められた平成12年度調査区のB I i 13の捨て場 (Iva4層) 1点についても分析を行う。これらの試料は、暗褐色～黒褐色を呈し、砂壤土、壤壤土、軽壤土よりなる。いずれも骨片等は認められない。なお、試料の詳細は、結果とともに表が示す。

2. 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った (土壌養分測定法委員会, 1981)。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる (風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法 (105℃、5時間) により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφの篩を全通させる (微粉砕試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸黄色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、下渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

また、微粉砕試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量 (OrgC乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

3. 結果

結果を表6に示す。住居址炉覆土あるいは焼土遺構覆土から採取された17点では、腐植含量0.20～4.08%、リン酸含量0.65～2.57 P_2O_5 mg/g、カルシウム含量2.67～10.11CaOmg/gの測定値が得られる。一方、対象試料とした骨片を多量に含むSK112では、腐植含量1.93%、リン酸含量15.00 P_2O_5 mg/g、カルシウム含量26.81CaOmg/gの測定値が得られる。

表6 土壌理化学分析結果

調査 年次	遺構	試料 番号	土性	土色	腐植含量(%)	PaOs (mg/g)	CaO (mg/g)	備考
H13	207号住地床炉A	1	L/C	10YR2/2 黒褐	0.52	2.17	10.11	
H13	207号住地床炉B	2	L/C	10YR2/3 黒褐	0.33	1.70	7.00	
H13	317号住地床炉1	3	SL	10YR2/3 黒褐	0.74	1.84	4.60	
H13	317号住地床炉2	4	SL	10YR3/4 暗褐	0.44	1.12	2.82	
H13	320号住地床炉1/2	5	L/C	10YR2/3 黒褐	4.08	2.46	7.61	
H13	320号住地床炉2/2	5	L/C	10YR2/3 黒褐	0.88	2.57	7.51	
H13	320号住地床炉(計)	6	SL	10YR2/3 黒褐	0.45	2.33	6.76	
H13	323号住地床炉	7	CL	10YR2/3 黒褐	0.46	1.42	5.36	
H14	409号住地床炉	8	CL	10YR2/2 黒褐	0.62	2.21	7.83	
H14	425号住地床炉	9	CL	10YR2/2 黒褐	0.91	2.48	4.44	
H13	301号焼土遺構	10	SL	10YR2/3 黒褐	0.24	0.98	2.67	
H14	400号焼土遺構	11	CL	10YR2/3 黒褐	0.39	0.65	4.72	第1面
H14	401号焼土遺構	12	CL	10YR2/3 黒褐	0.20	0.72	4.38	第1面
H14	434号焼土遺構	13	CL	10YR2/2 黒褐	0.57	1.26	5.59	第2面
H14	436号焼土遺構	14	CL	10YR2/2 黒褐	0.46	1.68	6.02	第2面
H14	441号焼土遺構	15	CL	10YR2/2 黒褐	0.40	1.67	6.20	第3面
H14	443号焼土遺構	16	CL	10YR2/2 黒褐	0.34	1.50	5.75	第3面
H14	461号焼土遺構	17	CL	10YR2/2 黒褐	0.23	1.28	5.61	第4面
H12	B1-113捨て場(Ba1層)	20	-	10YR1.7/1 黒	1.93	15.00	26.81	骨片多量を含む

注1) 土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色粘(農林省農林水産省農産部, 1967)による。

注2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。

SL…砂壤土(粘土0~15%, シルト0~35%, 砂65~85%)

CL…粘壤土(粘土15~25%, シルト20~45%, 砂3~63%)

L/C…軽粘土(粘土25~45%, シルト0~45%, 砂10~55%)

4. 考察

かあるいは焼土遺構覆土において、骨の主成分の一つであるカルシウムの含量は、2.67~10.11CaOmg/gと測定範囲にバラツキがみられる。ただし、覆土のカルシウム含量は、対照試料としたSK112よりも、著しく低い測定値である。また、リン酸含量との関係をもみても、相関係数0.64であり、極めて高い相関関係が成り立つものでない。一般的にカルシウムは、土壤中に普通に含まれる量(天然賦存量)も普通1~50CaOmg/gとされており(藤員, 1979)、含量幅が大きい。これは、カルシウム成分が土壤中において溶解しやすく、移動・拡散しやすいことに起因する。したがって、ここでカルシウム含量が高い試料において、外的要因によりカルシウム成分が富化されたと判断することができない。

一方、土壤中に固定されやすい性質を持つリン酸成分の含量は、0.65~2.57P₂O₅mg/gであり、SK112と比較して低い。また、リン酸の天然賦存量については、Bowen (1983)、Bolt & Bruggenwert (1980)、川崎ほか(1991)、天野ほか(1991)などの調査例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.0P₂O₅mg/g程度である(なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここでは全てP₂O₅mg/gに統一した)。これによると、仮あるいは焼土遺構覆土の内部には、リン酸成分が著しく濃集していると推定される。

ところで、リン酸の供給源としては、植物遺体由来のものもある。そこで、仮覆土および焼土遺構覆土のリン酸含量と腐植含量について相関関係を求めてみると、相関係数が0.48である。すなわち、リン酸含量と腐植含量は正の相関関係が成り立つが、極めて強いものでない。このことから、土壤中のリン酸含量が土壌腐植(植物遺体)の影響をあまり受けていないと考えられる。

上記の観点でリン酸含量の分布傾向をみると、まず焼土遺構では検出面による違いがなく、住居跡覆土よりもリン酸含量が低いことが言える。一方、住居跡は、焼土遺構よりもリン酸含量が高い試料が認められることから、何らかの外的要因によってリン酸が富化された可能性がある。中でも、リン酸が比較的高い

320号住居跡や425号住居跡では、その影響が強かったことが考えられ、そこに動物遺体が存在していた可能性もある。なお、320号住居跡が1/2では、腐植含量が他の試料と比較して極めて高い。これは、炉内の燃料材などに由来することを反映している可能性もある。

Ⅳ. 動物利用

1. 試料

本遺跡では、平成12年度調査時に、縄文時代早期末葉～前期初頭ないし縄文時代前期前半の捨て場などから骨片等を含む土壌58点が採取された。これらの土壌中に含まれる骨は、全体的に保存状態が悪く、破片となっているものが多い。そこで比較的形状の残る骨12点について、骨同定を行う試料とする。なお、試料の詳細は結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹中、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。保存状態が良好な標本については、水洗を行い、自然乾燥させる。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。また、保存の悪いものに関してはバインダーNo.17を塗布し、補強を行う。これらの標本について、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を掲載した。

3. 結果および考察

小松1遺跡出土の動物遺体

金子浩昌

(1) 出土骨

検出された動物依存体は、脊椎動物門 (Phylum Vertebrata) 哺乳綱 (Class Mammalia) ウシ目 (偶蹄目: Order Artiodactyla) の、シカ科 (Family Cervidae) ニホンジカ (*Cervus nippon*) とイノシシ科 (Family Suidae) イノシシ (*Sus scrofa*) である。以下、試料ごとに結果を示す (表7)。

< B I h20 Iva3層 >

ニホンジカの右側頭骨片である。破損標本であるが、部位のサイズからみて雄個体と考えられる。

< B I i11-1 Iva4層 >

ニホンジカの遊離した右上顎第2・3後臼歯が各1点、左下顎第3後臼歯2点である。右上顎第2・3後臼歯は、歯冠部のみを残す標本である。また、左下顎第3後臼歯の2点は、破損歯である。これらの臼歯は、推定年齢2.5歳と5.5歳である。

< B I h11~13-14 Iva3層 >

イノシシの左上顎第3後臼歯 (M3) と右下顎第3後臼歯 (M3) である。左上顎第3後臼歯は、前・中葉のみを残す。歯冠幅19.29mmを測り、咬耗をほとんどみない。また、右下顎第3後臼歯は、末葉部のみ破片であり、エナメル質部分まで咬耗する。全体的に咬耗の著しく進んだ歯と推定される。

< B I i12 V層 >

イノシシの左上顎第2・3後臼歯と右上顎第2・3後臼歯である。左上顎第2後臼歯は、破損が著しい。左上顎第3後臼歯は、歯冠長不明であるが、歯冠幅が最大で22.04mmを測る。また、右上顎第2臼歯が歯冠長23.09mm×歯冠幅18.61mm、右上顎第3後臼歯が歯冠長40.15mm×歯冠幅22.13mmを測る。なお、右上顎第3後

表7 骨同定結果

調査年次	グリッド等	区標	層位	時代	分類群	左右	部位	部位	備考
H12	B I h20 B I h11-1		IVa5 V	縄文時代前期前葉 縄文時代前期前葉	ニホンジカ	右	側頭骨	破片	
						右	上顎歯牙	M ²	
	B I h11 ~13-14		IVa5	縄文時代前期前葉	イノシシ	左	下顎歯牙	M ³	
						左	下顎歯牙	M ³	
	B I h12		V	縄文時代早期末葉 ~前期初葉	イノシシ	右	上顎歯牙	M ²	
						右	上顎歯牙	M ²	
	B I h11-2		V	縄文時代前期前葉	ニホンジカ イノシシ	右	上顎歯牙	M ²	
						右	上顎歯牙	M ²	
	B I h12-4		V	縄文時代前期前葉	ニホンジカ イノシシ	右	上顎歯牙	M ²	
						左	下顎歯牙	M ²	
	B I h13		IVa4	縄文時代前期前葉	ニホンジカ イノシシ	右	歯牙	臼歯片	
						右	上顎歯牙	M ³ 末葉部	
	B I h13		IVa4	縄文時代前期前葉	ニホンジカ	右	不明	破片	鏡骨含む
	B I h13-1		IVa4	縄文時代前期前葉	ニホンジカ	右	下顎骨	PeM ³ 残存	
B I h13(1, 2)		IVa4	縄文時代前期前葉	イノシシ	右	上顎歯牙	M ³		
					右	上顎歯牙	M ³		
B I j23		II b	縄文時代後葉、晩 期末葉~弥生時代	ニホンジカ	右	上顎骨	遠位端外側		
					右	頭頂骨	後頭部		
B II m06	27号住居		縄文時代前期前葉	ニホンジカ	右	上顎歯牙	M ¹		
					右	上顎歯牙	M ²		
					左	下顎歯牙	M ²		
					右	下顎歯牙	M ²		

凡例 I: 切歯 P: 前臼歯 M: 後臼歯

臼歯の咬耗は、前葉でわずかにエナメル質の摩耗がみられる程度である。

<B I h11-2 V層>

ニホンジカの臼歯片、イノシシの右上顎第3後臼歯、下顎第2切歯、獣類の四肢骨片である。右上顎第3後臼歯は、破損標本であるが、歯冠長40.0mm近くになると思われる。咬耗はほとんどみられない。右下顎第2切歯も破損標本で、咬耗の弱い歯である。これらの歯牙は、いずれも同一個体由来する可能性がある。この他、獣類の骨片が含まれる。

<B I h12-4 V層>

ニホンジカの臼歯片、イノシシの左上顎第2後臼歯が検出される。左上顎第2後臼歯は、前葉部の一部を残す破片である。歯冠幅20.0mm前後、エナメル質の摩滅とわずかな窪みをみる。この他、土塊中に骨が埋存する試料がある。この骨は脆弱であり、土中から取り出せないために観察できない。部分的に露出できた形態を観察すると肢骨でなく、椎骨系の骨の可能性があり、頸椎が考えられる。

<B I h13 IVa4層>

ニホンジカの臼歯片、イノシシの右上顎第3後臼歯である。右上顎第3後臼歯は、末葉部が残り、エナ

メル質部分を平らに咬耗する。この他、獣類の破片がある。なお、種類不明の獣類の破片中には、白色～灰黒色を呈し、表面に網かなび割れが生じている、焼骨も僅かであるが含まれる。

< B I i13 IVa4層 >

ニホンジカの右下顎骨片である。土壌中に埋没する状態で検出され、骨質部分も残されているが、全体の保存はよくない。下顎骨体は今少し保存されていたと思われる。第4前臼歯～第3後臼歯が確認される。第3後臼歯は萌出直前で、大部分が齧槽中にあった状態である。

< B I i13-1 IVa4層 >

ニホンジカの臼歯破片と獣類の破片である。

< B I i13 (1,2) IVa4層 >

イノシシの右上顎第3後臼歯である。末葉部のみを欠損し、歯冠長推定40.0mm×歯冠幅21.50mmを測る。前葉にエナメル穿孔、中葉にエナメル質摩耗がみられる。この他、獣類の四肢骨片が僅かにみられる。

< B I j23 IIb層 >

ニホンジカの腕骨遠位端の外側部、イノシシの頭頂骨後頭部が検出される。ニホンジカの腕骨遠位端の外側部は、骨端の小片であり、標個体と思われる。また、イノシシの頭頂骨後頭部は、頭頂骨は後頭部にかけて残る破片である。後頭部幅75.7mmを測る。おそらく打ち割ったもの一部と推定される。

< B II m06 27号住居 >

ニホンジカの右上顎第1・2後臼歯、左下顎第3後臼歯、右下顎第2後臼歯である。右上顎第1・2後臼歯は、同一個体のもと思われる。なお、全歯高からみた推定年齢は、右下顎第2後臼歯が4.5歳、左下顎第3後臼歯が2.5歳と考えられる。

(2) 総括

・イノシシ

B I i12のV層では、左右の上顎第2後臼歯が出土していることから、顎骨にあったことが推定される。ただし、その他歯牙が少ないことから、顎骨がどのような状態で残されていたか不明である。上顎第3後臼歯で全長40.0mmに達する大形サイズの標本が認められており、イノシシとしても大形タイプである。第3後臼歯まで萌出する個体であることから、4歳以上と推定される。その他の標本については、4歳以上に著しく年を経た個体の臼歯を確認することができない。

上記した臼歯の他に確認された歯牙は、切歯片がみられた程度である。骨格としては、後頭骨部分や顎骨片が確認された。この内、顎骨片は上記の臼歯との関連はあるかと思われる。いずれも成獣の個体と判断される。

・ニホンジカ

わずかに側頭骨片と上腕骨片が認められるが、大半は臼歯片である。B I i11-1のV層、B II m06の27号住居では、上顎臼歯と下顎臼歯が混在し、破損したものと考えられる。また、B I i13のIVa4層では、右下顎骨が検出されており、第4前臼歯～第3後臼歯が確認される。これらの事実から、数個の顎骨があったことは事実のようである。

(3) あとがき

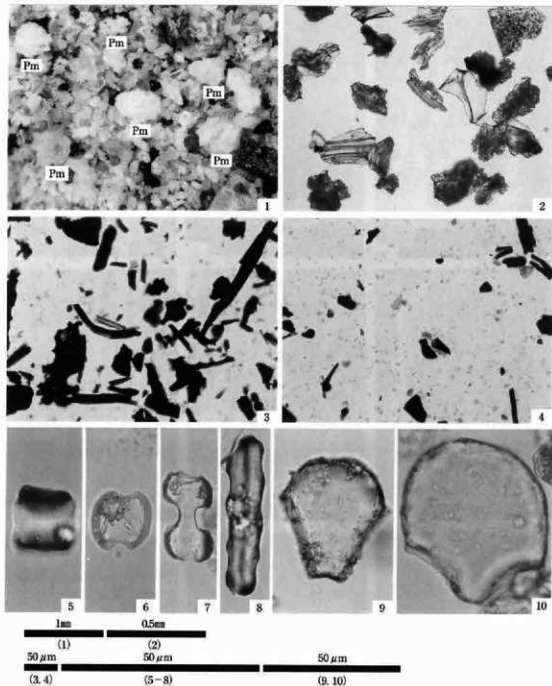
本遺跡における出土骨の調査結果、イノシシ、ニホンジカがその中心となっている。イノシシおよびニホンジカは、縄文時代の主な狩猟対象となる獣類で、各地から報告例がある(金子, 1994)。本遺跡の結果は、内陸地域での獣類骨格の検出できた例として興味を持たれ、かつ重要な資料であると思われる。捨て場という推定であるが、イノシシ、ニホンジカの頭骨を主とする集積であった可能性もある。検出された

シカの白歯片も埋没時には顎骨にあった可能性もある。今後、周辺地域において資料が蓄積されていくことで、当時の食糧資源や狩猟方法などの動物利用や当時の周辺環境について、より詳細に検討することができると思われ、今後とも本地域の調査成果に注目していきたい。

引用文献

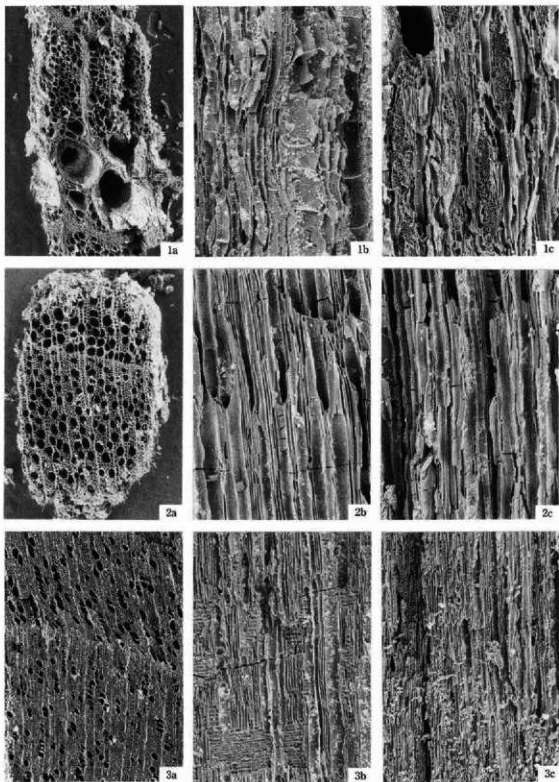
- 天野洋司・太田 純・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H.J.M. (1983) 『環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -』。浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社
- [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M. (1980) 「土壌の化学」, 岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, p.235-236, 学会出版センター[Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY].
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 「土壌養分分析法」, 440p., 養賢堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, p.57-61, 地質調査所.
- 古澤 明 (1995) 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別。地質学雑誌, 101, p.123-133.
- 早川由紀夫 (1983) 十和田火山中塚テフラ層の分布, 粒度, 組成, 年代, 火山, 28, p.263-273.
- 金子浩昌 (1994) 狩猟対象と技術。加藤晋平・小林達雄・藤木 強編「縄文文化の研究2 生業 (第2版)」, p.78-102, 雄山閣出版株式会社.
- 川崎 弘・吉田 浩・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- キーリC.T.・武藤康弘 (1982) 縄文時代の年代, 加藤晋平・小林達雄・藤木 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣出版株式会社.
- 近藤隼三・佐瀬 隆 (1986) 植物硅酸体分析, その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 「火山灰アトラス」, 276p., 東京大学出版会.
- 松田隆剛 (1986) 湯舟沢遺跡より出土した炭化材の樹種について。滝沢村文化財調査報告書第2集「湯舟沢遺跡 (第2分冊)」, p.867-872, 滝沢村教育委員会・財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・トーメン住宅開発株式会社.
- 中村 純 (1967) 「花粉分析」, 232p., 古今書院.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993a) 自然科学分析からみた人々の生活 (1)。炭燻熟藁炭地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p.347-370, 慶應義塾.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993b) 大石渡遺跡・仏沢Ⅲ遺跡の炭化材同定及び連続分析。岩手県滝沢村文化財調査報告書第24集「大石渡遺跡 縄文時代晩期の配石土壌と続縄文文化の墓地調査報告」, p.111-119, 滝沢村教育委員会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993c) 花粉分析・炭化材同定・種子同定。「御所野遺跡 縄文時代中期の大集落」, p.341-355, 一戸町教育委員会.
- ベドロジスト懇談会編 (1984) 「土壌調査ハンドブック」, 156p., 博友社.

図版1 テフラ・花粉分析プレパラートの状況・植物珪酸体



1. To-Cuの軽石 (平成12年度 Bih10-4)
2. To-Cuの火山ガラス (平成12年度 Bih10-4)
3. 花粉分析プレパラート内状況 (平成12年度 V層下部)
4. 花粉分析プレパラート内状況 (平成12年度 V層上部)
5. タケ亜科短細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)
6. ヨシ属短細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)
7. ススキ属短細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)
8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)
9. タケ亜科横動細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)
10. ヨシ属横動細胞珪酸体 (平成12年度 V層下部)

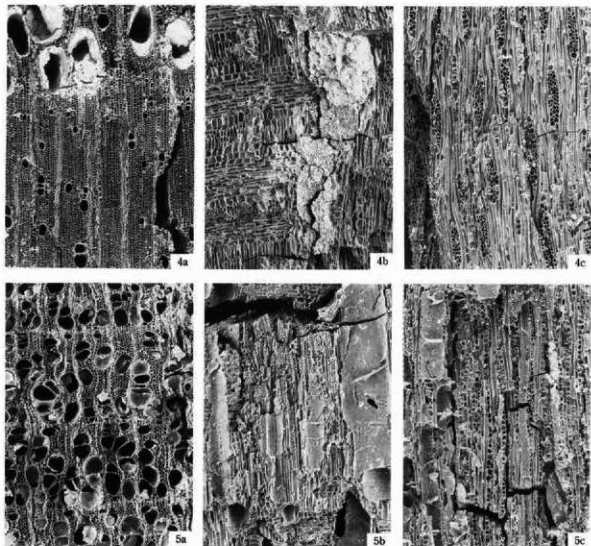
図版2 炭化材 (1)



1. ケヤキ (平成13年度 300号炭)
 2. カブラ (平成14年度 400号炭)
 3. モクレン属 (平成13年度 318号住)
- a : 木口、b : 柀目、c : 柀目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版3 炭化材 (2)



4. ケンボナン属 (平成13年度 318号住)

5. タマガヤナギ属近似種 (平成12年度 BI113 IVa層)

a : 木口、b : 柀目、c : 柀目

200 μ m : a

200 μ m : b, c

写 真 图 版

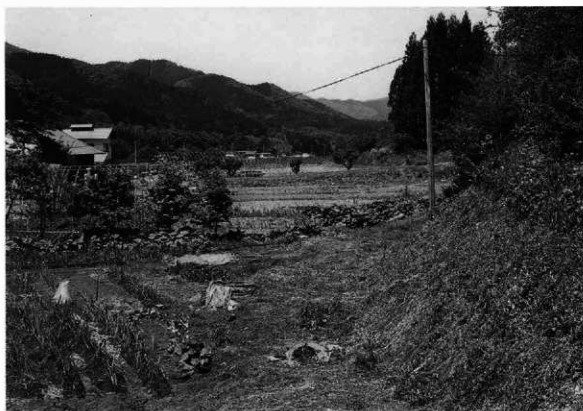


遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南から）

写真図版1 遺跡遠景・近景



0～3区調査開始前（東から）



1区縄文晩期末～弥生初面作業風景（西から）



0区縄文前期要素検出面（西から）



1区完掘（東から）

写真図版2 0～3区調査開始前・作業風景・完掘



縄文前期前葉（焼土・完形土器出土、南から）



縄文早期末～前期初葉検出状況（焼土群、南から）

※同じ場所

写真図版 3 2区検出状況



2～3区調査開始前（西から）



3区縄文早期末～前期初頭住居跡群（東から）

写真図版4 2～3区調査前・3区V層（畑側）検出住居跡群



4区調査前（西から）



5～8区調査前（東から）

写真図版5 4～8区調査前



9～10区調査前（東から）



4区作業風景（縄文前期前葉、西から）



7区調査風景（縄文早期末～前期初頭、西から）



9区1面検出状況（西から）



9区作業風景（縄文前期前葉、北西から）

写真図版 6 9～10区調査前・4、7、9区作業風景・検出状況



0区土層断面 (南から)



0区土層断面 (3図①、東から)



1区土層断面 (4図、南から)



2区西側連続断面A (4図、右側に断面B、西から)

写真図版7 土層断面1



2区西側連続断面B (5図、左側に断面A、右側に断面C、西から)



2区西側連続断面C (5図、左側に断面B、西から)

写真図版 8 土層断面 2



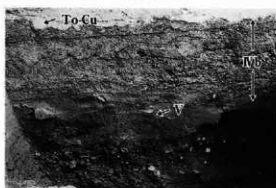
3区山側土層断面1 (右側に断面2、南から)



3区山側土層断面2 (南から)



3区山側土層断面3 (西から)

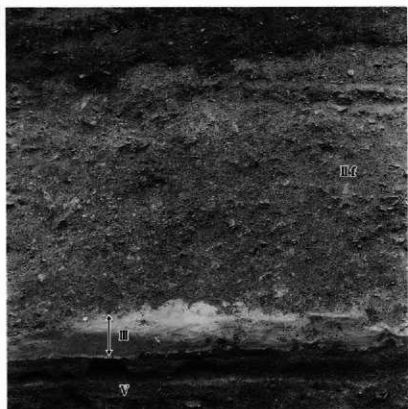


3区内深掘土層断面 (南から)



3区畑側土層断面 (北から)

写真図版9 土層断面3



4区山麓土層断面 (6図、南から)

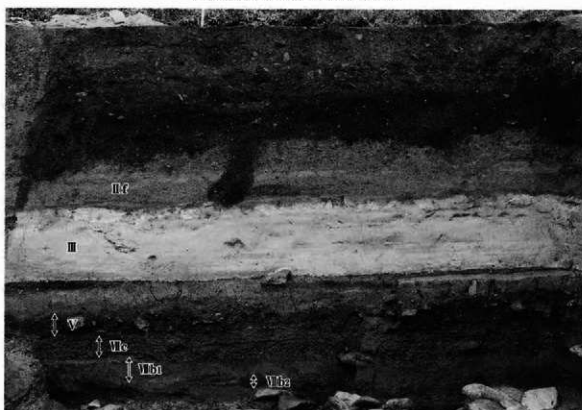


4区横断土層断面 (6図、西から)

写真図版10 土層断面 4



7区東側横断土層断面(7図①、西から)



7区山側土層断面(左側に上写真断面、南から)

写真図版11 土層断面5



7区西側横断土層断面（7図②、東から）



8区山側土層断面・検出状況（南から）

写真図版12 土層断面 6



完掘 (西から)



土層断面 (西から)



地床断面 (西から)



遺物出土状況 (南から)

写真図版13 20号住居跡



完掘（東から）



土層断面（西から）



第3号地床炉 平面（東から）



遺物出土状況（北から）



完照 (南から)



土層断面 (西から)



第3号地床切 平面 (東から)



断面 (北から)



完掘（東から）



土層断面（南から）



第1号地床炉 平面（北から）



断面（北から）

写真図版16 25号住居跡



完掘（西から）



土層断面（南から）



地床跡 平面（東から）



断面（南から）

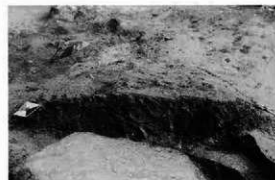
写真図版17 26・52号住居跡



完掘（東から）



土層断面（西から）



第1号地床炉 断面（北から）



遺物出土状況（西から）

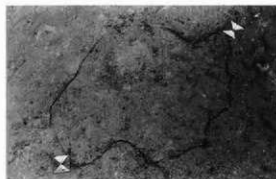
写真図版18 27号住居跡



完掘 (西から)



土層断面 (西から)



第2号地床切 平面 (南から)



断面 (南から)

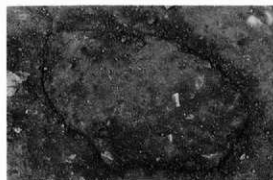
写真図版19 30号住居跡



完掘 (南から)



土層断面 (南から)

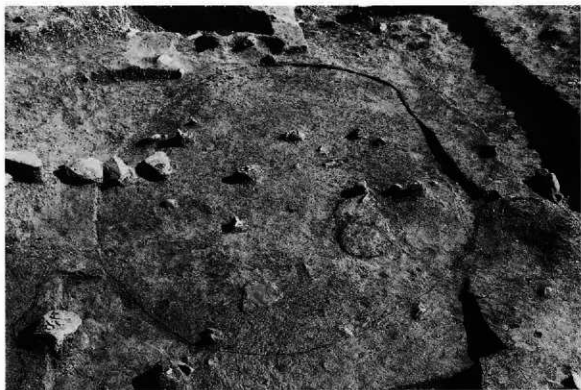


第2号地床炉 平面 (南から)



断面 (西から)

写真図版20 31号住居跡



完掘（西から）



土層断面（東から）



第1号地床炉 平面（北から）



断面（北から）

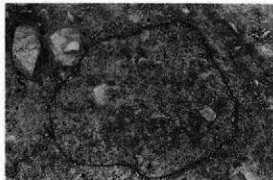
写真図版21 38号住居跡



完照 (南から)



土層断面 (南から)



地床部 平面 (北から)



断面 (西から)

写真図版22 39号住居跡



完掘（北から）



土層断面（西から）



地床坪 平面（北から）



断面（北から）

写真図版23 40号住居跡



完照（北から）



土層断面（東から）



完掘 (西から)



土層断面 (東から)



遺物出土状況 (南から)



屋外炉 断面 (西から)

写真図版25 46号住居跡



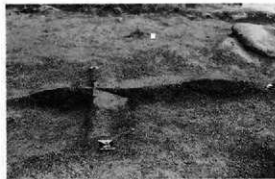
完掘 (西から)



土層断面 (南から)



地床跡 平面 (北西から)



断面 (南から)

写真図版26 42号住居跡



完掘（北から）



土層断面（東から）



完瀬 (北から)



土層断面 (南から)

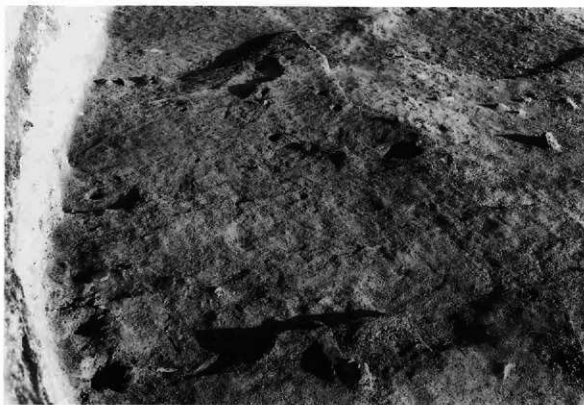


地床炉 断面 (北西から)



pp11 柱穴 断面 (南から)

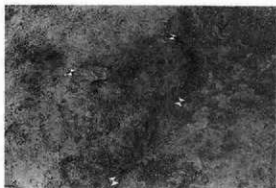
写真図版28 45号住居跡



完掘（西から）



土層断面（東から）

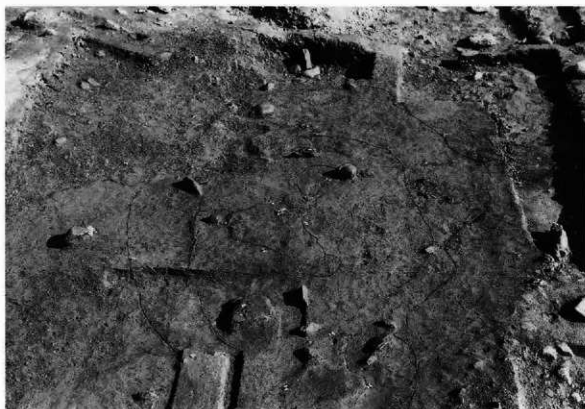


第2号地床炉 平面（南から）



断面（南東から）

写真図版29 48号住居跡



完掘（西から）



土層断面（東から）



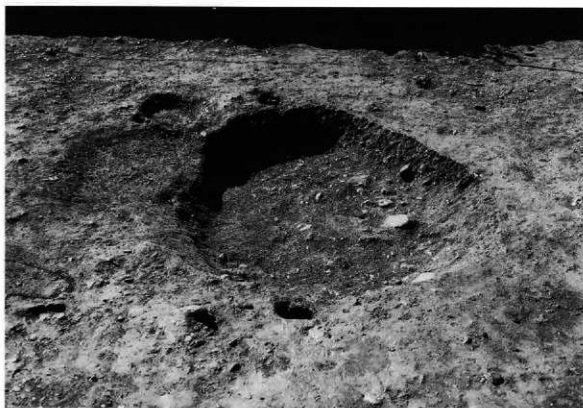
地床が

断面（西から）



断面（東から）

写真図版30 49号住居跡



完掘（北から）



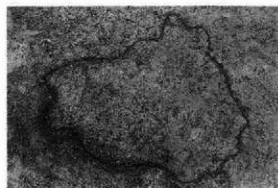
屋外炉 断面（東から）



完掘 (南から)



土層断面 (北から)



第1号地床炉 平面 (西から)



断面 (東から)

写真図版32 200号住居跡



完掘 (北から)



土層断面 西側 (南から)



東側 (南から)



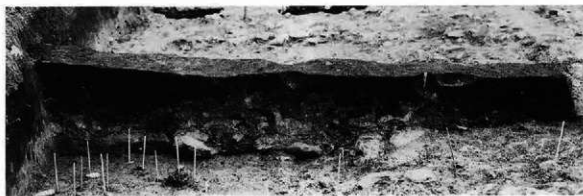
地床炉平面と遺物出土状況 平面 (北から)



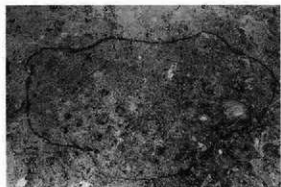
地床炉 断面 (南から)



完掘 (西から)



土層断面 (南から)



地床炉 平面 (東から)



断面 (東から)

写真図版34 206号住居跡



完掘（北から）



土層断面（東から）

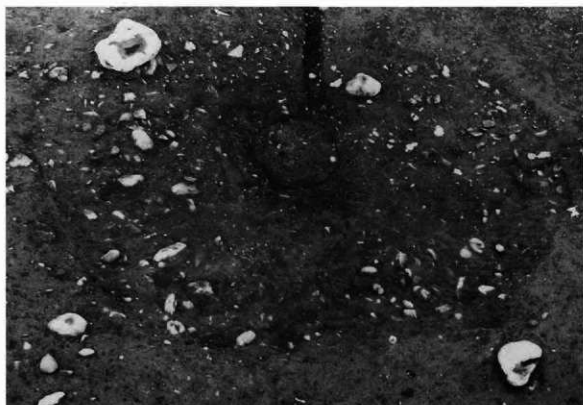


第1号地床切 平面（東から）



断面（北東から）

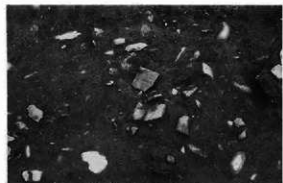
写真図版35 207号住居跡



完掘 (南から)



土層断面 (東から)



遺物出土状況 (西から)



地床炉 断面 (南から)



完掘（北から）



土層断面（東から）



第1号地床跡 平面（西から）



断面（西から）

写真図版37 317号住居跡



完掘（北から）



土層断面（西から）



地床炉 平面（西から）

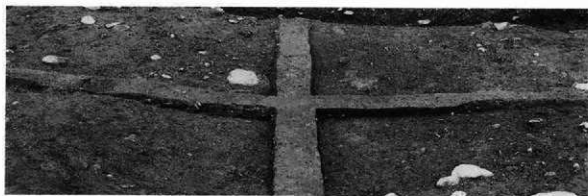


断面（北西から）

写真図版38 318号住居跡



完掘（北から）



土層断面（南から）



地床部 平面（東から）



断面（南から）

写真図版39 319号住居跡



完備（北から）



土層断面（南から）



新期地床跡 平面（東から）



断面（南から）

写真図版40 320号住居跡



完掘（西から）



地床炉 平面（北から）



断面（西から）



完掘（北から）



土層断面（南から）



地床切 断面（東から）



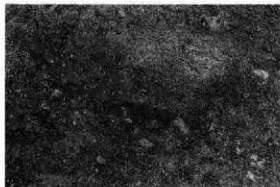
完掘 (東から)



土層断面 (西から)



地床坪 平面 (東から)



断面 (東から)

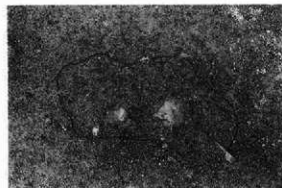
写真図版43 324号住居跡



完掘 (中央白色部分 南から)



土層断面 (西から)



第2号地床炉 平面 (西から)



断面 (西から)

写真図版44 400号住居跡



完掘（南から）



土層断面（北から 断面中央白色部が十和田一中樞火山灰層）



地床型 断面（東から）



断面（北から）

写真図版45 404号住居跡



完掘 (北から)



第2号地床 平面 (東から)



断面 (東から)



第1号地床 断面 (北から)



pp1柱穴 断面 (東から)

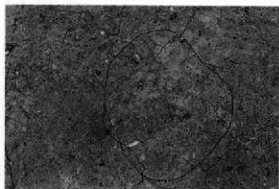
写真図版46 405号住居跡



完掘 (北から)



土層断面 (南から)



地床炉 平面 (南から)



断面 (西から)

写真図版47 407号住居跡

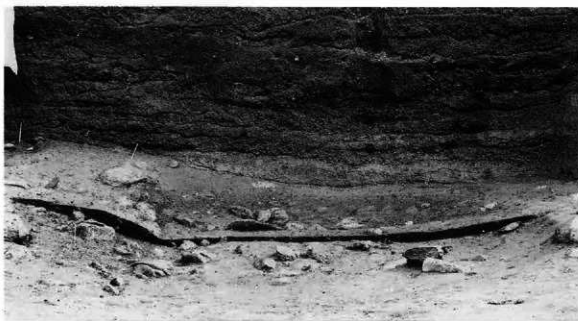


207号住居跡地床炉と408号住居跡地床炉 (ベルト下の炉)



完掘 (南から)

写真図版48 408号住居跡 (1)



土層断面 (北から)



地床断面 (北から)



完圓 (南から)



断面 (南東から)



地床切断面 (南西から)



炉跡出土土器拡大 (南から)



完掘（北から）



土層断面（北から）



地床伊断面（北から）

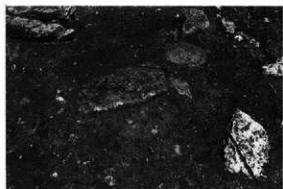
写真図版51 410号住居跡



完掘（北から）



土層断面（南から）



第2号地床炉平面（南から）



断面（南から）

写真図版52 412号住居跡



完掘 (北から)



土層断面 (南から)



地床^{II}平面 (東から)



断面 (西から)

写真図版53 413号住居跡



完掘（北から）



土層断面（北から）



地床炉平面（東から）



第1号地床炉断面（西から）

写真図版54 414号住居跡



完掘（東から）



土層断面（東から）



地床断面（南から）



遺物出土状況（北から）

写真図版55 415号住居跡



完掘（北から）



土層断面（北から）



地床炉平面（西から）



地床炉断面（西から）

写真図版56 417号住居跡



完掘 (北から)



土層断面 (南から)



地床断面 (南西から)



遺物出土状況 (南から)

写真図版57 418号住居跡



完掘（東から）



土層断面（南から）



地床断面（東から）

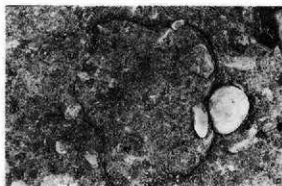


第1号土坑断面（東から）

写真図版58 420号住居跡



完掘（北から）



地床炉平面（北から）



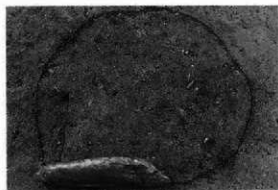
断面（西から）



完掘（北から）



土層断面（西から）

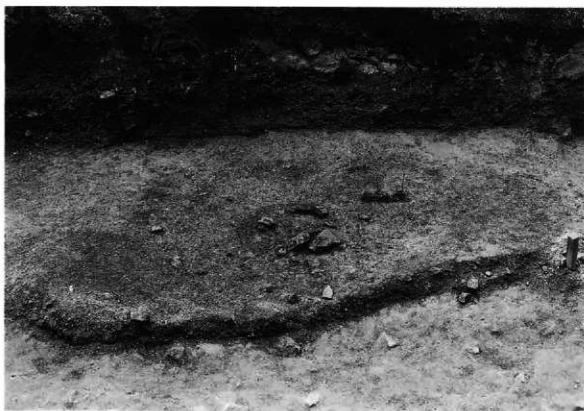


地床炉平面（南から）



断面（東から）

写真図版60 423号住居跡



完掘（北から）



地床部平面（南から）



断面（南から）



完掘 (南から)



土層断面 (北から)



地床平面 (南から)



断面 (北から)

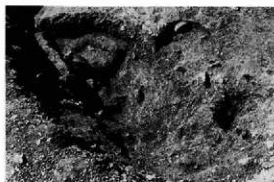
写真図版62 28号竪穴状遺構



完掘（南から）



土層断面（西から）



土坑完掘（南から）

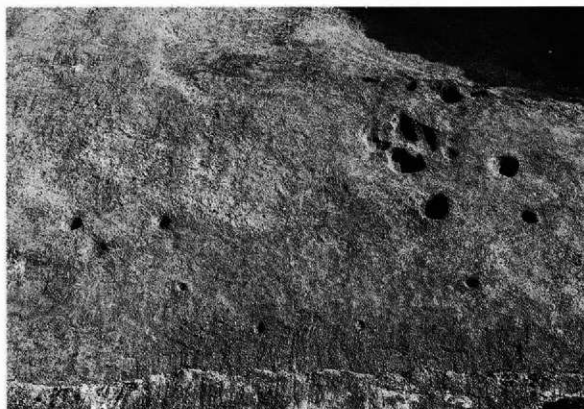


断面（南から）



32号整穴状遺構

完撮（北から）



33号整穴状遺構

完撮（北から）

写真図版64 32・33号整穴状遺構



完圖 (北から)



pp30 柱穴断面 (北から)



完掘（北東から）



土層断面（北から）



完掘（南から）



土層断面（東から）

写真図版67 37号竪穴状遺構



完掘（南西から）



pp4 柱穴断面（南東から）



完掘（南西から）



土層断面（北から）



完掘（南西から）



土層断面（北東から）



完掘（南西から）



土層断面（北西から）



土層断面（北から）

写真図版71 307号竪穴状遺構



完掘（南西から）



土層断面（北東から）



完掘（南西から）



土層断面（南西から）



完掘（南西から）



土層断面（西から）



土坑完掘（西から）



遺物出土状況（南西から）

写真図版74 312号竪穴状遺構



完掘 (南西から)



pp1 柱穴断面 (南西から)



pp2 柱穴断面 (南西から)



完掘（南西から）



土層断面（北西から）



完掘（北西から）



pp4 柱穴断面（南東から）



完掘（北から）

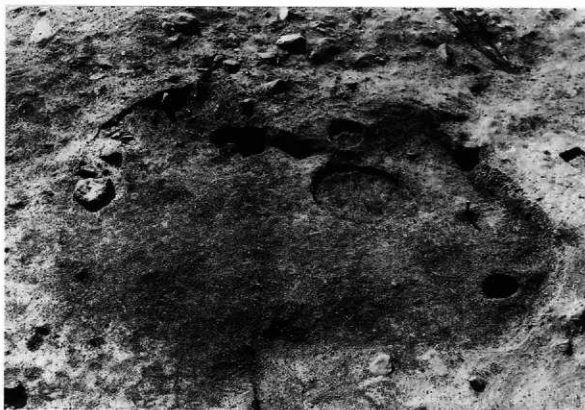


土層断面（南から）



pp1 柱穴断面（西から）

写真図版78 322号竪穴状遺構



完掘 (北から)



土層断面 (西から)

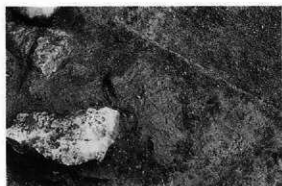


遺物出土状況 (北から)



pp1 柱穴断面 (西から)

写真図版79 325号型穴状遺構



2号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南東から)



3号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)



4号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南東から)



6号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (南から)

写真図版80 焼土遺構 (1)



7号焼土遺構

平面 (西から)

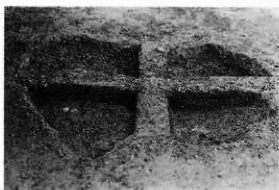


断面 (西から)

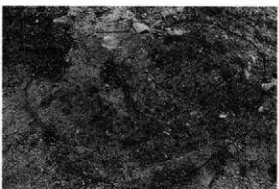


8号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (東から)

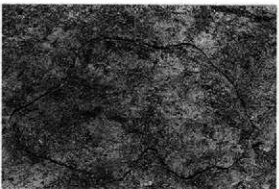


9号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (南から)



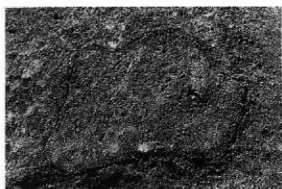
10号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)

写真図版81 焼土遺構 (2)



11号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (南から)



12号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (東から)

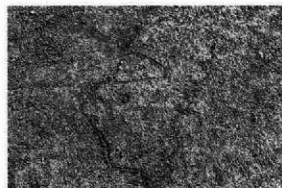


13号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (北から)



14号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (東から)

写真図版82 焼土遺構 (3)

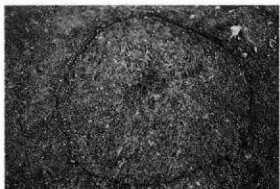


15号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



16号焼土遺構

平面 (北西から)



断面 (東から)



17号焼土遺構

平面 (北東から)



断面 (南西から)



18号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)

写真図版83 焼土遺構 (4)



19・21号焼土遺構

平面 (西から)



19号焼土遺構

断面 (南から)



20号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (西から)



22号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (西から)



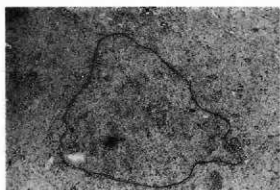
23号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (西から)

写真図版84 焼土遺構 (5)

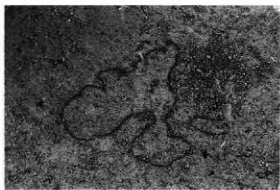


24号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (東から)



25号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



26号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



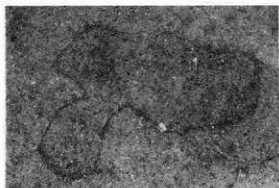
27号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (西から)

写真図版85 焼土遺構 (6)

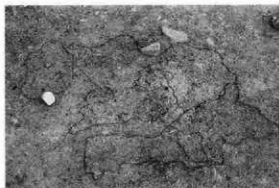


28号焼土遺構

平面 (南東から)



断面 (南から)



29号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (西から)



200号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (東から)



201号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (南から)

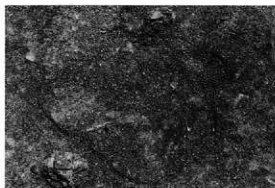
写真図版86 焼土遺構 (7)



202号焼土遺構 平面（東から）



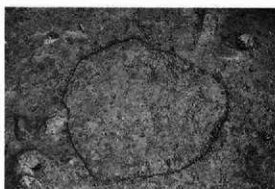
断面（南から）



203号焼土遺構 平面（北から）



断面（東から）



204号焼土遺構 平面（北から）



断面（東から）



205号焼土遺構 平面（西から）



断面（南東から）

写真図版87 焼土遺構 (8)



206号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



207号焼土遺構

平面 (東から)



断面 (西から)



208号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (北から)



209号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (東から)



300号焼土遺構 平面(南東から)



断面(南から)



301号焼土遺構 平面(西から)



断面(北から)



302号焼土遺構 平面(北から)



断面(西から)



304号焼土遺構 平面(南西から)

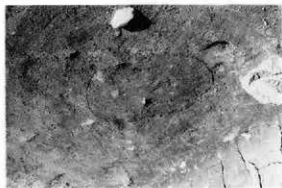


306号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (西から)



305号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)



400号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)



401号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)

写真図版90 焼土遺構 (11)



402号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (西から)

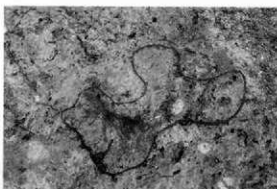


403号焼土遺構

平面 (南から)



炭化木 (462号跡出土)



404号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



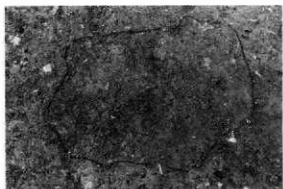
405号焼土遺構

平面 (南から)



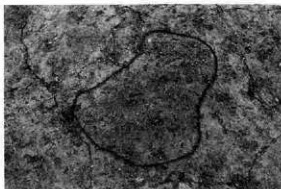
断面 (西から)

写真図版91 焼土遺構 (12)



406号焼土遺構

平面 (北から)



407号焼土遺構

平面 (北から)

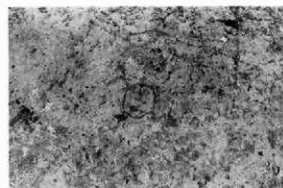


408号焼土遺構

平面 (南から)

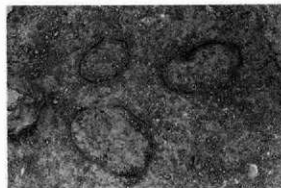


断面 (北から)



409号焼土遺構

平面 (北から)



414号焼土遺構

平面 (南から)



410号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)

写真図版92 焼土遺構 (13)



415号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南西から)



416号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (南から)



417号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (南から)



418・419号焼土遺構

平面 (南から、真中が419号)



断面 (南から)

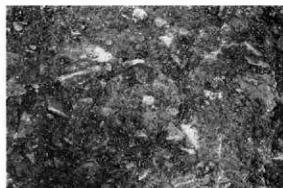
写真図版93 焼土遺構 (14)



420号焼土遺構 平面（真中：南半分検出）



断面（南から）



422号焼土遺構 平面（南から）



断面（南東から）



423号焼土遺構 平面（北から）



断面（西から）



424号焼土遺構 平面（北から）



断面（北東から）

写真図版94 焼土遺構（15）



425号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (南東から)

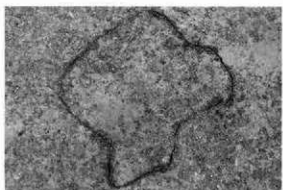


426号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (東から)

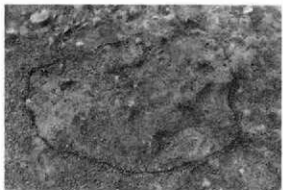


427号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (東から)

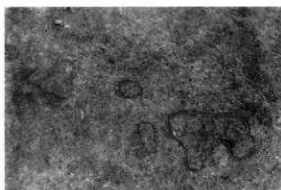


432号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南西から)

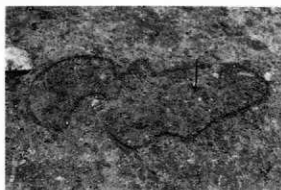


433号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (西から)



434号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)

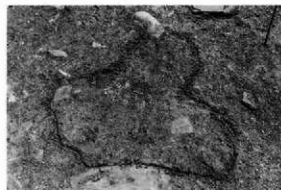


435号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南西から)

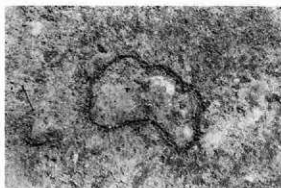


436号焼土遺構

平面 (西から)



断面 (西から)



437号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



441~443号焼土遺構

平面 (西から)



441号焼土遺構

断面 (東から)



442号焼土遺構

断面 (南東から)



443号焼土遺構

断面 (東から)



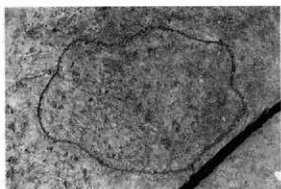
444号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)

写真図版97 焼土遺構 (18)



445号焼土遺構

平面（北から）

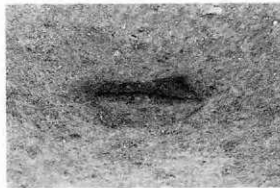


断面（南から）



446号焼土遺構

平面（南から）



断面（南から）



447号焼土遺構

平面（北から）



断面（南から）



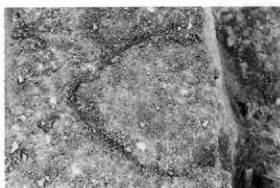
448号焼土遺構

平面（南から）



断面（南から）

写真図版98 焼土遺構（19）



455号焼土遺構

平面 (北から)



断面 (北から)



456号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)



457号焼土遺構

平面 (南から)



断面 (南から)



458号焼土遺構

平面 (南東から)



断面 (北から)



459号焼土遺構

平面（西から）



断面（東から）

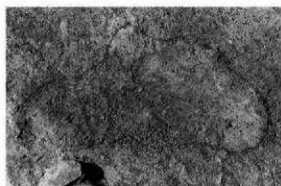


460号焼土遺構

平面（南から）



断面（南から）



461号焼土遺構

平面（南から）



断面（南から）



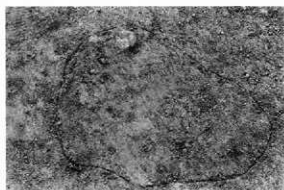
452号焼土遺構

平面（東から）



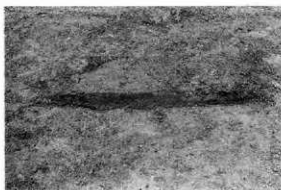
断面（南から）

写真図版100 焼土遺構 (21)



453号焼土遺構

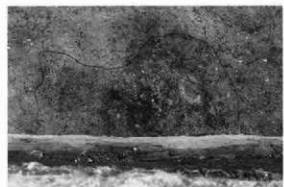
平面（東から）



断面（南から）



462号焼土遺構と炭化木出土状況（北から）



300号炭化物集積遺構

平面（北から）



断面（南から）

写真図版101 焼土遺構（22）・炭化物集積遺構（1）



400号炭化物集積遺構

平面 (北から)



断面 (南から)



401号炭化物集積遺構

平面 (南から)



断面 (南から)

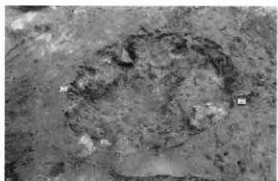


53号土坑

完掘 (西から)



断面 (西から)



55号土坑

完掘 (西から)



断面 (東から)



56号土坑

完掘 (北から)



断面 (北から)



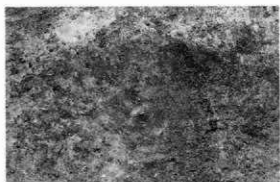
57号土坑

完掘 (西から)



断面 (南から)

写真図版103 土坑 (1)

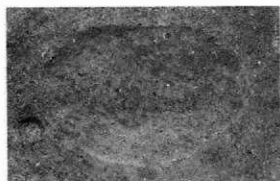


113号土坑

完掘 (北から)



断面 (東から)

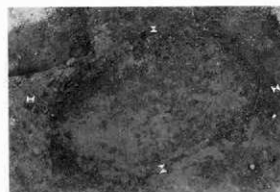


120号土坑

完掘 (北から)



断面 (南から)



200号土坑

完掘 (南から)



断面 (南から)

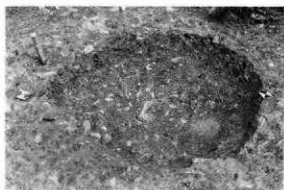


201号土坑

完掘 (西から)



断面 (南から)



202号土坑

完掘 (南から)



断面 (南から)



203号土坑

完掘 (東から)



断面 (南から)

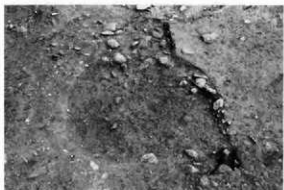


204号土坑

完掘 (西から)



断面 (南から)



307号土坑

完掘 (西から)



断面 (西から)



308号土坑

完掘 (西から)



断面 (西から)

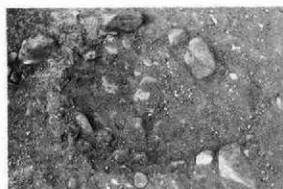


310号土坑

完掘 (西から)



断面 (東から)

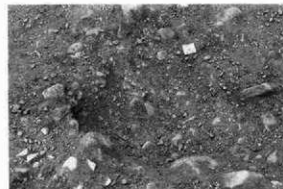


312号土坑

完掘 (南から)



断面 (東から)



313号土坑

完掘 (南から)



断面 (東から)



314号土坑

完掘 (東から)



断面 (東から)



317号土坑

完掘 (東から)



断面 (北から)



318号土坑

完掘・断面 (南から)



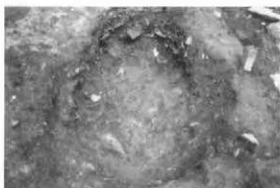
319号土坑

完掘・断面 (南から)



321号土坑

完掘・断面 (南から)



403号土坑

完掘 (南から)

写真図版107 土坑 (5)



405号土坑

完掘 (南から)



断面 (南から)



406号土坑

完掘 (南から)



断面 (南から)



1



2



3



5



4



6



8



7



9



10



11



12



13



14



19



15



16



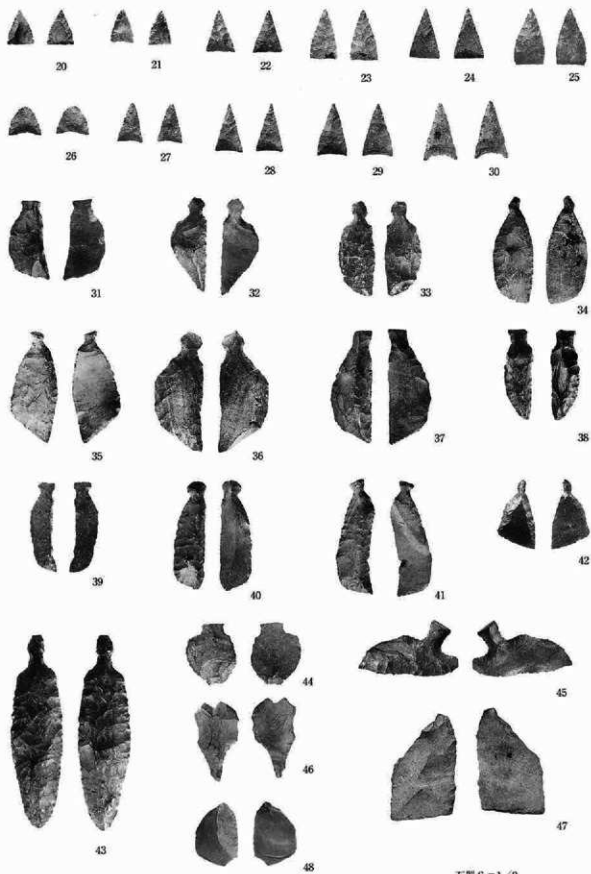
18



17

土器S=1/3

写真図版109 20号住居跡出土遺物 (1)



写真图版110 20号住居跡出土遺物 (2)



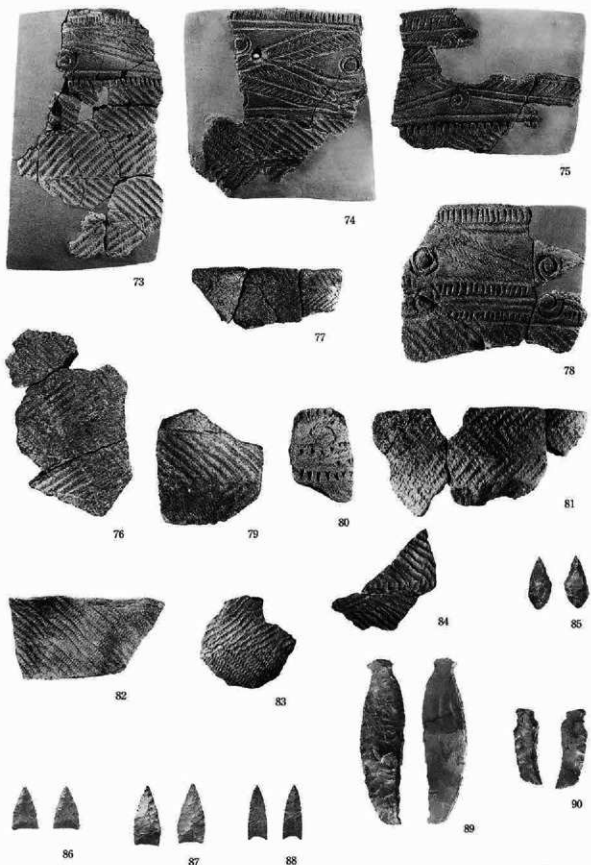
20住

21住



土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版111 20号(3)・21号住居跡出土遺物

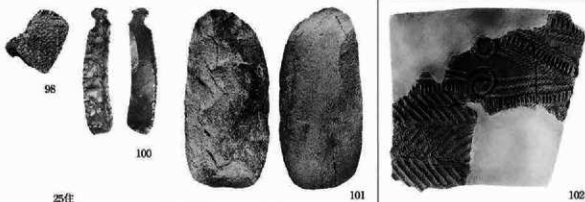
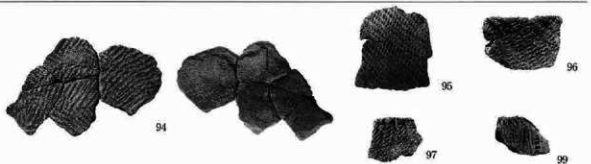


土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版112 24号住居跡出土遺物 (1)

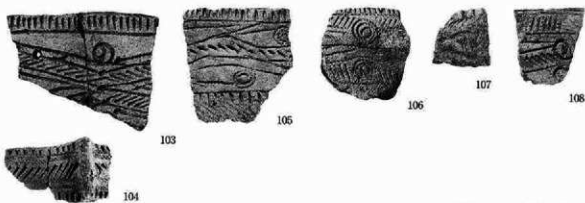


24住



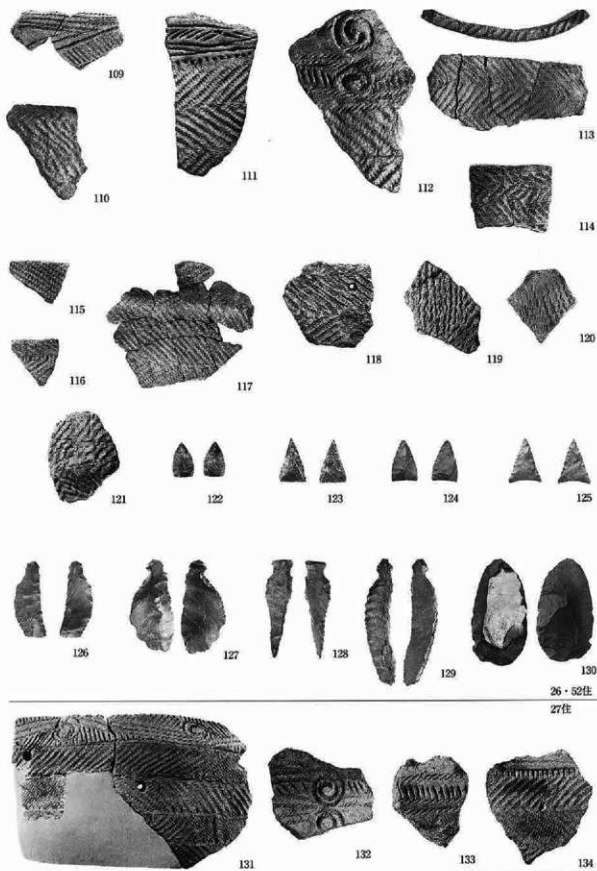
25住

26・52住



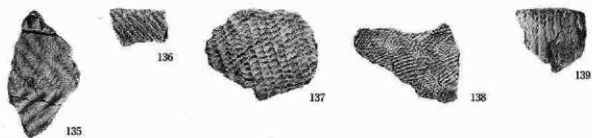
土器S-1/3 石器S-1/2

写真図版113 24号(2)・25号・26・52号(1)住居跡出土遺物

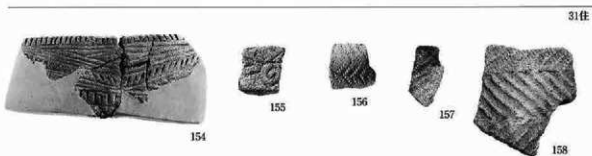
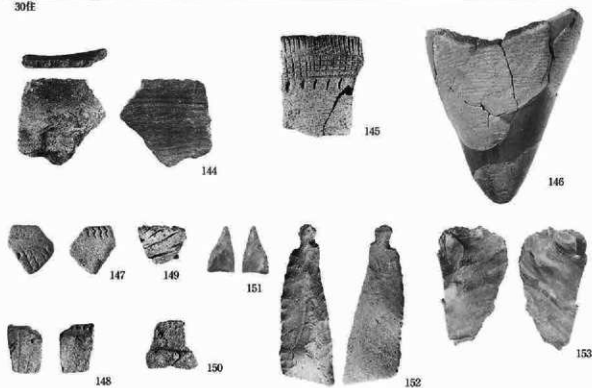


土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版114 26・52号(2)・27号(1)住居跡出土遺物

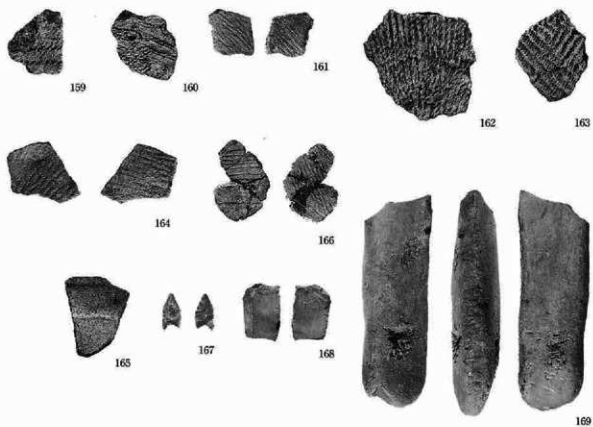


27住
30住

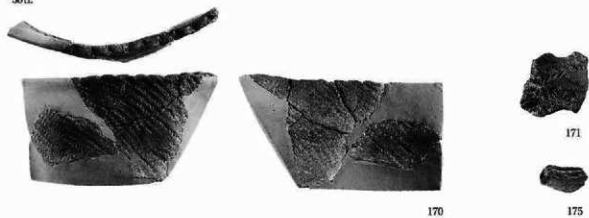


土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版115 27号(2)・30号・31号(1)住居跡出土遺物

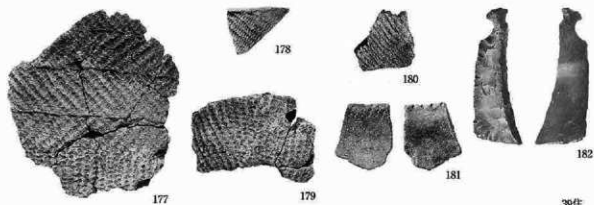


31住
38住

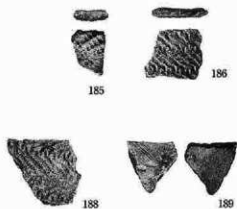


土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版116 31号(2)・38号住居跡出土遺物

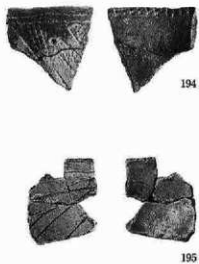
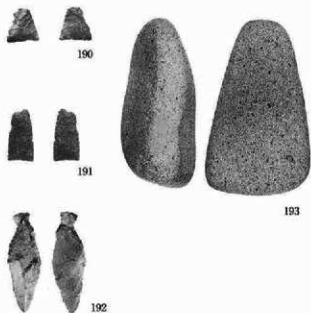


39住



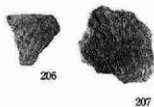
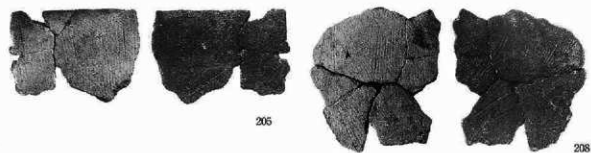
40住

41住

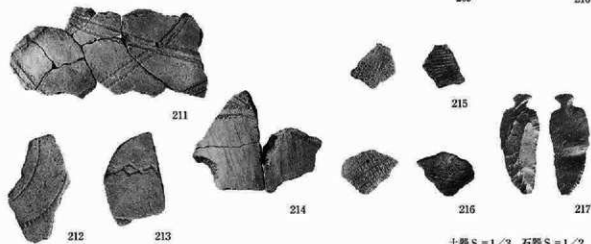
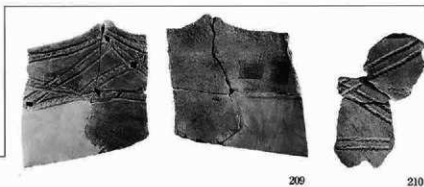


土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版117 39号・40号・41号 (1) 住居跡出土遺物

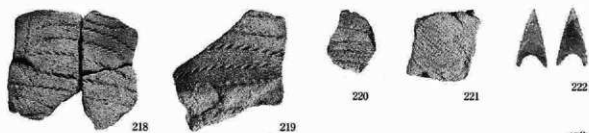


41住
46住



土器S-1/3 石器S-1/2

写真図版118 41号(2)・46号住居跡出土遺物

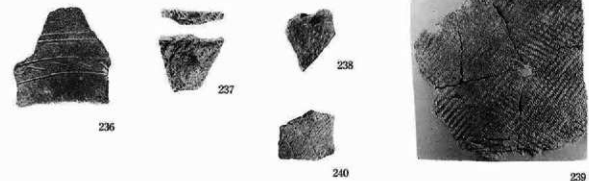
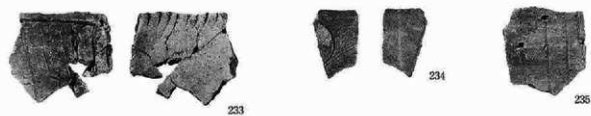


44住



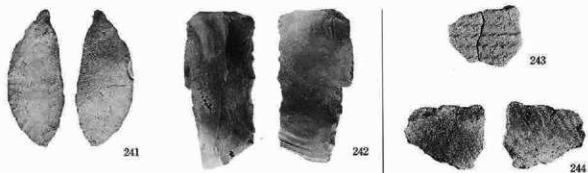
45住

48住



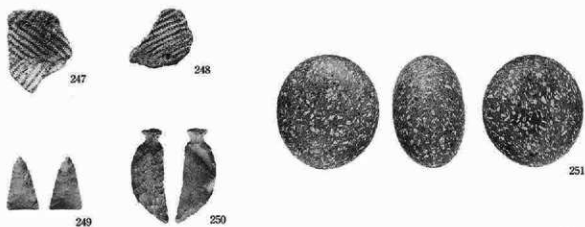
土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版119 42号・44号・45号・48号 (1) 住居跡出土遺物



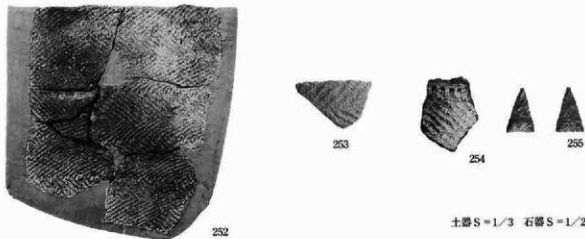
48住

49住



51住

200住



土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版120 48号(2)・49号・51号・200号住居跡出土遺物



256



257



258



259



260



261



262



263

266



264



265



267



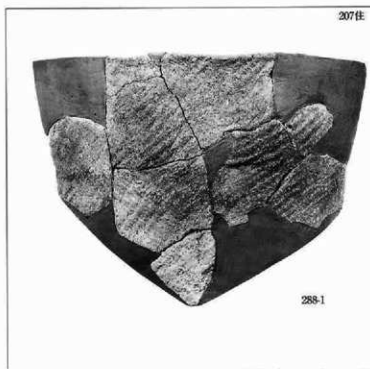
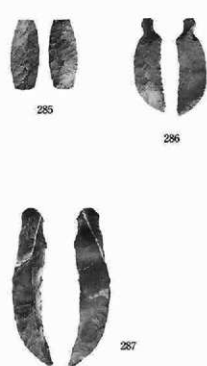
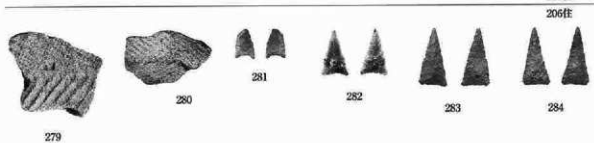
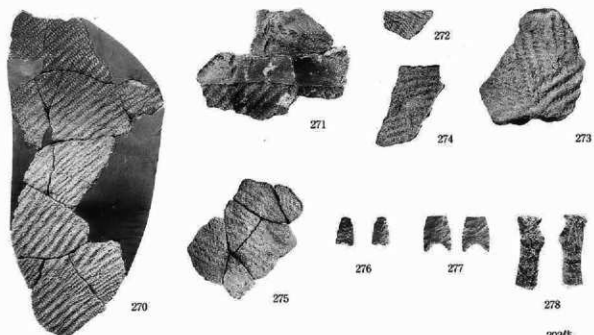
268



269

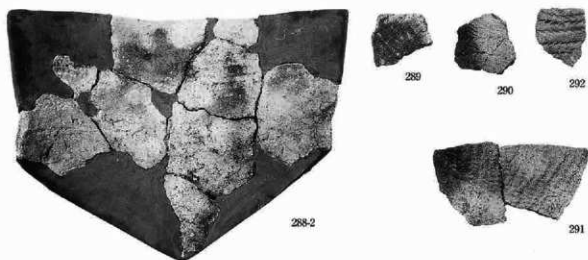
土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版121 202号住居跡出土遺物(1)

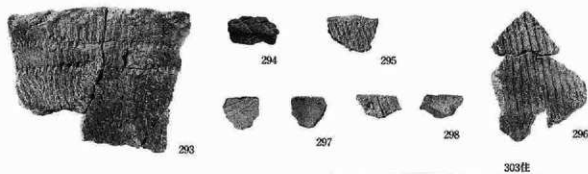


土器S-1/3 石器S-1/2

写真図版122 202号(2)・206号・207号(1)住居跡出土遺物



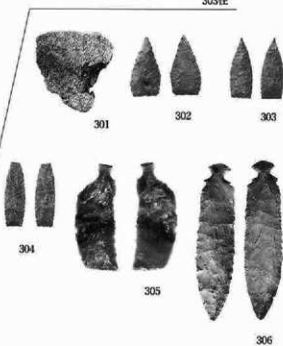
207住



303住



317住



土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版123 207号(2)・303号・317号(1)住居跡出土遺物



309

317住

318住



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



325



327



324



326



328

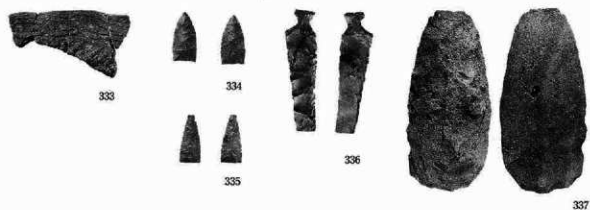
319住

土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版124 317号(2)・318号・319号住居跡出土遺物



320住



321住



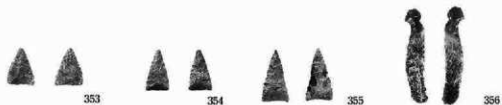
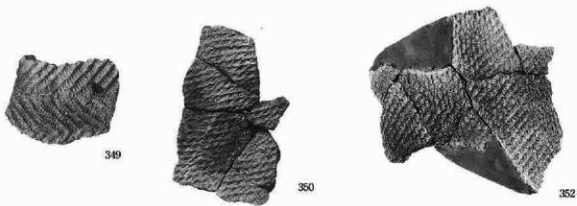
323住

324住

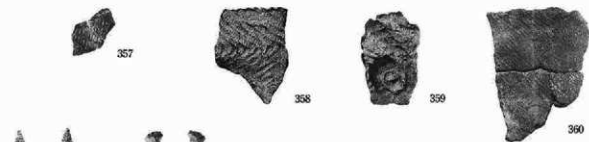


土器S=1/3 石器S=1/2

写真图版125 320号・321号・323号・324号住居跡出土遺物

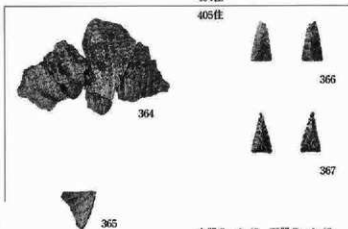


400住



404住

405住



土器 S = 1/3 石器 S = 1/2

写真図版126 400号・404号・405号住居跡出土遺物



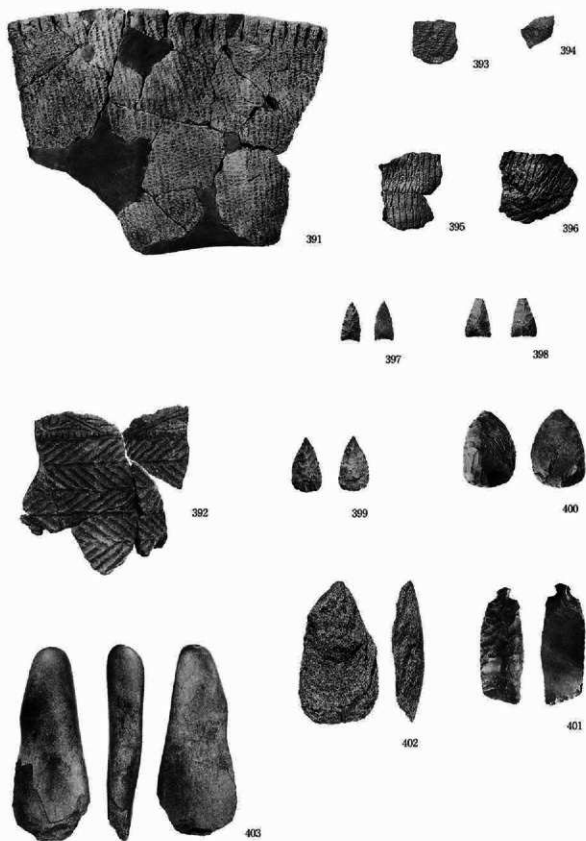
407住

408住



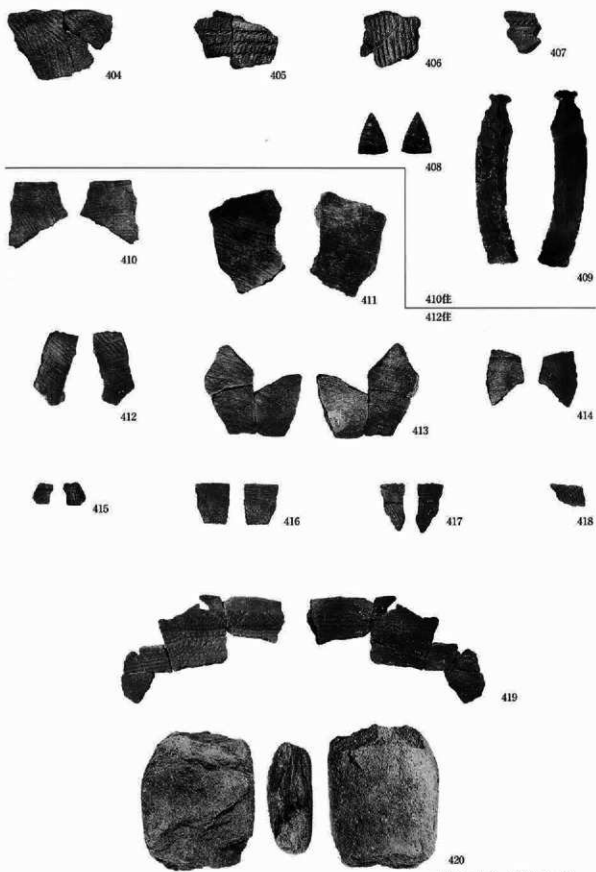
土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版127 407号・408号住居跡出土遺物



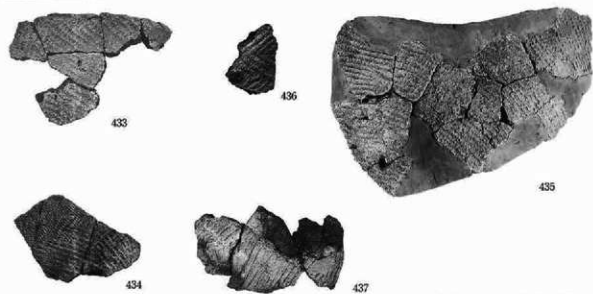
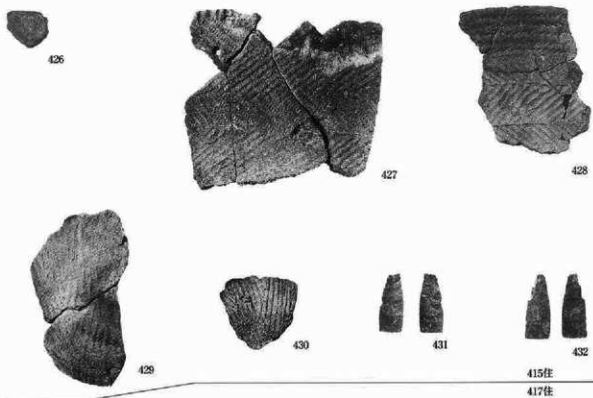
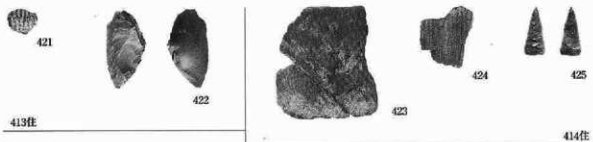
土器 S = 1/3 石器 S = 1/2

写真図版128 409号住居跡出土遺物

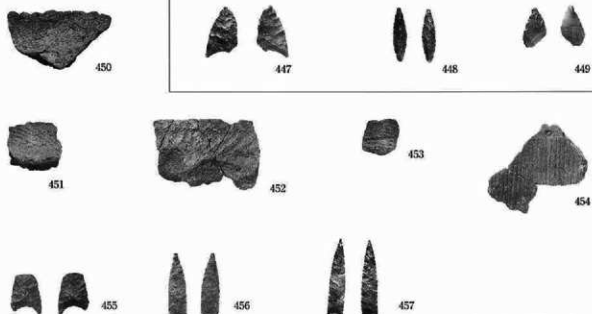
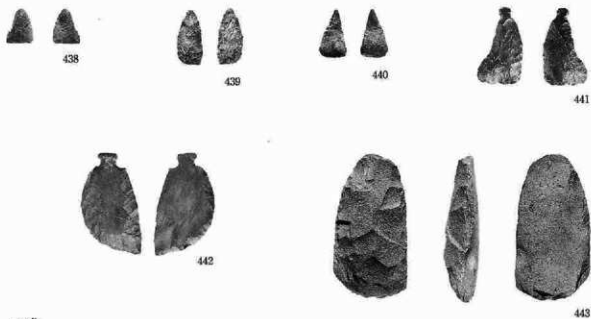


土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版129 410号・412号住居跡出土遺物



写真図版130 413号・414号・415号・417号(1)住居跡出土遺物



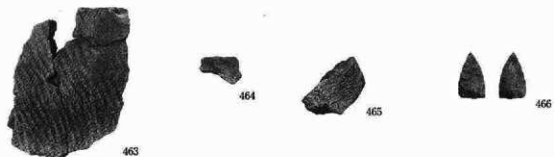
土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版131 417号(2)・418号・420号住居跡出土遺物

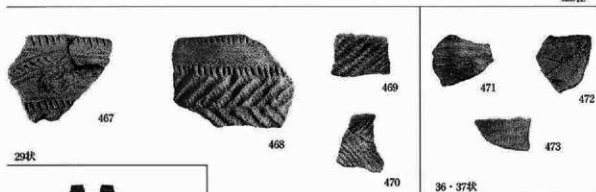


422住

423住

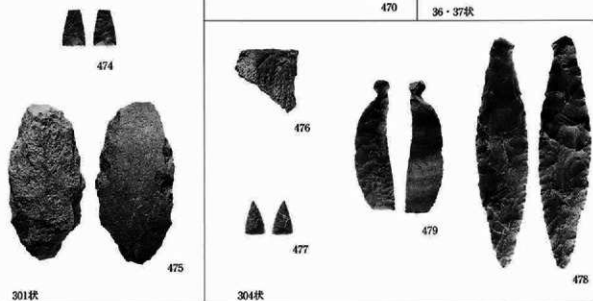


425住



29状

36・37状



301状

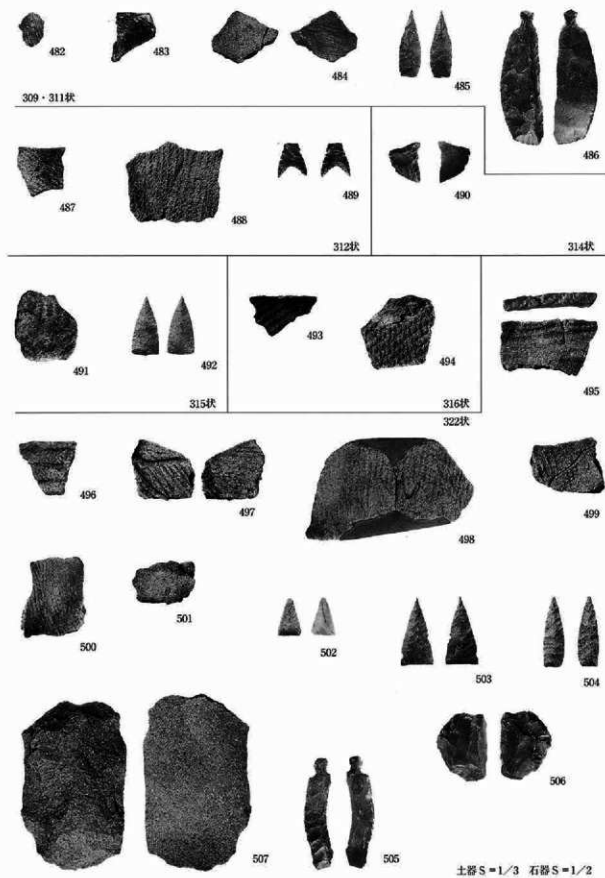
304状

306・307状



土器S=1/3 石器S=1/2

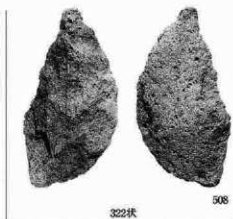
写真図版132 422号・423号・425号住居跡・29号・36・37号・301号・304号・306・307号竪穴状遺構出土遺物



写真図版133 309・311号・312号・314号・315号・316号・322号 (1) 竪穴状遺構出土遺物



509



322状

508



513

514



510



511



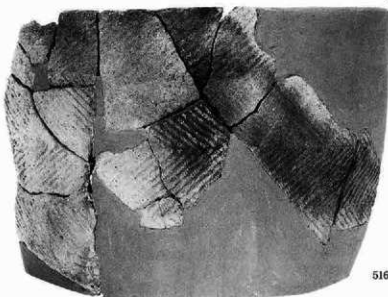
512



515

325状

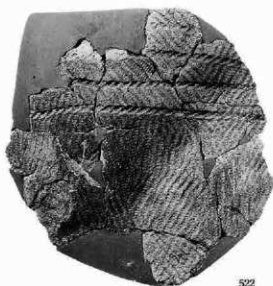
焼土



516

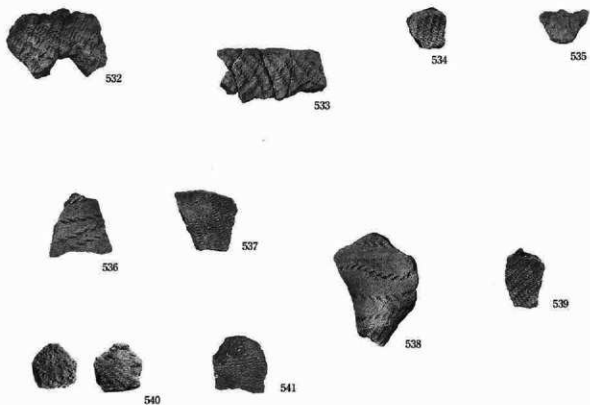
土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版134 322号(2)・325号竪穴状遺構・焼土遺構(1)出土遺物

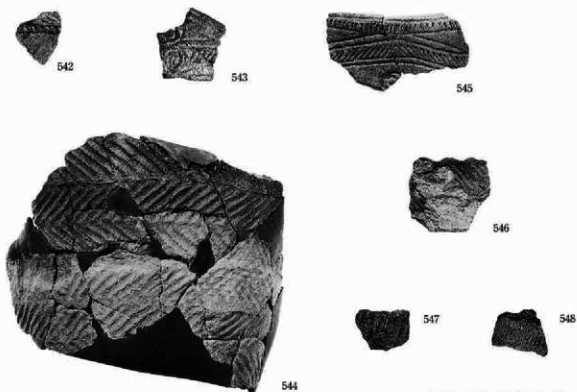


土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版135 焼土遺構出土遺物 (2)

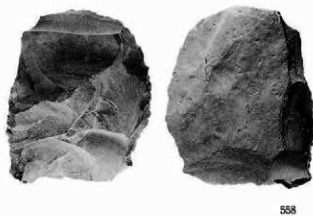


燒土
土坑



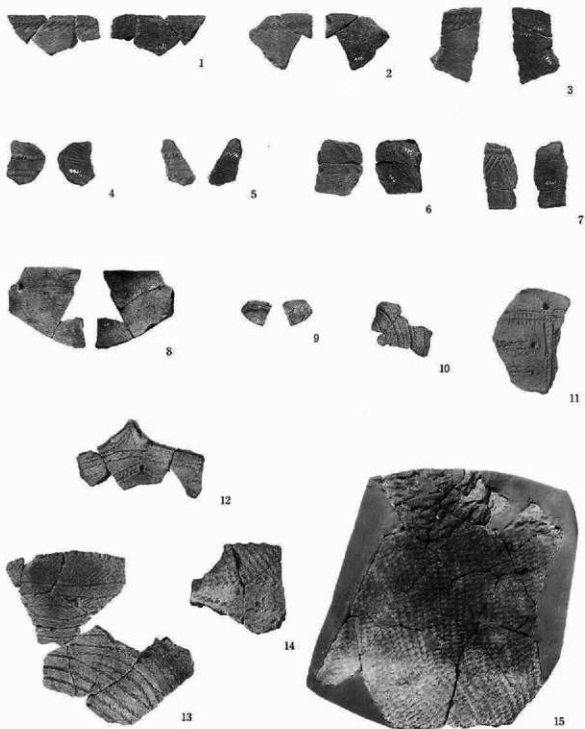
土器 S=1/3 石器 S=1/2

写真図版136 燒土遺構 (3)・土坑 (1) 出土遺物



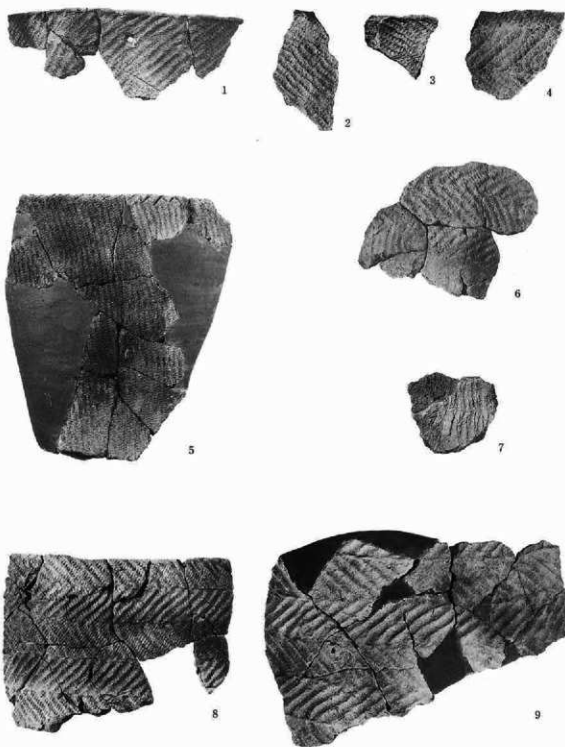
土器S=1/3 石器S=1/2

写真図版137 土坑出土遺物(2)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	129-1	1/3	4	129-4	1/3	7	129-7	1/3	10	129-10	1/3	12	129-12	1/3
2	129-2	1/3	5	129-5	1/3	8	129-8	1/3	11	129-11	1/3	13	130-1	1/3
3	129-3	1/3	6	129-6	1/3	9	129-9	1/3				14	130-2	1/3
												15	130-3	1/3

写真図版138 遺構外出土土器 (1) 0区IX、Wa層-1



No.	组·番号	断片	No.	组·番号	断片	No.	组·番号	断片	No.	组·番号	断片	No.	组·番号	断片
1	130-4	1/3	3	130-6	1/3	5	131-1	1/3	7	131-3	1/3	9	131-5	1/3
2	130-5	1/2	4	130-7	1/3	6	131-2	1/3	8	131-4	1/3			

写真图版139 遗構外出土土器 (2) 0区Ⅵa層-2、Ⅵb層-1



1



2



3



4



5



6



7



8



9



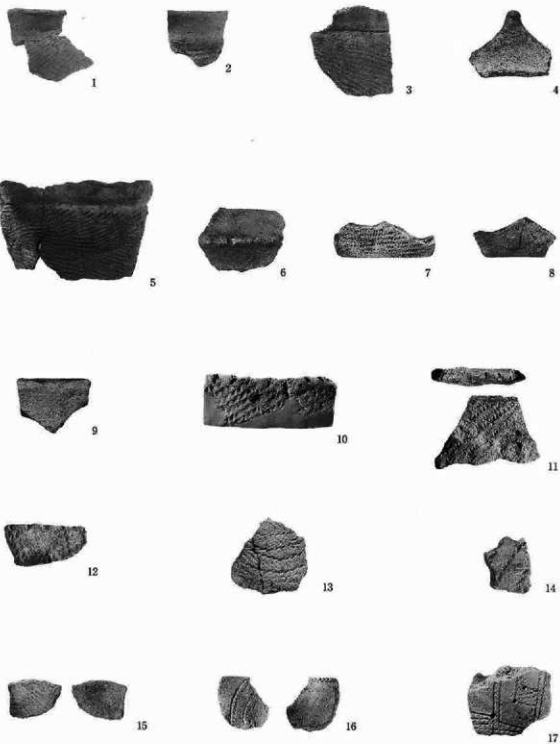
10



11

No.	图·番号	缩尺	No.	图·番号	缩尺	No.	图·番号	缩尺	No.	图·番号	缩尺	No.	图·番号	缩尺	
1	132-1	1/3	3	132-3	1/3	5	132-5	1/3	7	132-7	1/3	9	132-9	1/3	
2	132-2	1/3	4	132-4	1/3	6	132-6	1/3	8	132-8	1/3	10	132-10	1/3	
													11	132-11	1/3

写真图版140 遗物外出土土器 (3) 0区Ⅴa層-3、Ⅴb層-2、Ⅱb層-1



No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸
1	130-12	1/3	4	130-15	1/3	7	133-3	1/3	10	134-2	1/3	13	134-5	1/3	16	134-8	1/3
2	130-13	1/3	5	133-1	1/3	8	133-4	1/3	11	134-3	1/3	14	134-6	1/3	17	134-9	1/3
3	130-14	1/3	6	133-2	1/3	9	134-1	1/3	12	134-4	1/3	15	134-7	1/3			

写真图版141 遗構外出土土器 (4) 0区IIb層-2、1区V層



1



2



3



4



5



6



7



8



9



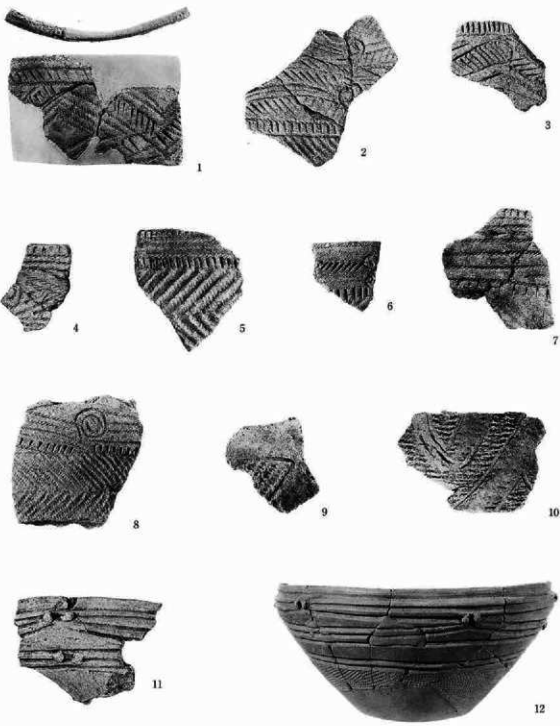
10



11

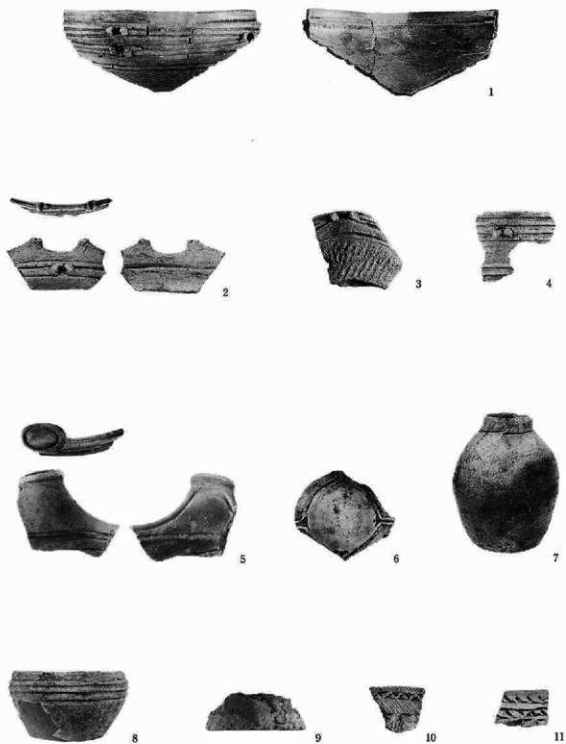
No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺
1	134-10	1/3	3	134-12	1/3	5	134-14	1/3	7	135-2	1/3	9	135-4	1/3
2	134-11	1/3	4	134-13	1/3	6	135-1	1/3	8	135-3	1/3	10	135-5	1/3
												11	135-6	1/3

写真图版142 遺構外出土器 (5) 1区IVa3層-1



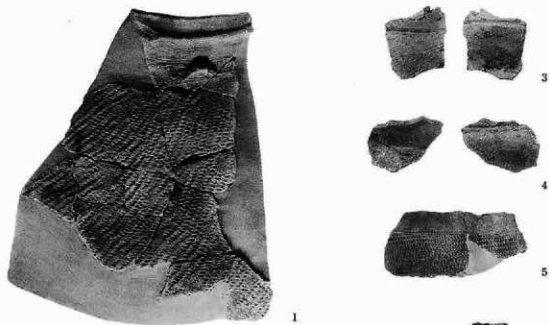
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	135-7	1/3	3	135-9	1/3	5	135-11	1/3	7	135-13	1/3	9	136-1	1/3
2	135-8	1/3	4	135-10	1/3	6	135-12	1/3	8	135-14	1/3	10	136-2	1/3
												11	136-3	1/3
												12	136-4	1/3

写真図版143 遺構外出土土器 (6) 1区IVa3層-2、IIb層-1



No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺
1	136-5	1/3	3	136-8	1/3	5	136-9	1/3	7	136-11	1/3	9	136-15	1/3
2	136-6	1/3	4	136-7	1/3	6	136-10	1/3	8	136-12	1/3	10	136-13	1/3
												11	136-14	1/3

写真图版144 遺構外出土土器 (7) 1区IIb層-2、I、II層



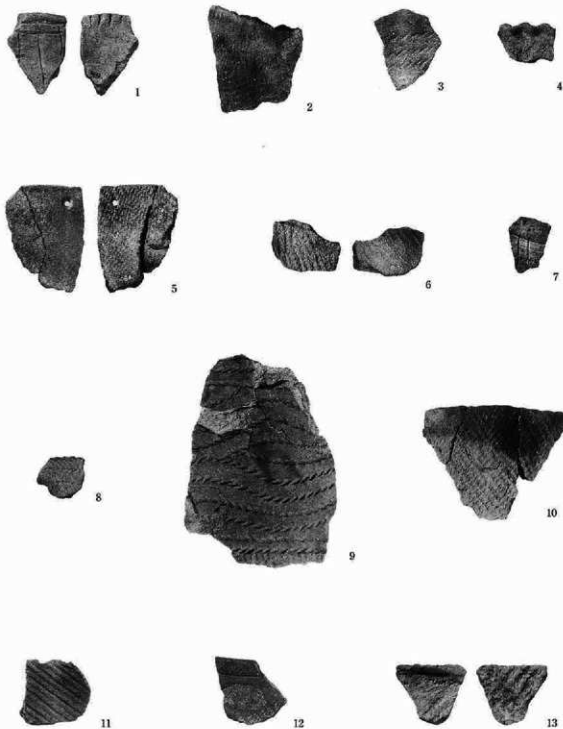
No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺	No.	图·番号	縮尺
1	137-1	1/3	3	137-3	1/3	5	137-5	1/3	7	137-7	1/3	9	137-9	1/3
2	137-2	1/3	4	137-4	1/3	6	137-6	1/3	8	137-8	1/3			

写真图版145 遺構外出土土器 (8) 1区IIb層-3



No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片
1	138-1	1/3	3	138-3	1/3	5	138-5	1/3	7	138-7	1/3	9	138-9	1/3
2	138-2	1/3	4	138-4	1/3	6	138-6	1/3	8	138-8	1/3	10	138-10	1/3

写真图版146 濠沟外出土土器 (9) 1区IIb層-4



No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺	No.	图·番号	断尺
1	130-1	1/3	4	130-4	1/3	6	130-6	1/3	8	130-8	1/3	10	130-10	1/3
2	130-2	1/3	5	130-5	1/3	7	130-7	1/3	9	130-9	1/3	11	130-11	1/3
3	130-3	1/3												

写真图版147 遗物外出土器 (10) 2区Ⅱa3、Ⅱa2层-1



No.	图・番号	断尺	No.	图・番号	断尺	No.	图・番号	断尺	No.	图・番号	断尺	No.	图・番号	断尺	No.	图・番号	断尺
1	140-1	1/3	4	140-4	1/3	7	140-7	1/3	9	140-9	1/3	11	140-11	1/3	13	140-13	1/3
2	140-2	1/3	5	140-5	1/3	8	140-8	1/3	10	140-10	1/3	12	140-12	1/3	14	140-14	1/3
3	140-3	1/3	6	140-6	1/3			1/3									

写真图版148 道横外出土土器 (11) 2区Ⅱa2層-2



No.	图·番号	顺尺	No.	图·番号	顺尺	No.	图·番号	顺尺	No.	图·番号	顺尺	No.	图·番号	顺尺	No.	图·番号	顺尺
1	140-15	1/3	3	141-1	1/3	5	141-3	1/3	7	141-5	1/3	9	142-2	1/3			
2	140-16	1/3	4	141-2	1/3	6	141-4	1/3	8	142-1	1/3	10	141-6	1/3			

写真图版149 遺構外出土土器 (12) 2区Ⅱa2層-3、Ⅱa3、Ⅱa4、Ⅱa5層



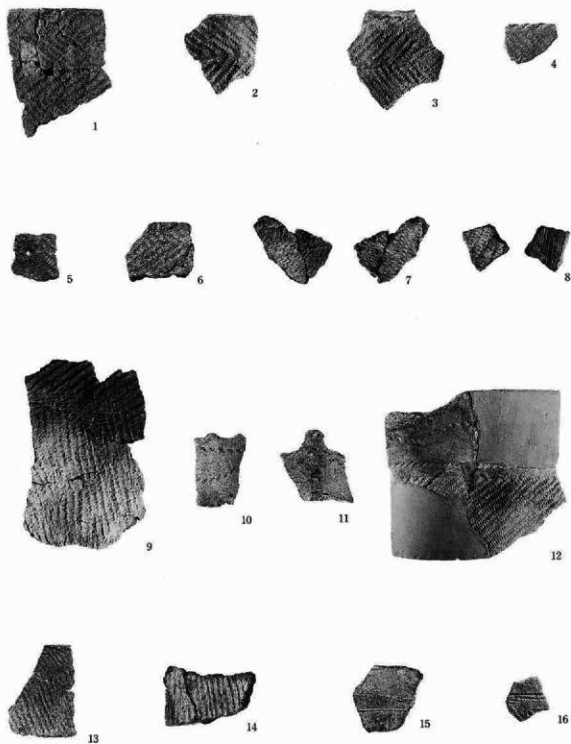
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	1426	1/2	3	1425	1/3	5	1431	1/3	7	1433	1/3	9	1435	1/3
2	1428	1/3	4	1424	1/3	6	1432	1/3	8	1434	1/3	10	1436	1/3
												11	1437	1/3

写真図版150 遺構外出土土器 (13) 2区Ⅱa2層、3区(山体側)Ⅱa2層-1



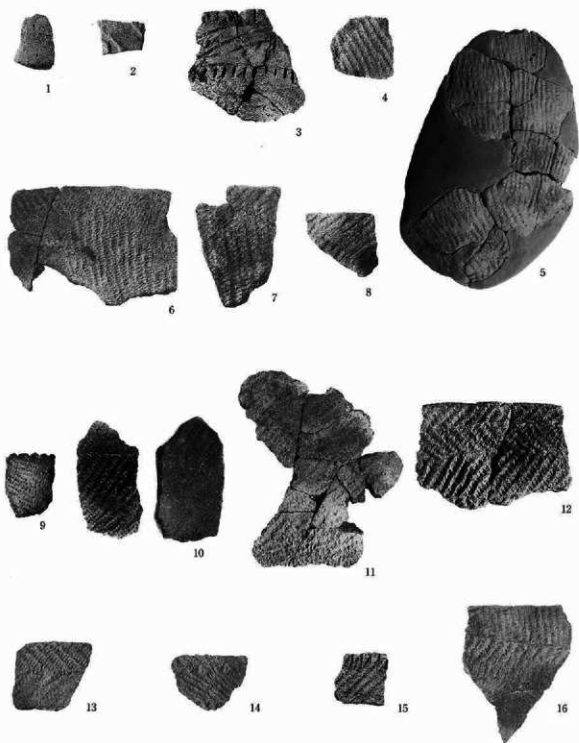
No.	図・番号	総尺	No.	図・番号	総尺	No.	図・番号	総尺	No.	図・番号	総尺	No.	図・番号	総尺	No.	図・番号	総尺
1	143-8	1/3	4	143-11	1/3	7	143-14	1/3	10	144-2	1/3	13	144-5	1/3	16	144-8	1/3
2	143-9	1/3	5	143-12	1/3	8	143-15	1/3	11	144-3	1/3	14	144-6	1/3			
3	143-10	1/3	6	143-13	1/3	9	144-1	1/3	12	144-4	1/3	15	144-7	1/3			

写真図版151 遺構外出土土器 (14) 3区 (山体側) W2層-2、V層-1



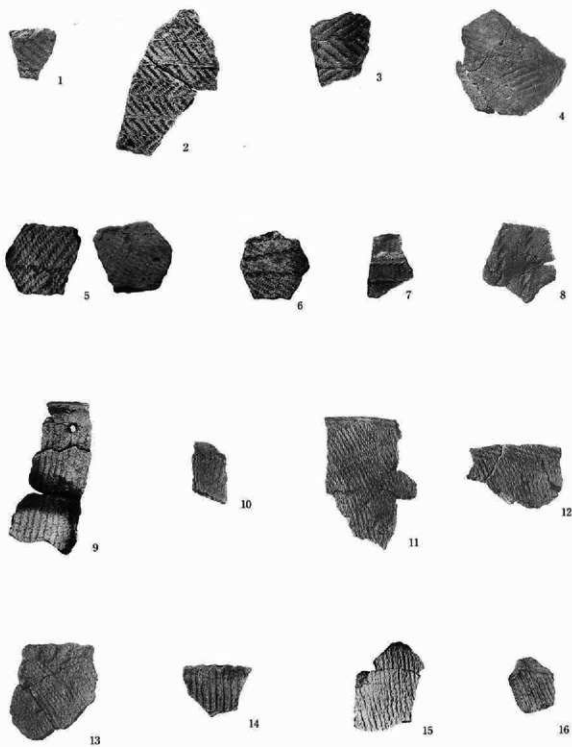
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	144-9	1/3	4	144-12	1/3	7	144-15	1/3	10	145-1	1/3	13	145-4	1/3
2	144-10	1/3	5	144-13	1/3	8	144-16	1/3	11	145-2	1/3	14	145-5	1/3
3	144-11	1/3	6	144-14	1/3	9	144-17	1/3	12	145-3	1/3	15	145-6	1/3
												16	145-7	1/3

写真図版152 遺構外出土土器 (15) 3区 (山体側) V層-2



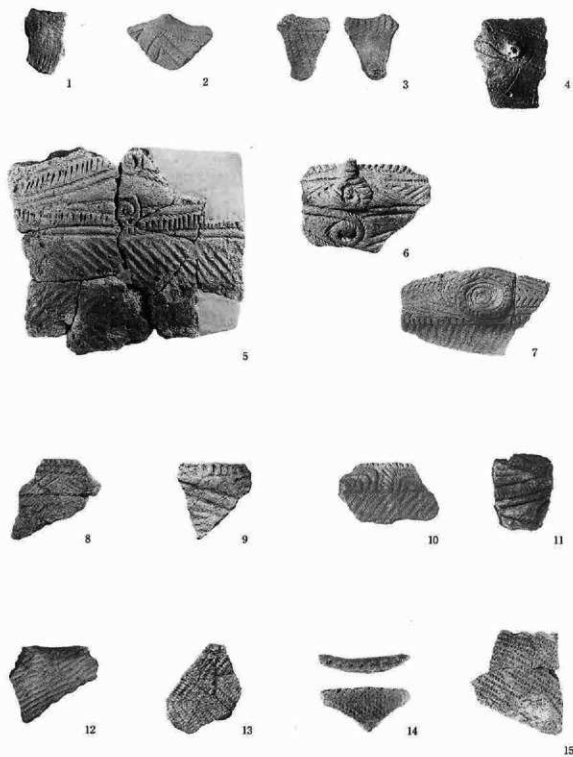
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	
1	145-6	1/3	4	145-11	1/3	7	146-2	1/3	10	146-8	1/3	13	146-8	1/3	16	146-11	1/3	
2	145-9	1/3	5	145-12	1/3	8	146-3	1/3	11	146-6	1/3	14	146-9	1/3				
3	145-10	1/3	6	146-1	1/3	9	146-4	1/3	12	146-7	1/3	15	146-10	1/3				

写真図版153 遺構外出土土器 (16) 3区 (山体側) V層-3、IVa層-1、(畑側) V層-1



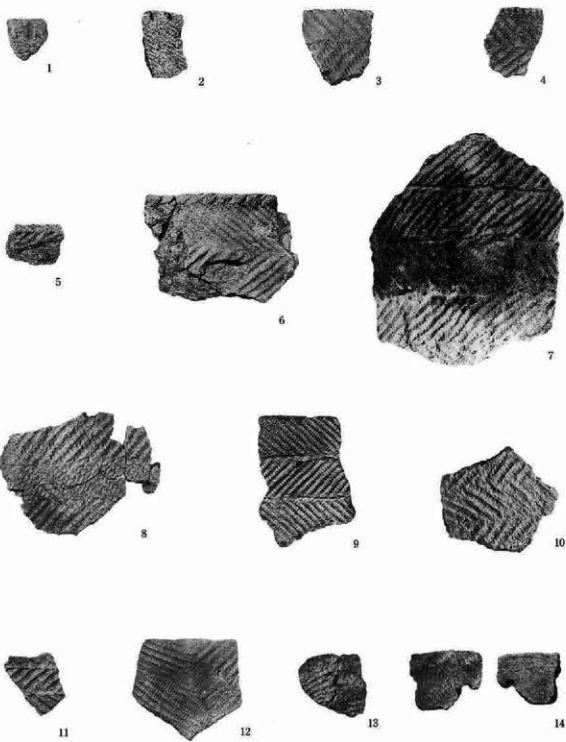
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	146-12	1/3	4	147-1	1/3	7	147-4	1/3	10	147-7	1/3	13	147-10	1/3	16	147-13	1/3
2	146-13	1/3	5	147-2	1/3	8	147-5	1/3	11	147-8	1/3	14	147-11	1/3			
3	146-14	1/3	6	147-3	1/3	9	147-6	1/3	12	147-9	1/3	15	147-12	1/3			

写真図版154 遺構外出土土器 (17) 3区 (畑側) V層-2



No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片	No.	图·番号	断片
1	147-14	1/3	4	147-17	1/3	7	148-3	1/3	10	148-6	1/3	13	148-9	1/3			
2	147-15	1/3	5	148-1	1/3	8	148-4	1/3	11	148-7	1/3	14	148-10	1/3			
3	147-16	1/3	6	148-2	1/3	9	148-5	1/3	12	148-8	1/3	15	148-11	1/3			

写真图版155 遺構外出土土器 (1B) 3区 (畑側) V層-3、IVb層-1



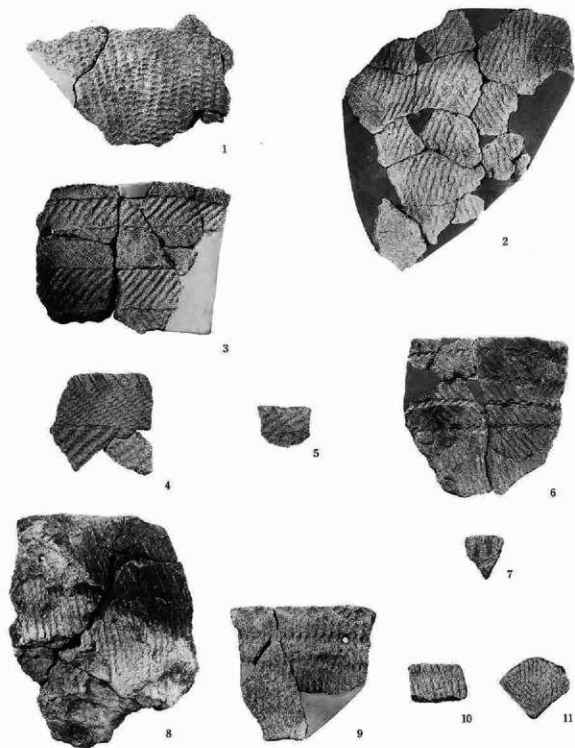
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	149-12	1/3	4	149-15	1/3	7	149-2	1/3	10	149-3	1/3	13	149-8	1/3
2	149-13	1/3	5	149-16	1/3	8	149-3	1/3	11	149-6	1/3	14	149-9	1/3
3	149-14	1/3	6	149-1	1/3	9	149-4	1/3	12	149-7	1/3			

写真図版156 遺構外出土土器 (19) 3区(畑側) IVb層-2



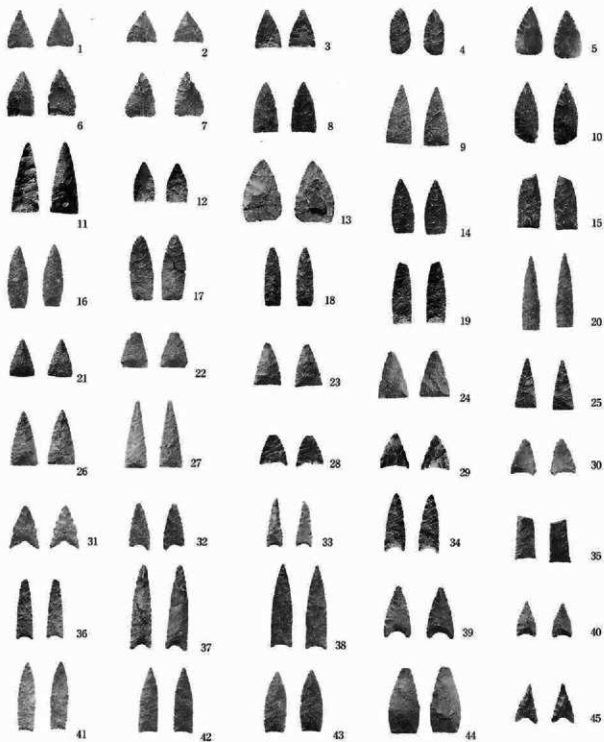
No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸	No.	图·番号	尺寸
1	149-10	1/3	4	149-13	1/3	7	150-3	1/3	10	150-6	1/3	13	151-2	1/3
2	149-11	1/3	5	150-1	1/3	8	150-4	1/3	11	150-7	1/3	14	151-3	1/3
3	149-12	1/3	6	150-2	1/3	9	150-5	1/3	12	151-1	1/3	15	151-4	1/3

写真图版157 遗物外出土土器 (20) 3区 (畑侧) IVb層-3、IIb層、(山体侧) IVa4層-2、5~7区Ⅱb2、V層-1



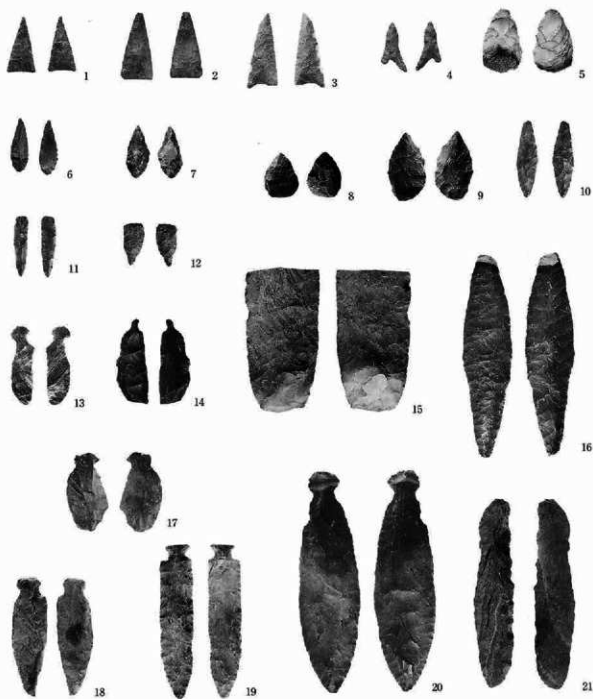
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	151-5	1/3	3	151-7	1/3	5	152-2	1/3	7	152-4	1/3	9	152-6	1/3
2	151-6	1/3	4	152-1	1/3	6	152-3	1/3	8	152-5	1/3	10	152-7	1/3
												11	152-8	1/3

写真図版156 遺構外出土土器 (21) 5~7区V層-2



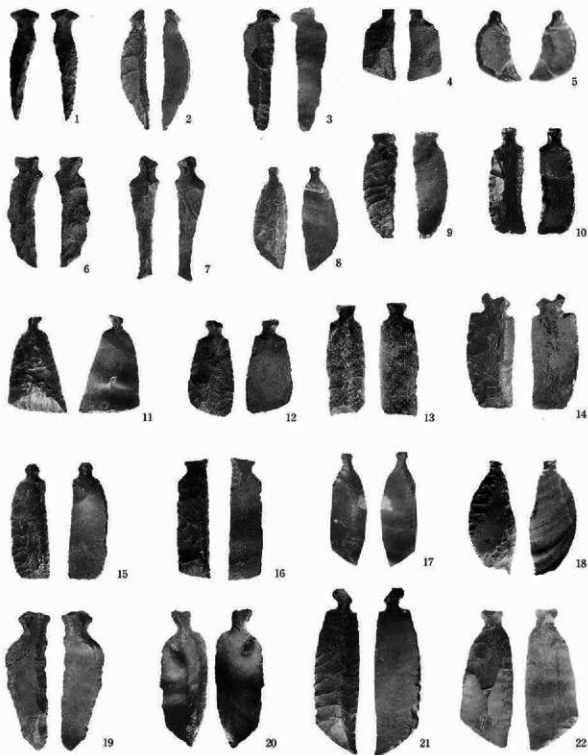
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	153-1	1/2	9	153-9	1/2	17	153-17	1/2	25	153-25	1/2	33	154-8	1/2	41	154-16	1/2
2	153-2	1/2	30	153-30	1/2	18	153-18	1/2	26	154-1	1/2	34	154-9	1/2	42	154-17	1/2
3	153-3	1/2	11	153-11	1/2	19	153-19	1/2	27	154-2	1/2	35	154-10	1/2	43	154-18	1/2
4	153-4	1/2	12	153-12	1/2	20	153-20	1/2	28	154-3	1/2	36	154-11	1/2	44	154-19	1/2
5	153-5	1/2	13	153-13	1/2	21	153-21	1/2	29	154-4	1/2	37	154-12	1/2	45	154-20	1/2
6	153-6	1/2	14	153-14	1/2	22	153-22	1/2	30	154-5	1/2	38	154-13	1/2			
7	153-7	1/2	15	153-15	1/2	23	153-23	1/2	31	154-6	1/2	39	154-14	1/2			
8	153-8	1/2	16	153-16	1/2	24	153-24	1/2	32	154-7	1/2	40	154-15	1/2			

写真図版159 遺構外出土石器(1)



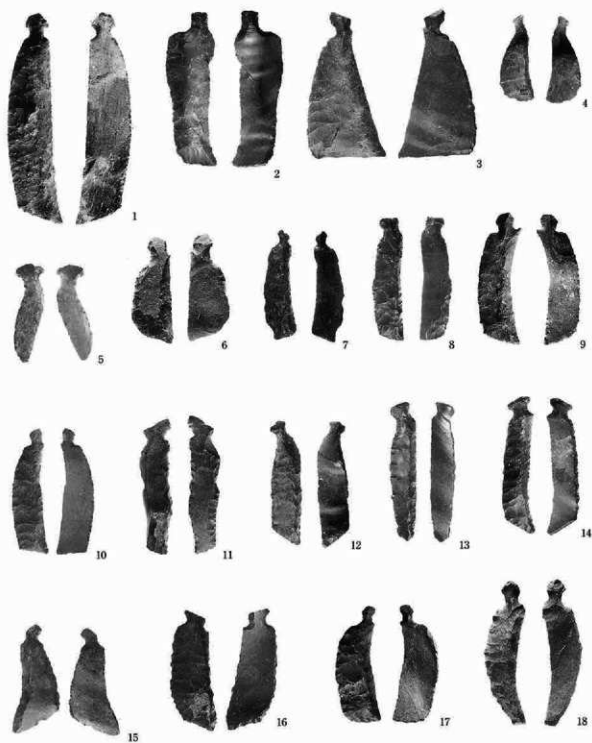
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	154-21	1/2	5	154-20	1/2	9	150-4	1/2	13	150-8	1/2	17	155-12	1/2	21	155-16	1/2
2	154-22	1/2	6	150-1	1/2	10	150-5	1/2	14	150-9	1/2	18	155-13	1/2			
3	154-23	1/2	7	150-2	1/2	11	150-6	1/2	15	150-10	1/2	19	155-14	1/2			
4	154-24	1/2	8	150-3	1/2	12	150-7	1/2	16	155-11	1/2	20	155-15	1/2			

写真図版160 遺構外出土石器(2)



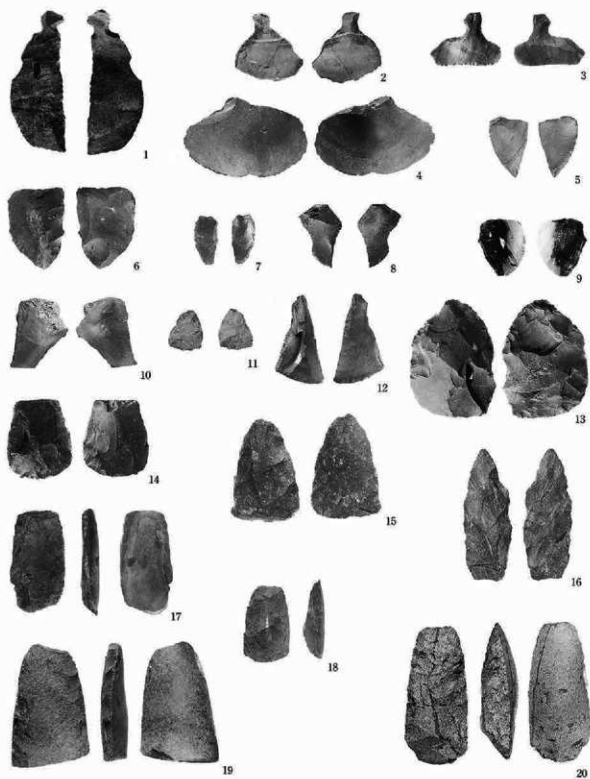
No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	186-1	1/2	5	186-5	1/2	9	186-9	1/2	13	186-13	1/2	17	187-1	1/2	21	187-5	1/2
2	186-2	1/2	6	186-6	1/2	10	186-10	1/2	14	186-14	1/2	18	187-2	1/2	22	187-6	1/2
3	186-3	1/2	7	186-7	1/2	11	186-11	1/2	15	186-15	1/2	19	187-3	1/2			
4	186-4	1/2	8	186-8	1/2	12	186-12	1/2	16	186-16	1/2	20	187-4	1/2			

写真図版161 遺構外出土石器(3)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	157-7	1/2	4	157-10	1/2	7	157-13	1/2	10	158-3	1/2	13	158-6	1/2	16	158-9	1/2
2	157-8	1/2	5	157-11	1/2	8	158-1	1/2	11	158-4	1/2	14	158-7	1/2	17	158-10	1/2
3	157-9	1/2	6	157-12	1/2	9	158-2	1/2	12	158-5	1/2	15	158-8	1/2	18	158-11	1/2

写真図版162 遺構外出土石器(4)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	158-12	1/2	5	158-2	1/2	9	158-6	1/2	13	158-10	1/2	17	160-1	1/3			
2	158-13	1/2	6	158-3	1/2	10	158-7	1/2	14	158-11	1/2	18	160-2	1/3			
3	158-14	1/2	7	158-4	1/2	11	158-8	1/2	15	158-12	1/2	19	160-4	1/3			
4	158-1	1/2	8	158-5	1/2	12	158-9	1/2	16	158-13	1/2	20	160-3	1/3			

写真図版163 遺構外出土石器 (5)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	160-5	1/3	3	160-7	1/3	5	161-2	1/3	7	161-3	1/3	9	161-5	1/3			
2	160-6	1/3	4	160-8	1/3	6	161-1	1/3	8	161-4	1/3						

写真図版164 遺構外出土石器 (6)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	161-6	1/3	3	161-8	1/3	5	162-2	1/3	7	162-4	1/3	9	162-7	1/3			
2	161-7	1/3	4	162-1	1/3	6	162-3	1/3	8	162-5	1/3						

写真図版165 遺構外出土石器 (7)



No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺	No.	図・番号	縮尺
1	162-6	1/3	3	162-9	1/3	5	163-1	1/3	7	163-2	1/3	9	163-6	1/3
2	162-8	1/3	4	163-3	1/3	6	163-5	1/3	8	163-4	1/3	10	163-7	1/3

写真図版166 遺構外出土石器 (6)

平成15年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長	木 村 昇	副 所 長	平 野 允 苗
〔管理課〕			
課 長	長 並 沢 正 吾	嘱 託	高 橋 照 雄
課 長 補 佐	佐 山 岸 直 美	〃	湯 沢 邦 子
主 査	中 嶋 賢 一	〃	沼 田 テル子
主 事	猿 橋 幸 子	〃	伊 藤 滋 子
〔調査第一課〕			
課 長	佐々木 勝	文化財調査員	北 村 忠 昭
課 長 補 佐	佐々木 清 文	〃	八 木 勝 枝
文化財専門員	金子 昭 彦	〃	九 山 浩 治
文化財調査員	古 田 充	〃	北 出 勲
〃	亀 大 二郎	〃	高 原 弘 征
〃	野 中 真 盛	期限付調査員	坂 部 恵 造
〃	新 妻 伸 也	〃	小 林 弘 卓
〃	阿 部 勝 則	〃	小 藤 京 大 輔
〃	沢 杉 昭 太郎	〃	小 針 大 志
〃	西 澤 正 晴	〃	太 田 代 彦
〃	村 木 敬	〃	新 井 田 えり子
〔調査第二課〕			
課 長	三 浦 謙 一	文化財調査員	星 雅 之
課 長 補 佐	中 川 重 紀	〃	佐 藤 淳 一
〃	高 橋 義 介	〃	星 幸 文
文化財専門員	小山内 透	〃	瀧 浩 二郎
〃	金子 佐知子	〃	本 多 準一郎
〃	濱 田 宏	〃	丸 山 直 美
文化財調査員	赤 石 登	〃	堀 島 正 和
〃	阿 部 眞 澄	〃	米 田 寛
〃	水 上 明 博	〃	須 原 拓
〃	阿 部 憲 淳	〃	中 村 絵 美
〃	早 坂 則 也	〃	川 又 田 晋 淳
〃	小 阿 部 徳 幸	〃	村 田 (村 上 拓)
〃	阿 部 岩 伸 吾	期限付調査員	齋 藤 麻 紀子
〃	亀 澤 盛 行	〃	石 崎 高 臣
〃	飯 坂 一 重	〃	吉 山 隼 和
〃	鈴木 裕 明	〃	立 花 裕 敦
〃	林 森 明	〃	江 藤 敦 寛
〃	阿 部 孝 明	〃	駒 木 野 智
〃	羽 柴 直 人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第433集

小松 I 遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石住田線金ノ倉～山脈地工区クロスロード整備事業

印刷 平成16年1月22日

発行 平成16年1月29日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 社殿印刷
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ2-22-50
TEL (019) 641-8000
FAX (019) 641-8085

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004

